

# 山陽新幹線関係 埋蔵文化財調査報告

春日市・筑紫郡那珂川町所在遺跡群の調査

第 2 集

1976

福岡県教育委員会

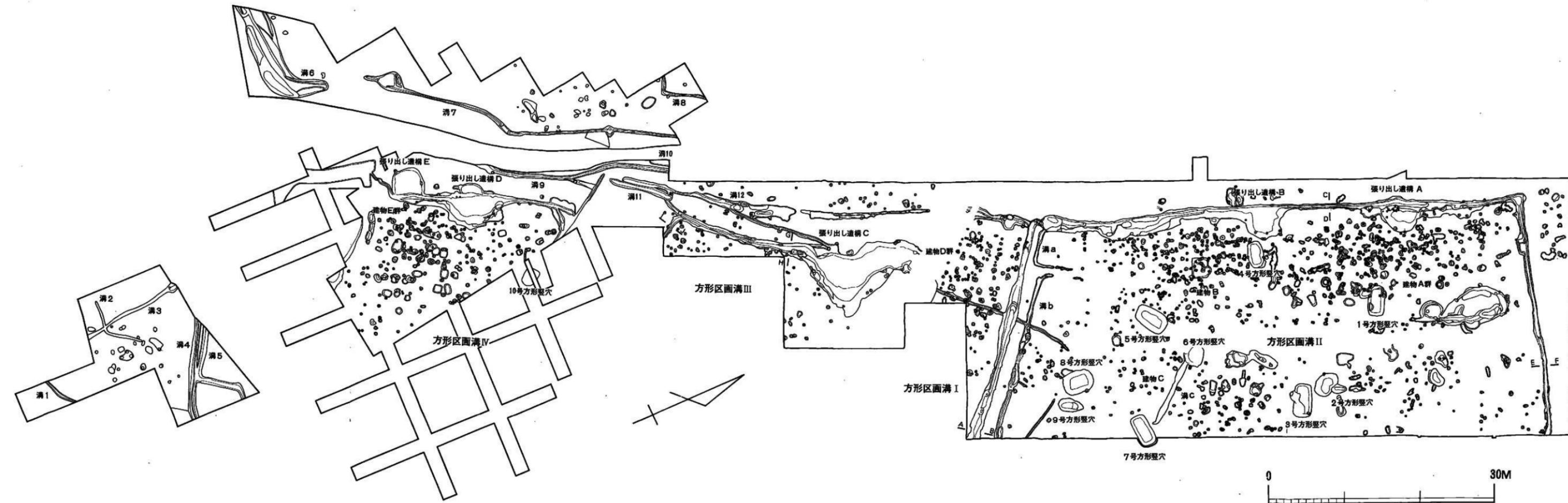
山陽新幹線関係  
埋蔵文化財調査報告

第2集

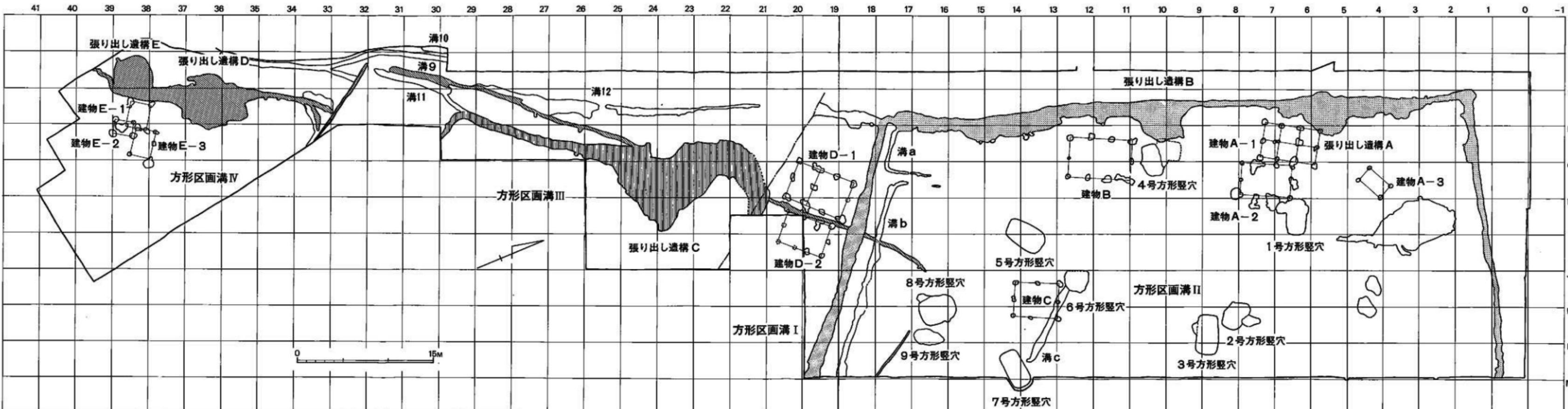
付 図

1976

福岡県教育委員会



付図1 井手ノ原遺跡諸構配置図 (3600)



付図 2 発掘区と方形区画構造構図 (3‰)

# 山陽新幹線関係 埋蔵文化財調査報告

春日市・筑紫郡那珂川町所在遺跡群の調査

第 2 集

## 序

この報告書は、福岡県教育委員会が日本国有鉄道の委託を受けて、昭和46年度から実施している山陽新幹線建設路線内および博多総合車両基地内の埋蔵文化財発掘調査の記録の一部であります。

今回の報告は、春日市と筑紫郡那珂川町所在の遺跡群についてのもので『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第1集に続くものであります。

発掘調査の記録としては決して満足のゆくものではありませんが、本報告書を通して文化財に対する关心を深める方が一人でも増えれば、望外の喜びとするものであります。

なお、調査に対してご協力いただいた地元の方々をはじめ、関係各位のご援助とご配慮により本書を発刊するはこびになりましたので、心からの感謝を申し上げます。

昭和51年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 森 田 實

## 例　　言

- 本書は、昭和46年4月1日から昭和48年12月26日までに福岡県教育委員会が、日本国有鉄道下関工事局から委託されて、山陽新幹線建設のため破壊される埋蔵文化財を発掘調査した2冊目の報告書である。
- 本書の執筆分担は次のとおりである。

I	柳田 康雄
II-1	鶴久 謄郎
II-2	鶴久 謄郎・木下 修
II-3	松本 峰・鶴久 謄郎・木下 修
II-4	鶴久 謄郎
III-1・2・3	木下 修
III-4	鶴久 謄郎・木下 修
III-5・6	木下 修
III-7	柳田 康雄
III-8・9	木下 修
III-10	鶴久 謄郎・木下 修
III-11	木下 修
IV-1	鶴久 謄郎
IV-2	鶴久 謄郎・井上 裕弘
IV-3	井上 裕弘・小池 史哲
IV-4	鶴久 謄郎・井上 裕弘

- 第33地点出土の漆器甕の材質同定、執筆には九州大学農学部松本島教授の協力を得た。
- 掲載の写真的撮影、実測図の作成および製図は、図版目次と挿図目次に示すとおりであるが、一部写真・執筆には石丸洋・小池史哲氏の協力を得た。
- 本書の編集は、I・IVを井上、II・IIIを木下があたった。

## 本文目次

I	序文	1
II	第33地点の調査	5
1.	はじめに	5
2.	遺構	7
3.	遺物	9
4.	おわりに	12
III	原古墳群の調査	15
1.	調査の経過	15
2.	古墳の立地と環境	18
3.	1号墳	22
4.	2号墳	27
5.	円形周溝墓	36
6.	3号墳	47
7.	方形周溝墓	52
8.	土壙墓	58
9.	住居跡	61
10.	中世遺物跡	64
11.	まとめ	70
IV	井手ノ原遺跡の調査	79
1.	はじめに	79
2.	遺構	83
3.	遺物	97
4.	まとめ	115

# I 序 文

## 本文目次

I 序文	1
------	---

## 図版目次

本文対照頁	
図版 1 博多車輛基地建設前の原古墳群・井手ノ原遺跡付近航空写真 (1972年8月) (井上裕弘撮影)	1

## 挿図目次

第 1 図 山陽新幹線の路線と博多車輛基地の位置 (佐々木隆彦作成)	3
第 2 図 山陽新幹線博多総合車輛基地付近地形図及び遺跡分布図 (日本国有鉄道 原図 1:5,000 木下修作成)	折込み

## 表目次

表 1 山陽新幹線関係遺跡一覧表 (鶴久嗣郎作成)	折込み
---------------------------	-----

図版 1



博多車輌基地建設前の原古墳群・井手ノ原遺跡付近航空写真（1872年8月）

## I 序 文

本書は第33地点・原（第33-1地点）古墳群、井手ノ原（第37・39・50・55地点）遺跡の発掘調査報告書である。

第33地点は当初から発掘調査地点としてあげられていたが、むしろ南側に隣接する上白水字原の段丘上に重要遺跡が存在することが明らかになった。この地点は工場敷地造成により、遺跡全体が約1mの厚さの土砂で埋立てられていたために当初の分布調査では確認されていなかったもので、昭和48年4月の側道敷地の遺跡分布調査に際して旧土地所有者などの教示を得て、第33-1地点として追加調査することになった。

第33-1地点は、古墳が存在したということで調査になったが、実際に埋立の土砂を除去したところ、古墳群の外にも甕棺墓群や縄文時代遺構なども検出された。調査は昭和48年8月から時代の新しい掘立柱群・古墳群から始めたが、古墳群の性格上重要遺跡として国鉄側と古墳群の保存について協議を重ねたが、古墳群の大半が側道ではなく基地内の重要な部分に含まれることで調査担当者の要望は受け入れられなかった。しかも、工事の急務から側道に含まれる甕棺墓群と縄文時代遺構の調査は昭和49年度にまわすことになり、原古墳群の調査は12月26日に調査を終らざるを得なかつた。本報告書にはこの原古墳群を掲載する。

井手ノ原遺跡は、昭和46年8月に新幹線関係の発掘調査として最初に始めた第55地点から、昭和48年8月に調査終了した第37地点までを含む一連遺跡である。工事に追われ、緑音山古墳群・深原遺跡の調査と並行して行なう結果となり、十分な調査とはいえないなかつた。

第33-1地点・原古墳群・井手ノ原遺跡関係の調査関係者は次のとおりである。

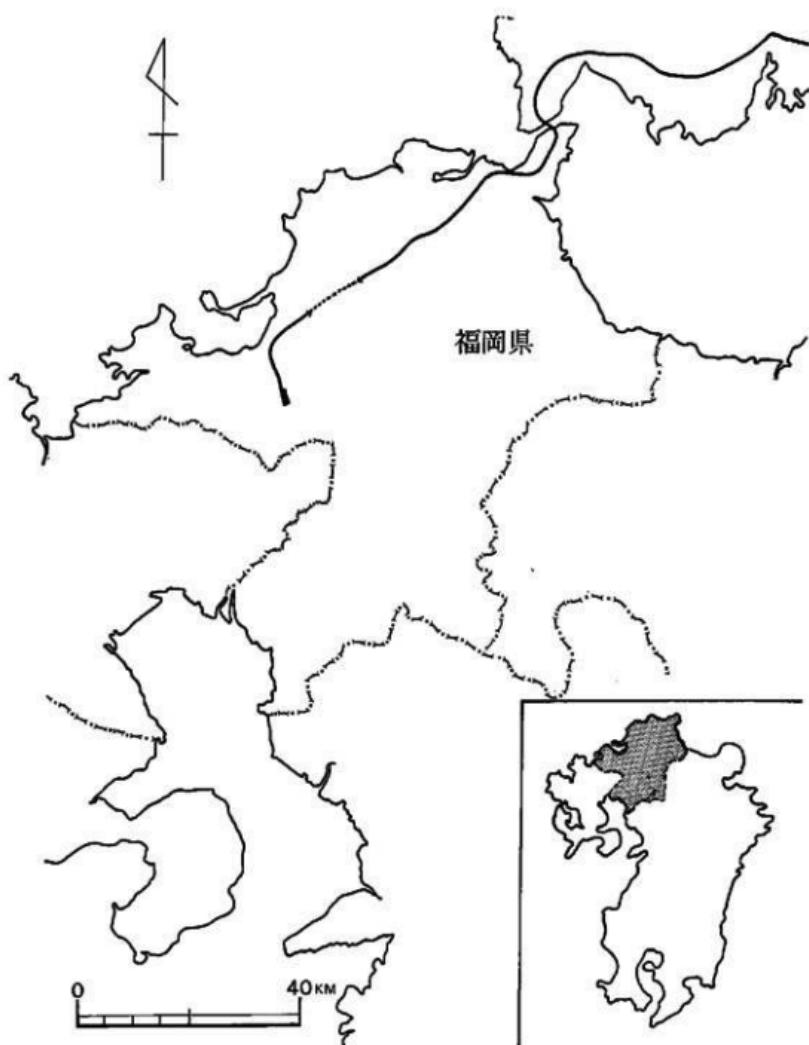
## 日本国有鉄道下関工事局（昭和48年度）

福岡工事事務所	所長	海原正二
	次長	清水彰明
	総務課長	綿引治
" 捕佐	属	勉
設計協議係長	吉岡戈	
"	高谷任	
停車場課長	長安智重	
" 捕佐	石倉優	
" 第1係長	今川信夫	

序文

南福岡工事区	区長	若松安志	博
助役		福永	
福岡県教育委員会			
總括	教育長	森田太郎	寅一
	教育次長	西村英	實七
	文化課課長	泰音	功史
	同 課長池佐	音今前	郎宏
	同	前植吉	雄弘
庶務	庶務係長	田井岡	修治
	主事	田村久	美夫
	嘱託	村路田上	廣郎
発掘調査	課長技術補佐	井岡路田上	弘一
	調査係長	木下井	信
	技術主査	木木下	
	技師	橋木木下	
	同	宮崎木木下	
	同	柳木木下	
	同	宮木木下	
	同	三河木木下	
	同	河高木木下	
	同	井野木木下	
	同	川瀬木木下	
遺物整理	嘱託	岩安正	

(柳田康雄)



第1図 山陽新幹線の路線と博多車両基地の位置 (1:600,000)

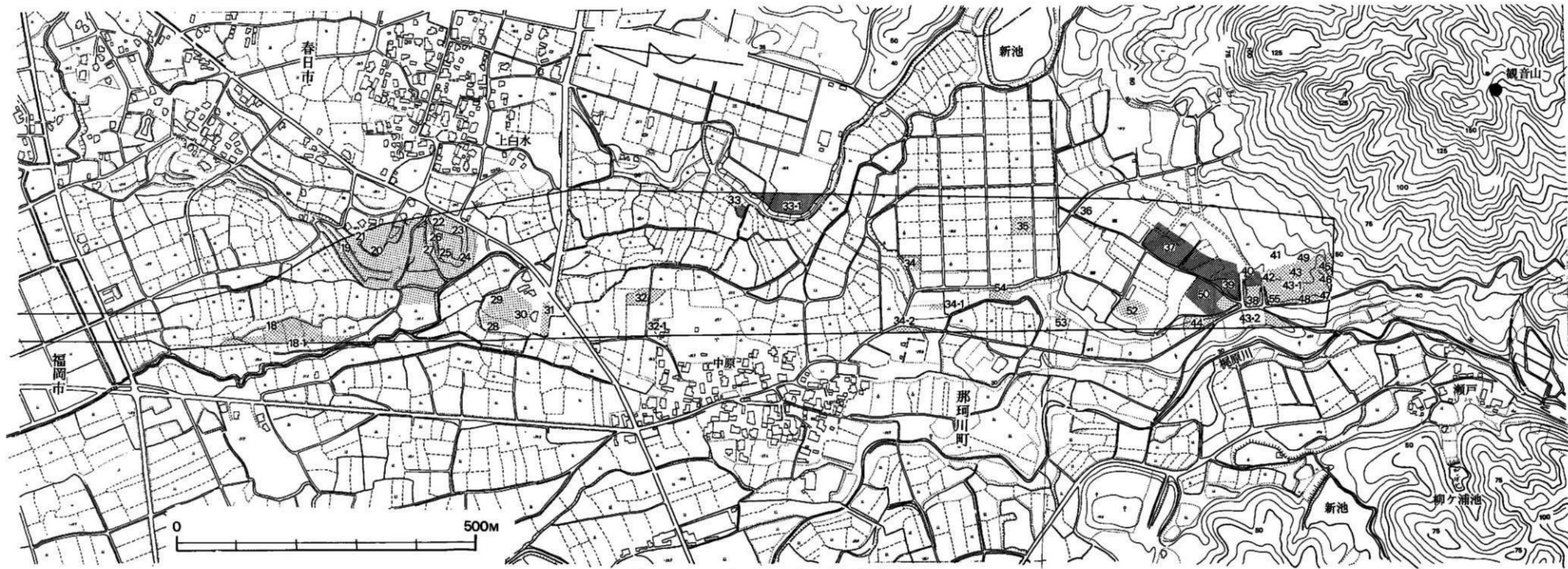
表 1 山陽新幹線関係遺跡一覧表

地点番号	遺跡名	所在地	内 容	調査発掘面積					備 考	
				46年度	47年度	48年度	49年度	50年度		
3	小田山墓地	萩原郡萩町中山	近世墓地	—	—	—	—	—		
4	下松尾墓地	〃 〃	近世墓地	—	—	—	—	—		
5	京尾遺跡	〃 〃 壱木	中世花崗石造橋	—	—	—	—	—		
6	若宮条理	〃 若宮町	条理遺構	229	—	—	—	—		
6-0	〃 金丸	近世墓地	—	—	—	—	—	—	調査前に工事のため改変。	
6-1	田尻遺跡	〃 〃 金丸・水原	古墳、歴史時代：住居跡	2,035	—	3,000	—	—		
6-2	別当塚	〃 〃 竹原	古墳	—	146	—	—	—	遺構・遺物なし。	
6-3	八幡塚	〃 〃	古墳	—	16	—	300	—		
7	杉屋遺跡	〃 〃 雅光	土師：散布地	—	—	—	—	—	遺構なし。	
8		柏原郡久山町山田	兔頭遺構	100	—	—	—	—	調査の結果条里ではなかった。	
18		春日市上白水	先土器～歷史時代：住居跡	—	—	790	—	—		
18-1			古墳	—	—	—	2,100	1,000	昭和49年度は、別府大学に一部調査委嘱。	
18-2			溝状遺跡	—	—	—	—	—		
19-27 及び周辺	門田遺跡	〃 〃	先土器～平安時代：住居跡、貯藏穴、薬指輪、石棺蓋、土壙墓、古墳5基	予備調査 (4,500)	7,170	9,700	4,570	—	昭和48年度に、門田2号墳の調査を平賀博物館に実施。	
28-31	下原遺跡	〃 〃	古墳時代：住居跡	2,784	—	—	—	—		
32	油田遺跡	筑紫郡都河川町中原	古墳時代：散布地	—	690	—	—	—		
32-1		〃 〃	古墳時代：鶴形墓	—	—	—	300	—		
33		春日市上白水	古墳時代：散布地	—	—	197	—	—		
33-1	原古墳群	〃 〃	円墳3基、周溝墓8基、土壙墓4基	—	—	1,725	800	400	一部保存。	
	原遺跡	—	绳文時代早期、弥生時代鶴形墓	—	—	—	—	—		
34		筑紫郡都河川町中原	弥生時代：散布地	—	135	—	—	—	遺構・遺物なし。	
34-1	鳥ノ巣遺跡	〃 〃	先土器、縄文時代：散布地	—	287	—	—	—		
34-2		—	—	—	—	288	—	—	別府大学に調査委嘱。	
35		—	中世：散布地	—	—	200	—	—		
36		—	近世：道標（かんのん道）	—	—	—	—	—		
37, 39 50, 55	井手原遺跡	〃 〃	中世：方形区割造構、溝状遺構	1,814	1,515	1,500	—	—		
38, 40-43 45-49 49-1, 51	鰐首山古墳群 中東支群	〃 〃	古墳31基	—	707	6,400	220	—		
43-1	深原遺跡	〃 〃	縄文時代：石錐炉跡32基、円形埴込造構	—	—	1,840	2,540	—	昭和47年度は、別府大学に一部調査委嘱。	
43-2		—	—	—	—	—	140	—		
44		〃 〃	中世：散布地	—	—	271	—	—		
52		〃 〃	中世：散布地	—	—	452	—	—		
53		〃 〃	古墳時代：散布地	—	—	123	—	—	遺構なし。	
54		〃 〃	弥生、古墳時代：散布地	—	—	150	—	—		
54-1		〃 〃	古墳時代：散布地	—	—	95	—	—		
	合		計	—	5,305	14,369	14,829	15,900	6,270	

註 1. 地点番号1, 2は北九州市教育委員会、9-17は福岡市後方委員会が調査を担当した。

2. 調査範囲の内付帯地等にかかる土地の調査は上記を含むものとする。

3. 表面標に(一)で示したもののは調査面積としてはないが該年度に調査したことを示す。



第2図 山陽新幹線博多総合車両基地付近地形図及び遺跡位置図 (1:5,000)

印は本報告書掲載遺跡を表わす。

# I 第33地点の調査

春日市大字上白水字下原

## 本文 目 次

1.	はじめに	5
(1)	調査の経過	5
(2)	遺跡の立地	5
2.	遺構	7
(1)	溝状遺構	7
(2)	柱穴状ピット	7
(3)	土層	7
3.	遺物	9
(1)	土器	9
(2)	木器	11
4.	おわりに	12

## 図版目次

		本文対照頁
図版 1	(1) 第33地点全景(鶴久耕郎撮影)	5
	(2) 第33地点全景(鶴久撮影)	5
2	(1) 南北トレンチ西壁北半と杭穴出土状態(鶴久撮影)	7
	(2) 北西拡張区溝状遺構全景(鶴久撮影)	7
3	(1) 最南部溝状遺構と木器出土状態(鶴久撮影)	7
	(2) 土器(石丸洋撮影)	9
4	漆器碗(石丸撮影)	11

## 挿 図 目 次

第 1 図	第33地点地形図（福久朋郎・高田一弘実測。木下修製図）	6
第 2 図	第33地点造構実測図（福久・木下実測。木下製図）	8
第 3 図	南北トレンチ土層断面図（川道寛実測。木下製図）	9
第 4 図	出土土器拓影（木下手拓）	10
第 5 図	出土土器実測図（木下実測、製図）	10
第 6 図	漆器椀材質頭微鏡写真正目（松本島撮影）	11
第 7 図	同 板目（松本撮影）	11
第 8 図	同 木口（松本撮影）	12

## II 第33地点の調査

## 1. はじめに

## (1) 調査の経過

この遺跡の調査は、昭和48年10月1日から31日までの間におこなった。この時期は、山陽新幹線の開業予定が3ヶ月くり上げられて工事工程が切詰められ、埋蔵文化財の調査日程もそのあおりをうけて数地点を並行して調査せざるをえない状態であった。このために、この遺跡の調査は、後記の原古墳群や門田遺跡の調査と並行して行なうことになり、原古墳群と隣接するところから、古墳群の堆土が一段落した時点に着手したものである。

調査は、まず直交するトレンチを設定し、僅かだが溝状遺構が見られたために一部を拡張したが、遺物の逆転があることと遺構が頭著でないために打切った。

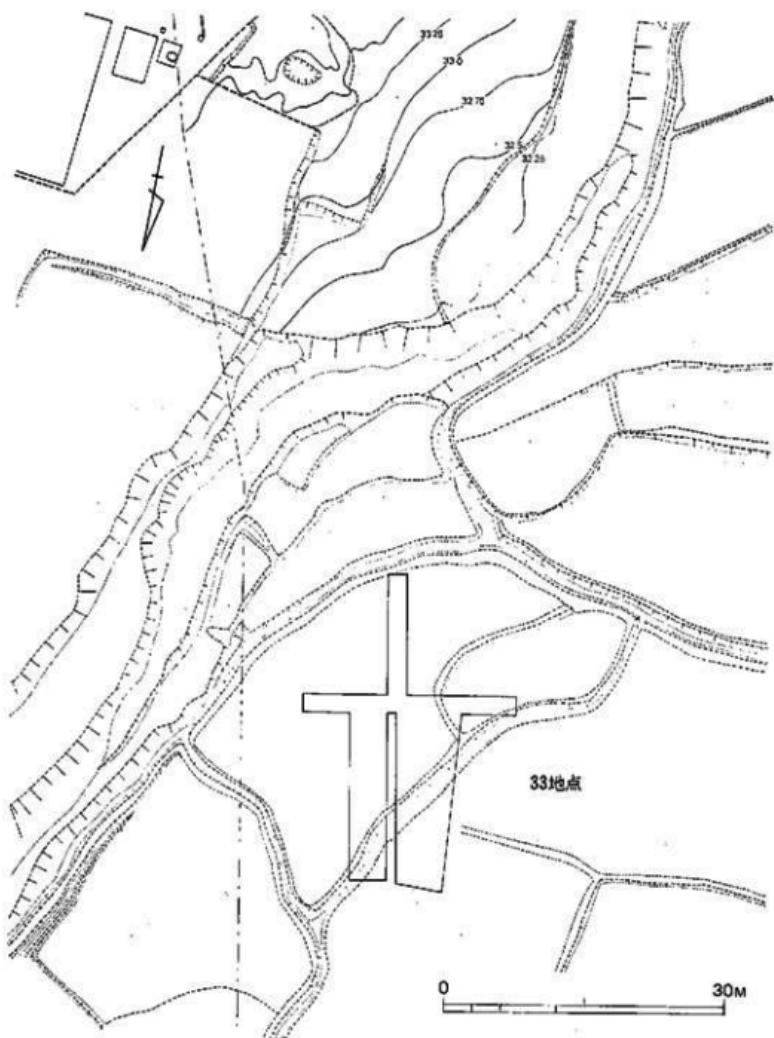
庶務担当者	福岡県教育委員会文化課	主事	植田 實
	同	嘱託	吉村 源七
調査担当者	同	技術主査	翁久 順郎
	同	技師	木下 修
調査補助員		高田 一弘	
		川道 寛	

## (2) 遺跡の立地 (図版1, 第1図)

この遺跡は、福岡県春日市大字上白水字下原にある。春日丘陵をのせる広大な台地が、那珂川平野に面するところに作る比高約6.5mの段丘崖をつくるが、その段丘崖下の水田面にこの遺跡は立地する。南方に、小閉折谷ひとつを挟んで鶴音山があり、南接して半円状に突出した段丘上には原古墳がある。また、この段丘崖は曲折しながら北西に続き、この遺跡より約500mの段丘突出部には門田遺跡がある。

現場は、段丘崖端より滲出する小湧水によって湿地となっている。すぐ北側から東に入りこむ小谷の奥には、常時湧水がみられる。

第33地点



第1图 第33地点地形图 (3600)

## 2. 遺構

検出された遺構は、溝状遺構が3ヶ所と柱穴状ピットが2ヶ所である。

### (1) 溝状遺構 (図版3-1, 第2図)

溝状遺構は、南北方向トレンチで検出された。最も南に位置するもの (図版3-1) は、幅約1.2m、深さ約30cmである。土層の第8層 (第3図) から切りこまれており、断面は浅い鍋底状である。この底部から木器片1と木片7が出土した。

この溝の北約1.5mにある小溝は、幅約35cmで深さ約25cmある。第6層から切りこまれており、前記の溝より新らしい。壁はやや急傾斜で底は平坦にちかい。

トレンチ北半部で検出された溝は、北東拡張区で分岐する (図版2-2)。東に向かう溝は、幅約1mで深さ約10cmと浅く、木器片1と壺椎片が出土した。北東に分岐するものは幅約40cmで深さ約20cmで、西端部とはほぼ同じである。第6層から切込まれている。

### (2) 柱穴状ピット (第2図)

東西トレンチ西半の西端と東端で、柱穴状ピット2が検出された。西のものは直径28cmで深さ30cm、東のものは直径15cmで深さ10cmと小さいものである。第何層より掘込まれたかは不明である。

(鶴久耕郎)

### (3) 土層 (第3図)

図は南北トレンチの西壁土層図で、当遺跡の標準的な土層堆積を示している。

1層 耕作土で厚さ22cm。

2層 石英粒を含んだ灰褐色粘質土で厚さ20cm。

3層 灰褐色粘質土層、厚さ10cm。

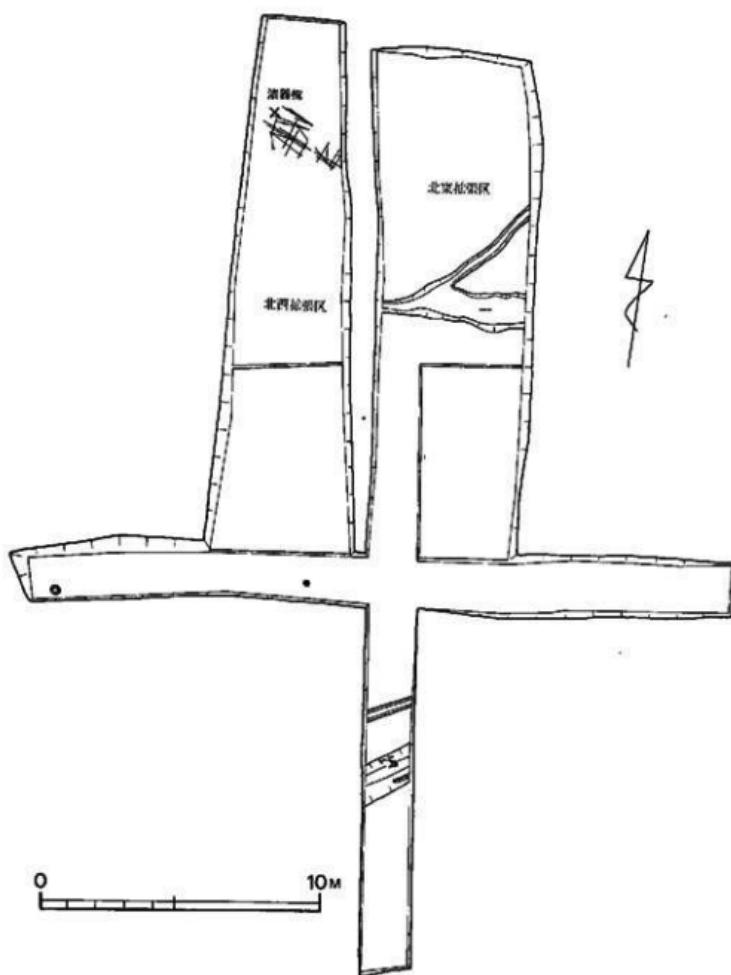
4層 黒味を帯びた砂質の土層で、5層の漸移層、厚さ5cm。

5層 黒色の砂混ざりの土層で厚さ18cm。

6層 灰褐色の土層で5層と同様に砂混ざりの土層、厚さ10cm。

7層 石英粒を含んだ灰黒色の粘質土層で、北側になるに従い徐々に粘質が弱くなる。厚さ18cm。

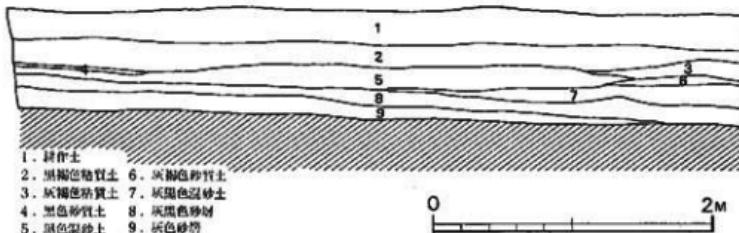
第 33 地 点



第 2 図 第 33 地点 遺構実測図 (3400)

8層 灰黒色を呈した砂層で厚さ10cm。

9層 上層の黒味が消えた灰色の砂層、厚さ15cm。この最下層に木製の椀と木坑の残欠が出  
土した。(木下修)



第3図 南北トレンチ土層断面図(%)

### 3. 遺 物

#### (1) 土 器 (図版3-2, 第4・5図)

出土した遺物はいずれも磨滅した小破片で、実測できたのは以下の7点のみである。

1～3が弥生時代、4が古墳時代、5～7は中世の遺物で、出土した層は1が9層、2・3が8または9層、4が2層、5が1層、6・7が5層とかなり混乱した状態である。これらにまじって近世の茶碗片や煙管の瓶首が出土している。

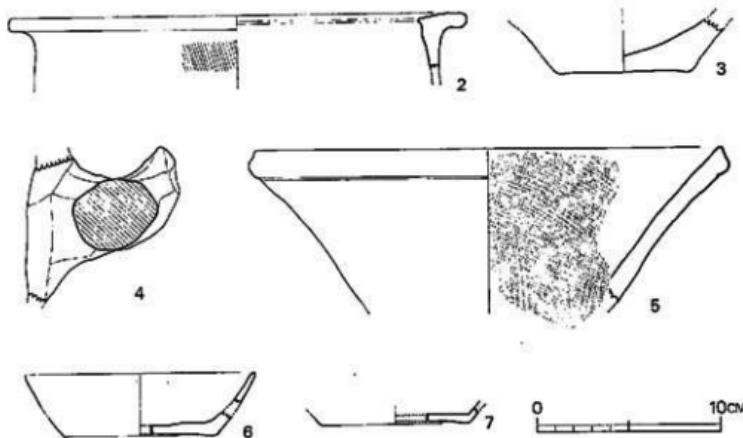
1は弥生時代成人用壺の胴部破片である。「コ」字形凸脊を有する。器壁は磨滅しているが、タテ方向の刷毛目隔壁が認められる。胎土には石英粒が多い。中期後半であろうか。2は菱形土器の小破片である。口縁部はいわゆる錐先状口縁をなし、縁部中央でふくらみながら、内側に張りだす。磨滅しているが焼成は良好で、外面頸部下にタテ方向の刷毛目が見られる。口径25cmを測る。3は壺形土器の底部で、若干あげ底である。底径7cm、厚さ0.9cmを測る。胎土は石英粒を多く含む。焼成は不良、2・3は弥生時代中期前半に属すであろう。4は瓶の把手部で、全体に鉈による整形が行きとどいている。把手基部側に横方向の刷毛目を施して

第33地點

いる。古墳時代後期に属する。5はスリ鉢で、口径25.5cm、現存高8cmを測る。外反ぎみの口縁部は若干肥厚し、直下に段を有することから、あたかも沈縫紋のごとくである。外面はヨコナデ調整され、内面には幅1.5mmで8条の溝部が2ヶ所観察される。両者の間かくは上端で4.1cm、下端で2.7cmで斜め方向の刷毛目で器面を調整した後に溝を作り出している。灰褐色を呈し、胎土に石英粒を含むが、焼成の硬い良好な土師質土器である。6は杯の小破片で、口縁部と底部は接合しない。直行する口縁部の口唇部は尖がりぎみで、薄い底部はややあげ底で厚さ5mm前後である。復原口径13.4cm、器高3.4cmを測る。底部切り離しは右廻りロクロから回転糸切りによる。灰黒褐色を呈し焼成は軟質。内外面とも回転のナデ調整を施している。7は小皿の底部破片で、底径8cm程度である。調整は不明で黄褐色を呈し焼成は軟質。底部に右廻りロクロから切り離した糸切り痕が残る。



第4図 出土土器拓影(3分)



第5図 出土土器実測図(3分)

## (2) 木器 (図版4, 第6・7・8図)

2個とも9層の灰色砂層出土である。図版4-1は高台付の椀で、高台径8.6cmで外方に5mmほど張り出す。内外とも黒漆の地に朱漆で、外面は木の葉文と柳葉文を、内面は木の葉文を描く。3はやはり椀で口縁部から腹部にいたり、底部を欠く。1と同様黒漆の地に、朱漆で外面は木の葉文、内面は柳葉文を配している。2は1と同一個体である。

木製椀は太宰府町南条坊遺跡(註1)などで出土している。鎌倉時代のものであろう。

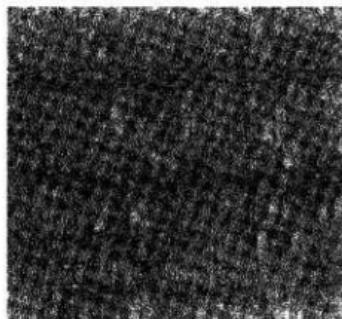
材質の同定を九州大学農学部木材理学教室の松本島教授に依頼した結果、「エゴノキ」であるという鑑定を得た。  
(木下修)

樹種名はエゴノキ *Styrax japonicus* Sieb. et Zucc. で、地方によってはチヤノキ、チサノキ、ヤマチサ、クロギ、ジサノキ、ズサ、クロジシヤ、イツチヤ、コメミズ、コハゼ、コヤス、チヨウメン、チナイともよばれるが、九州地方のみに分布するチヤノキとは全く異なる。

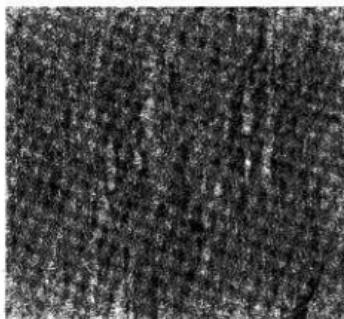
北海道南部、四国、九州に広く分布し、材は黄白色で緻密である。

顕微鏡的にみた材の特色

道管は平等に分布するも早材部に多く、道管の数は1mmあたり45~55。道管の直径は40~120μ、穿孔は階段状。柔組織は接線状か散在状に配列。放射組織は1~3細胞列で單列のものは直立、多列のものは縁辺に直立の單列放射柔組織を有する。



第6図 正 目



第7図 板 目

### 第 53 地 点

用途（明治時代）

玩具換物、妻椅子、将棋駒、木桶（つげの模擬材）、とくに割れ難く工作が容易であることから、各種換物、刷子木地、洋傘の柄その他に利用されていた。漆器用素地（換物）としては、ケヤキ、トチノキなどにつぎ椀類に使用され、金沢地方では多く用いられていた。（松本鶴）

牧野新日本植物図鑑（註2）によると、エゴノキはエゴノキ科に属し、日本や中国の山地、野原にはえる落葉の小高木で、高さ3～5mほどになる。果皮は毒を有し川に流して魚を取るために用いる。材は和傘のろくろに使用されるのでクロギとも呼ばれる、とされる。芯はかなり粘性が強く、加工に耐えることの特性を生かして椀などの木製品の材となったと思われる。

なお、円田遺跡の谷地区の種子分析によれば（註3）、第5層下部を主にエゴノキ種子が多数発見されている。

その他に少量の黒耀石、サスカイトのchipが出土している。

また、溝状造構より出土した木器は、一部に鋭い刃物で加工した痕跡がみられたが、他の木片とともに極めて腐蝕が激しく、一夜でトレンチが溝水となり排水を繰返す状況の中で分解してしまった。復原が不可能なので割愛した。

なお、当地点は分布調査により押型文土器が表探されており、その後の原古墳群調査の一助になったことを付け加えておきたい。



第 8 図 木 口

## 4. おわりに

遺物の項で述べたように、この遺跡は地層が逆転して混乱している。第2層までなら地表からの遺物が、耕作などによって混入する可能性もあるが、地表下約1mの第9層に中世漆器椀と瓦片などが出土するということは、この層が中世またはそれ以降の地表で瓦片が混入したという状態の可能性しか示さない。したがって、検出された造構も、漆器椀が遺棄された地点

で発見されたものであるとしても、下限が決められるだけである。

遺跡は、比高6.5mにおよぶ段丘崖の直下にあり、湧水の激しい湿田であった。トレンチは一夜で調査となり、調査中もほとんど常時ポンプを運んで排水を続けなければならなかった。このため、特に8・9層は作業のために混亂して土器の2・3はどちらの層から出土したか識別できないほどであった。このような状況からして、この遺跡は、段丘面または崖面に散布していた遺物が、激しい湧水による崩壊で各層に混入したものであると考えるのが、最も自然であろう。

なお、北西拡張区第9層から、細い木の枝1本を交えた竹垣様の組合せが発見された。数本の竹がほぼ平行し、あるいはほぼ直交するさまは竹垣を思わせるが、交互に組合せた形跡はなく、人為的なものか偶然重なったものか判断できなかった。竹材は、2年半以上経って乾燥しても撓やかさを失なわず、ほとんど変色もしていない。性格・時期とともに不明である。

(鶴久副郎)

註1 前川威洋・新原正典 「筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡(1)」

『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』2 1975 福岡県教育委員会

註2 牧野富太郎「牧野新日本植物図鑑」北隆館 1961

註3 大阪市立大学粉川昭平教授による。

図 版

第 33 地 点



1 第33地点全景（南から）



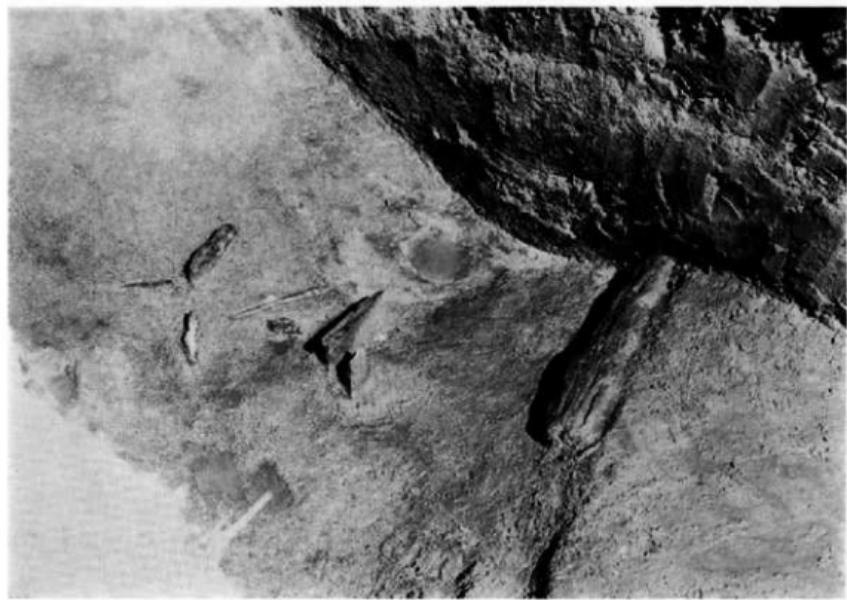
2 第33地点全景（北から）



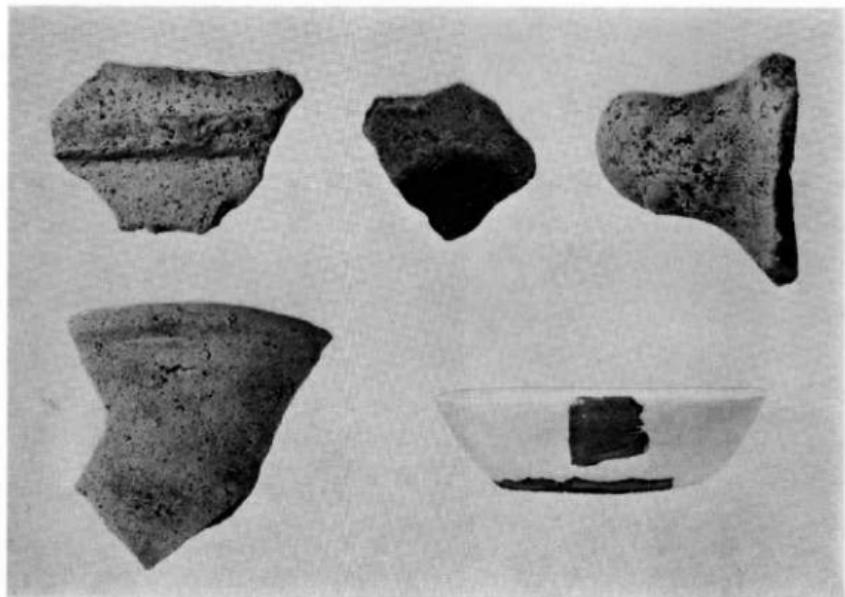
1 南北トレンチ西壁北半と杭状欠出土状態（南東から）



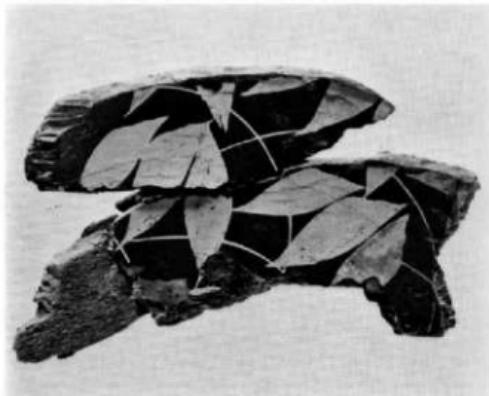
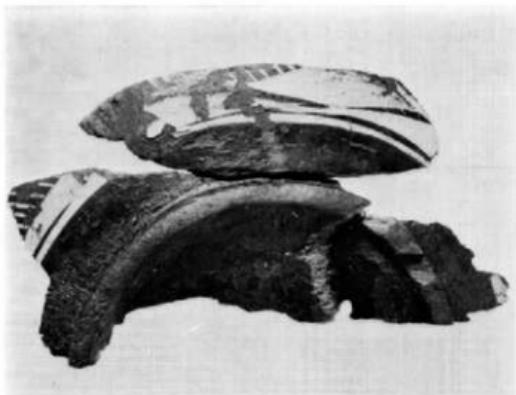
2 北西拡張区溝状遺構全景（南東から）



1 最南部溝状造構と木器出土状態（南西から）



2 出土土器



漆 器 構

## Ⅱ 原古墳群の調査

春日市大字上白水字原

## 本文目次

1.	調査の経過	15
2.	古墳の立地と環境	18
3.	1号墳	22
(1)	墳丘	22
(2)	周溝	22
(3)	石室	24
(4)	遺物	25
4.	2号墳	27
(1)	墳丘	27
(2)	周溝	28
(3)	主体部	30
(4)	遺物	32
(5)	8号土壙墓	36
5.	円形周溝墓	36
(1)	2号墳—1号円形周溝墓	37
(2)	2号墳—2号円形周溝墓	39
(3)	2号墳—3号円形周溝墓	40
(4)	2号墳—4号円形周溝墓	46
6.	3号墳	47
(1)	墳丘	47
(2)	周溝	49
(3)	主体部	49
7.	方形周溝墓	52
(1)	4号周溝墓	52
(2)	5号方形周溝墓	54
(3)	6号周溝墓	56
(4)	7号方形周溝墓	58

8.	土 墳 墓 .....	59
(1)	9号土塙墓.....	59
(2)	10号土塙墓.....	60
(3)	11号土塙墓.....	61
9.	住 居 跡 .....	61
(1)	1号住居跡.....	61
(2)	2号住居跡.....	63
10.	中 世 建 物 跡 .....	64
(1)	1号建物跡.....	65
(2)	2号建物跡.....	66
(3)	3号建物跡.....	66
(4)	4号建物跡.....	67
(5)	遺 物 .....	67
11.	ま と め .....	70
(1)	立地と墳丘について.....	70
(2)	主体部について.....	72
(3)	円形周溝墓について.....	74
(4)	原古墳群の位置.....	75

## 図 版 目 次

本文対照頁

図 版 1	(1) 原古墳群遠景 (須久嗣郎撮影) .....	15
	(2) 墓地層除去後の航空写真 (井上裕弘撮影) .....	15
2	(1) 2号墳と南方に炭焼丘陵を望む (木下修撮影) .....	18
	(2) 遺跡遠景航空写真 (須久撮影) .....	19
3	(1) 遺跡全景航空写真 (石山歟撮影) .....	19
	(2) 遺跡南半航空写真 (須久撮影) .....	19
4	(1) 調査前の1号墳 (木下撮影) .....	22
	(2) 坟丘調査中の1号墳 (木下撮影) .....	22
5	(1) 1号墳南側盛土の状況 (木下撮影) .....	22
	(2) 調査中の1号墳主体部 (木下撮影) .....	22
6	(1) 1号墳北側周溝断面 (木下撮影) .....	22
	(2) 1号墳西側周溝断面 (木下撮影) .....	23
7	(1) 1号墳全景航空写真 (須久撮影) .....	24
	(2) 1号墳石室全景 (木下撮影) .....	24
8	(1) 石室東壁 (木下撮影) .....	24
	(2) 石室石積状態 (木下撮影) .....	24
9	(1) 短甲片出土状態 (木下撮影) .....	24
	(2) 石材を抜いた蓋板 (木下撮影) .....	24
10	(1) 2号墳と円形周溝基全景航空写真 (石山撮影) .....	27
	(2) 2号墳調査状況 (木下撮影) .....	27
11	(1) 西側地山整形状態 (木下撮影) .....	27
	(2) 南東周溝と土器出土状態 (木下撮影) .....	28
12	(1) 調査前の主体部 (木下撮影) .....	30
	(2) 主体部全景 (木下撮影) .....	30
13	(1) 主体部全景 (木下撮影) .....	31
	(2) 木棺東側小口部の状態 (木下撮影) .....	31
14	(1) 木棺内出土の鉄劍 (木下撮影) .....	31
	(2) 鉄劍出土状態 (木下撮影) .....	31
15	(1) 塚塹内横断面と木棺 (木下撮影) .....	31

(2) 墓壙内地山整形の状態（木下撮影）	31
16 (1) 高杯の出土状態（木下撮影）	32
(2) 増の出土状態（木下撮影）	32
17 (1) 周溝内土器出土状態（木下撮影）	32
(2) 北側周溝内瓦出土状態（木下撮影）	32
18 (1) 2号墳－1・2号円形周溝墓全景（木下撮影）	37
(2) 1号円形周溝墓全景（木下撮影）	37
19 (1) 1号円形周溝墓主体部（木下撮影）	38
(2) 1号円形周溝墓主体部内土層断面（木下撮影）	38
20 (1) 2号円形周溝墓全景（木下撮影）	39
(2) 主体部の状態（木下撮影）	39
21 (1) 2号墳－3・4号円形周溝墓全景（木下撮影）	40
(2) 2号墳－3・4号円形周溝墓（木下撮影）	40
22 (1) 3号円形周溝墓主体部内の玉類出土状態（木下撮影）	41
(2) 勾玉と小玉（木下撮影）	41
23 (1) 4号円形周溝墓全景（木下撮影）	46
(2) 主体部の状態（木下撮影）	46
24 (1) 調査後の4号円形周溝墓（木下撮影）	46
(2) 8号土壙墓（木下撮影）	46
25 (1) 3号墳丘の調査（木下撮影）	47
(2) 3号墳全景（木下撮影）	47
26 (1) 3号墳主体部全景（木下撮影）	49
(2) 3号墳主体部全景（木下撮影）	49
27 (1) 4号周溝墓全景（柳田康雄撮影）	52
(2) 4号周溝墓主体部（柳田撮影）	52
28 (1) 5号方形周溝墓全景（柳田撮影）	54
(2) 5号方形周溝墓主体部（柳田撮影）	54
29 (1) 6号周溝墓全景（柳田撮影）	56
(2) 6号周溝墓主体部（柳田撮影）	56
30 (1) 7号方形周溝墓全景（柳田撮影）	56
(2) 7号方形周溝墓主体部（柳田撮影）	56
31 (1) 9号土壙墓（木下撮影）	59
(2) 9号土壙墓断面（木下撮影）	59

32 (1) 10号土壙墓（鶴久撮影）	60
(2) 10号土壙墓断面（鶴久撮影）	60
33 (1) 11号土壙墓（木下撮影）	61
(2) 須恵器副葬の状態（木下撮影）	61
34 (1) 1号住居跡の調查（木下撮影）	61
(2) 1号住居跡全景（木下撮影）	61
35 (1) 1号住居跡高杯出土状態（木下撮影）	62
(2) 2号住居跡全景（木下撮影）	63
36 (1) 中世建物跡全景（鶴久撮影）	64
(2) 1号建物跡全景（鶴久撮影）	64
37 (1) 3号建物跡全景（鶴久撮影）	66
(2) 4号建物跡全景（鶴久撮影）	67
38 (1) 1号墳 短甲（石丸洋撮影）	25
(2) 1号墳 土師器（木下撮影）	26
39 2号墳 土師器（木下撮影）	32
40 鉄劍、滑石製玉類、土師器（石丸・木下撮影）	32・43
41 土壙墓、住居跡出土土器（木下撮影）	64
42 (1) 瓦（石丸撮影）	69
(2) 中世の追物（石丸・木下撮影）	69

## 挿 図 目 次

第 1 図 1号墳蓋石の除去（木下修撮影）	16
第 2 図 調査中の1号墳（木下撮影）	16
第 3 図 2号墳周溝の調査（木下撮影）	17
第 4 図 中世建物跡の調査（木下撮影）	17
第 5 図 春日・那珂川地区古墳時代遺跡分布図（国土地理院地形図 福岡南部・不入道1:25,000、柳田康雄作成）	折込み
第 6 図 原古墳群地形図（鶴久嗣郎・井上裕弘・木下・高田一弘・三津井知廣 駒木洋子・追かつみ実測、木下製図）	折込み
第 7 図 原古墳群造構配置図（鶴久・柳田・木下・三津井実測、木下製図）	折込み
第 8 図 1号墳実測図（鶴久・木下・高田・三津井実測、木下製図）	折込み

第 9 図	1号墳墳丘南北土層断面図（木下・川道寛実測、木下製図）	23
第 10 図	1号墳石室実測図（三津井実測、木下製図）	折込み
第 11 図	1号墳蓋石橋架状態復原図（木下作製）	25
第 12 図	1号墳石室出土短甲実測図（木下実測、製図）	25
第 13 図	1号墳出土器実測図（木下実測、製図）	26
第 14 図	2号墳実測図（鶴久・木下・三津井実測、木下製図）	折込み
第 15 図	2号墳墳丘北側土層断面図（木下・三津井実測、木下製図）	28
第 16 図	2号墳主体部実測図（木下実測、製図）	29
第 17 図	2号墳蓋壕内土層断面図（木下実測、製図）	31
第 18 図	2号墳主体部出土鉄劍実測図（木下実測、製図）	32
第 19 図	2号墳周溝出土土器実測図（木下実測、製図）	32
第 20 図	2号墳周溝出土土器実測図（木下実測、製図）	34
第 21 図	2号墳北側周溝出土瓦実測図（鶴久実測・手拓、木下製図）	35
第 22 図	8号土塙墓実測図（木下実測、製図）	36
第 23 図	2号墳—1・2号円形周溝墓実測図（鶴久・木下・三津井実測、木下製図）	37
第 24 図	1号円形周溝墓主体部実測図（木下実測、製図）	38
第 25 図	1号円形周溝墓主体部土層断面図（三津井実測、木下製図）	38
第 26 図	2号円形周溝墓主体部実測図（三津井実測、木下製図）	39
第 27 図	1・2号円形周溝墓共に溝出土土器実測図（木下実測、製図）	40
第 28 図	2号墳—3・4号円形周溝墓実測図（鶴久・木下・三津井実測、木下製図）	41
第 29 図	3号円形周溝墓主体部実測図（木下実測、製図）	42
第 30 図	3号円形周溝墓主体部玉類出土状態実測図（木下実測、製図）	42
第 31 図	3号円形周溝墓出土勾玉・小玉実測図（木下実測、製図）	43
第 32 図	4号円形周溝墓主体部実測図（三津井実測、木下製図）	47
第 33 図	3号墳実測図（鶴久・木下・三津井実測、木下製図）	48
第 34 図	3号墳東側周溝土層断面図（三津井実測、木下製図）	49
第 35 図	3号墳主体部実測図（木下実測、製図）	50
第 36 図	4・5・6号方形周溝墓実測図（柳田・三津井実測、三津井製図）	51
第 37 図	4・5号方形周溝墓主体部実測図（柳田実測、丸山康晴製図）	53
第 38 図	4号周溝墓主体部土層断面図（三津井実測、丸山製図）	54
第 39 図	5号方形周溝墓主体部土層断面図（三津井実測、丸山製図）	54
第 40 図	6・7号周溝墓主体部実測図（柳田実測、丸山製図）	55

第 41 図	6号周溝墓主体部土層断面図（三津井実測、丸山製図）	56
第 42 図	7号方形周溝墓実測図（柳田実測、丸山製図）	57
第 43 図	7号方形周溝墓主体部土層断面図（柳田実測、丸山製図）	57
第 44 図	9・10号土壤墓実測図（鶴久・三津井実測、木下製図）	58
第 45 図	9・10号土壤墓断面図（鶴久・木下・三津井実測、木下製図）	59
第 46 図	11号土壤墓実測図（三津井実測、製図）	60
第 47 図	9・11号土壤蒸出土器実測図（木下・三津井実測、木下製図）	61
第 48 図	1号住居跡実測図（三津井実測、製図）	62
第 49 図	2号住居跡実測図（三津井実測、製図）	63
第 50 図	1・2号住居跡出土土器実測図（木下実測、製図）	64
第 51 図	1号建物跡実測図（鶴久・木下実測、鶴久製図）	65
第 52 図	2号建物跡実測図（鶴久・木下実測、鶴久製図）	折込み
第 53 図	3号建物跡実測図（鶴久・木下実測、鶴久製図）	折込み
第 54 図	4号建物跡実測図（鶴久・木下実測、鶴久製図）	折込み
第 55 図	中世土器実測図（木下実測、製図）	68
第 56 図	表土層出土瓦拓影（木手下手拓）	69
第 57 図	1号墳墳丘復原図（木下作製）	71

## 表 目 次

表 1	春日・那珂川地区古墳時代遺跡地名表（柳田康雄作成）	19
表 2	勾玉計測表（木下作成）	43
表 3	小玉計測表（木下作成）	44
表 4	方形周溝墓一覧表（三津井知廣作成）	52
表 5	土壤墓一覧表（三津井作成）	59
表 6	1号建物跡計測表（木下作成）	66
表 7	2号建物跡計測表（木下作成）	66
表 8	3号建物跡計測表（木下作成）	66
表 9	4号建物跡計測表（木下作成）	67
表 10	古墳・円形周溝墓一覧表（三津井作成）	71

### III 原古墳群の調査

#### 1. 調査の経過

遺跡は、山陽新幹線関係埋文化財地点番号の第33-1地点にあたる。当初、遺跡北側の傾斜面から水田面のみが調査対象地（第33地点・本報告書掲載）となっていた。48年4月時に創道分の再踏査を行なったところ、春日市中央公民館長の龜井勇氏、ならびに、地元の旧地権者より、台地上に古墳1基が存在したとの教示を得、追加調査地点とした。

調査の結果、古墳3基を中心とした古墳時代の遺構と重複して、绳文時代早期の包含層と、弥生時代中期の甕棺墓群を発見した。本報告は前者の古墳時代の遺構と中世建物跡のみに限って行ない、他は「原遺跡」として、別に報告する。

調査は昭和48年8月26日から、同年12月26日までの4ヶ月間を要した。調査団の編成は以下の通りである。

庶務担当者	福岡県教育委員会文化課	主事	植田 實
	同	嘱託	吉村 源七
調査担当者	同	技術主査	鶴久嗣郎
	同	技術師	柳田 康雄
	同	同	井上 裕弘
	同	同	木下 修
調査補助員		高田 一弘	
		実川 順一	
		三津井 如廣	
		宮崎 貴夫	
明治大学学生	川道 寛・駒木 洋子・追 かつみ		
法政大学学生	福富 裕和		

また、発掘作業には春日市上白水・下白水、および小倉在住各位の協力、ならびに、日之出水道機器上白水工場の援助を受けた。あわせて感謝の意を表したい。

以下に日誌から調査経過をたどってみよう。

5月19日 ブルドーザにて埋土の排除を行なう。

## 原古墳群

5月22日 墳丘の高まりと考えられる箇所が3ヶ所発見される。深原遺跡の調査終了後に発掘を行なうことにする。

8月24日 地形測量を行なう。

8月26日 1号墳の墳丘中央に石室を検出。蓋石4枚はばらばらに散在していた。石室の中央から十文字ベルトを残し、残りの全振にかかる。

9月4日 石室内を掘り終る。堅穴式石室で北西側は破壊されていた。墓櫃は地山の褐色土層上部の黒色土層から切り込んでいることが判明した。

9月5日 黒色土層を注意したところ、墳丘は二段の築成であることを確認した。周溝の全振にかかる。

9月11日 1号墳は北西部のみを残して全掘した。2号墳の墳丘中央部の東西に長い墓櫃と考えられる落込みを掘り下げたところ、木棺の痕跡が現われる。

9月12日 1号墳の周溝を全掘。北西側周溝底面より土師器が出土した。細片のため復原できるかどうか不明。2号墳は主体部の木棺を確認し、主体部に直交した土層断面ベルトを残し、全振にかかる。

9月20日 1号墳の全景写真と主体部の写真撮影を行ない、午後より土層断面図を作成。断面図より墳丘高はそう高くないだろうと考えられた。第33地点の調査を開始する。

9月26日 ブルドーザーを導入し、台地斜面の排土を行なう。

10月8日 1号墳主体部の実測にかかる。

10月10日 2号墳の周溝がまわらず、4ヶ所で切れることが判明した。周囲の表土剥ぎを急ぐ。

10月12日 1号墳主体部の断面図をとる。

10月15日 2号墳の西側は斜面で、地山まで深く発掘難航する。

10月18日 周溝を完掘したところ、2号墳の周囲に4基の円形周溝墓が付く特異な古墳である



第1図 1号墳蓋石の除去



第2図 調査中の1号墳

ことが判明した。周溝東南部では、高杯・壇・壺などがまとめて出土した。なお、2号墳の北西側は近世にかなり削平され、2号墳—1号周溝墓は、3分の1が切られていた。

10月24日 3号墳の主体部を検出する。

10月26日 2号墳の土層断面図をとる。

10月30日 2号墳の木棺を掘る。盗掘により1mしか残っていない。棺床面は赤色顔料が塗布され、副葬品の鉄剣一振が発見された。

10月31日 2号墳主体部写真撮影を行なう。

11月5日 3号墳は東側馬溝より棗棺が出士した。2号墳—4号周溝墓の主体部を実測する。

11月7日 3号墳の土層断面図をとる。主体部を掘る棺床面下まで盗掘されていた。

11月8日 2号墳—3号周溝墓の主体部より滑石製勾玉と小玉を発見した。実測を行なう。

11月9日 2号墳—1号周溝墓の土壌を掘り下げるところ、粘土があらわれ、木棺らしいことが判明した。

11月10日 2号墳に付随する4基の円形周溝墓を完掘する。1号墳西側斜面に住居跡2軒を検出した。

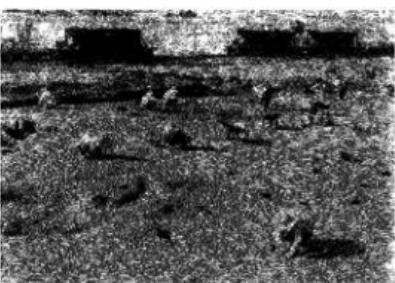
11月12日 2号墳—1号周溝墓の主体部上層実測をとる。1号墳の南側に柱穴群を認めた。

11月15日 1号住居跡より高杯・杯が出土した。4・5号方形周溝墓の主体部を掘る。各土壌を掘る。

11月20日 台地の南東側を拡張し、表土剥ぎを行なったところ、豪棺墓群を発見する。



第3図 2号墳周溝の調査



第4図 中世建物跡の調査

## 原古墳群

- 11月22日 9号土塁墓の土崩断面図をとる。
- 11月23日 図面とりで忙しくなる。4号・5号周溝墓主体部の実測にかかる。8号・11号土塁墓の実測も並行して行なう。
- 11月24日 2号墳—1号周溝墓、2号墳—3号周溝墓の主体部の実測に入る。
- 11月28日 2号墳の主体部を実測する。
- 11月30日 10号墓の実測を行なう。2号墳は墓壇内断面図をとる。
- 12月1日 3号墳の全景写真を撮る。
- 12月5日 航空写真を撮る。天候状態はあまりよくなかった。3号墳主体部の実測にかかる。
- 12月12日 4号周溝墓の主体部を実測する。
- 12月19日 造橋を含め、地山面のコンタを20cm間隔でとる。一部縄文時代の調査を行ない、石組炉跡を発見する。
- 12月26日 中世建物群の実測を終る。縄文時代と弥生時代豪富墓の調査を残し、古墳群の調査を終了する。

## 2. 古墳の立地と環境

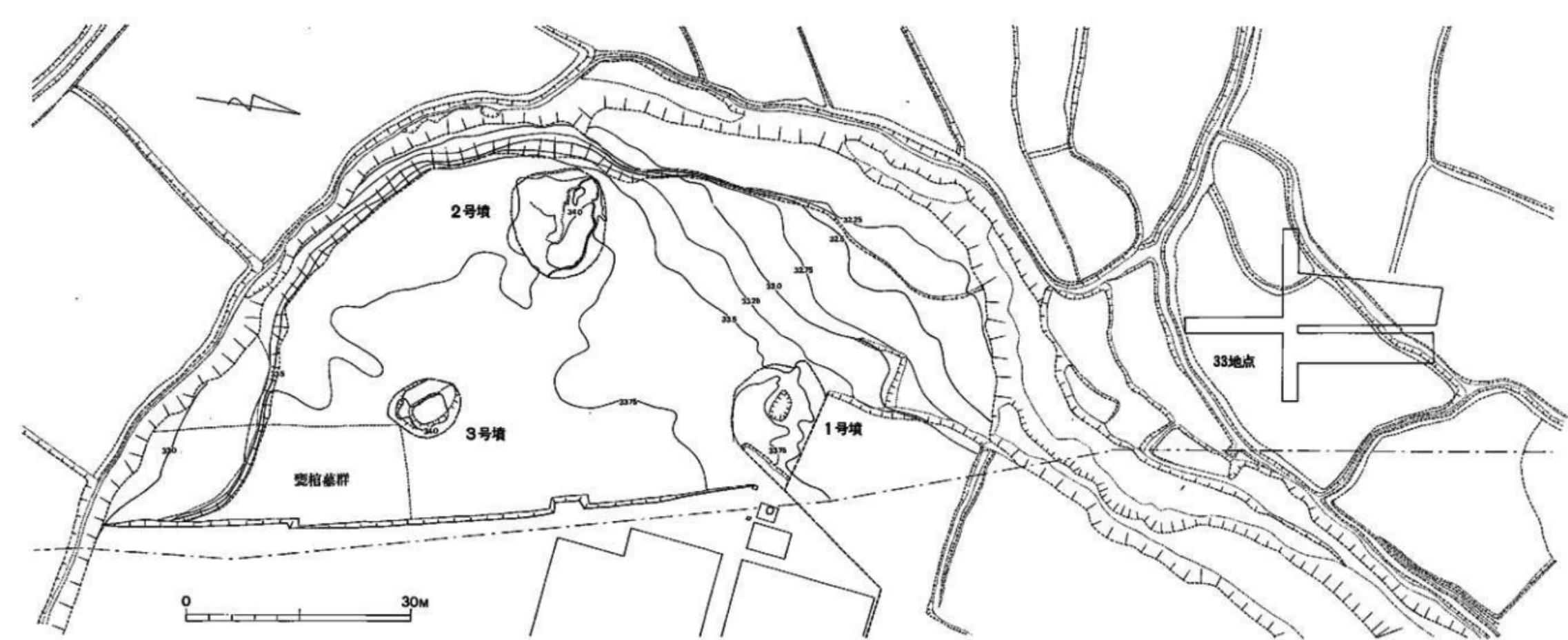
遺跡は、福岡県春日市上白水字原に所在し、春日・那珂川の両市町にまたがる50万m<sup>2</sup>に及ぶ広大な博多総合車両基地のほぼ中央部東端に位置する。

県西部を北流して博多湾へ注ぐ那珂川は、佐賀県との県境に達する、標高1,000m余の背振山塊に源を発する。大谷川・下代久津川などの水を集め、水量を増しながら、市ノ瀬・不入道の急流を下る。妙見と安宿間の狭い谷を抜けると川幅を拓げ、運んで来た土砂を両岸に堆積する。そして、特に右岸を中心にして肥沃な沖積地を形成していく。一方、櫛原川を挟んで、炭焼丘陵と対峙する銀音山山塊(標高169m)は、その大部分を花崗岩で成している。その性質から、雨水等により徐々に侵蝕され、西麓一帯に小規模の扇状台地を形成する(註1)。その台地上には縄文時代早期から後期にいたる深原遺跡や、終末期の古墳群である銀音山古墳群中原支群(第5図43)が存在する。また、北麓へは、低い台地が八つ手状にのびていく。遺跡は、その1つの平坦な扇状台地が、冲積地に突き出た西端舌状部に位置する。標高34m前後を測り、周囲は発達した水田面となる。水田との比高は5mを数えるに過ぎないが、東は三郡山系から福岡平野が望め南には背振山塊の姿を近くに見えられる。台地上は、近年まで雜木林として、それ以前は、畠地となっていた。現在でも用地外の工場北側は竹林となっている。

当地域の古墳群については、柳田康雄により、その分布と編年があきらかにされつつある(註2)。



第5図 春日市・那珂川町地区の古墳時代遺跡分布図（福岡南部・不入道 1:25,000）



第6図 原古墳群地形図 (1/600)

原古墳群の南方 1.5 Km にある安徳大塚古墳（30）は古式の前方後円墳で、那珂川が作りだしていく沖積地の要の位置にある。内部主体は大きく盗掘を受けているが、礫床の粘土層である。同じ炭焼丘陵の各支脈上には、方形周溝墓の炭焼古墳群（39）がある。この炭焼古墳群は中原集落をはさんで、原古墳群と対峙している。その内部主体は、箱式石棺・木棺直葬・石蓋土壤・石棺系堅穴式石室とバラエティーに富んでいる。

那珂川左岸は、丘陵がすぐそばまでせまっている。その狭い丘陵上に古式の古墳、方形周溝墓が立地している。恵子若山遺跡は、那珂川をはさんで、原古墳群と対峙し、その間 2 Km を距る。粘土層を有する円墳と、方形周溝墓 2 基が調査されている。その南方 0.5 Km には油田古墳群北方 0.5 Km には井河古墳群（14）と、古式の低墳丘を持つ古墳群が集中する。また、遺跡の北西 2.5 Km には、櫛闘平野最大の老司古墳（2）が横たわっている。

このように、那珂川町一帯は、古式の古墳群の集中した地域で、その墳丘・立地・主体部と非常に在地性の強い点でも注目されている。原古墳群も、これらの古墳群と深い関連性を有しているものと思われる。

古墳群をのせる台地上は、日之出水道機器の工場用地として整地され、1 m あまり盛土されていた。盛土を除去し、元の状態に戻したところ、3 基の円墳を確認した。

全掘した結果、台地上を大きく三等分して、古式の円墳が 3 基と、2 号墳に付随する特異な円形周溝墓 4 基（2 号墳—1 号周溝墓～4 号周溝墓）、3 号墳の南側、台地南側斜面に作られた方形周溝墓 4 基（4 号周溝墓～7 号周溝墓）、土壤墓 4 基及び、遺跡の北西斜面に古墳時代の住居跡 2 軒、中世期の建物跡 4 軒の追跡を発見した（第 7 図）。

この他に、縄文時代早期の遺物包含層と石組炉跡ならびに、3 号墳南側一帯に大規模な弥生時代中期の変格墓群を発見したが、この両時代の調査は、国鉄の新幹線開通至上主義における車輌基地建設優先工事工程のため 50 年度に延期された。

表 1 春日・那珂川地区古墳時代地名表

番号	跡名	所在地	立地時期	遺構内容	出土遺物	註
1	卯内 封古墳	福岡市南区老司卯内	前期	円墳、粘土層	三角縁神獸鏡、銅鏡	3
2	老司古墳	大谷丘陵	前後円墳	古式横穴式石室、玉類、鐵器、織、磁	石、玉器、鏡、金環	3
3	老松神社古墳群	老松神社	低墳丘			4
4	野口古墳群	那珂川町片瀬野口	低墳丘			4
5	櫛音堂古墳	櫛音堂	前方後方墳			5
6	櫛現塚古墳		後期	装飾古墳、円墳、周堤	須恵器、滑減	4
7	油ノ田古墳群	浦ノ田	前後円墳、円墳、横穴式石室	埴輪、須恵器、陶棺		4
8	大牟田古墳群	福岡市南区星形原	凹墳、方墳、横穴式石室	須恵器、鐵器		
9	油ノ原東古墳群	那珂川町片瀬油ノ原	凹墳、横穴式石室			6
10	油ノ原西古墳群		凹墳、横穴式石室			6

## 原古墳群

11 小丸古墳群	那珂川町片岡小丸	丘陵後期前方後円墳（2基）円墳	埴輪	4
12 うめぼし山古墳	那珂川町片岡下原	丘陵後期円墳、横穴式石室	云よろい、鏡、刀剣、馬具	7
13 下原古墳群	" "	" 円墳		6
14 井河吉塙群	那珂川町片岡井河	丘陵前期低墳丘		4
15 白石古墳群	" 後野白石	" 後期半墳	新池東側は造成にて全壇	6
16 若山古墳群	那珂川町恵子若山	丘陵前期円墳、方形周溝墓	鏡、土師器	5
17 荒平池古墳群	" "	" 後期		6
18 紗法寺古墳	那珂川町恵子紗法寺	丘陵後期前方後円墳、横穴式石室		4
19 油田古墳群	" 道善油田	" 前期円墳、方墳、木棺直葬、鏡片、鉄器、土師器	右棺	4
20 大万寺前古墳	" 後野大万寺前	" 後期前方後円墳、横穴式石室		4
21 大万寺北邊塚	" "	散布地	須恵器、土師器	6
22 イボリ古墳	" 後野イボリ642	丘陵 方墳？段築		8
23 国太子古墳群	" 国太子	" 後期円墳4基一部削平		6
24 堂の前古墳	" 西限堂の前	" " 円墳		8
25 熊本古墳群	" 熊本	" 横穴式石室、墳丘割列石		4
26 吉畑古墳	那珂川町後野吉畑	" 円墳		6
27 松尾古墳	" 松尾	山裾後期円墳、複室	現在は玄室のみ残る。	6
28 風早古墳	那珂川町安徒風早	台地 円墳		6
29 風早	那珂川町安徒風早	台地 敷地	土器	6
30 安徒大屋古墳	" 大屋	丘陵前期前方後円墳、隕床、立石	埴輪、鐵器、土師器	9
31 平賀古墳群	" 平賀	" 円墳、横穴式石室		8
32 平蔵	那珂川町上醍醐平蔵	台地 敷地	土師器、須恵器	6
33 大戸	" 下醍醐大戸	丘陵後期敷地	土器	6
34 馳原	" 上醍醐駒原	山裾 敷地		6
35 内河	" 内河	段丘後期敷地		6
36 潤戸古墳群	" 下醍醐潤戸	円墳、横穴式石室		8
37 ツタガ原古墳群	" 松ノ木ツタガ原	丘陵後期円墳、横穴式石室		6
38 平石古墳群	那珂川町松ノ木瀬戸	丘陵後期円墳、横穴式石室		6
39 炭焼古墳群	那珂川町仲炭焼	丘陵前期石蓋土壙		10
40 潤戸古墳群	" 松ノ木潤戸	丘陵後期円墳、横穴式石室	須恵器、鐵器	11
41 カクチガ浦古墳群	" 松ノ木カクチガ浦	丘陵後期円墳、横穴式石室		6
42 エゲ山古墳群	" 松ノ木エゲ	丘陵後期円墳、横穴式石室		12
43 鞍背山古墳群	" 中原深原	山裾終末石棺、横穴式石室	鐵器、金環、須恵器、土師器	13
44 合政	" 松ノ木合政	台地 敷地	土器	6
45 油田	" 中原油田	那珂川中生吉古墳	須恵器、横穴式石室	14
46 清井川古墳	" 中原	段丘 後期円墳	須恵器	15
47 宗石	那珂川町今光宗石	台地 敷地		6
48 潤戸口	" 松ノ木潤戸口	台地 敷地		6
49 火堀古墳群	春日市上白水大堤	" 横穴式石室		12
50 ウトロ古墳	" 上白水ウトロ	" 前期前方後方墳		8

## 原古墳群

51	ウトコ古墳群	春日市上白水ウトコ	台地前期後墳丘、斐椎墓		18	
52	原古墳群	春日市上白水原	" " 円墳、竪穴式石室、木棺 土師器	焼甲、铁劍、勾玉、小玉、 土師器		
53	門田古墳群	" " 門田	" 後期円墳2基、横穴式石室	埴輪、鐵刀、铁劍、碧、 勾玉、青玉、丸玉、小玉	16	
54	門田	" " 門田	" " 横穴住居跡		16	
55	辻田古墳群	" " 辻田	合地前期円墳1基、竪穴式・横穴式・木棺 後期式石室	勾玉、青玉、丸玉、铁劍、 铁斧	16	
56	辻田	" " 辻田	合地前期横穴住居跡	土師器	16	
57	天神山古墳	春日市上白水天神山	丘陵後期前方後円墳、横穴式石室		8	
58	千足古墳	" " 下白水千足	" " 円墳、横穴式石室		12	
59	日拝塚古墳	" " 日拝塚	合地後期前方後円墳、横穴式石室	鉄、铁劍、铁棒、单面 环形器、武器组、輪鉢、碧、 云珠、馬銭、須恵器等	17	
60	吉水	" " 吉水	散布地		12	
61	一の谷	" " 一の谷	丘陵前中期方形周溝墓		18	
62	下白水大塚古墳	" " 下の原	後期前方後円墳	上製人形	4	
63	須恵古墳群	春日市須恵野屋	"	埴輪	4	
64	熊野神社古墳	" " 国本町	" 後期円墳(2基)、横穴式石室		12	
65	竹ヶ本古墳群	" " 小倉竹ヶ本	丘陵後期前方後円墳、円墳	鏡	19	
66	竹ヶ本	" " 小倉竹ヶ本	" 前期住居跡		19	
67	伯玄社古墳	" " 伯玄町	" 前期砾床	鐵刀	12	
68	円入	" 春日円入	後期散布地		8	
69	斐利古墳	" " 斐利	丘陵" 円墳	須恵器	20	
70	榎原古墳群	" " 榎原	" 前方後円墳、円墳、横穴 式石室	須恵器	8	
71	浦ノ原	"	散丘	散布地	須恵器	8
72	肩ノ元古墳	大野城市牛頭肩ノ元	丘陵後期円墳、横穴式石室		21	
73	中通古墳群	" 牛頭中通	丘陵後期円墳、横穴式石室	須恵器、玉類、鐵器	21	

註1 九州大学浦田英夫教授より、深原遺跡調査時に、当地域一帯の地質について御教示を得た。

2 渡辺正気・初田慶造「油田古墳群」『福岡県文化財調査報告書』42 1969

3 義貞次郎「老司古墳—I.老司古墳の発見」福岡市教育委員会 1969

4 距2に同じ

5 岩崎二郎編「恵子若山遺跡」恵子若山遺跡調査会 1975

6 那珂川町教育委員会「那珂川町文化財遺跡調査」 1970

7 1975年福岡県教育委員会実測

8 1975年福岡県教育委員会実査

9 井上裕弘「安徳大源古墳の発掘調査」『教育福岡』A260 1971

10 宮小路賀史・柳田康雄「炭鉱古墳群」『福岡県文化財調査報告書』37 1968

11 1974年國立大学調査

12 龜井勇氏教示

13 井上裕弘編「昭和47年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」福岡県教育委員会 1973

14 木下修編「昭和49年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」福岡県教育委員会 1975

15 1976年那珂川町教育委員会調査にて、円溝のみ確認された。墳丘は消滅。

16 柳田康雄編「昭和48年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」福岡県教育委員会 1975

17 中山平次郎・玉泉大業・島田寅次郎「口拝塚」『福岡県史跡名勝天然紀念物調査報告書』5 1990

18 宮路賀史「一の谷遺跡」『那珂川町文化財調査報告書』2 1969

19 渡辺正気「筑紫郡春日町竹ヶ本遺跡調査報告」『福岡県文化財調査報告書』22 1961

20 肥山正秀氏検査

21 小田富士雄・柳田康雄編「野添・大浦窓跡群」『福岡県文化財調査報告書』43 1970

## 3. 1号墳

## (1) 墳丘 (図版4-2, 第7・8図)

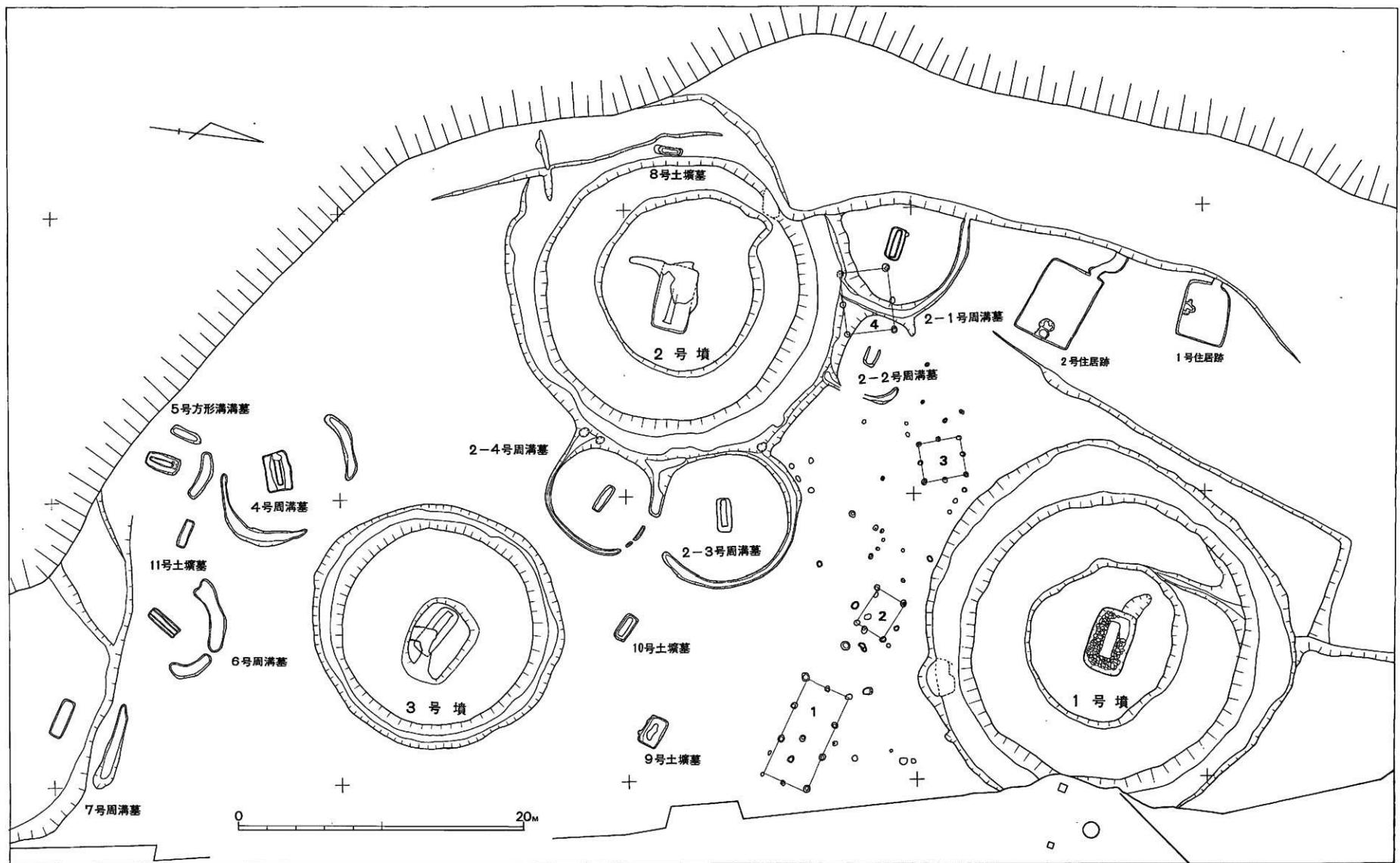
遺跡の北側を占める円墳で、本古墳群中最も大きい。周溝間径26mを測り、墳丘東側は側道用地外ならびに、工場配水管等の設備があるため未調査である。当初、地籍図に記録され、本遺跡の調査のきっかけを作った古墳である(註22)。前述のように、遺跡は工場用地として一度造成をうけていたので、墳丘上部はすでに削平されていた。

陥没した主体部周辺の黒色土の上に、破壊された蓋石や石室の石材が散乱していた。主体部を確認し、主軸と直交して断面ベルトを残し、墳丘の調査にかかった。主体部の墓築が黒色土層から掘り込まれているところから、注意して土層を観察した結果、この層が墳丘盛土ではなく、石室を中心に広がる径11m、厚さ30cmほどの旧表土であり、盛土前の墳丘が2段に形成されていたことを確認した。この二段築成とも言える墳丘の築成法は、2・3号墳にも共通し、本古墳群の一つの特色となっている。第8図が示すように、上段の範囲は主体部と周溝の中間点までの4mで、テラス状に平坦面をなす。その外側、つまり周溝までの約3.5mも平坦面をなし、周溝にいたる。平面形からすると、石室を中心と上段・下段・周溝と同心円を描いていくようである。上段部径9.5m、下段部径18.5mを測る。

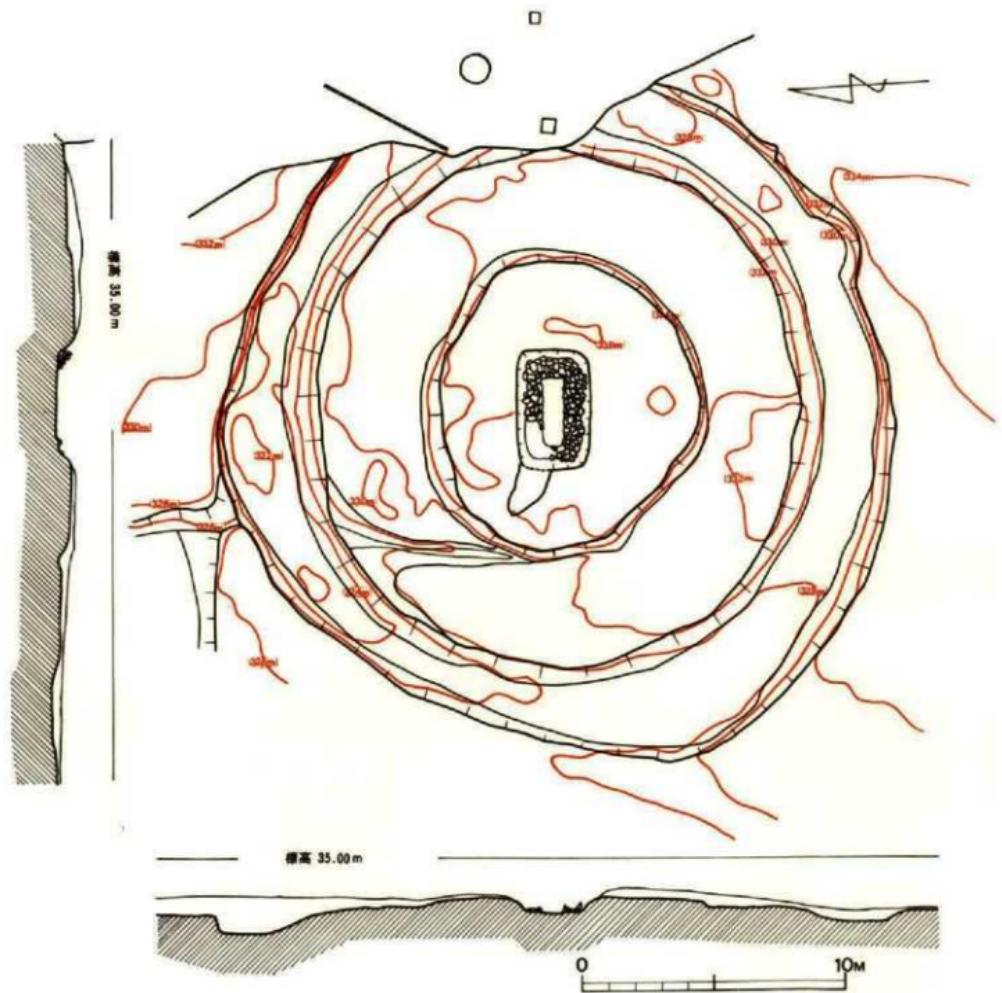
第9図の断面図が示すように墳丘盛土は、旧表土の黒色土上では6層に分けられ、南側では旧表土にはほぼ水平、北側では主体部を覆うように堆積している。そのうち、主体部石室近くは特に粘土質の土層(第9図の土層番号12・15)をもって石室を被覆する形をとっている。下段の地山では10層を除いて顕著な盛土は見られず本墳の盛土が、上段と下段の境あたりから行なわれ石室を覆う程度のものであったことが知られる。盛土前の墳丘は台地の傾斜に沿い最高所で33.6m、低所、つまり周溝外で32.4mと1.2m前後の差をもつ、二段の平坦に近いものに形成され、盛土がなされたことになる。このことは、旧地権者等の記憶から、削平前の墳丘高が1.5m前後であったことと相反しない。また、墳丘表土層に、中世の土御器の出土を見るとところから、その当時、若干削られた可能性は残るが、大差はないであろう。

## (2) 周溝 (図版6, 第9図)

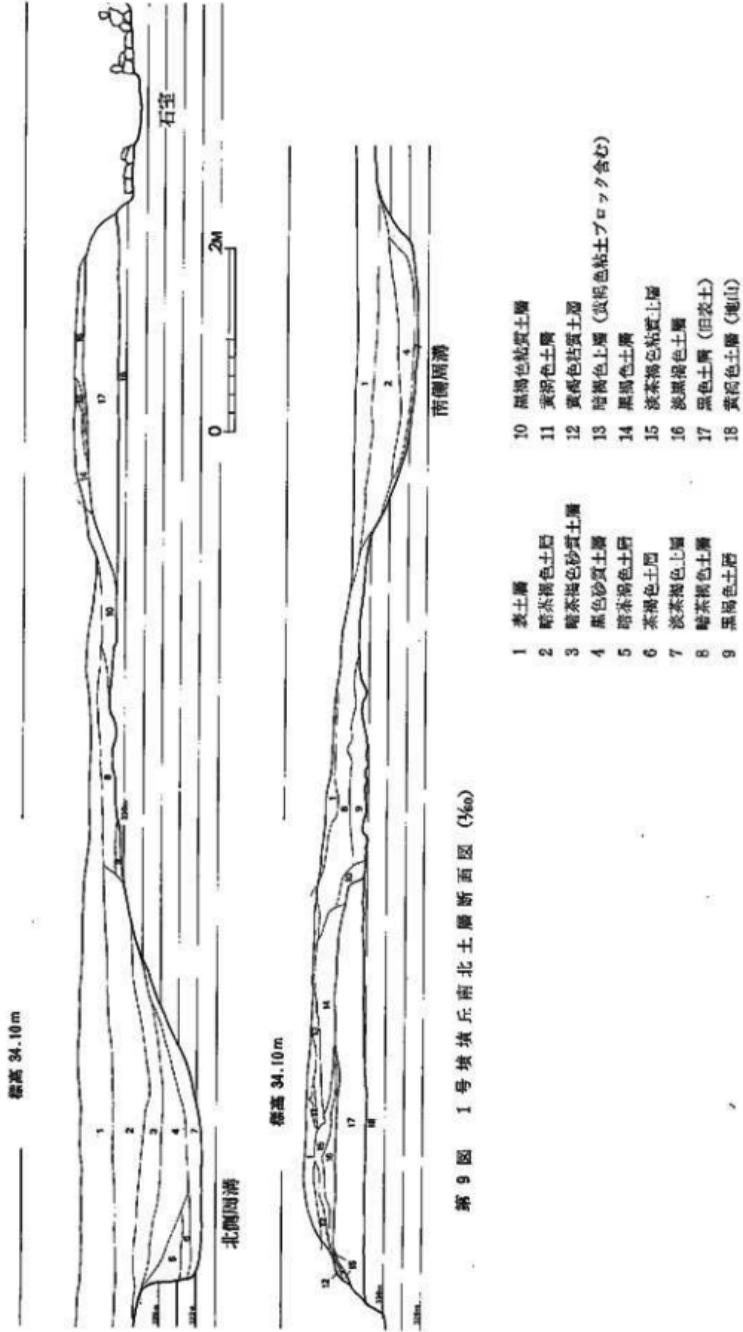
墳丘東側は未調査であるが、一周することは確実である。西側を除き幅は平均して3.5m前後で、南側は底面U字形を呈し深さ45cm、北東側は60cmと深くなる。レベルでいうと南側より80cm程下がって32.2mを測り、石室床面よりは70cm程高い。周溝内側はゆるく墳丘にあがり外



第7図 原古墳群遺構配図 (1/200)



第 6 図 1 号 填 実 測 図 (3500)



第9圖 1号墳墳丘南北土層断面図 (No. 1)

## 原古墳群

側は急である。西側部は幅2.8m、深さ20cmと極端に浅くなる。この部分は、本墳でも最も標高の低い地点であり、この深さが南側の周溝と変りない点は古墳築成上注意されよう。

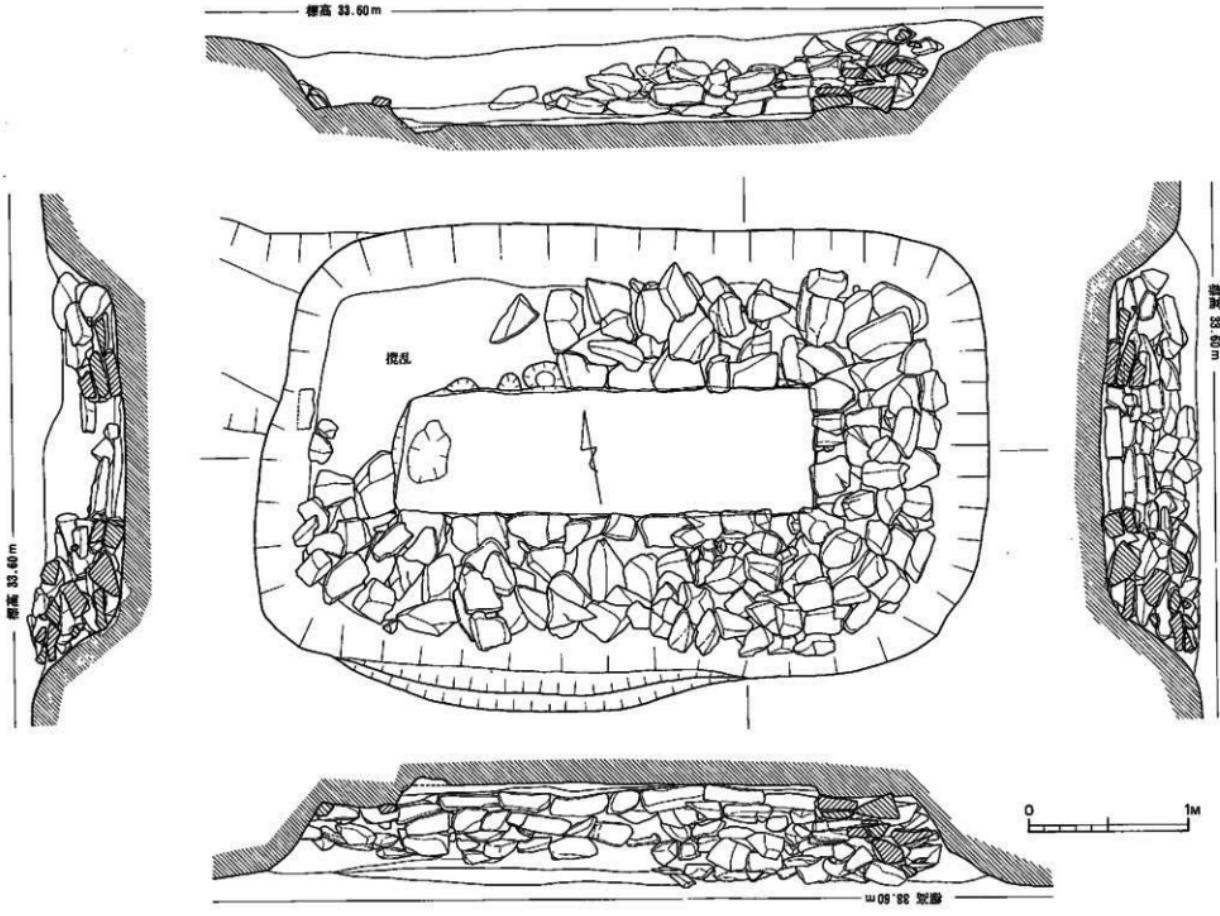
遺物は北側周溝底面に接して土師器甕が発見されたが、ほとんどが磨滅し、細片化している。

### (3) 石室（図版7・8、第10図）

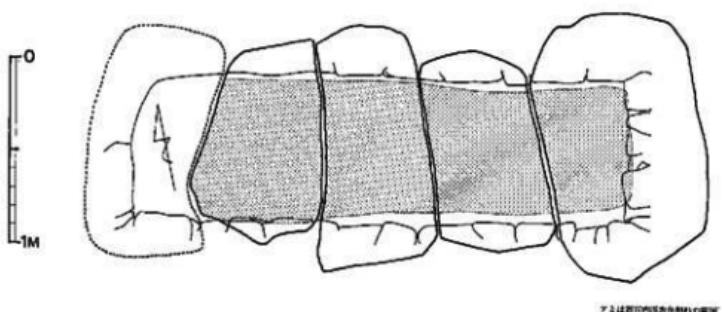
主軸をN81°Wとほぼ東西方向にとする竪穴式石室である。蓋石は造成時に破壊され、石室上部もかなりの石が動いていた。また、石室北東側は床面まで石材が抜かれているので、ここから盜掘が行なわれたのであろう。石室は埴丘中央部旧表土の黒色土から掘り込んだ、長さ4.5m幅2.9m、深さ0.5mの長方形の墓壙内に積築されている。石室内法は、南壁側2.6m、東壁側0.8m、西壁側0.7mを測り、東壁側の方が若干広くなっている。

石質は、すべて花崗岩を用い、残存状態のよい東壁では4段の石積みがみられ、他の壁は2～3段ほどしかない。積石は腰石より徐々に内部にせりだすように積み上げ蓋石を構架する。内壁腰石は、長さ30cm、厚さ10cm内外の石材を用い、その上には若干小さめの、厚さ7cm前後の扁平な石を小口積みにしている。裏込めの石はふぞろいで、その状態も密につめたものではないが、墓壙内全体に裏込めは行なわれている。裏込め石までを含めた石室長は4m×2.3mを測る。石室の高さは上部が削平されているため不明であるが、第10図の石室断面図の裏込め石のレベルから想定して、あと2～3段は確実に存在したと考えられ、約60cm前後になるとと思われる。蓋石は、主体部周辺に4枚散在していた。長さは1.1m～1.4m、幅0.55m～0.85mで、厚さはほぼ0.2mを数える。内面に赤色顔料が塗彩されているので、大体の位置関係が判る。第11図東側の石は、赤色顔料の状態からして端に来るもので、散乱していた状態からして、東側の1枚であったと思われる。他の蓋石は中央部にくる石である。4枚の石の長さを合計すると2.5mとなり、赤色顔料の塗彩状態からしても、いま1枚の西端にくる蓋石があったと考えられたが、遺跡内には見あたらなかった。蓋石内面に残る塗彩の範囲は石室内法より若干せまい。蓋石間に粘土で目張りされたかは判然としないが、土層断面図（第9図）には、墓壙周辺部に粘土がみられるところから、その可能性が強い。赤色顔料の塗彩は、石室内壁の小口部全体と、前記の蓋石内面つまり天井部に認められ、床面には認められなかった。

床面には粘土、礫などは一切認められず、中央部が若干、低くなる傾向があるだけだが、被葬者は、石室内の木棺に安置されていたのであろう。頭位は石室内法から考えれば東側の可能性が強い。1号墳の石室は、いわゆる小形竪穴式石室という範疇に入るものであるが、内法が2.6mと長く、その積築法も、炭塙5号墳や栗崎山4号墳の如く、石棺系のものではない。



第10圖 1号填石室実測図 (3/4)



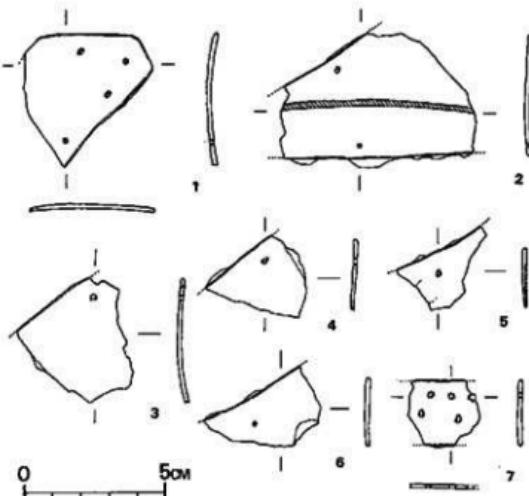
第11図 1号墳蓋石と構架状態復原図 (3%)

アミは蓋石内側を斜めに複数

## (4) 遺物 (図版9-1)

石室内は盗掘を受け、短甲片が得られたのみであるが、渡辺正氣氏によれば、かつて短甲・鐵劍・鐵斧等が発見されたとのことである(註25)。

**短甲 (図版38-1, 第12図)** 石室内に残存していた唯一の遺物で小破片が大部分であり、原形が察えるのは以下の7点。いずれも三角板革縫短甲の一部である。2～6は三角板の一部で2のみが三角板の二辺、すなわち左辺と底辺を残し、各々に革縫の一孔を有する。厚さは2が2mm強で



第12図 1号墳石室出土短甲実測図 (3%)

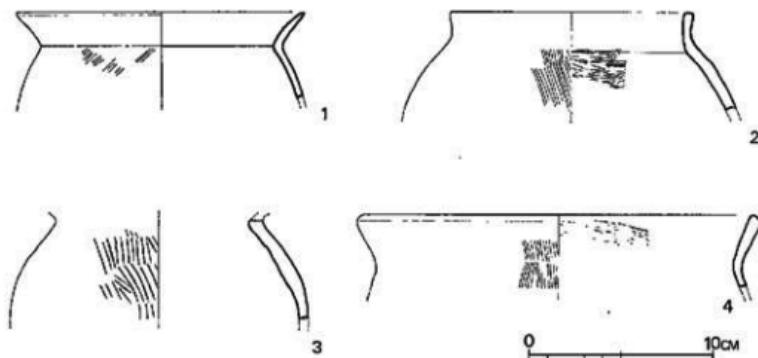
### 原古墳群

径が2mm弱である。全体の大きさは不明で、壁上か長側の三角板か否かも判然としない。1は左辺を欠く資料で革縫孔が4ヶ所、上辺と右辺に沿ってみられるところから壁上二段目の破片と思われる。7は2.5cmの帯状の破片で上部に3孔、下部に2孔革縫孔がみられる。帯金か引合板の破片であろうか。

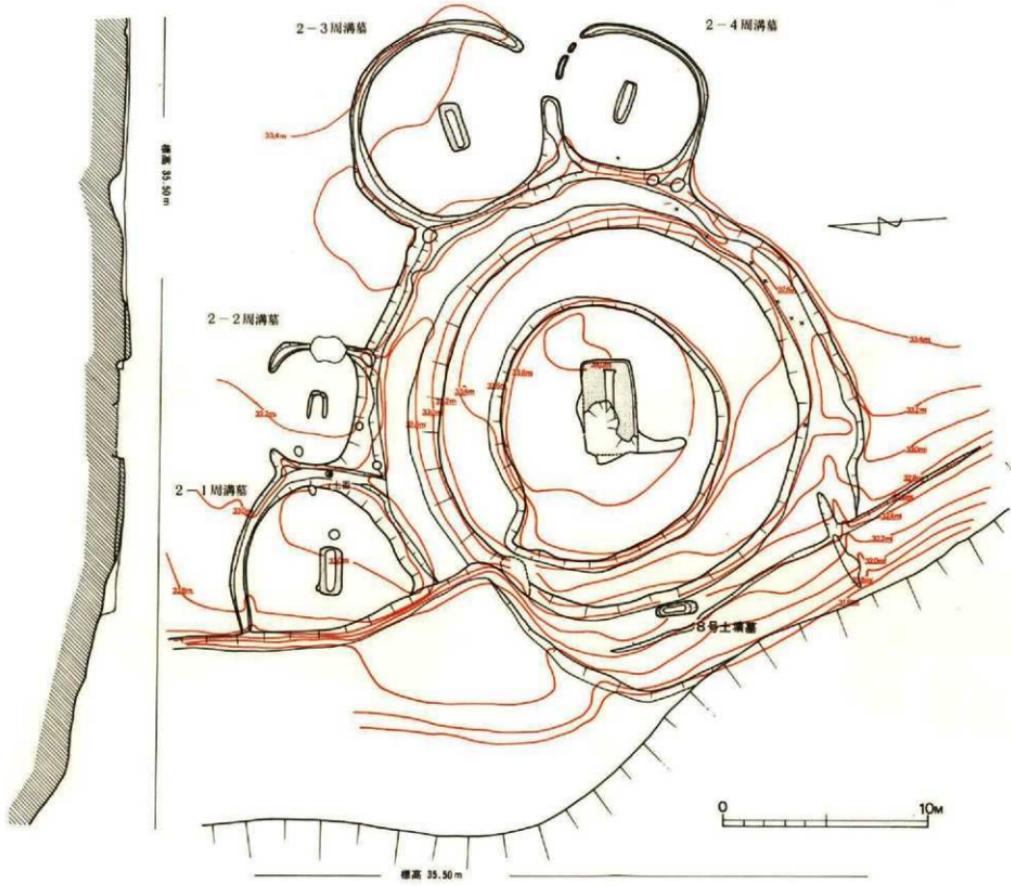
**土器（図版38—2、第13図）** 1のみが北側周溝底出土で、その他は墳丘の表土層より出土したものである。器形はすべて壺形土器である。

1は復原口径15.6cmを測る壺形土器である。腹部上半部以下を欠く。器壁は4mm前後と非常に薄く、「く」字形の口縁をもち、口唇部は尖る。調はあまり張らないようである。表・裏とも刷毛目調整を施している。多くの砂粒子を含み、乾い。2は直口する口縁をもち、口唇部はかなり丸味をもつ。口径は13cmを測り、口唇部は平坦面をなすが、口唇端部は角がとれ丸くなる。外面は縱方向の荒い刷毛目によって調整され、内面は横方向の刷毛目が走る。口頭部以上は刷毛目の上にヨコナデにて調整している。黒灰褐色を呈し、胎土にかなりの小石を含む。3は口頭部以上を欠く、厚さ1cm前後と厚い土器である。口縁部は「く」字形になると思われ、胴部は2と同様に、球形に近くなる。外面は縱方向の荒い刷毛目調整を施し、内面には箇ケズリにて器壁を整えている。4は復原口径21cmと、比較的大きい壺形土器で、浅い「く」字形口縁をなす。口頭部以下は欠損しているが、胴部はあまり張らないと思われる。内面の箇ケズリにより、胴部を4mmと薄く焼形している。外面は縱方向の刷毛目調整を施している。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。

出土した遺物のうち三角板革縫垣甲は、小田富士雄・石松好雄氏の九州古墳発見の甲冑地名



第13図 1号墳山土土器実測図(36)



第14図 2号墳実測図 (1/200)

×印は土器出土地点

表によると(註24)，短甲のⅡA類になり。その出土古墳は宗像郡玄海町高宮古墳や宮崎県東諸県郡富町六野原の塚下式横穴8号墳など6例が知られている。この福岡県地名表のうち筑紫郡春日町出土の短甲が、2の原1号墳出土のものと思われる。

三角板革縫短甲は堅矧板革縫短甲や西区若八幡古墳(註25)で出土した方形板革縫短甲や、長方板革縫短甲に統いて製作され、5世紀前半の古墳に多く出土している(註26)とされる。

## 4. 2 号 墳

### (1) 墓丘(図版10, 第14図)

舌状にとび出した台地の中央先端部を大きく占拠し、墳丘北側から東側にかけて径11mから7m前後の4基の円形周溝墓をもつ特異な古墳で、一見“四環跡、古墳”とも呼びたい形状を呈す。周溝間24.5mを測るが周溝墓を含めると南北29m、東西32mと1号墳をしのぐ。西側は造成前に削平を受け、周溝部は切られている。墳丘中央部に主体部を確認し、それと直交して断面ベルトを残して調査を行なった。墳丘上部は削平され、すでに旧表土の黒色土があらわれていた。1号墳と同じように2段に形造られ、上段の南北は幅4mのテラス状の平坦面をなしでいるが、西北側のみは、2mほどの突出部をもっている。上段部だけでは、一見“帆立貝、状”を呈していることが特徴である。下段も3.3m前後の平坦部をもち周溝にいたるが、西斜面のみは、明瞭に周溝を掘り込み、地山を削りだして墳形をととのえている(図版11-1)。南北方向からすると、上段部径10.5m、下段部径17.5mを数える。南西の周溝が切れる地点に、ほぼ南北方向に低い段差が認められる。東西方の径をこの段差までとすると、周溝間24mと、ほぼ正円を呈することになり、墳丘の幅と考えられる。

前述のようにこの傾斜面の地山を削り出すことにより、墳丘を際立たせる効果をもつていい。これは、台地西方からの標高を強く意識しているものと考えられ、上段の最も高い標高は34mを測り、また、台地の西端部では31.6mと、2.4mの差をもつことからも推しあはれよう。なお、この箇所に土壠墓があることも注意される。

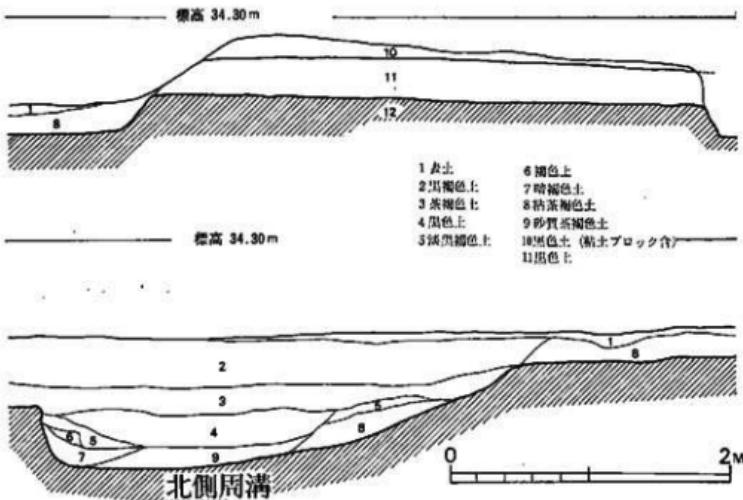
古墳の盛土は、ロームブロック合みの黒色土層が薄くみられただけである。しかしこの土層も上・下段の境から墳丘を覆うことが確認できたので、本墳の盛土も1号墳と同様に主体部を中心に盛土されたことが判る。墳丘の高さについては不明で、削平前の踏査時にもその存在は判っていないところから、1号墳よりも低かったことが考えられ、主体部を覆う程度のものであったろう。

原古墳群

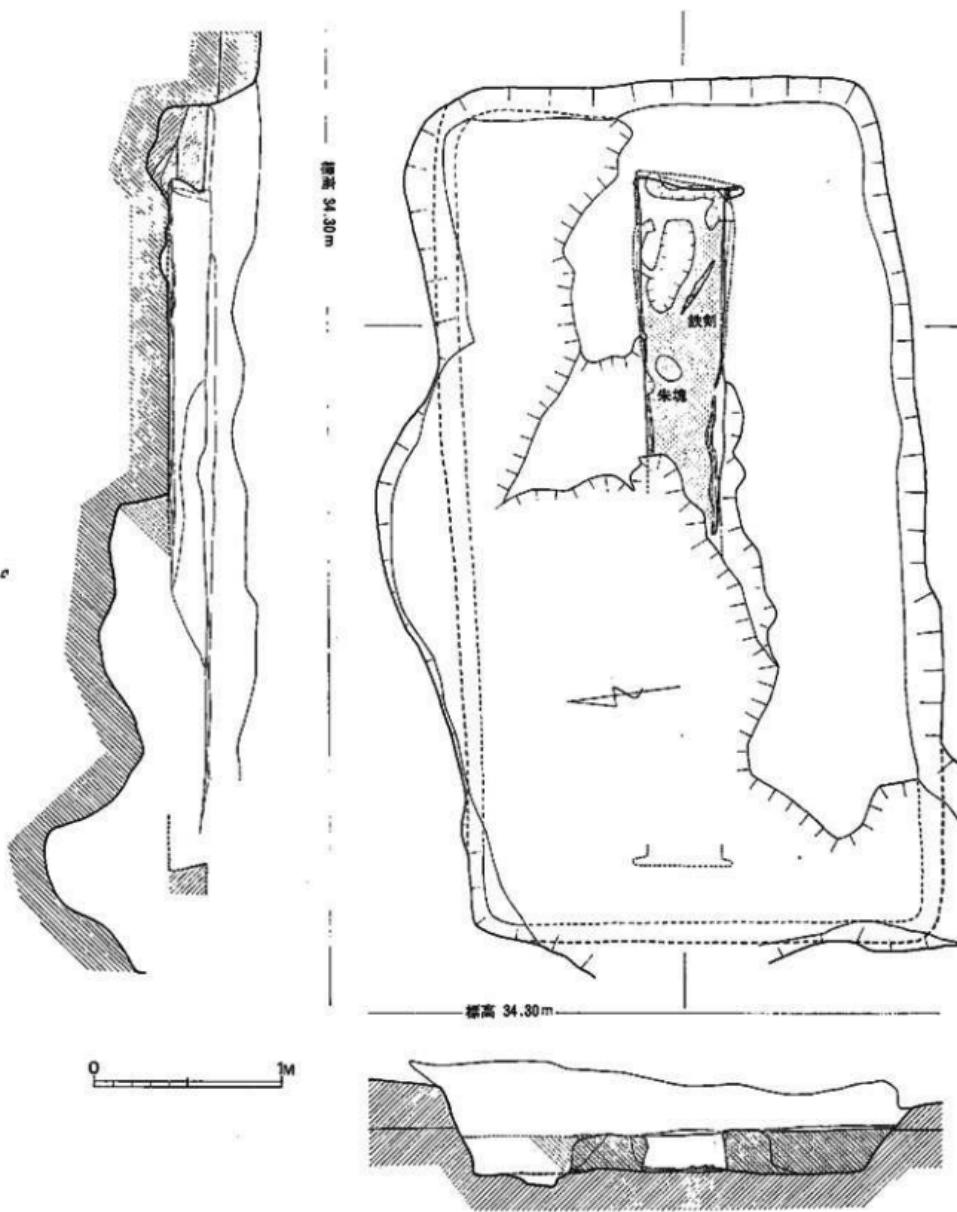
(2) 周溝 (図版11—2, 第14・15図)

幅2~4mと一様でなく、南側は浅いU字状を呈す。東・北側は60cmと深く、その断面形は周溝外側が直角に近く立ちあがり、墳丘側は緩やかである。北西側周溝は削平され、1m弱の段差をもって切られ、南西側周溝は、台地斜面に近くなるに従い浅くなり、南北断面線より、6m程である。この部分に幅50cm程の溝状の落ち込みが、台地の堆積方向にのびているのが見られる。33.0mのコンタから考えると人为的に掘られた可能性もある。

周溝の外周線は、墳丘を一周するのではなく、4基の周溝墓と共有するために6ヶ所で切れている。4基の円形周溝墓の部分に当る周溝のカーブは、本来の墳丘を巡る溝のカーブと逆になっており、各周溝墓の4半径をなしている。これに対し周溝外周の下端線のカーブは、墳丘のそれと一致する。また、周溝墓と共有する溝幅は、他の地点より広くなっていることから考え元墳を築成した後に、墳丘の北、東側の周溝外周端を削り、4基の円形周溝墓が造られたと推測できる。しかし、前後関係は認められても、時期的な差は土層図を通して認められないところから、古墳と周溝墓は同時に設計され、築造されたものと思われる。周溝墓と周溝間に見られる部分的な平坦面ならびに地山変換線が、当初の周溝の痕跡を示すものであろう。



第15図 2号墳墳丘北側土層断面図 (340)



第16図 2号墳主体部実測図 (No. 2)

## 原古墳群

東溝内からは高杯4、壺2、埴形土器が出土した(第14図)。遺物は一番南側の周溝蓋との接点から、南側周溝部のみに順序よく並んでいる。埴形土器は遺物群をはさむように両端の溝横面中に発見され、高杯・壺は、溝底面に密着して発見された(図版16)。また、北側周溝から丸瓦1枚が、底より20cmほど浮いた状態で出土した(図版17-2)。

### (3) 主体部(図版12・13、第16・17図)

墳丘中央部を清掃したところ、黒色土を掘り込んだ墓壙を検出した。墓壙の大きさは、長辺4.6m、短辺2.5mと円丸の長方形を呈し、深さは0.5m内外である。内部は擾乱がひどかったが、20cmほど掘り下げたところ、墓壙中央部に木棺の痕跡を認めた。主軸はN82°Wと1号墳とは同じ南北方向である。

木棺は、西側が深さ1m余と大きく盗掘を受けて旧状をうかがえないが、東側は比較的良好に残っていた。それによると木棺は、小口板が側板を挟み込む、いわゆる「II」型の組合式木棺であることが判明した。内法は残存全長1.6m、幅は東側0.45m、西側0.4m、深さ0.22mを測る。木質の痕跡は、皆無であった。

小口部、側壁とも内側に粘土が張り出し、第16図では断面が台形状を呈しているが、これは棺材の腐植によるもので、本来は箱形であったのである。第17図の様・横断面をみると、棺床面と両壁を固めた粘土との境目に、幅5cm内外、深さ1cmほどの溝が走ることから、両側板とも、溝内にはめ込んで安定させたことが知られる。小口板、側板とも、この溝幅から5cm前後であったことが推定される。床板は棺床面の状態からしても用いられなかったと思われる。木蓋をした痕跡は、上部が擾乱されているので判然としないが、この擾乱土には多くの粘土ブロックを含んでいたところから、木蓋をして、その上に粘土を置いたものとも考えられる。

棺床面は墓壙上部から約50cm下で、一番高い東側周溝底より40cm高い。床面は地山上に厚さ2.5cm程の褐色粘質黒斑土をよく締め固めたもの(第17図、4層)で、東側は擾乱を受けているが全体に平坦で東西のレベル差はない。その上は全面に赤色顔料が塗装されて、北壁側には厚さ3cm、径13cmほどの赤色顔料の固まりもみられる。柄は、東壁から20cmほど西側で55cmと最大に伸び、西側になるにつれて40cm内外に安定する。唯一の副葬品の鉄劍が、この部分の南壁側に切先を東南方向に向けた状態で出土したことも合せ、頭位を東側にして埋葬されていたと思われる。床面盗掘擾乱層中からは、玉類はじめ何ら遺物は出土しなかった。

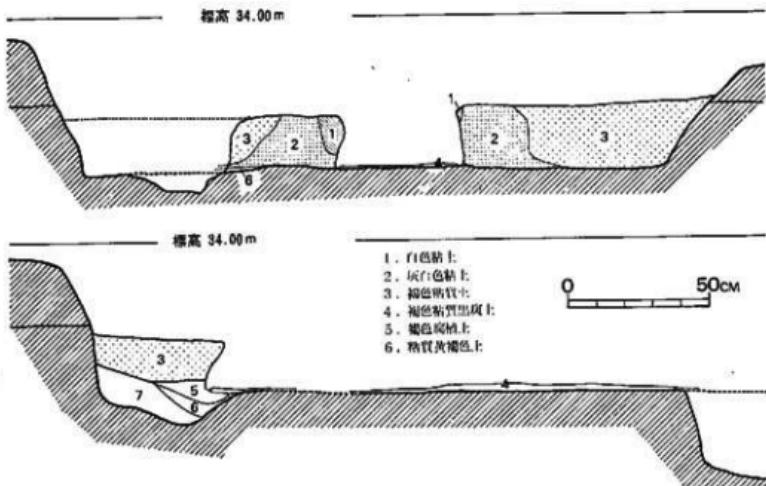
墓壙内には棺床面下を除いて、周縁を固めるように粘土質の土が充填されている(第17図、1~3層)。木棺側から白色粘土、次に灰白色粘土、外側は腐殖した黒褐色土とバイラン土の混ざった褐色粘質土となり、木棺に近い程度粘性が強い粘土を利用している。やはり、棺の保護を強く意識していることの現われであろう。前述したごとく、棺下には粘土が見られない所か

ら、厳密には粘土部とは言えず、木棺直葬である。木棺を安置する前に、東側墓壙内は、幅50cm、深さ10cmほど地山を掘り下げているが（図版15-2、第17図縦断面図），この作業が、木棺を安定させるものか否かは、土層からでは判断がつかなかった。縫内の堅穴式石室、粘土部では、木棺を水気から防ぐため、墓壙内に排水溝的な構造をもたせ、その溝内には礫を敷いたり、板状の石を投入する古墳がある。本墳では、礫・石等は認められないが、木棺を保持する除水、排水を目的としたものかもしれない。

木棺の全長については推測の域を出ないが、

- ① 墓壙の長さが4.6mである。
- ② 木棺の墓壙内における位置が東側では45cmの間隔しかない。
- ③ 墓壙内粘土の掠りをみると、西側が擾乱されて不明とはいえ、ほぼ墓壙全体に渡る。
- ④ 油田古墳群中の第4号墳の木棺をはじめ、木棺は墓壙の中心にある。
- ⑤ 至近距離にある油田1号墳の木棺墓は、4.2m以上の長大なものである。

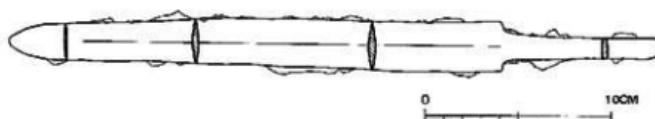
以上のことを考え合せると、第16図の推定総全長3.5m内外あったものであろう。



第17図 2号墳墓壙内土層断面図 (3a)

## (4) 遺物

**鉄剣**（図版14・40—1、第18図） 棚内東側で発見された、唯一の副葬品である。完形品で全長35cm、剣身26.5cmを測る。剣身幅は、先端で2cm、中央部で2.5cm、闊部付近で2.6cmを数え、剣先はにぶく尖る。鍔は先端部近くで明瞭さを失く。先端部から厚さを増し、闊部付近では4mm前後となる。刃部と直角に闊部を作り出し、長さ8.5cmの茎を持つ。茎の厚さは、中央で3.5mm、端部で2.5mmを測る。木質は認められず、目釘穴についても不明である。

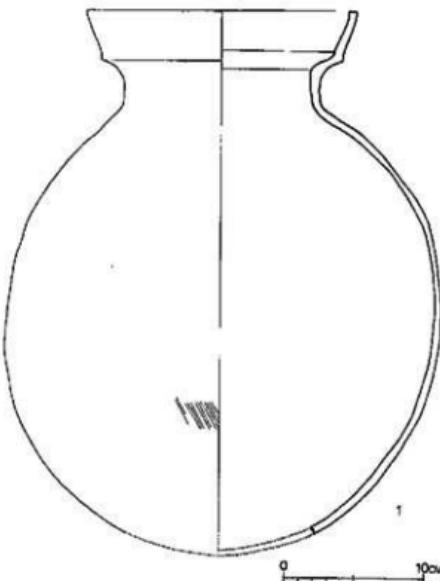


第18図 2号墳主体部出土鉄剣実測図(34)

**土師器**（図版39）

**壺**（第19・20図—2） 器形から2種類に分けられる。1は底部を欠くもので、口径19.3cm、残存高37.5cmを測る大形の土器である。口縁はやや外反しながらたちあがり、上部で反転して若干内反する複合口縁をなす。口唇部は平坦面を呈す。

頸部との接合部は、外に突き出した段を形成し、くびれながらほぼ直立した頸部に移行する。頸部は最大径をほぼ中央にもつ、肩はながい。底部は欠損しているが、胴部下半のカーブから浅い丸底状をなすと思われる。全体に脆弱なため、その整形技法は判然としないが、胴部内面は箆ヶケズリにより器壁を薄く整形し、外面は胴下半部



第19図 2号墳周溝出土土器(34)

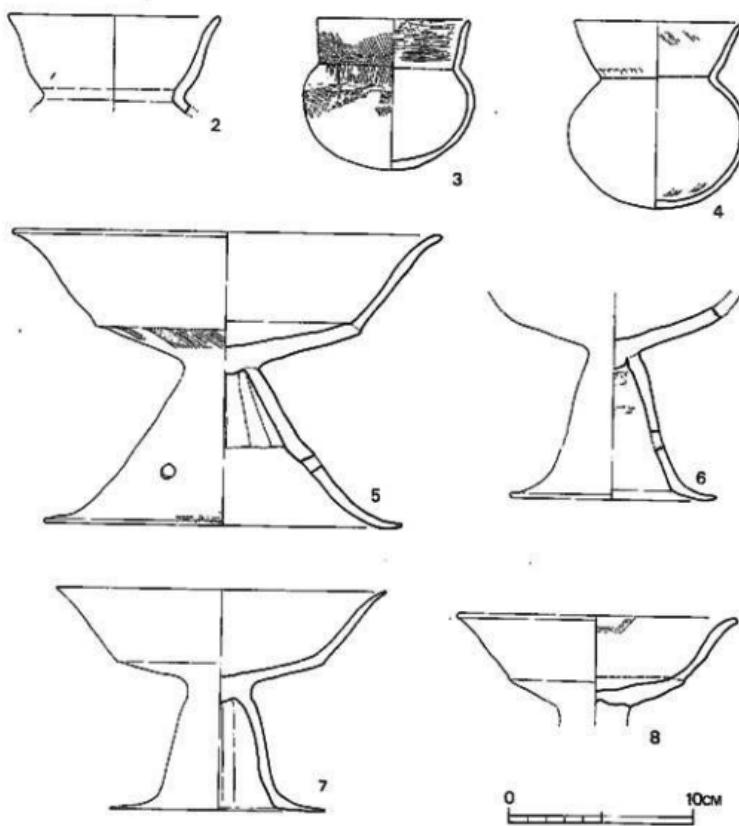
に刷毛目調整痕が一部残る。

2は小形の壺形土器で、口頸部以下を欠く。口径11.5cmを測る。口縁部は中ぶくらみで外方にひらく。口頸部は強くしまり丸い脚部に移行していく。黄褐色を呈し、荒い土器である。外面はナデ調整が行なわれている。

培（第20図3・4）2個体出土した。小形の丸底をもつ3は、短かく直口の口縁部と、最大径を脚部上半にもつ扁球状の脚部をもつ土器である。口径8.4cm、器高8.1cmを測る。口唇部は鋭く尖る。脚下部と内面とも笠ヶズリにより器壁を薄く整形し、内面は脚部に一条の稜をもつ。外面は細い縱方向の刷毛目により調整され、一部、最大径部分に横方向の刷毛目を見る。黄褐色を呈し、胎土も精製され焼成も硬い。脚下部は二次的に火を受け黒変している。4は外反した口縁に球形状の脚部がつき、口径9.3cm、器高10.1cmを教える。口頸部は縱方向の笠ヶズリで「く」字形に折れている。器壁は3と同様、笠ヶズリにより薄く仕上げられている。内面は刷毛目調整を施し、外面は不明。

高杯（第20図5～8）その大きさによって、2種類に分けられる。I類(5)4個体出土した高杯中最大のもので、口径23.5cm、器高15.7cmを測る完形品である。高杯は、杯上部・下半部・脚部の3部よりなる。明瞭に段を有する杯部の上半部は、若干のふくらみをもちながら大きく広がり、口縁部付近で反転して外反する。厚さ5mm前後と薄い上半部に対し、下半部は1cmと肥厚する。脚部は、杯部がややふくらみながらラッパ状に大きく広がり、脚端部で若干上方へ跳ね上がる。脚高8.5cmであるが、低く安定した形状を呈している。脚部下半部には3つの円孔がみられるが、その上部に2ヶ所の未穿孔部を経ることが出来る。杯上半部は、内外とも刷毛目のあとヨコナデ調整をし、下半部外面は、縱方向の荒い刷毛目が残る。杯部と脚部の接合部は、杯下部に粘土を張り出させ、ソケット状に合せたものである。脚内面は時計回りに笠ヶズリをし、中ほどに、細い稜を作り出している。なお杯内面の中央部には、3本を単位とした刷毛目が円形に残る。胎土は精製され、焼成は良好である。

II類（6～8）口径、器高ともI類より小形の土器で、脚部に孔をもたないものである。6は杯部上半分を欠くもので、現存高10.5cm、脚部径11cmを測る。部厚い杯部は明瞭な段をもたず、ゆるやかに外反する口縁部にいたるとと思われる。ゆるく膨らんだ細味の脚部は、脚部で急に拡がるため内面に稜をもつ。接合部は、出ベソ式の杯部に脚部を合わせている。外面は刷毛目調整の後に横ナデ仕上げされ、脚内部には横方向の刷毛目が残る。7は口径18cm、器高12cm、脚部高6.5cmを測る。段を有する杯部から、ややふくらみながら外反する口縁部をもつ。ずんぐりとした低い脚部は、脚部に直角近く横に広がる。脚端部は薄く尖っている。全体に器壁を薄く仕上げている点は6と異なっている。黄褐色を呈し、風化して脆弱な土器である。杯部外面にはかろうじて横方向の刷毛目調整が行なわれているのが覗察される。脚部内面は縱方向の笠ヶズリを施している。8は杯部のみで脚部を欠く。口径15.5cm、杯部高は5cmである。



第20図 2号墳周辺出土土器実測図(3分)

赤褐色を呈し胎土もよく精製され、焼成も高杯群では最もよい。杯部上・下半の接合部は、丸味を帯びた段を有し、若干肥厚するのが特色である。内面は刷毛目調整が施こされその後横ナデをしている。

(木下修)

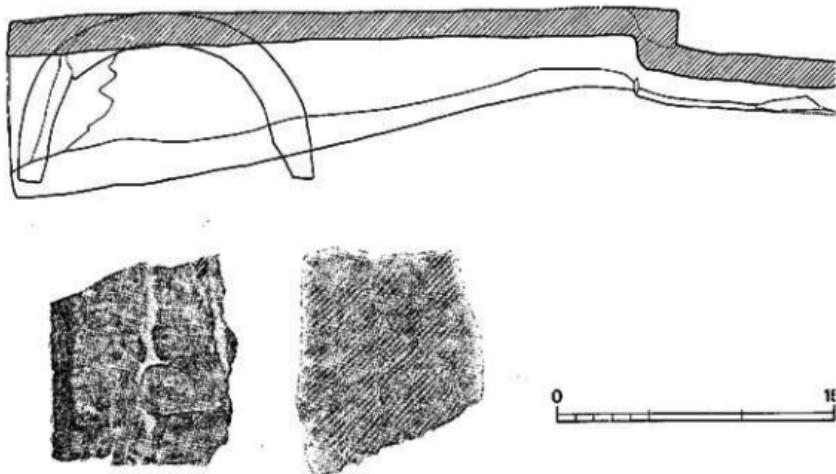
瓦(図版17-2・42-1、第21図) 北側周溝の底から、約20cm浮いた状態で丸瓦1枚が出土した。長さ45.6cm、下端幅16.1cm、厚さ1.5~1.8cmあり、玉縁は長さ9.1cm、厚さ1.5cmである。玉縁が異常に長く、通常の1.5倍ちかい。右上半部を欠くが、左側縁が下端に対して直角

以上にひらき、上部にゆくにしたがって曲率半径が大きくなり、また内面下部に幅2mmほどの焼き割れがみられるところから、上半部は、中央から大きく焼割れて開いたものと思われる。全般に黄灰色であるが、笠で面取りした部分は青灰色を呈し、焼成は良好である。

成形をみると、横骨の痕跡はないが、右側縁に平行して内面に粘土の継目がみられる。上からかぶせた側の内面に平行条痕が残っているが、継目の線に対する角度が上部にゆくほど鋭角になり緩い弧をえがくから、粘土角材を糸で引切った痕跡であろう。全面に残らぬところをみれば、接合を良くするための刷毛目かとも考えられるが、刷毛目にしては少し鋭すぎるようと思われる。継目内面の端の処理も雖だし、叩きしめるだけで強度は十分であろう。

整形は比較的良好である。外面に平行条痕叩文、内面に布目が残っている。条痕は細く密で、下から叩きあげており、割合密に叩かれているので叩板の幅は不明である。一部に擦り消したところがある。内面の布目は細かく密であり、布の継目の痕跡がある。上部に幅3mmほどの継痕状の縫が横に走るが、布の下に用いられているから横骨を束ねた紐の痕跡であろう。

玉縁は、丸瓦部と一体に成形されているが、玉縁から丸瓦に移行する肩の部分は後から粘土を貼りつけて叩きしめたのち余分を笠で切取り、玉縁上面下部を削りあげている。瓦端・両側縁とも笠切りのち面取りされ、内面の両側縁は1回、下端は2回の面取りが行なわれている。下端は比較的凹凸が大きいから、この上段の面取りは布の下に溜った粘土によって生じた



第21図 2号墳北側周溝出土瓦実測図(36)

## 原古墳群

凹凸をならすために行なわれたものであろう。

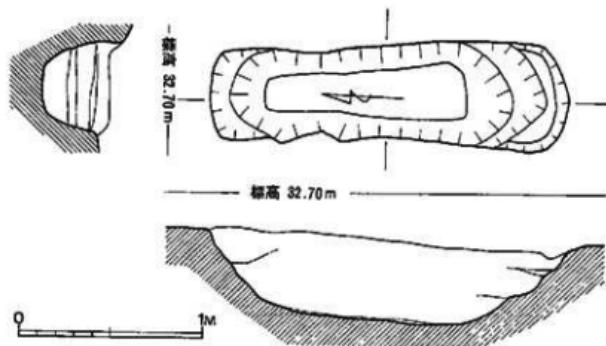
(須久嗣郎)

### (5) 8号土塙墓 (図版24-2, 第22図)

2号墳西側の地山を削りだした地点で、本来ならば周溝内にあたる箇所に位置する。

主軸を2号墳のそれと直交するごとくN $10^{\circ}W$ に置き、地山から切りこんだ素掘りの土塙墓である。上部の長辺1.97m、短辺0.5~0.6mで床面は長さ1.1m、幅0.2~0.3mと南側の方が若干広い。深さは平均0.4mで、南・北端からは階段状を呈し、北から南へ緩やかに傾斜する。縱断面はその掘り方から浅い皿状のような感じを受ける。地山は花崗岩のバイラン土であるが、床面は黄白色粘質土層に達する。

土塙内は黒褐色土が詰っていたが、何ら遺物は発見されなかった。しかし、時期的には、2号墳築成と近い時期が与えられるであろう。このような周溝内における土塙墓の例は、夜須町松尾古墳群1号墳(註27)、糸島郡平原遺跡(註28)、等にみられる。



第22図 8号土塙墓実測図 (3/4)

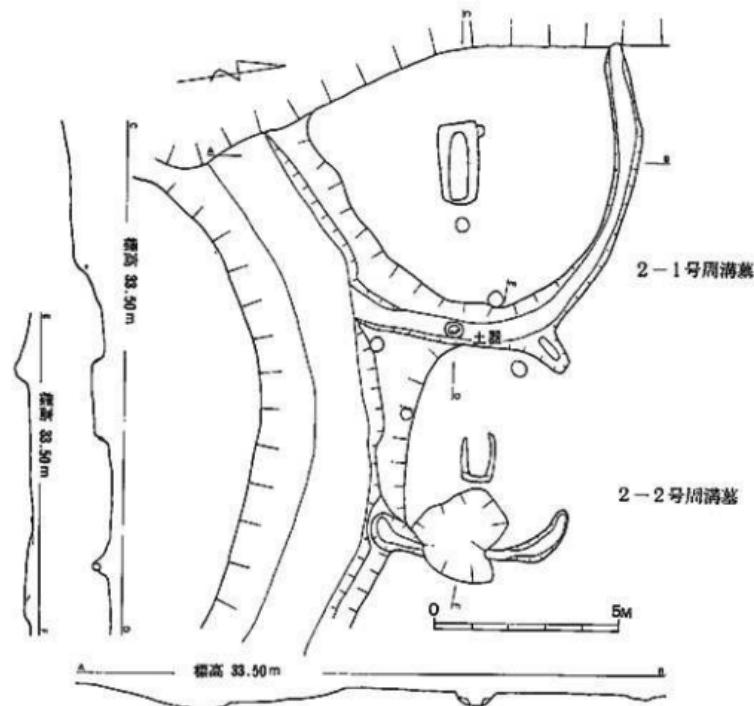
## 5. 円形周溝墓

2号墳の北側と東側に2基を1単位とした周溝墓が4基孤状に並ぶ。いずれも、2号墳の周溝と溝を共有し、円形を呈しているところから円形周溝墓とし、北側から2号墳—1号円形周溝墓～4号円形周溝墓とする。

## (1) 2号墳—1号円形周溝墓

平面形態(図版18、第23図) 2号墳の北西に位置するもので、最も西に位置する。2号周溝墓と東側で接し、周溝を共有する。西側の約3分の1は近世になり削平され、80cm程の段差をなしている。主体部付近が一番高く、標高33mを測り、2号墳の周溝底とは40cmの差が認められる。第6図の地形図でも、まったく高まりは認められていないが、耕作により、若干は削平されていると思われる。

東側の2号周溝墓と溝を共有するため、溝下端は直線的であるが、上端は円形に削り出して

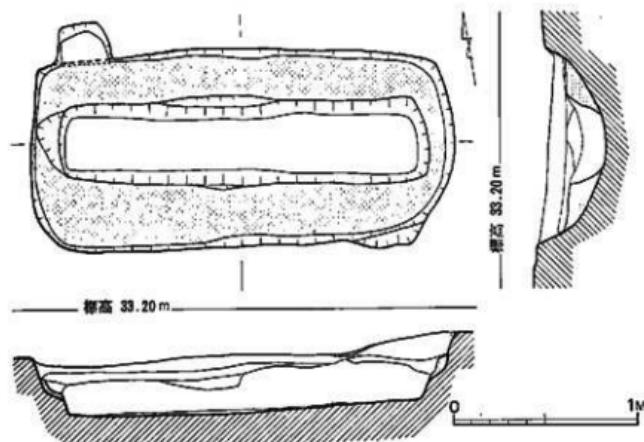


第23図 2号墳—1・2号円形周溝墓実測図 (5line)

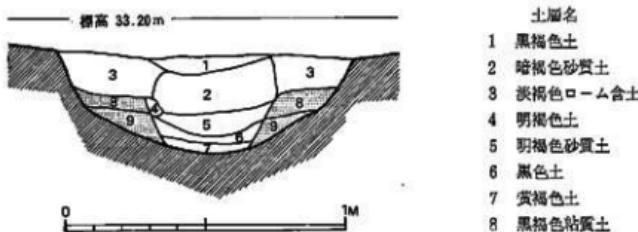
### 原古墳群

いる。南北の径からして、9m前後の円形を呈する。北側の周溝は、幅60cm、深さ10cmと浅いが、東側は幅100cm、深さ30cmと深くなる。この共有溝中主体部の主軸延長上に、圓上部以上を打ち欠いた壺形土器が底部を上にしてピット内に埋置されていた。またこの内部には赤色顔料が塗っていたが、これは2号墳主体部内にみられた赤色顔料の拂との関連性が考えられる。

**主体部（図版19、第24図）** 地山に掘り込んだ土塙内中央に内部主体がある。土塙は二段掘りで長辺2.3m、短辺1.08m、深さ0.35mの四角長方形を呈す。長辺側は幅10cmと明瞭な平坦部を有するが、短辺側は軽い稜がつく。上面より一段目まで16cm、以下が19cmである。土塙内は幅25cmで段部以下に粘土を埋めている（第25図8・9）。



第24図 1号円形周溝基主体部実測図(3%o)



第25図 1号円形周溝基主体部土層断面図(3%o)

主体部は主軸を N9°E と 2号墳主体部の木棺とはほぼ平行する。内法は上面で長さ 2.0m, 幅 0.5m, 床面で長さ 1.95m, 幅 0.3m の細長い長方形を呈す。レベルは東側に高く、幅も広い。横断面は U字状をなし、床面下には粘土を薄く敷いている。主体部をまく粘土、床面下にみられた薄い粘土により木棺を納めたものと思われる。蓋は棺内の土層がやわらかかったので存在した可能性が強い。小口部の断面では小口板の存在は認められず、横断面形からして割竹形の木棺であろう。

## (2) 2号墳 - 2号円形周溝墓

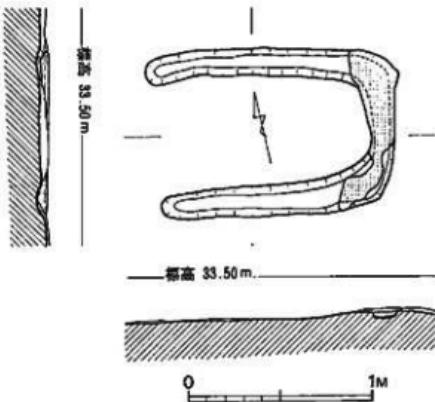
平面形態（図版20-1, 第23図） 1号円形周溝墓の東側に溝を共有して位置する。かなり削平を受けていると考えられ、盛土はもちろん北側の周溝も認められない。4基のうちでは最小で、東西方向から復原して 6.5m 前後であろう。溝に囲まれた内側は、平坦面をなす。溝は直線的であるが、2号墳周溝側は地山を削り出して円形に整えている。溝幅は 50cm、深さ 10cm である。なお 1号円形周溝墓とかけて、中世の柱穴群が認められる。

主体部（図版20, 第26図） 中央部に西側を欠く「コ」字状の主体部と考えられる痕跡を認めた。東側の短辺側のみに、厚さ 5cm ほどの粘土帯が残るだけである。この粘土下は浅い溝になり、底には粒の細かい石を薄く敷いている。上部がかなり削平されていることから、内部主体を覆った粘土帯の下端部と考えることができよう。本来は、土壤内に納められていたのであろう。主軸は N78°W にとり、現存長 1.2m、幅 0.6m を測る。

遺物は 1号周溝墓との共有溝の臺以外は出土しなかった。

### 土師器（図版40-3, 第27図）

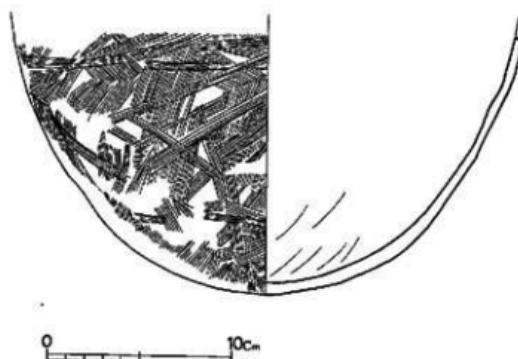
1・2号周溝墓の溝中の中央部にピット状造構に埋め込まれて発見されたもので、内部には赤色顔料を含めていたので、その痕跡が残る。その出土状況から、意識的に頭上部以上を打ち欠いた壺形土器



第26図 2号円形周溝墓主体部実測図 (3%o)

## 原古墳群

で、現存高14cmを測る。球形に近い頂部に、丸味のある底部をもつ内面は緩方向の第ヶズリにより、器壁は6~7mmほどに薄く整形される。外面は全体に7本前後を単位とした刷毛目にて調整される。



第27図 1・2号円形周溝臺共用溝出土土器実測図(3号)

### (3) 2号墳-3号円形周溝墓

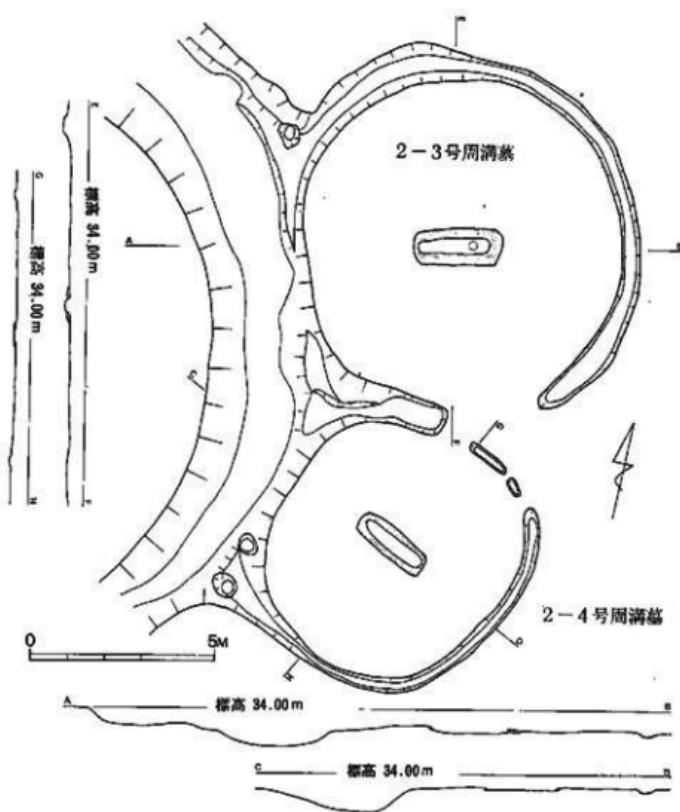
平面形態(図版21、第28図) 2号墳北東部に位置し、4号円形周溝墓と南側で溝を共有し接する。この共有溝の断面では、両者の前後関係は判明しなかった。

最高部は33.4mを割り、ほぼ平坦面をなしている。溝は東南部で切れるが、径10.5mの正円形を量する。周溝幅は東側0.5mで、北側になり急に1.1mと広がり、2号墳北東側の周溝に入る。2号墳と接する周溝西側は、一段の平坦部を作り出しているが、これが本来の2号墳周溝外周に当り、その部分を削って円形に整えていると考えられる。本周溝墓も、周溝の深さ、主体部の残存状況から上部は削平されていることは疑いないが、1号周溝墓と同様にほとんど盛上されていなかったと見てよいだろう。

主体部(図版21、第29図) 中央部の地山を掘り込んだ墓壙は長辺2.4m、短辺1mの隅丸長方形を量す。二段掘りの墓壙は深さ18cmと浅く、上面から段までは8.5cmである。上段部は黄褐色粘土と茶褐色土の混ざり合った土で固めている。その上面には“丹”が点々として見られた。

下段部の掘り方は墓壙の中心になく西に寄っている。内法は全長1.85m、東側幅0.4m、西側幅0.25mで、深さは中央部が18cmと最も深いが本来のものではないだろう。小口部は1号周溝墓が斜方向に立ちあがるのに対し、若干内寄している。床面の形状は東側に高く、中央部から西側にかけて浅くくぼんでいる。また横断面方向は緩いV字形を呈し、形状は1号周溝墓に似る。

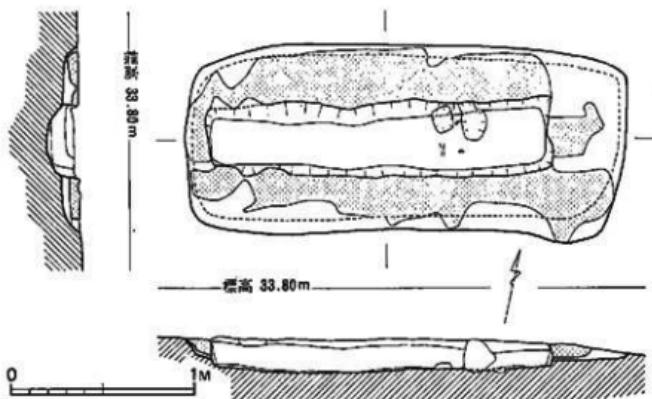
床面近くには非常に軟らかい灰黒色土が堆積しており、粘土の状態からしても1号周溝墓と



第28図 2号墳—3・4号円形周溝墓実測図 (3iso)

同様な木棺、つまり割竹形木棺と考えられる。木棺床面の東側は数ヶ所にわたって搅乱を受けているが、この付近から滑石製勾玉・小玉類が出土したので、頭位は東にあったことが判る。主軸方位はN78°Eにとり、基本的に2号墳主体部方位と似る。

玉類出土状態（図版22、第30図） 木棺の東側床面上に検出された。東壁から50cmで、ほぼ20cmの範囲内に勾玉が南・北両端に分かれ、それぞれに小玉類が連なって発見された。南側の



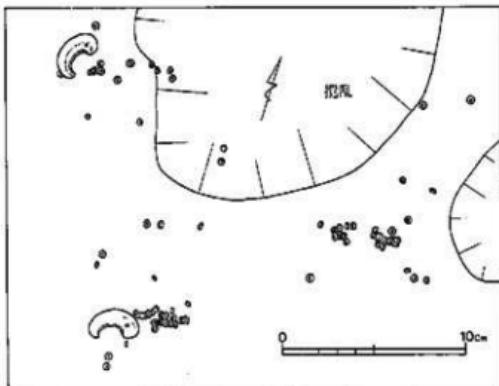
第29図 3号円形周溝墓主体部実測図 (3‰)

残存状況が比較的良く、当初は二重に連鎖されていたと思われる。しかし全面的に床面が搅乱されているので、最終的には滑石製勾玉2個、小玉類188個を検出したにすぎなかった。

#### 勾玉(図版40-2, 第31)

図-A・B) 2個出土した。

青灰色を呈した良質な滑石を材料としたものである。両者ともほぼ同じで、Aは長さ2.7cm、厚さ0.87cm、Bは長さ2.65cm、厚さ0.8cmを測る。頭部は肉厚で、背部は丸味を帯びるが稜線を残している。尾部は細くなり、先端で上向きにはねあがる。腹部は中央に明瞭な稜線が走り、横方向の割りの痕跡がみられる。特に頭部、尾部とも、細かく丁寧な面取りを行ない、平滑に優美に仕上げられている。孔

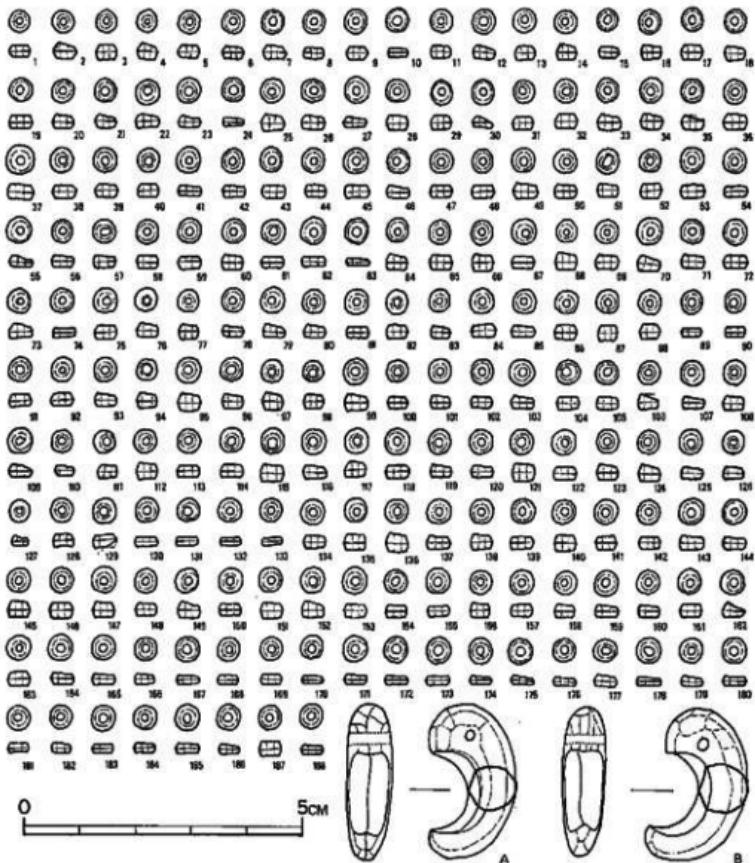


第30図 3号円形周溝墓主体部玉類出土状況実測図 (3‰)

径は1.6mmと小さく、穿孔部の広がりがほとんど見られないところから、かなり細く、硬い工具で一気にあけたと思われる(表2)。

表2 勾玉計測表 (単位 mm)

番号	全長	厚さ		孔径 (mm)	直径 (mm)
		孔部	周部		
A	27.0	8.7	5.8	1.6	4.1
B	26.5	8.0	5.9	1.7	4.0



第31図 3号円形周溝墓出土勾玉・小玉実測図 (3分)

## 原古墳群

小玉(第31図1~188、表3) 全部で188個検出されたが、本来の数ではない。その厚さから4分類できる。いずれも、中央部に最大径をもつもので、その穿孔はすべて中央を貫通しているとは限らない。

a類は、径のわりに厚さ2mm以下の扁平なもの、b類は、厚さが2mmから2.5mm前後のもの、c類は、厚さが3mm前後のもの、d類は厚く、径との差が1mm前後のものの4分類が可能であるが、いわゆる小玉と算盤玉に近いものに包括される。数量的には、a類37個、b類80個、c類53個、d類18個である。最も径の大きいものは37の5.1mm、最小径は15の3.4mm、最大孔径は38の2.1mm、最小孔径は9の1mmであり、最も厚いものは136の3.6mm、薄いものは63の1.35mmである。平均径は4.2mm、孔径1.62mm、厚さ2.85mmで1個の平均の重さは0.045gを測る。詳しい計測値は表3に示した。

表3 小玉計測表 (単位 mm)

番号	径	孔径	厚	穿孔方向	分類	番号	径	孔径	厚	穿孔方向	分類
1	3.8	1.3	2.0		b	26	4.2	1.8	2.7		c
2	4.0	1.5	2.0		d	27	4.2	1.4	2.0		a
3	3.7	1.1	2.9		c	28	4.1	1.5	1.8		c
4	3.7	1.2	2.7	↙	c	29	4.1	1.4	2.3		c
5	3.7	1.5	2.4	↙	b	30	4.0	1.4	1.9		a
6	4.0	1.5	2.0		b	31	4.0	1.6	2.4		b
7	4.0	1.4	2.4	↙	b	32	4.2	1.8	2.8		c
8	4.0	1.5	2.0		b	33	4.0	1.8	2.8		c
9	3.9	1.0	2.2		b	34	4.2	1.7	2.2		c
10	3.5	1.8	1.7		a	35	4.2	1.7	2.5		b
11	3.8	1.3	2.3		b	36	4.4	1.8	2.7		c
12	3.9	1.8	2.3		b	37	5.1	1.9	2.8		c
13	3.8	1.2	2.4		b	38	4.5	2.1	2.6		c
14	3.6	1.2	2.7		c	39	4.4	1.7	2.3		b
15	3.4	1.4	1.9		a	40	4.3	2.0	2.4	↙	b
16	3.6	1.4	2.6	←	c	41	4.4	1.7	2.0		b
17	3.6	1.3	2.4		b	42	4.0	1.7	2.1		b
18	3.9	1.7	2.4		b	43	4.1	1.9	2.5		b
19	4.0	1.8	2.2		b	44	4.1	1.4	2.3		b
20	4.0	1.5	2.4		b	45	4.5	1.7	2.4		b
21	4.1	1.7	2.4		b	46	4.4	1.8	2.2		b
22	4.1	1.9	2.4		b	47	4.1	1.6	2.7		c
23	4.1	1.6	2.3	↙	b	48	4.2	1.7	2.7		c
24	4.3	1.9	1.8		a	49	4.7	1.9	2.9	↙	c
25	4.1	1.2	2.9		c	50	4.4	1.8	2.6		c

## 原古墳群

51	4.0	1.8	2.4		b	95	4.5	1.8	9.1	d
52	4.0	1.7	2.6		c	96	4.0	1.9	2.5	c
53	4.5	1.7	2.4		b	97	3.9	1.8	2.0	
54	4.4	1.7	1.7	a	a	98	4.1	1.7	2.8	d
55	4.5	1.7	1.7		b	99	4.4	1.9	2.8	c
56	4.05	1.4	2.0		c	100	4.0	1.4	2.3	
57	4.4	2.0	2.6		b	101	4.4	1.4	2.5	b
58	3.9	1.5	2.5		b	102	4.3	1.7	2.1	b
59	4.2	1.2	2.5		b	103	4.5	1.9	2.2	b
60	3.8	1.2	2.5		a	104	4.2	1.8	2.3	b
61	4.25	1.35	1.9		a	105	4.0	1.7	2.3	b
62	4.4	1.45	1.7		a	106	4.1	1.5	2.7	b
63	4.2	1.5	1.35		c	107	4.0	1.7	2.1	c
64	4.4	1.7	2.8		c	108	4.2	1.5	2.2	c
65	4.3	1.5	2.6		c	109	4.2	1.5	2.1	b
66	4.2	1.5	3.0	d	b	110	3.9	1.7	1.8	a
67	4.6	1.5	2.4		b	111	3.7	1.7	2.3	b
68	4.1	1.4	3.1		d	112	4.0	1.5	2.5	c
69	4.4	1.6	2.9		c	113	4.3	1.5	2.3	c
70	4.6	1.7	2.8		c	114	4.2	1.6	2.6	c
71	4.4	1.7	2.5		b	115	4.2	1.8	3.1	d
72	4.5	1.8	2.4		b	116	4.2	1.6	2.6	
73	4.6	1.7	2.5		b	117	4.1	1.8	2.8	c
74	4.5	1.8	1.7	a	c	118	4.7	1.6	2.2	b
75	4.4	1.7	2.8		c	119	3.9	1.4	2.5	b
76	4.2	1.5	2.8		c	120	4.2	1.6	2.3	b
77	4.1	1.4	2.7		c	121	4.1	1.3	2.0	b
78	4.3	1.6	2.0		b	122	4.6	1.2	2.2	d
79	4.5	1.5	2.3		b	123	3.8	1.7	2.8	b
80	4.4	1.6	2.3		b	124	4.0	1.8	2.2	c
81	4.4	1.7	2.1		b	125	4.5	1.8	2.3	d
82	4.4	1.7	2.4		b	126	4.2	1.8	2.5	b
83	4.1	1.5	2.2		b	127	4.2	1.8	1.8	b
84	4.7	1.5	2.6		c	128	4.3	1.7	1.4	a
85	4.7	1.8	1.9		a	129	4.6	1.9	2.6	b
86	4.5	1.8	2.9		c	130	4.6	1.7	2.3	c
87	4.3	1.9	2.8		c	131	4.3	1.8	1.9	a
88	4.2	1.4	2.8		c	132	4.4	1.8	1.9	a
89	4.1	1.8	1.6		a	133	4.1	1.5	1.4	a
90	4.0	1.7	1.9		a	134	4.4	1.8	2.5	b
91	4.3	2.0	2.4		b	135	4.2	1.5	3.0	d
92	4.4	1.6	2.4		b	136	4.5	1.7	3.6	d
93	4.3	1.8	2.0		c				2.9	
94	3.8	2.0	2.6							
			2.1							

## 原古墳群

137	4.3	1.6	2.3	b	161	4.1	1.9	2.6	c
138	4.5	1.8	3.0	d	162	4.3	1.5	2.8	c
139	4.2	1.3	2.2	b	163	4.3	1.3	2.8	c
140	4.1	1.8	3.1	d	164	4.2	1.8	2.4	b
141	4.1	1.6	2.6	c	165	4.1	1.8	2.2	b
142	4.1	1.8	2.4	b	166	4.1	1.6	2.2	b
143	4.6	1.9	2.8	c	167	4.6	1.8	1.7	a
144	4.7	1.5	2.4	d	168	4.1	1.4	2.0	b
145	4.1	1.2	2.8	c	169	4.2	1.6	2.1	b
146	4.2	1.6	3.1	d	170	4.4	1.8	1.6	a
147	4.1	1.8	2.8	b	171	4.4	1.9	2.0	b
148	4.1	1.4	2.4	b	172	4.6	1.7	1.6	a
149	4.2	1.6	2.0	b	173	4.8	2.0	1.9	a
150	4.9	1.7	2.5	d	174	4.3	1.5	1.5	a
151	4.2	1.4	3.0	b	175	4.3	1.8	0.9	a
152	4.1	1.7	3.1	d	176	4.5	1.8	1.7	a
153	4.1	1.8	2.5	b	177	4.0	1.9	1.8	b
154	4.0	1.7	2.6	b	178	4.6	2.0	1.9	a
155	4.3	1.5	2.2	b	179	4.3	1.7	1.9	a
156	4.0	1.6	3.0	c	180	4.2	1.7	1.8	a
157	4.2	1.4	2.0	b	181	4.2	1.9	1.9	a
158	3.8	1.3	2.6	b	182	4.0	1.8	1.8	a
159	4.2	1.6	2.1	c	183	4.1	1.8	1.8	a
160	4.0	1.8	2.5	b	184	4.1	1.5	1.9	a
			2.1	b	185	4.4	1.5	1.9	a
				c	186	4.6	1.7	1.9	a
				b	187	4.1	1.7	2.7	c
				c	188	4.2	1.7	1.8	a

## (4) 2号墳—4号円形周溝墓

平面形態(図版23、第28図) 2号墳の東側、主体部主軸線上に位置するもので、3号周溝墓と北側、2号墳と西側で周溝を共有する。

幅40cm、深さ5cmと狭く、浅い溝に囲まれ、4基のうちでは隅丸の方形に近い感じを受ける。東西7.5m、南側7.8mを測る。最高所で33.6mのコンタが巡るが、全体的に、平坦面をなしている。

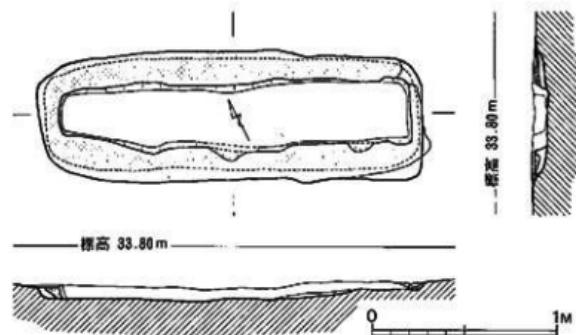
主体部(図版23-2、第32図) 地山から掘り込んだ長辺2.08m、短辺0.7mの素掘り土壙である。両端部上に粘土、下に暗褐色土を詰めたもので、1号周溝墓の主体部と同様の形状をもつところから、やはり、木棺を納めたものであろう。木棺内法は長辺1.85m、短辺東側0.33m、西側0.24mと東側が広い。主軸方位はN63°Wである。木棺高が7.5cmしか残っていないの

で、上部は削平されていることが予想されるが、8・9号土壙墓の主体部残存状態からして10cm内外の削平と考えられる。

棺床面は平坦面をなしており、1・3号周溝墓の断面形と

異なっている。縦断面によると、東側から30cmほど一段高い部分があるところから、この部分が頭部になるだろう。なお、棺中央部には砂質層の分布が認められた。本周溝墓には溝内、主体部とも遺物は発見されなかった。

これら4基の円形周溝墓の主体部は、2号周溝墓を除く2つに分類できる。1つは、1・4号周溝墓の茅葺きの土壙内に木棺を納め、その周囲に粘土を覆ったもので、他は3号墓の、当初から2段掘りの土壙を穿ち、内に木棺を入れ、上段部から粘土をつめるものである。労力的には両者に差はないと考えられるが、3号周溝墓上段の粘土下のみに赤色顔料が見られるることは、質的な差があったものとも考えられる。しかし、2号墳の主体部が全面粘土で覆われたことと比べれば、その差は微々たるものであろう。



第32図 4号円形周溝墓主体部実測図 (3/4)

## 6. 3号墳

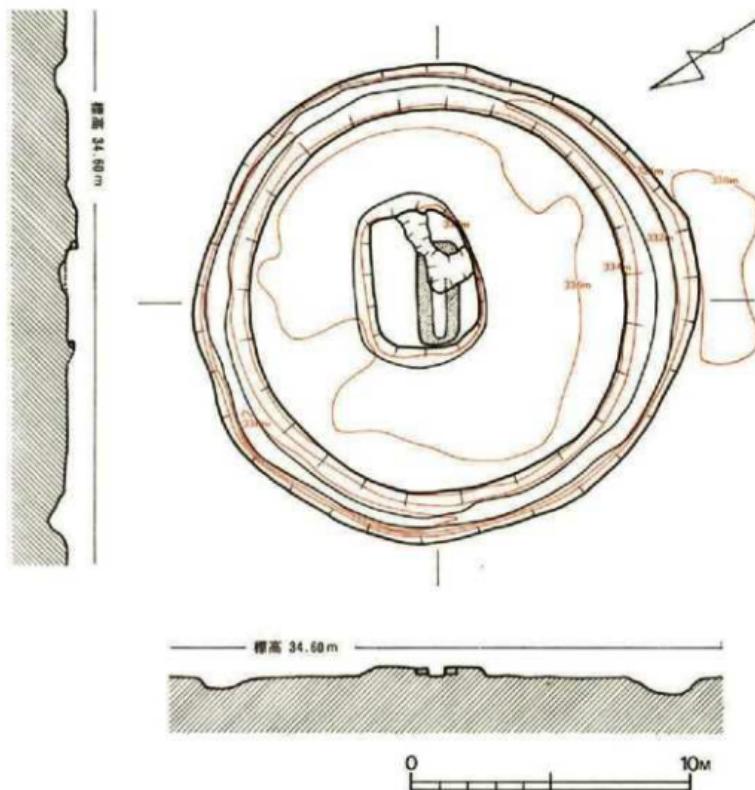
### (1) 墳丘 (図版25, 第33図)

3基の古墳中では標高33.8mと最も高所に位置する。2号墳の南東側で、その間は9m、2号墳—4号円形周溝墓とは2m余の至近距離にある。3基中最も馬溝間東西17m、南北18mを測り、主体部主軸側に狭い円墳である。やはり二段に築成したもので、上段は東・南方向が大きく破壊されているが、上段部径6m、下段部径13.5mを測ることができる。下段は幅4m程の平坦面をなし周溝に連する。

墳丘調査のため、主軸に直交した土崩断面を観察したが、上部はまったく削平され、耕作土の

原古墳群

みが残り、盛土の痕跡は認められなかった。本墳の存在は、調査前の段階ではまったくの白紙の状態であった。耕作等により上部が削平されていた可能性があるが、墳丘の盛土は主体部を覆う程度の低いものであったろう。

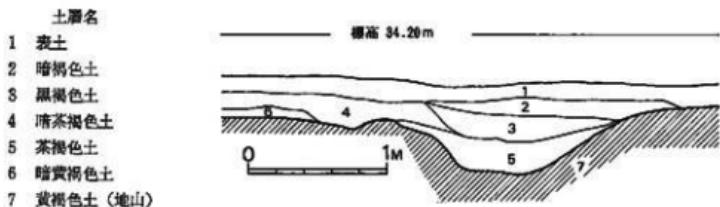


第33図 3号墳実測図 (1/200)

## (2) 周溝 (第34図)

地山を掘り込み、墳丘を円形に巡る周溝は、幅1.5m~2.8m、深さ0.4m~0.6mを測る。幅は南側が広く、深さは北側に深い。特に北側周溝は狭く「V」字形に近い。

本墳に伴う遺物は何ら出土していないが、南側周溝中には、弥生時代中期中葉の甕棺が出土し、付近に甕棺墓が確認された(註29)。



第34図 3号墳東側周溝土層断面図 (Mo)

## (3) 主体部 (図版26, 第35図)

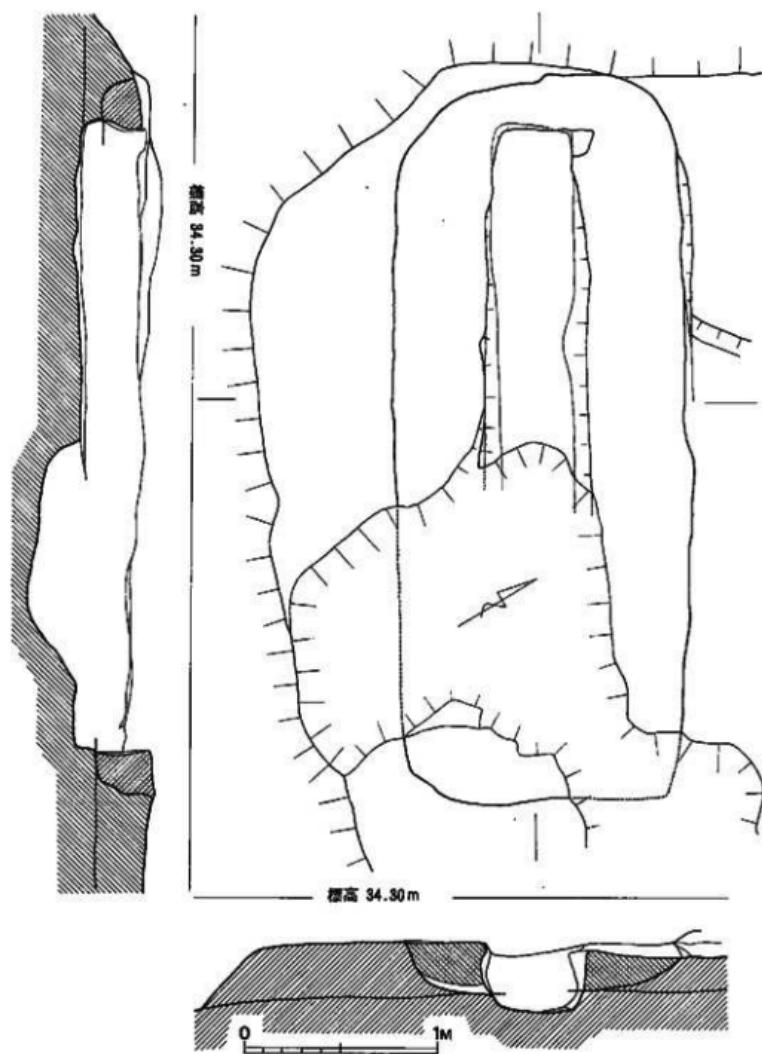
黒色土から掘り込まれた、長辺3.8m、短辺1.55mの長方形の墓域内に納められたものである。上段部が削平されているので、南に寄っているように見える。墳丘と同様に南側より大きく破壊(盗掘か?)を受け、墓域の半分にも達する。西側の断面から墓壁は深さ30cmほど掘り込まれ、50cmの幅でバイラン土を含む黄褐色粘土層をつめる。

主軸をN58°Wにもつ主体部の内法は残存長で1.6m、幅は西側で0.4m、東側で0.55mを測る。東側の幅が広くなるのは、本古墳群の特色の一つでもある。2号墳の組合式木棺や円形周溝墓の主体部と同様に木棺を納めたものであろうがその形式は断面図からみて組合式木棺以外のものであろう。

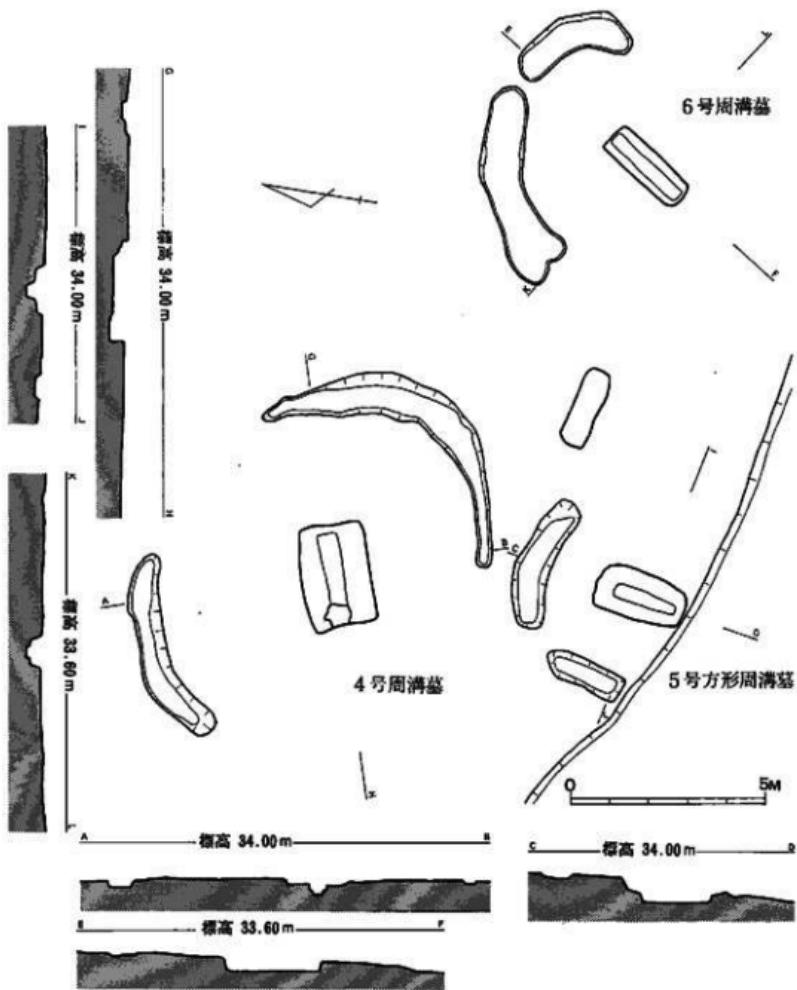
木棺全長は東側が棺床面下まで破壊されているので確実なことは言えないが、西側木口部の位置から判断して残存する粘土部までと考えられ、復原すると3m近くと思われる。

遺物は何ら出土しなかったが、木棺の幅が東側に広いことや、当古墳群の傾向から、頭位は東であったと考えられる。

(木下修)



第35図 3号墳主体部対測図 (1/20)



第36図 4・5・6号方形周溝基 (34.80)

## 7. 方形周溝墓

いわゆる方形周溝墓といえるものは、5号墓のみであるが、4号・6号・7号墓は3基の円墳とそれに付随している円形周溝墓とは性格を異にするところがあるので、ここに方形周溝墓の性格のものとして項をあらためて取り扱うこととした。

平坦な台地を3基の円墳がゆったりと占拠し、ある意味で企画された古墳施設が推定できる。その中で、4基の周溝墓は台地南端の斜面に沿うかっこうで配列している。

表4 方形周溝墓一覧表 (単位m)

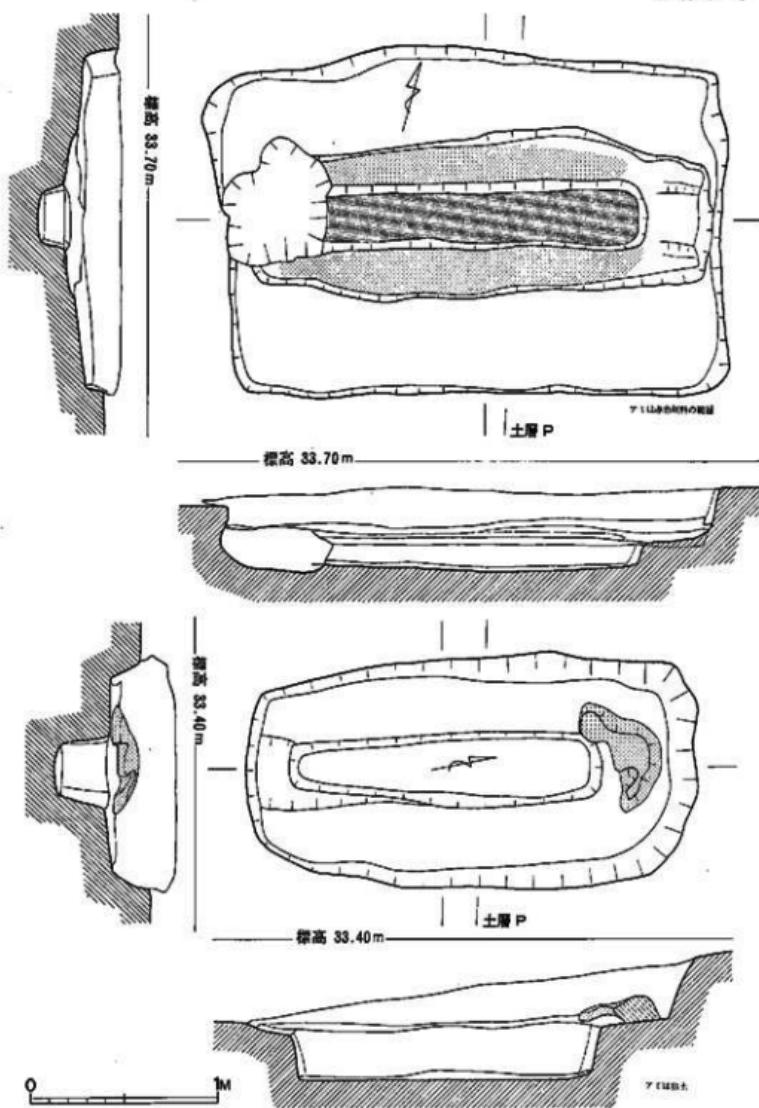
番号	周溝開径	墓 溝			主 体 部			主軸方位	備 考
		長 軸	短 軸	深 さ	長 軸	短 軸	深 さ		
4号墓	9.5	2.67	1.8	0.25	1.95?	0.35	0.27	N74°E	三段掘りの土塙
5号墓	内 4	2.4	1.25	0.33	1.67	0.4	0.3	N11°E	二段掘りの土塙
6号墓		2.4	0.87	0.4	2.3	0.38	0.47	N34°E	
7号墓					2.73	1.1	0.3	N73°W	素掘りの土塙

## (1) 4号周溝墓

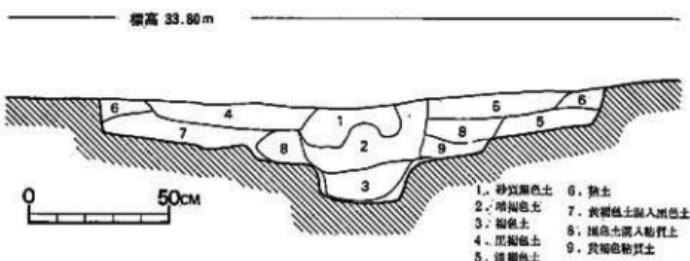
周溝(図版27、第36図) 現状では第36図に示すように南東側と北西側に溝が認められるだけで、主体部を中心に完全に巡っていない。しかし、現存している溝の両端が自然に浅くなっているところから、原形では深い溝が巡っていた可能性は認められよう。この周溝からは高い墳丘は考えられない。周溝から南北径が計測できるが、溝の内側で8.1m、外側で9.5mの大きさである。平面プランは南東側の現状の溝を見るかぎり隅丸方形を呈しているといえよう。

主体部(図版27-2、第37図) 周溝で囲まれたほぼ中央にN74°Eに主軸を向けた墓塙の内法は上面で長さ2.67m、幅1.8mの長方形をしている。深さは現状で深いところで25cmの浅いものである。墓塙の中央には主軸を墓塙と同一にした土塙が掘られている。土塙の西端は木根で搅乱されているが、復原は容易である。内法は復原長約1.95m、幅0.35mの細長い土塙である。土塙は粘質黄褐色土の地山に掘り込まれているが、床面には砂を薄く敷いてあるが、そのうえにまたわずかに赤色顔料が検出された。土塙は割合広い墓塙の中央に浅いもう1段の段築をもって掘られているのであるが、この浅い5cmほどの段の床面で土塙の両側にあたるところには、土塙床面と同じように砂と部分的に赤色顔料が散かれている。このことから、浅い段築は木蓋受けと考えられるが、その形状から土塙内には木棺は使用されず、木蓋土塙埋葬で

原古墳群



第37図 4・5号方形周溝墓主体部実測図 (1/50)



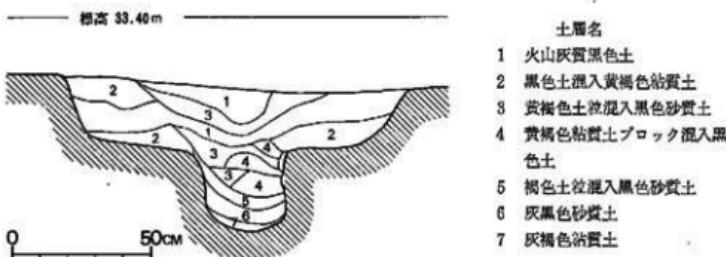
第38図 4号周溝墓主体部土層断面図(%)

あったと考える。頭位は東端の土壤床面が他より少し赤色顔料が多いところから、東枕であろう。

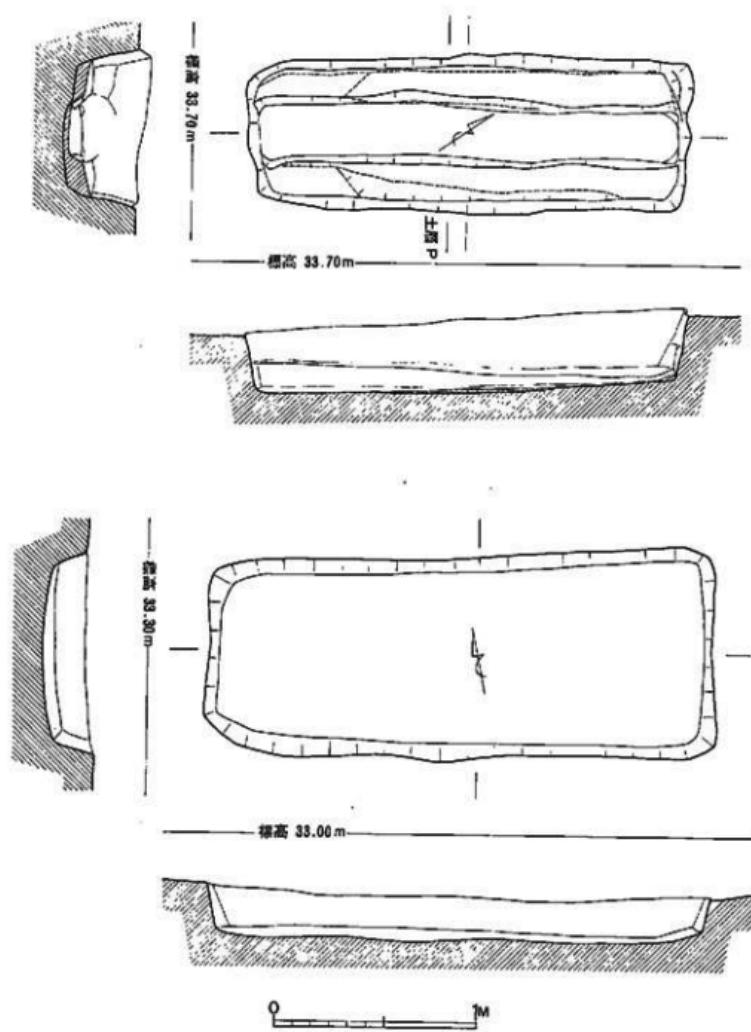
## (2) 5号方形周溝墓

周溝(図版28-1, 第36図) 4号墓に近接した南側斜面に位置するもので、もっとも方形周溝墓らしいものである。周溝は、主体部の北と西側に土壇状に検出されたもので、北西側コーナーも切れているが、主体部に伴う溝であることは間違いないであろう。この溝が最初から主体部を完全に巡るものではなく切っていたものであることは、4号墓のそれと違って切れ目がはっきりしていることでわかる。東と南側に溝が検出されなかつたので、そのプランの大きさは確かなものではないが、東西径を復原すると溝の内側で約4mの大きさとなる。ここで1番小型のものである。

主體部(図版28-2, 第37図) 北側の溝との間隔1.2m, 西側の溝との間隔1.4mのところ



第39図 5号方形周溝墓主体部土層断面図(%)



第 40 図 6・7 号周溝基主体部実測図 (3/4o)

に主軸をN11°Eに向けた主体部が掘られている。主体部は墓壙の中に土壙が掘られたかっこうの2段掘りのものである。墓壙は上面プラン長さ2.4m、最大幅1.25mの隅丸方形をしている。斜面に掘られているので、北側が深く33cm、浅い南側で6cmの深さである。墓壙中央に掘られた土壙は北側が広くなっているところから、北枕であったと思われる。土壙内法の大きさは、上面で計測すると長さ1.67m、最大幅0.41m、最小幅0.24m、深さ0.3mである。土壙の縁付近には粘土が検出され、とくに北側には多くの粘土が置かれていたことから木棺が使用されたことがわかるが、木棺は納めていないようだ。土壙の形態から考えると弥生後期的な木棺土壙墓ということができる。

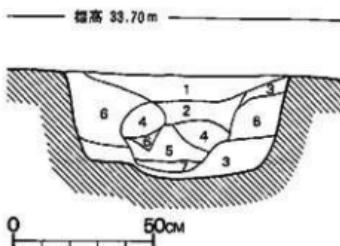
### (3) 6号周溝墓

**周溝**（図版29、第36図） 5号墓の東側に位置し、この墳墓群中もっとも周溝と呼ぶにふさわしくないもので、浅いくぼみといった感じであるが一応主体部を囲む様相を示すので周溝として取り上げざるを得ない。周溝が方形に巡るものか、円形であるのかきめてはないが、方形に巡るものであれば、1つのコーナーは北東側付近で、主体部は対角線上にあることになる。

**主体部**（図版29—2、第40図） 主体部は主軸をN34°Eに向けて掘られた墓壙内に木棺を納めたものである。墓壙の内法は上面で長さ2.4m、幅0.87m、深さ0.4mのもので、主軸に沿って中央が深く掘られている。この中に墓壙とほぼ長さの同じ割竹形木棺を安置したらしく、木棺の両側を褐色粘土質の多く混入した土で埋め戻している。木棺の内法は不明であるが、外形は長さ2.3m、幅0.38mの大きさで、高さも幅と同じ約0.4mになるものと思われる。頭位は不明であるが、北側の可能性が強い。

### (4) 7号方形周溝墓

**周溝**（図版30—1、第42図） この周溝墓は、堀指墓が群集する中でもっとも新しい造構として検出されたもので、溝・主体部共に数基の堀指墓の一部を破壊している。したがって、



第41図 6号周溝墓主体部土壙断面図(340)

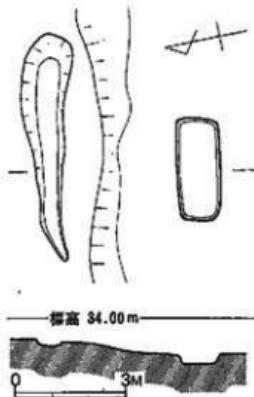
#### 土 壤 名

- |   |                    |
|---|--------------------|
| 1 | 褐色粘土質混入黑色砂質土       |
| 2 | 砂質黒褐色土             |
| 3 | 褐色粘土質土ブロック混入黑色粘土質土 |
| 4 | 褐色粘土質土ブロック混入黑色砂質土  |
| 5 | 褐色粘土質土混入黒褐色砂質土     |
| 6 | 黄褐色粘土質土ブロック混入黑色砂質土 |
| 7 | 砂質褐色土              |

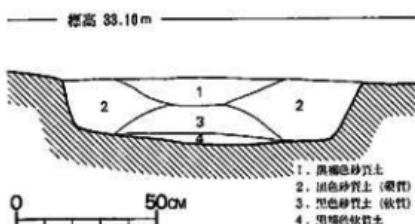
主体部と溝との関連も、溝が主体部を巡るものではないため、更埴墓群中一番新しい遺跡という共通点をもっているだけである。ただ、周溝中の土は他の周溝墓と同じ黒色土であるから、5号墓と同様な方形周溝墓と考えてよい。現存する土壙状の周溝の南側は後世に削平されているので、他の浅い溝は削られて消滅したものと思われる。もし、主体部が中央にあったものとすれば、現存する溝と主体部との間隔から、溝の内側の復原南北径約7.4mになる。

**主体部**（図版30-2、第40図） S79.5°E の方向に主軸を向いた、内法の大きさ2.73m、東側幅1.15m、西側幅1.0m、深さ0.8mの米堀りの土壙が検出された。東側が少し幅が広いので東枕になると思われるが、その他の根拠はない。土壙中央の幅60cmほど柔らかい土で埋っていたので木棺が納められていたと思われるが、粘土等の痕跡はなかった。木棺であれば組合式木棺であろう。

以上4基の周溝墓を方形周溝墓的性格のものとして扱つたが、円墳や円形周溝墓との関連を考えるとき、どうしてもこれらとの立地関係が気になってくる。北部九州の場合、炭焼（註30）、油田（註31）、峰山・焼ノ峯（註32）などと比較すると、第1に立地の違いがあげられる。前記4遺跡は、丘陵の尾根上に継列するが、原遺跡の場合は平坦な台地の縁である。第2に円墳や円形周溝墓との関係で、4遺跡は方形周溝墓が時期的にも立地からいっても優位性があるのにここでの接は違つてとることもできる。しかし、ここで第2の違いを取り上げると方形周溝墓が円墳より新しいと解釈ができるが、立地においては方形周溝墓の規模からいっても、より広い地域である必要性がないようにも思えるし、確実に方形周溝墓といえる5号墓の主体部は古い様相を残していることからも、方形周溝墓は円墳より古い可能性が強い。副葬品や伴出遺物のない現状ではこれ以上のきめてはあろう。（柳田康雄）

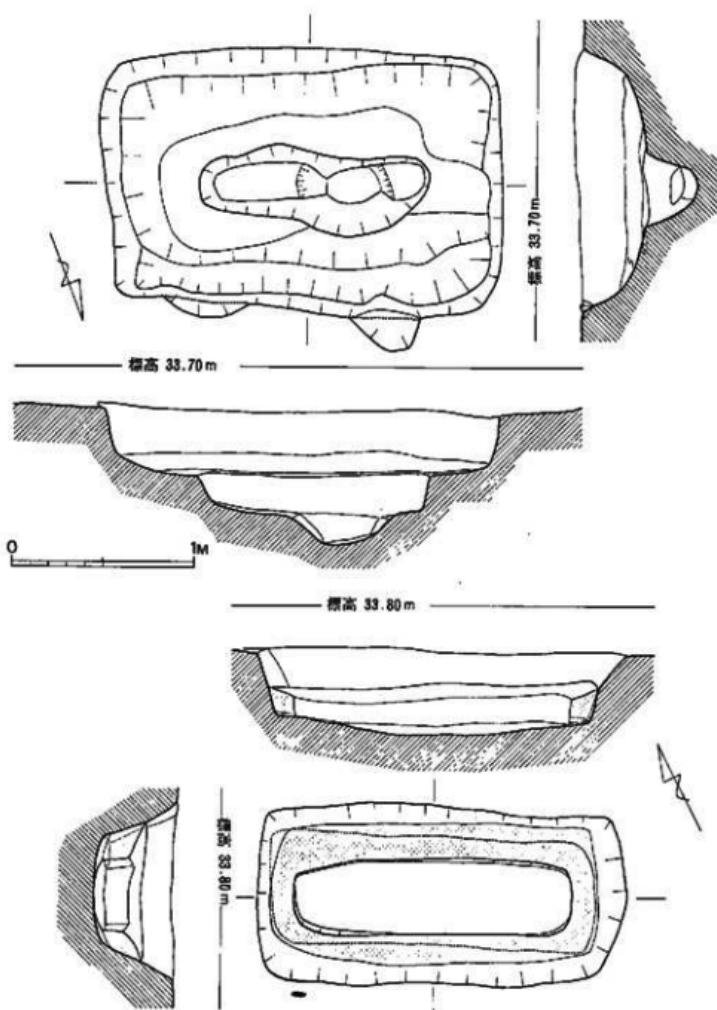


第42図 7号方形周溝墓実測図  
(Mao)



第43図 7号方形周溝墓主体部土壙断面図 (Mao)

原古墳群



第44図 9・10号土壇高実測図 (3‰)

## 8. 土 墓

2・3号墳間に並列する9・10号土壙墓と、方形周溝墓に挟まれるように1基のみ確認された11号土壙墓に分けられる。9・10号土壙墓は調査中から周溝墓の可能性が考えられたが、周溝は存在しなかった。

表 5 土 墓 一 覧 表 (単位 m)

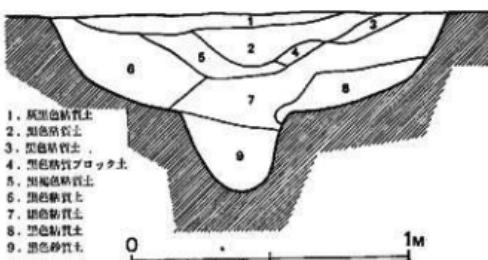
番 号	高 壹			主 体 部			副 装 品	備 考
	長 軸	短 軸	深 さ	長 軸	短 軸	深 さ		
8号土壙墓				1.97	0.8 0.5	0.4	N 1°W	
9号土壙墓	2.15	1.45	0.88	1.25	0.4	0.3	N69°W	
10号土壙墓	2.0	0.95	0.46	1.5	0.4	0.2	N64°W	
11号土壙墓				2.03	0.86	0.45	N74°W	須恵器杯 素盞りの土壤

## (1) 9号土壙墓(図版31, 第44図)

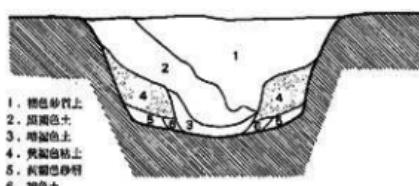
いわゆる二段掘りの土壙墓で、主軸をN69°Wにとる。北側から若干擾乱されている。上段部は長辺2.15m、短辺1.45mと長辺に対して幅広である。上面から上段部まで30cm、下段部の床面まで29cmであり、一段目は幅30~40cmのテラスをなす。この段部に若干バイラン土を含んだ黒色粘質土をみると木棺の可能性が強い。

棺の内法は長辺1.25m、短辺0.4mと、墓壇に比べて著しく幅の狭いことが特色である。棺床面は黒色砂質土が薄くあり、中央部が

—— 標高 33.80m ——



—— 標高 33.80m ——



第45図 9・10号土壙墓土壙断面図(3%)

## 原古墳群

15cmほど下がる。

土壇上部より変形土器の口縁部破片が出土した。

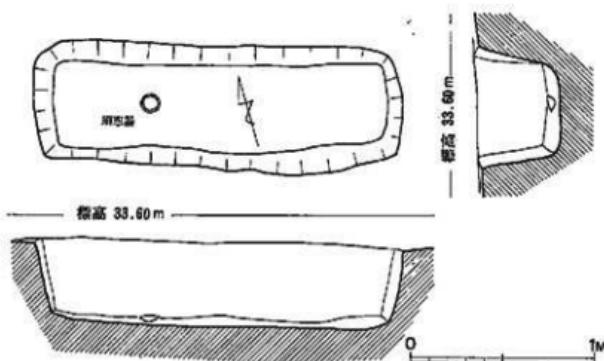
遺物（第47図-1） 変形土器で肩部以下を欠く。口径14.5cm、残存高4.8cmを測る。「く」字形の口縁部をもつ。口縁部に2ヶ所の接合部を認め、この部分は肥厚する。内面には明瞭な稜を作りだす。ここから、あまり張らない肩部に移行する。外面は頸部以下に刷毛目痕が残り、内面は横方向の刷毛目調整のあと、ナデにより仕上げられている。

### (2) 10号土壇墓（図版32、第44図）

8号土壇の西側に位置する。長辺2m、短辺0.95m、深さ0.45mの素掘りの土壇墓であるが、東側は軽い浚がつく。この内に木棺を納めたものと考えられ、その周囲を粘土で固めたもので、1・4号円形周溝墓の主体部に類似する。その内法は、長辺1.5m、短辺0.4mを測り、N64°Wの主軸方位を示す。

棺床面は西側に若干高くなり、中央部が一番下がる。横断面は長辺部がやや内傾きみになり、底は浅い皿状を呈す。床面は土壇上部から45cmの深さで、木棺の高さは20cm前後となる。第45図の土壇図を見ると、1層の褐色砂質土、2層の黒褐色砂質土が、北側から棺内に流入した堆積状態を示している。これは棺を安置し上部の土層を覆う段階で木蓋が腐ち、棺内に土砂が堆積する以前に、南側の木蓋がはずれ、棺内に落ち込んだことを物語っているのであろう。

副葬品等は発見されなかったが、主体部の構造は円形周溝墓のそれに極めて類似し、その位置的なものからしても、ほぼ同時期か、近い時期が与えられよう。



第46図 第10号土壇墓実測図 (3%)

## (3) 11号土墳墓 (図版33, 第46図)

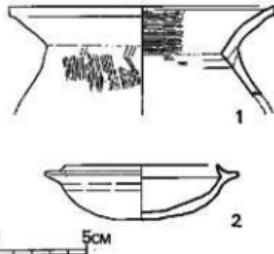
遺跡の南傾斜面の方舟溝墓間に発見された。地山から掘り込んだ長辺2.03m, 短辺0.66mの長方形を呈し、主軸をN74°Wにとる深さ45cmの素掘りの土塙墓である。土塙内には粘土等は一切認められず、黒褐色土で埋められている。床面は平坦で、西側が若干高い。この高い部分に須恵器の杯身が発見されたので、西側を頭部としたのであろう。

時期は、副葬品の須恵器から当遺跡内では最も新しく、7世紀前半に位置づけられよう。

従って、本古墳群との関連性は薄いが、土塙墓群のうちの1つとして扱った。

遺物 (図版40-2, 第47図2) 11号土塙墓の副葬品で、須恵器の杯身蓋どちらともつかないものであるが、ここでは杯身として扱った。口径8.3cm, 深さ2.9cmを測る。蓋受け部の立ちあがりは5mmと低く、受け部も短かい。底部はどちらかと言えば平坦に近い感じである。淡灰色を呈する。

須恵器の編年のIV期の終りからV期の時期にあたるものであろう。



第47図 9・11号土塙出土土器実測図 (1)

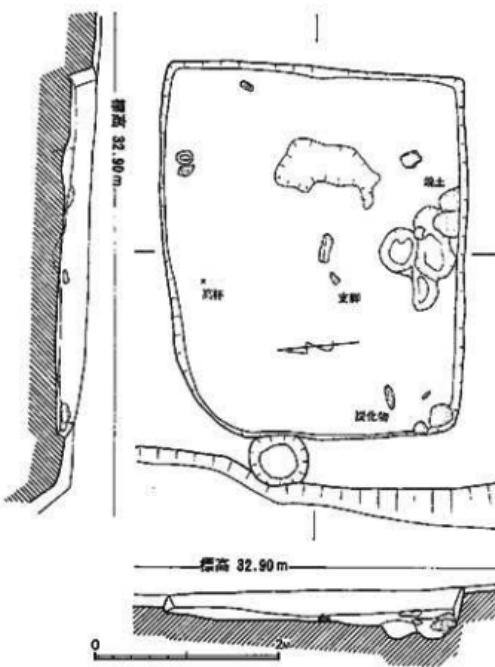
## 9. 住居跡

2軒発見された。1号墳の西側、台地傾斜面の標高32.8mから32.5m間に位置する。北側を1号住居跡、南側を2号住居跡とした。柱穴は1号住居跡に1つ検出されただけだった。

## (1) 1号住居跡 (図版34, 第48図)

長辺4m, 短辺は東側で3.2m, 西側で2.6mの不整な長方形を呈する。西側は削平により段差をもつが、その間に50cm前後の円形の浅い凹みがみられる。東西方向の傾斜面に作られているため、壁高は東で20cmを測るが、西側は10cmに満たない。

床面は地山に粘土を薄く張ったもので凹凸がはげしい。南壁側に径1m前後の不焼則な落ち込みがみられ、その内と東側に焼土が確認されたので炉と推測される。また床面上には炭化材も認められるが、柱穴は北東隅に径15cm, 深さ20cmの小さなものを1つ検出したにとどまった。住居跡外周にも、柱穴らしき穴は存在しない。

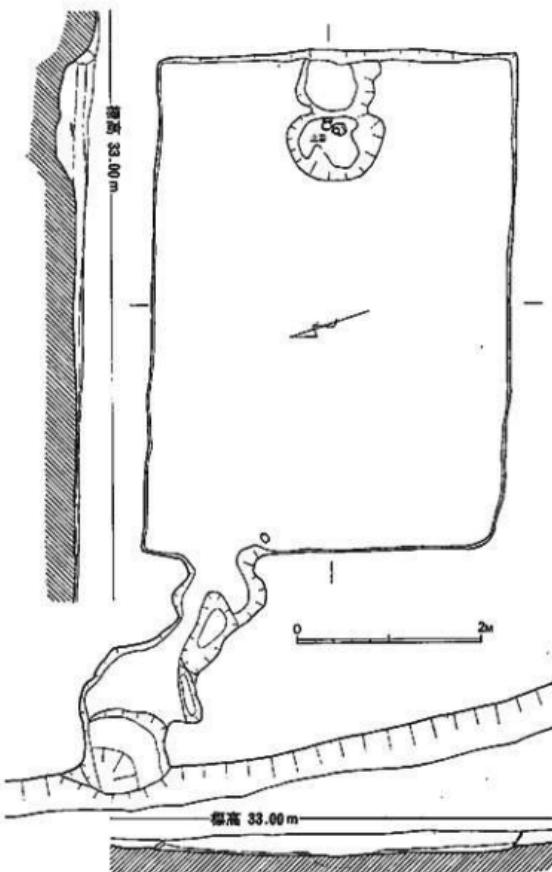


第48図 1号住居跡実測図(360)

遺物は北側床面上に完形の高杯と、炉付近に杯形土器が出土し、住居跡中央部に支脚が1点出土した。

遺物(図版35-1, 41-1~3, 第50図1~3) いずれも土陶器である。1は小形の高杯で、杯外面丹塗りの完形品で非常によく整った優品である。口径12.2cm, 器高9.3cmを計る。明瞭な段をもつ杯部は直線的に外方にのびる。杯接合部は5mm前後で、口縁部にいくに従い薄くなり、口唇部では2.5mm程になり丸味を帯びる。脚部はあまり広がらず、脚部径は8cmほどで中央部に三孔を穿っている。杯外面は、笠ヶズリのあと、丁寧な笠磨きを行なう。杯下半部から脚部にかけても、笠ヶズリの後に刷毛目調整を行なう。内面は横方向の細い刷毛が残る。赤褐色を呈し、焼成も硬質である。2は楕形土器で、口径13cm, 器高4.8cmを測る。1cmに近く、肥厚し丸味を帶びた底部から若干、内凹しながら外方にのびる口縁部をもつ。胴部

下半部は指による調整を行ない、にぶい段を作りだす。ほぼ器壁の中央部で粘土の貼り合せが観察されるが、内部を作った後に外側を接合している。内外面とも竪ヶケツリのあととのナデにより仕上げられている。口縁部に一部黒変した箇所がみられる。胎土には、かなりの長石を含んでいるが、焼成は良好である。3は支脚である。高さ14cm、幅6.5cmを測る。背部に径3cm程のつまみ部を2箇所認め。全面に火を受け、剥落が著しい。出土地点は住居跡中央で、本来置かれた位置とは異なるであろう。



第49図 2号住居跡実測図 (3/4)

## (2) 2号住居跡 (図版35—2, 第49図)

長辺5.5m、短辺4mを測る。東西に長い長方形を呈す。西側は台地削平部にのびる浅い溝状の落ち込みに切られている。壁高は東側で17cmを確認したが、西側は5cm程しかない。床面は部分的に粘土質の褐色土を貼ったもので、壁側に比べて中央部が若干深くなる。東壁中央

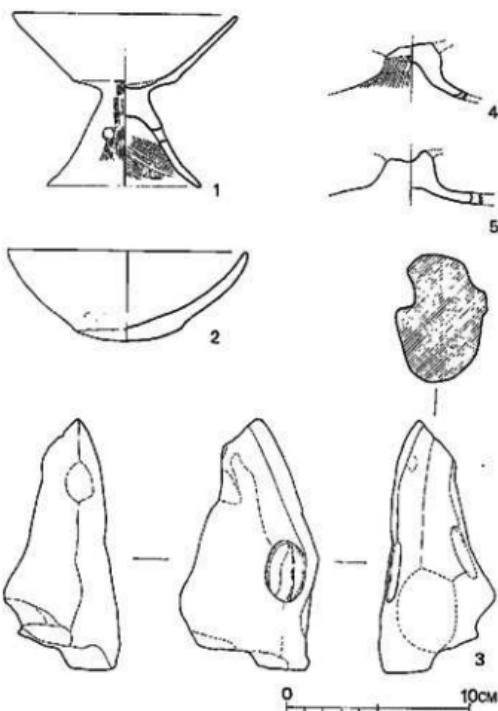
## 原古墳群

に8字形の落ち込みがみられる。特に西側の落込みは火を受けた状態を示しているが、焼土・炭化物等は認められなかった。この部分より土師器の小破片が出土したが全体の器形は窺えない。

柱穴は住居跡内外とも、まったく認められなかった。

遺物（図版41-4・5、第50図4・5）4・5とも土師器の高杯脚部破片である。両者とも壠の広く、長いものになる器形と思われ、杯部は丸く浅いものが付くであろう。4は、笠ヶズリのあと、刷毛目調整をしているが、5は風化が著しいために、横方向の刷毛目が一部みられるだけである。両者とも1孔を有する。

2軒の住居跡は、2号墳出土の土師器より古い様相をもち、4世紀後半頃に住設づけられるものであろう。また、1号住居跡の炉の状態、床面の状態からしても、短期間営なまれたものと思われる。



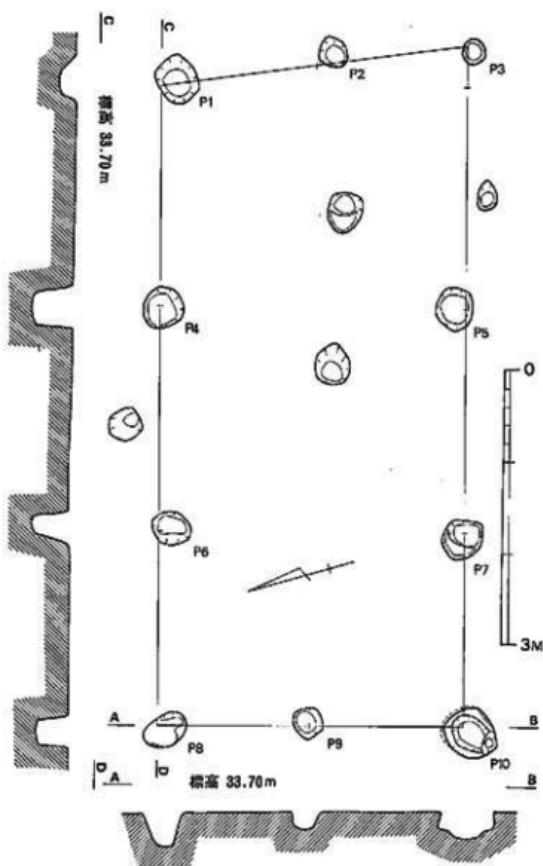
第50図 1・2号住居跡出土土器実測図(分)

## 10. 中世建物跡

1号墳と2号墳間に標高33.75m～33.25mの緩斜面に柱穴群があり、4棟の建物跡が確認された。東西方向にはば一列に並んでおり、東側から1号～4号建物跡とする。

## (I) 1号建物跡 (図版36—2, 第51図)

発掘区域の東端に位置する2間×3間の建物跡で梁間幅327.5cm, 衍行間727.3cmである。P1～P3の東側梁間は東に振れ、南側衍行間の方が北側より33.5cm長い。衍行方位はN74°Wを指し、梁間・衍行間の占有面積は23.8m<sup>2</sup>である(表6)。



第51図 1号建物跡実測図 (36a)

## 原古墳群

表 6 1号建物跡計測表

(単位 cm)

2間×3間	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径
P 1 P 2	175.5	326.0	P 1 P 4	247.5		1	38	51	42
2 3	150.5		4 6	234.0	710.5	2	36	34	31
8 9	161.0	340.0	6 8	229.0		3	42	26	24
9 10	179.0		5 5	283.0		4	44	43	41
4 5	322.0		5 7	245.0	744.0	5	38	45	40
6 7	322.0		7 10	216.0		6	41	43	36
平 均	166.4	327.5	平 均	242.4	727.3	7	49	46	41
						8	38	48	34
						9	21	33	31
						10	29	55	51
						平均	37.6	42.6	37.1

## (2) 2号建物跡 (第52図)

1間×1間の小振りの建物で、梁間間214.75cm桁行間279.75cmを測る。桁行方位をN 68°Wに置き、占有面積は6m<sup>2</sup>である。P 1のみが50cmと深い(表7)。

表 7 2号建物跡計測表

(単位 cm)

1間×1間	梁間間		桁行間	P	深さ	長径	短径
P 1 P 2	215.0	P 1 P 3	276.0	1	50	40	35
3 4	214.5	2 4	283.0	2	38	47	39
平 均	214.75	平 均	279.75	3	31	40	31
				4	26	42	33
				平均	36	42	34

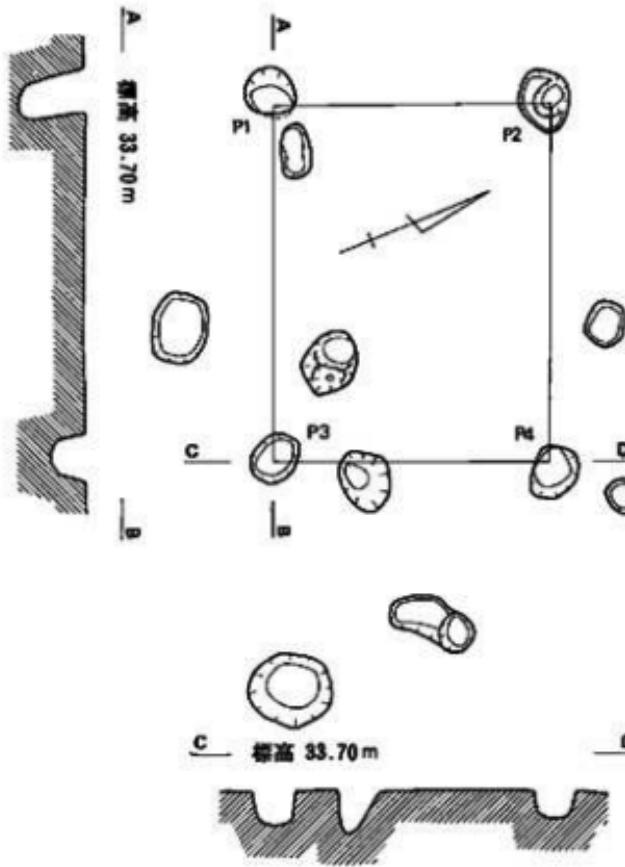
## (3) 3号建物跡 (図版37-1, 第53図)

2間×2間の正方形に近い建物で、梁間間271cm、桁行間289.6cmである。柱穴の径は他の建物より一回り小さい。桁行方位をN 17°Wにとり、占有面積は7.85m<sup>2</sup>(表8)。

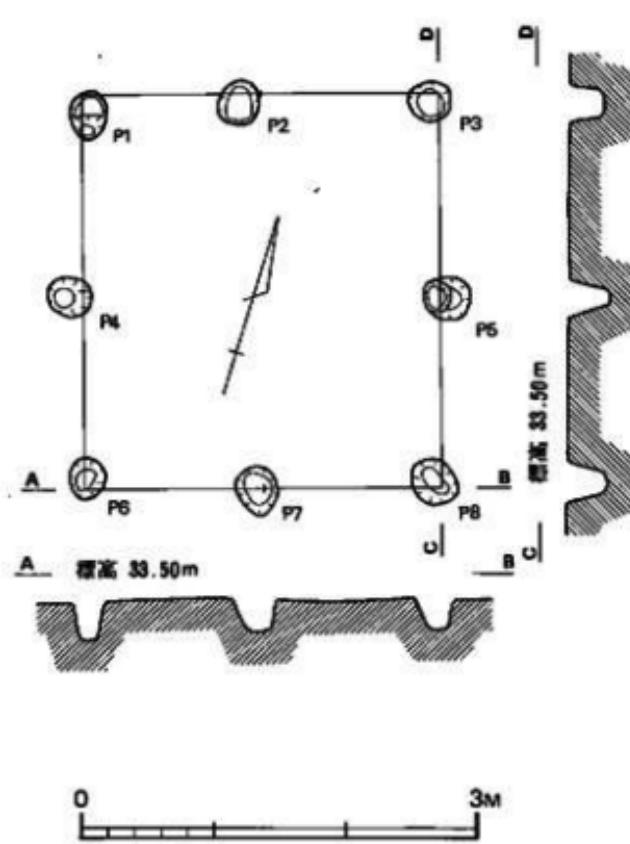
表 8 3号建物跡計測表

(単位 cm)

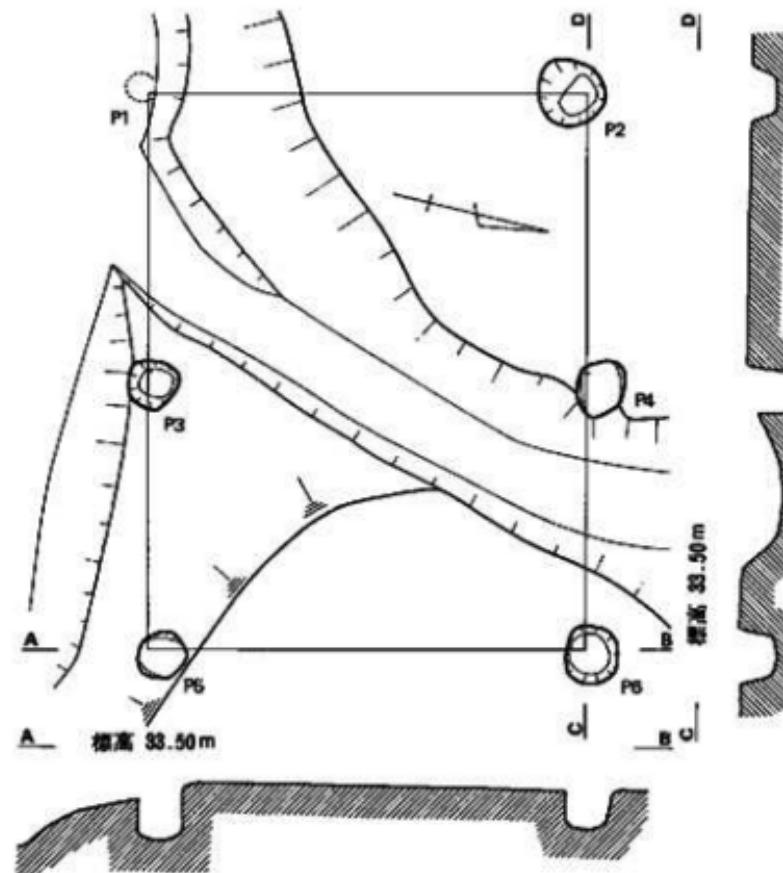
2間×2間	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径
P 1 P 2	115.0	261.5	P 1 P 4	145.0	285.0	1	11	35	27
2 3	146.5		4 6	140.0		2	28	32	30
6 7	132.0	267.0	3 5	149.0	290.0	3	30	33	29
7 8	135.0		5 8	141.0		4	42	34	29
4 5	284.5	2	7		294.0	5	40	35	32
平 均	131.1	271.0	平 均	143.5	289.6	6	28	31	26
						7	24	36	29
						8	32	39	32
						平均	29.1	34.4	29.3



第52図 2号建物跡実測図 (3‰)



第53図 3号建物跡実測図 (3‰)



第54図 4号建物跡実測図 (3‰)

## (4) 4号建物跡 (図版37-2, 第54図)

2号墳と1号円形周溝墓と重複して発見された1間×2間の建物跡である。P1は当初確認できず、古墳の周溝底に柱穴の痕跡が残って位置が判明した。梁間間332cm、桁行間431.3cmで、占有面積は14.3m<sup>2</sup>である。桁行方位はN74°Wにとる(表9)。

表 9 4号建物跡計測表

(単位 cm)

1間×2間		梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径
P1	P2	330.0	P1	P3	225.0	455.0	1	—	—
3	4	339.0	3	5	210.0	427.5	2	18+α	52 49
5	6	325.0	2	4	223.0	427.5	3	14+α	39 35
			4	6	204.5		4	39	44 34
平均		332.0	平均		215.6	431.3	5	36	36 35
							6	30	42 38
						平均	27.4+α	42.6	88.2

## (5) 造物 (図版42-2, 第55図)

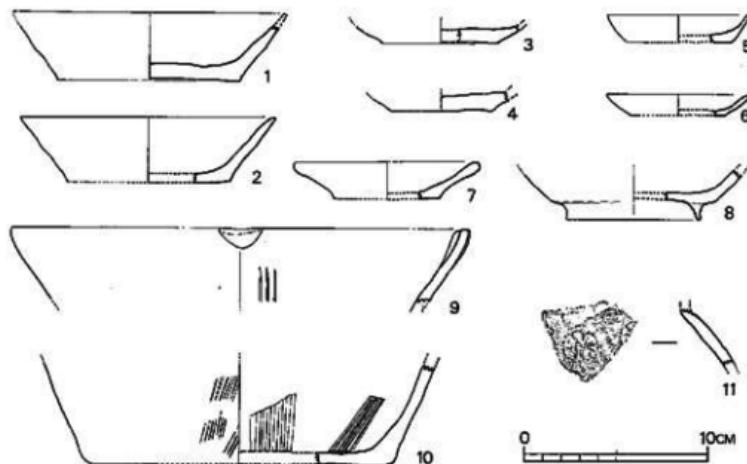
杯 1は口縁部を欠く。復原口径14.8cm、器高3.6cmで底径は7.9cm、底部は7mmと部厚く、外に開きぎみに立ちあがる。外面とも回転ナデ側壁、灰褐色を呈し、焼成は良好。2は底部の半分を欠く破片で、口径13.8cm、器高3.5cmを計る。外反ぎみに口縁にいたる。口唇部は尖る。外面は荒い回転ナデを、内面は部分的にナア調整を施している。切り離しは不明。

小皿 いずれも糸切離しによるもので、ロクロ回転は右廻りである。3種類に分けられる。1類(3, 4)は底部が8mm前後と部厚いもので両者とも底部破片である。底径は3が5.4cm、4が6.2cm。2類は対反に薄手のもので、5は内傾ぎみに立ちあがるのに対し、6は外方に直すぐのびる。口径・器高・底径は前者が7.8cm・1.5cm・5.8cm、後者が7.8cm・1.1cm・5.2cmを計る。3類7は口唇部が肥厚し、丸味をもった小皿で、口径10cmと比較的大きく、器高2cm底径5.8cmである。調整はすべてヨコナデを基本とし、色調も淡褐色に属す。時期的に下るものだろう。高台付杯8は杯部上半部を欠く破片である。貼り付け高台は薄手で、内傾しながら下方にのびる。底径7.4cm、高台高0.9cm、底部の厚さ3.5mmと薄い造りである。外面は回転ナデを施している。胎土に石英粒等の小粒子を多く含む。

すり鉢 9は片口のすり鉢の口縁部破片で、口径25cmに復原できる。三本単位の溝を持つ。黄灰色を呈し、焼成の甘い土器である。10は底部破片で、底径16.8cm前後である。内面に6本単位の溝が2ヶ所のこる。溝の中は2mmと一定している。外面は縱方向の刷毛目調整を施している。淡褐色を呈し、焼成は良好。

湯釜 11は湯釜形の土器の頸部破片で、口縁部は頸部から直角近くに立ちあがると思われ

原古墳群



第55図 中世土器実測図(%)

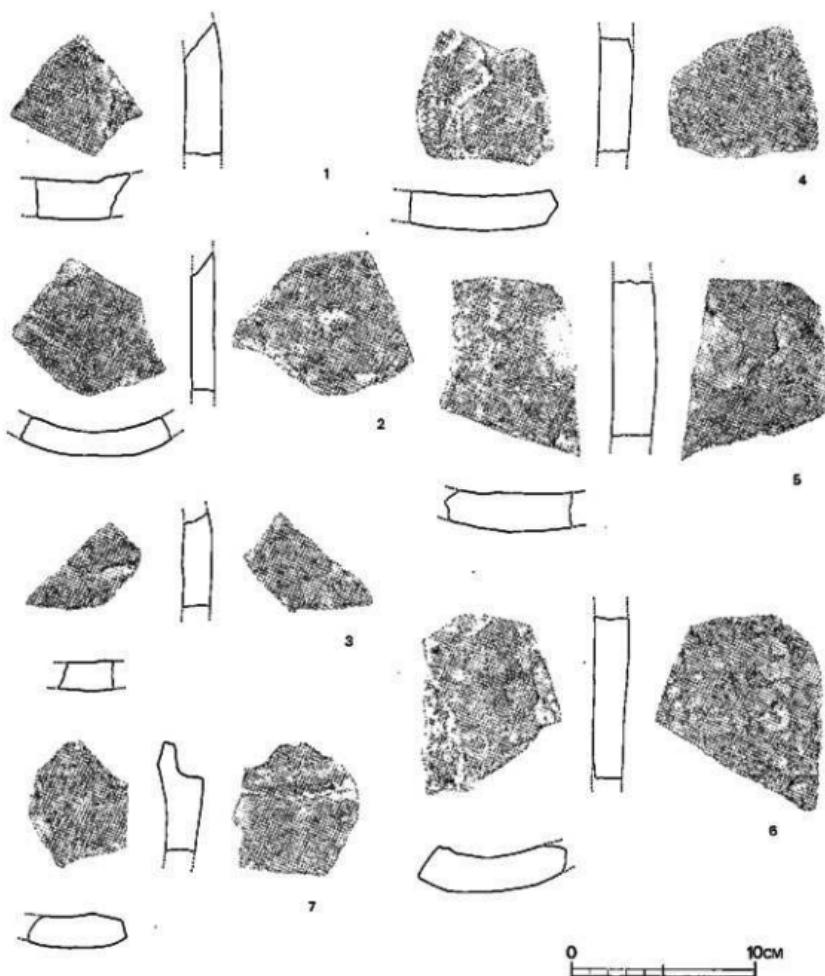
る。頭部には2本の浅い沈線が這り、10葉の菊花文を配している。外面黒灰色を呈し、ヨコナデ調整され、内面は指による整形後にナデ調整している。井手ノ原遺跡の湯釜に類例がみられる。

建物跡は2間×3間、1間×1間、2間×1間、1間×2間の4棟が確認された。この建物群の周囲には同時期の柱穴群が発見された。その範囲は1・2号墳間に限られた狭い地域で数はそう増加しないと思われる。この建物跡に伴って、ロクロ右廻りによる糸切り椎し底をもつ土師器杯、小皿と土師質の擂鉢、湯釜が出土している。建物跡の時期はこれら表土層出土の小破片のみでは断定的な結論を下せないが、中世前半期にあたるのであろう。(木下修)

瓦(図版42-1、第56図) 1号墳から2号墳との間にかけて、表土から瓦の小片が出土した。2・6・7は丸瓦、他は平瓦である。1~3は細い平行条線叩文をもち、布目は1が粗く2・3は細かい。4は裏面を擦消し、表面は笠で削られているが一部に粗い布目を残している。側縁は2回の面取りが行なわれている。5は粗い布目をもち、裏面は擦消して細い平行条線が横方向に残っている。6は細かい布目で粘土錐目がみられ、裏面は粗い斜格子の中に斜に十字を入れている。側縁は面取りされている。7は丸瓦上端で短かい玉縁をもつ。表面は擦消して、裏面に布の織が平行条線状にみえている。玉縁側縁は斜に切られ、側縁・上端・裏面側縁ともに面取りされている。

1~3は、2号墳周辺出土の丸瓦とともに、大詫2号窯出土の瓦(註33)と同じ平行条線叩

原古墳群



第56図 土層出土瓦拓片

## 原古墳群

文をもち、この種のものは7世紀中葉を下らない時期に出現している。また5に見られる細い平行条線も、平行条痕が擦消しで済めた可能性が大きい。6は平安時代、7は江戸時代に下る資料である。

平行条線印文をもつ瓦は、北北西に500mあまりの門田遺跡からも出土しており(註34)、上白水遺跡発見の重弁蓮草文軒丸瓦(註35)と同様の軒丸瓦を共伴する。上白水遺跡は原古墳群と同一台地上の北方約250mにあり、西遺跡の瓦は、東方約400mのウトロ瓦窯跡を含めて開拓の深いものといえるだろう。

(鶴久嗣郎)

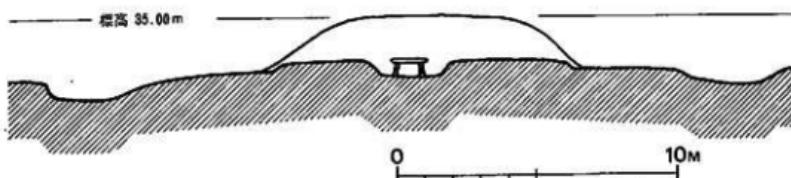
## 11. まとめ

### (1) 立地と墳丘について

原古墳群は標高34m前後の、那珂川右岸の沖積地に突き出た、低く、平坦な台地上の先端部に位置する。この台地上を三基の円墳が大きく占拠し、その間に円形周溝墓、方形周溝墓、土塙墓が位置する。当地域の古式古墳群の立地については、第Ⅱ章でふれたので詳述しないが、那珂川左岸の油田古墳群、井河古墳群、また右岸の炭焼古墳群が狭い丘陵上にあり、お互いが溝を接するごとく形成されていることはその立地に左右された問題だけではなく、原古墳群の内部主体との質的な差、時期的な差とも係り合ってくると思われる。また、那珂川右岸では本墳を除いて、日暮塚古墳、下白水大塚古墳、竹ヶ本大塚古墳と5世紀末から6世紀に下る前方後円墳があるが、時期的に近い墳墓としては、春日市一の谷遺跡(註36)の方形周溝を見るに過ぎない。

墳丘の規模からすると、1号墳が周溝間26m、2号墳24.5mと1号墳が最も大きいが、2号墳が合地の中央先端部に築かれ、周囲に4基の円形周溝墓と溝を共有し、付随させているところから盟主的な存在であったと思われる。

1号墳の残存した盛土の状態から、その墳丘は第57図のように復原できよう。盛土は上・下段の塊付近から主体部を覆う程度の高さ1.5m前後と低いもので、頂部は平坦であったと考えられる。2・3号墳は1号墳より低く、主体部を覆う程度のものであったろう。この低墳丘の古墳は那珂川流域古式古墳群の一つの特色ともなっているが、原古墳群は低位台地上の広い面積を3基の古墳で占めるという点に両者の相違がある。言い換れば、墳丘を高さでもって表現するよりも、面的な抜がりを溝でもって区画し、広い墓域を顯示しようとする意識を強く認めることができる。特に2号墳は周溝墓を周囲につけることで、より広い墓域を確保しているが、台地西斜面を削りだすことにより、台地端部と墳丘上に2.4mの高低差を造り出し、高さをも



第57図 1号墳墳丘復原図

\*表現している。これは2号墳の墳丘でも述べたが、西方からの視覚を強く意識したことの現われと思われる。原古墳群と至近距離にある下原遺跡、門田遺跡、柏田遺跡(註37)、安徳・中原遺跡(註38)などで発見された古式土器の住居跡と無関係とは考えられない。

3基の円墳とも、内部主体は異なるが、墳丘の形成では規則性がみられる。旧表土層を残しながら墳丘を二段に形造り、溝を掘り込む。上下段の差は30~40cm程度しかない。上段部中央に墓室を穿ち、主体部を置く。

平面形態は、主体部中央を中心点として同心円を描いている。上段・下段部の端、周溝端の数値は、1号墳では、4m・4m・3.5m、2号墳では、4.8m・3.8m・3.3mを測る。2号墳の上・下段部1mが最大の差でほぼ平均した数値を示している。2号墳の上段部径は10.5mと1号墳の上段部径より大きいことは、周溝間の径と逆転していく興味深い(表10)。

表 10 古墳・円形周溝墓一覧表 (単位 m)

番号	墳丘	墓	塚	主体部				主軸方位	副葬品	備考
				周溝上段下段 間隔	長軸	短軸	深さ			
1号墳	26	9.5	18.5	4.5	2.9	0.6	2.6	0.8	—	N81°W 鉄製品 懸穴式石室
2号墳	24.5	10.5	17.5	4.6	2.5	0.5	3.5	0.4 0.5	0.2	N82°W 主体部より鉄劍1、周溝内より壺2高杯4、井2組合式木棺直葬
3号墳	17.5	—	18.8	3.8	1.55	0.27	3?	0.53	—	N58°W 木棺直葬
2号円形周溝墓	9	—	2.3	1.08	0.37	2.0	0.5	0.22	N 9°E 2号墳—2号周溝墓との共通溝より壺	木棺2号墳と周溝を共有する
2号円形周溝墓	6.5	—	不明	—	—	0.8	—	N78°W 2号墳—1号周溝墓との共通溝より壺	“	
3号円形周溝墓	10.5	—	2.4	1.0	0.18	1.85	0.4	0.15	N78°E 主体部漆石製勾玉2、小玉188	“
4号円形周溝墓	7.5	—	2.08	0.7	0.08	1.85	0.3	0.075	N63°W —	“

この種の墳丘をもつものに、福岡県朝倉郡夜須町の松尾2号墳(註39)があげられる。径21mを測る円墳で、内部主体は箱式石棺である。上・下段の差は30cm内外で、上段の幅4mと本墳に近い数値を示している。本古墳群の三基とも、墳丘の形成法、平面形態とも非常によく類似し、規格性を見ることが出来る。従って、短時間内に三基とも形成されたことが窺える。

## (2) 主体部について

1号墳は二段に形造られた円墳で、内部主体は、その上段部より掘り込まれた高壙内に構築された堅穴式石室である。

石室は長辺4.5m、短辺2.9mの墓壙内に構築され、その内法は、南壁側2.6m、東壁側0.8mを測る。厚さ10cmから7cm前後の扁平な花崗岩を基底面から小口積みしたものである。石室西側は大きく破壊を受け、また、上部も削平され石積は4段しか残存しないが、裏込めの石の高さならびに墓壙の深さから、高さ60cm内外のものであると考えられた。石室の内法が2.6mと前期に位置付けられる堅穴式石室と比較し、著しく縮少されているが、前述の如く、その構築法は真正な堅穴式石室の系統上に立つものである。

堅穴式石室の形態についてはその規模等から、小林行雄氏によって大きく三大別されている(註40)。それによると、石室の長さが6m~8mのものから、時期が下がるにつれて長さが2~3mと短くなり、幅・高さとも縮少されるとしている。北部九州においても、地域的な特性(註41)を踏まえて、上野精志・山中英彦両氏の分類がみられる。

両氏とも堅穴式石室を三つに形態分類している。その中で、所謂畿内型と称される福岡県石塚山古墳(註42)・鶴子塚古墳・大分県免ヶ平古墳のように4m以上の長大な堅穴式石室を持つ古墳、ならびに、炭焼5号墳・栗崎山4号墳・荒田比のように長さ2m以下で箱式石棺を母胎にした石棺系堅穴式石室の二者については、ほぼ同じ見解をもっている。これに対し七夕池古墳・今宿2号墳・峰山4号墳や原1号墳のような、内法が2m前後の小型の堅穴式石室の評価が異なっている。上野氏は峰山4号墳・原1号墳を畿内型とし、七夕池古墳・今宿2号墳を「…箱式石棺が堅穴式石室の影響を受けた九州堅穴式石室…」(註43)と、小型の堅穴式石室にも二者があるとしている。山中氏はこの種の石室は、基底部から小口積みし、裏込めの石も存在するところから純正な堅穴式石室であるとし(Ⅱ類)として統括し、その特徴は「畿内型を受容し伝統的墓制を脱した塊石積みの堅穴式石室」としている(註44)。

原1号墳・鶴子19号墳・峰山4号墳を所謂畿内型とし、石塚山古墳・鶴子塚古墳・琵琶湖古墳等と同一の評価を与える上野氏の分類には疑問があると思われる。從って今宿2号墳(註45)・持田ヶ浦2号墳(註46)とともに、小型堅穴式石室としてまとめ、形態的には、山中氏の(Ⅱ類)にあてはめることが妥当と思われる。

小型堅穴式石室を内部主体とする古墳のほとんどは円墳で、墳形も七夕池古墳を除き20m未満のものが多い。石室の構築法では扁平な石を小口積みした、原1号墳・今宿2号墳の例と塊石積みの七夕池古墳・持田ヶ浦2号墳の二者が存在する。石室内法も原1号墳が2.6mと最も大きく、持田ヶ浦2号墳が長さ1.7m、幅0.4~0.5mと最も小さい。平均して2m前後のものが主体を占める。石室内法では石棺系堅穴式石室である炭焼5号墳・栗崎山4号墳のように

凌駕するものもある。小型堅穴式石室を有する古墳が数基をもって古墳群を形成することは、一つの特色と把えられよう。

一方2号墳は組合式木棺、3号墳は盗掘により主体部の状態は判然としないが、木棺直葬であったと思われる。ここでは保存状態のよい2号墳にしほってその特徴をまとめてみよう。

2号墳は上部から掘り込んだ、長さ4.5m、幅2.5mの墓壙中央部に組合式箱形木棺を安置したもので、木棺直葬である。

組合せ方法は小口板が側板よりとび出て、側板を挿込むもので、底板はない。

木棺全長は推定3.5m前後で幅は東側の方に若干広い。

棺床面下を除く墓壙内全体に粘土を充填し木棺を保持している。

木棺を安置する以前に、墓壙東側の地山を幅50cm、深さ10cmほど掘り下げている。

要約すると以上のような。木棺については北部九州を中心に弥生時代の発見例が増加し、組合方法等についても分類が試みられている(註47)。時期的には前期後半から中期初頭にかけて集中しているが、龜の甲遺跡のように後期に入るとされる例もあるようである。長さは2m弱のものが多く粘土を使用する例は、飯氏馬場遺跡(註48)・龜の甲遺跡などにみられ、従って木棺の保護のために粘土を用いる方法は弥生時代前期末まで遡のばることができよう。

一方県内における古式古墳で木棺を内部主体とするものは、堅穴式石室内で組合式木棺をもつ続子塚古墳・七夕池古墳を除き、安徳大塚古墳の礎床粘土構造・香椎ヶ岡古墳・卯内尺古墳・原口古墳・津古2号墳が粘土構造であるとされている以外内部施設は不明な点が多い。若八幡宮古墳の主体部は刺貫式の木棺直葬である。これらの古墳は、いずれも地域の古式古墳として時期的には4世紀後半位に位置づけられる。一方、油田1・3号墳・炭焼3号墳のような組合式木棺や油田4号墳のように割竹形木棺を納めたものがあり、いずれも木棺の周囲に帯状の粘土帶を残すものである。油田1号墳は4.4m、幅0.6mと長大であるが他は2~3m前後のものである。時期的には4世紀末頃に位置づけられ、群集して墳墓を構成しており、在地的な性格が強いとされている。その一方では川原庵山古墳群のように、5世紀後半代でも組合式木棺を内部主体とする例もある(註49)。

2号墳は、棺床面下に粘土を敷いてないが、広い墓壙内全体にわたって粘土を充填し、特に木棺の周囲には粘性の強い白色粘土をもってしており(第17図1), 形状は粘土構造に近い。油田1・3・4号墳、炭焼3号墳が粘土構造の手法をもつとされるが、粘土は棺の周囲に帯状に巡らすだけであり、2・3号墳の粘土の被覆状態からして、両者の質的差は歴然としている。

2号墳東側盗掘内にみられる地山を掘り込んだ造様(第18図2号墳主体部縦断面)について少しふれたい。畿内周辺では、内部主体の木棺の除湿のために排水溝の施設を持つ古墳があり、勝部明生氏による(註50)と堅穴式石室では大阪府柏原市玉手山5号墳、同南河内郡駒ヶ谷宮山古墳等があり、粘土構造では、大阪府和泉黄金塚古墳・高槻市弁天山B2号墳などがあげ

## 原古墳群

られている。特に弁天山B 2号墳東側は小口部の一方のみにその施設が認められる。しかし前記の古墳の排水溝内には礫や板状の石を投入して、除湿効果を高める工法がとられることに差が窺われる。一方福岡市若八幡宮古墳では木棺を安置するために、東西8.4m、南北4mの台状部を造りだしている。また、夜須町焼ノ跡古墳も同様な工法をもって主体部を形成しているようであり、この台状部を造りだすことは木棺を水気から保護する為とも考えられよう。これらの例からして、2号墳の溝状の掘り込みも、木棺の除湿を目的とした排水溝的なものと思われ、今後の類例の増加を待ちたい。

このように、2・3号墳の主体部は、長さは3.5m前後と古式古墳の木棺に比べて、内法が縮少し、墳丘とも小形の円墳であるが、油田・炭焼古墳群の木棺と比べると粘土梯的様相が強く、より幾内のであると言える。従って質的には2・3号墳は、原口古墳・安徳大塚古墳・若八幡宮古墳など、4世紀後半の、直接畿内の影響を受け、各地域で堅主的な位置を占める古墳と、油田・炭焼古墳群にみられる、組合式木棺をはじめ、箱式石棺・石棺系壺穴式石室・石蓋土塚とバラエティーに富んだ内部主体で構成される在地性の強い古墳群との「間」に位置づけられよう。

### (3) 円形周溝墓について

その特徴をまとめると以下の通りである(表10)。

2号墳と共通溝を持つ。

2号墳の北側に2基、東側に2基とお互いに共通の溝をもち、2基を1単位として存在する。すべて円形を呈し、径は6.5mから10.5m前後である。

4基とも、木棺を納めたものである。

2号墳と時期的に離れず、構築されている。

1・2号周溝墓の共通溝に丹の入った壺形土器と、3号墓の主体部に滑石製玉類をもつ。

周溝墓からの出土遺物は、赤色顔料、の入った壺形土器が胸部以上を打ち欠き底部を上にして、1・2号周溝墓の共通溝内に、3号周溝墓の主体部から滑石製勾玉・小玉が出土している。両者の性格からして、祭祀的な色合いが強く感ぜられる。しかし3号墓出土の滑石製勾玉は長さ2.7cmと幅0.9cm、第30図の通り硬玉製の玉類にきわめて類似する精巧品で、その出土状態から装着して納められたと考えられる。形態的に言えば、滑石製模造品のように扁平、小形のものではなく、単純に祭祀的な意味合いも持つものと異なっていよう。それに対し、赤色顔料、の入った土器については、祭祀的な意味合いが強く、2号墳の主体部内に残された赤色顔料、の塊との関連性が窺われる。

4基とも割竹形の木棺を納めたものと推定され、棺の周囲に粘土を囲い保護している。その

形状は油田1・3号墳例に近い粘土帶状のものである。従って、滑石製勾玉・小玉類については、3号墓の被葬者の副葬品と考えた方がよい。

4基の周溝墓の被葬者と、2号墳の被葬者との係りが重要な問題となってくる。規模は2号墳上段部より小さく、墳形が方形ではなく、円形を呈していること。また、主体部の主軸方位は、基本的に2号墳の主軸方向である東西方向に一致していることは、3号の円墳との関係を暗示し、方形周溝墓の被葬者と一線を画しているものと思われる。前方後円墳に見る主墳と陪塚との関連性は墳形形成が同一の企画上に成立し、陪塚の被葬者も主墳と同時的埋葬の疑いが強いとされている(註51)。2号墳に付随する4基の周溝墓が陪塚であるという訳ではないが、主墳である2号墳と澤を共有し、時期的にも距りが認められず、埋葬施設を持つところから、殉葬の可能性も含め2号墳の被葬者と密接(血縁的、祭祀的)に結びついた陪塚の墳墓と考えられるのではないだろうか。

#### (4) 原古墳群の位置

本古墳群の時期を決定する有力な遺物は、2号墳東南側周溝出土の土師器群と短甲であろう。土器は壺2・高杯4・壺2よりなる。高杯が主体を占めるとは炭焼5号墳によく類似している。第19図は二重口縁の壺で熊本県沈目遺跡(註52)・奈良県布留遺跡(註53)の出土のものに近い。第20図1の瓶形土器は佐賀県伊勢山遺跡(註54)・沈目遺跡などに出土する小形の壺形土器で、和泉式の特徴をよく表わしている。高杯には大形(第20図5)のものと、小形(第20図6~8)のものがあるが、炭焼5号墳出土の9個体の高杯のそれに近く、また、壺形土器は、春日市一の谷遺跡・竹ヶ本遺跡・下原遺跡のものに類似する。一方1号墳石室内出土の三角板革縫短甲が5世紀前半におかれること、また古墳群の墳形、内部主体とあわせて、5世紀前半に位置付けられる古墳群であろう。

原古墳群が形成された5世紀前半の地域相を概観して、おわりに変えたい。

那珂川右岸の肥沃な冲積地には、車輪基地建設に伴なって、古式土師の遺跡群が発見されている。門田遺跡の谷にはドングリの貯蔵穴12基と多量の土器が発見され、同、北台地には住居跡が、その他には第18・29地点ならびに、梶原川右岸の河岸段丘上にも住居跡群が発見されている。この住居跡群は現在の中原集落の方に延びていた可能性も強く、那珂川の第1段河岸段丘上が居住の場として選ばれている。

一方墳墓群は、炭焼・油田・井河古墳群と狭い丘陵根柢上に群集して立地し、低い墳丘を持ち、内部主体は箱式石棺・石蓋上壙・木棺直葬・石棺系竪穴式石室とバラエティーに富んでいるのが特色である。本古墳群の墳丘、主体部出土遺物は、炭焼・油田両古墳群に類似性が認められるが、一方では広く平坦な台地上を三基の古墳で占拠する立地、竪穴式石室、大きな墓域

## 原古墳群

内に埋葬され、全体に粘土を被覆する主体部古墳に付随する円形周溝墓等、すべての面で両古墳群を凌駕していることは否定できない。原古墳群以北の低い丘陵上には当期の墳墓が現在のところ認められることも、本古墳群の位置を暗示しているとさえられる。

当地域の盟主的な古墳には4世紀後半に位置付けられる那珂川町の安徳大塚古墳がある。炭焼古墳群の同一の丘陵上にあり、67mを測る前方後円墳で、内部主体は礫床粘土構造である。安徳大塚古墳は那珂川の造り出す沖積平野の「要」に位置している。これに次ぐのが5世紀初頭とされている老司古墳で福岡平野最大の前方後円墳である。豊穴系横口式石室という、大陸からの影響を受け、その豊富な鏡類などの副葬品から、那珂川流域はもとより、福岡平野までの支配下においていたものと考えられ、この両者の前方後円墳は、直接受けた大和国家の支配体制下に組み入れられた首長の墳墓である。これに対し原古墳群は那珂川右岸という限定された域を中心に支配した者の墳墓として把握でき、肥沃な沖積地を背景とした高い生産力、つまり、強い経済的基盤が畿内の内部構造とし具現されていると思われ、その一方では、在地的な様相をも兼ね備えている。

従って、原古墳群は炭焼古墳群・油田古墳群という、小規模で在地性の強い集団より優位な位置にあり、政治的には安徳大塚古墳・老司古墳の被葬者の支配体制に組み込まれた階層の墳墓と言えるのではないだろうか。

(木下修)

註22 渡辺正氣・亀井勇氏に現地を見せていただいたところ、油田古墳の報告書に記載されている「原古墳」に相違ないことが判明した。従って、同報告書に示されている位置(29)については修正される。以下、原古墳の引文をかかげて置く。

「那珂川町大字中原字カイネ低段丘上にある円墳。豊穴式らしい石室から短甲・鉄劍・鉄斧等が発見されたという。」(柳田彦雄「那珂川流域の古墳とその編年」註2に同じ)

23 かって本墳出土とされる遺物が大野城市三筑中学校に保管されていたと聞いた。元三筑中学校教諭藤田彦彦氏によれば、鉄刀・鉄劍とともに玉類も一緒に保管されていたが、中学校改築時に四散してしまったらしいとのことであった。藤田氏には毎多忙中のところ、調査現場ならびに中学校まで出向いて調べていただいた。お礼を申しあげる。

24 小田富士雄・石松好維「九州古墳発見甲冑地名表」「九州考古学」23 1964

25 柳田彦雄「若八幡宮古墳」「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」2 所収 福岡県教育委員会 1971

26 大家初重「大和政権の形成」「世界考古学大系」3 所収 1959

27 柳田彦雄編「城山遺跡群(図版篇)」夜須町教育委員会 1971

28 原田大六「福岡県糸島郡平原弥生古墳調査概報」「福岡県文化財調査報告書」33 1965

29 鐘文時代早期の包含層と、弥生時代中期の櫛植茎の調査は、昭和49年11月25日より行なわれた。櫛植茎は180基以上の多数が確認され、県教育委員会では、その重要性を訴え、国鉄と保存問題について協議した結果、側道を迂回してその大部分が保存されることになった。

- 30 宮小路賀宏・柳田康雄「炭焼古墳群」『福岡県文化財調査報告書』37 1968
- 31 註2と同じ
- 32 註27と同じ
- 33 小田富士雄・柳田康雄「野添・大浦窯跡群」『福岡県文化財調査報告書』43 1970
- 34 木下修編「昭和49年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」福岡県教育委員会 1975
- 35 小田富士雄「九州に於ける山田寺系撫先瓦の発見」『歴史考古』6 1961
- 36 宮小路賀宏編「一の谷遺跡」『春日町文化財調査報告』2 1969
- 37 下原道跡・門田道跡・柏田道跡とも山陽新幹線車輪基地建設に伴う調査による。
- 38 那珂川町安徳・中原地区区画整理事業に伴う調査。1974年12月
- 39 註27と同じ
- 40 小林行雄「堅穴式石室構造考」『京大紀元二千六百年記念史学論文集』 1941
- 41 兵庫県吉福遺跡では前期末、常全遺跡は終末期に属する小型の堅穴式石室が調査されている。  
石野博信「播磨・吉福遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』2 1974
- 磯崎正彦・渡辺誠「兵庫県太子町常全遺跡調査概要」『兵庫県埋蔵文化財調査報告書』 1971
- 42 烏田寅次郎「石冢山の古墳」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』1 1952
- 43 上野精志「七夕池遺跡群」『志免町文化財調査報告書』1 1974
- 44 山中英彦「東宮ノ尾古墳群」『北九州市文化財調査報告』14 1974
- 45 宮小路賀宏「今宿古墳群」『福岡県文化財調査報告書』38 1968
- 46 後藤重己・田坂美代子「持田ヶ浦古墳群1・2号調査報告」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』16 1971
- 47 柳田康雄「津古内畠遺跡」小郡町教育委員会 1970
- 48 利島邦弘「飯氏馬場遺跡」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』2 福岡県教育委員会 1971
- 49 石山薰「川原庵山古墳群の調査」『九州紙質自動車道関係埋蔵文化財調査報告』V 福岡県教育委員会 1974
- 50 勝部明生「前期古墳における木棺の觀察」『関西大学考古学研究年報』1 1967
- 51 西川宏「陪葬論序説」『考古学研究』8-2, 1961
- 52 隈昭志・江木直「沈目」『熊本県文化財調査報告』13 1974
- 53 中村泰寿「布留遺跡出土の土器」『土師式土器集成』1 東京堂 1971
- 54 木下之治「伊勢山遺跡出土の土器」『土師式土器集成』1 東京堂 1971

図 版

原 古 墳 群



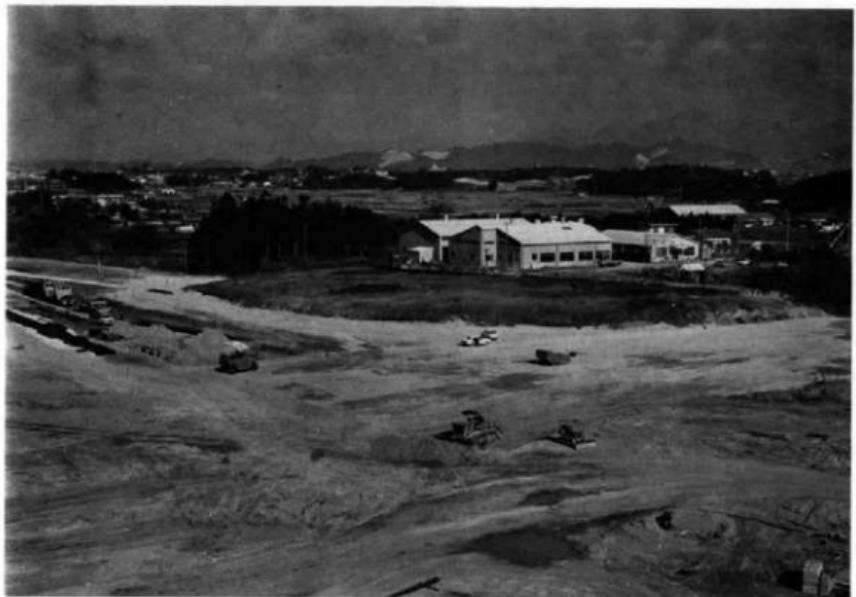
1 原古墳群遠景（西から）



2 整地履歴去後の航空写真（北から）



1 2号墳と南方に炭焼丘陵をのぞむ（北から）



2 遺跡全景航空写真（南西から）



1 遺跡全景航空写真（南方から）



2 遺跡南半全景（北方から）



1 調査前の1号墳（西から）



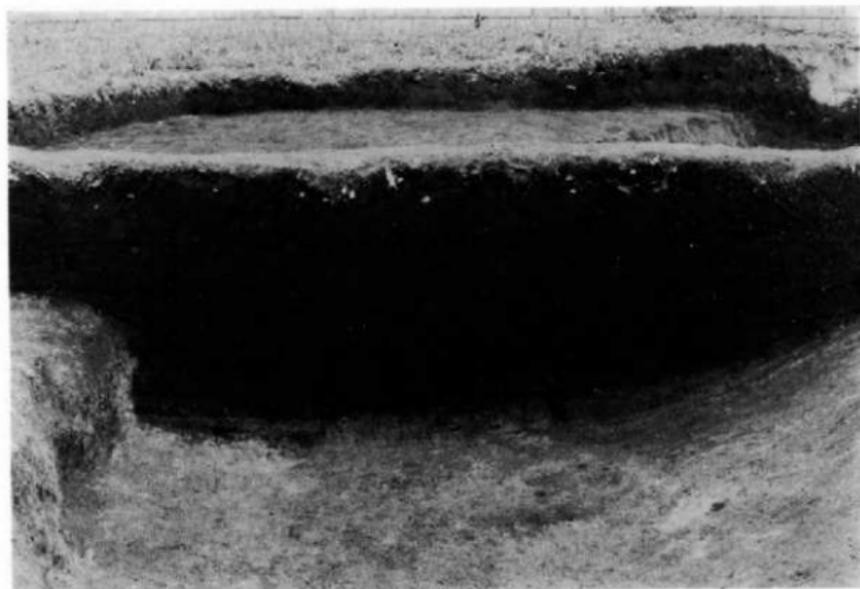
2 塗丘調査中の1号墳（南から）



1 1号墳南側盛土の状況（西から）



2 調査中の石室



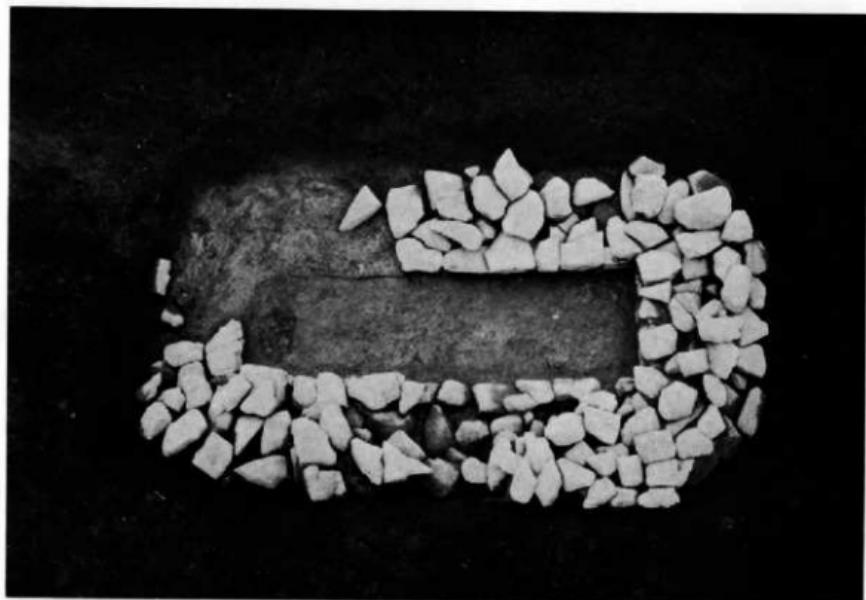
1 1号墳北側周溝断面



2 1号墳西側周溝断面



1 1号墳全景航空写真（南面から）



2 1号墳石室全景（南から）



1 石室東壁（西から）



2 石室石積状態



1 短甲片出土状態（南西から）



2 石材を抜いた墓壙



1 2号墳と円形周溝塗全景航空写真（西方から）



2 2号墳調査状況（北から）



1 西側地山整形状態（北から）



2 南東周溝と土器出土状態



1 調査前の主体部



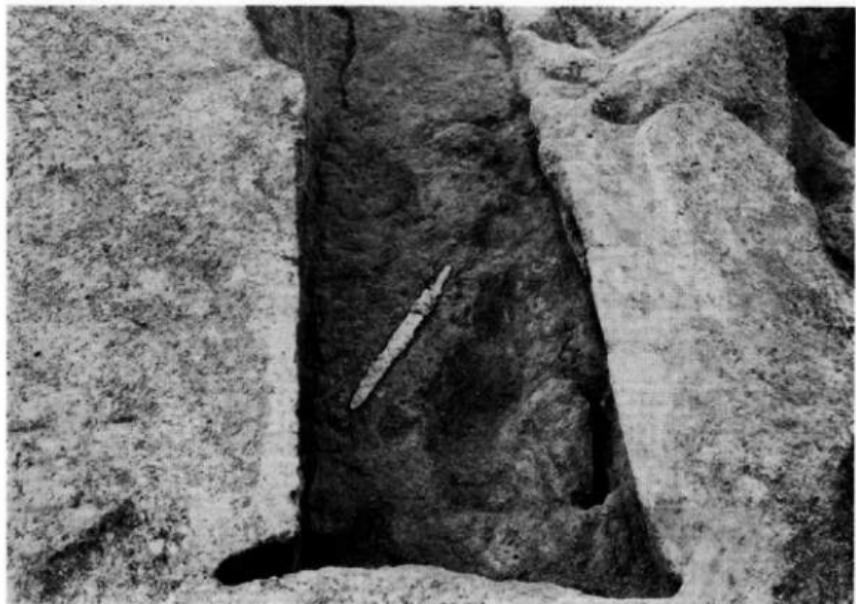
2 主体部全景



1 主体部全景（西から）



2 木棺東側小口部の状態



1 木棺内出土の鉄剣（東から）



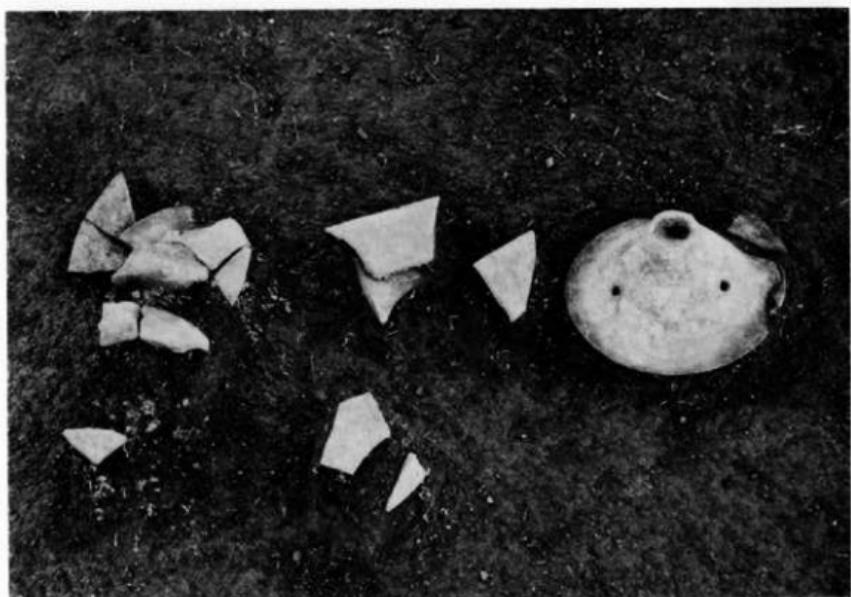
2 鉄剣出土状態



1 墓壙横断面と木棺（西から）



2 墓壙内の地山整形状態（西から）



1 高杯の出土状態



2 増の出土状態



1 周溝内土器出土状態



2 北側周溝内瓦出土状態



1 2号墳—1・2号円形周溝墓全景（東から）



2 1号円形周溝墓全景（北から）



1 1号円形周溝墓主体部（南から）



2 1号円形周溝墓主体部内土層断面



1 2号円形周溝墓全景（北から）



2 主体部の状態



1 2号墳—3・4号円形周溝墓全景（東から）



2 2号墳—3・4号円形周溝墓（北から）



1 3号円形周溝墓主体部内の玉類出土状態（西から）



2 勾玉と小玉



1 4号円形周溝墓全景（北から）



2 主体部の状態（北から）



1 調査後の4号円形周溝墓



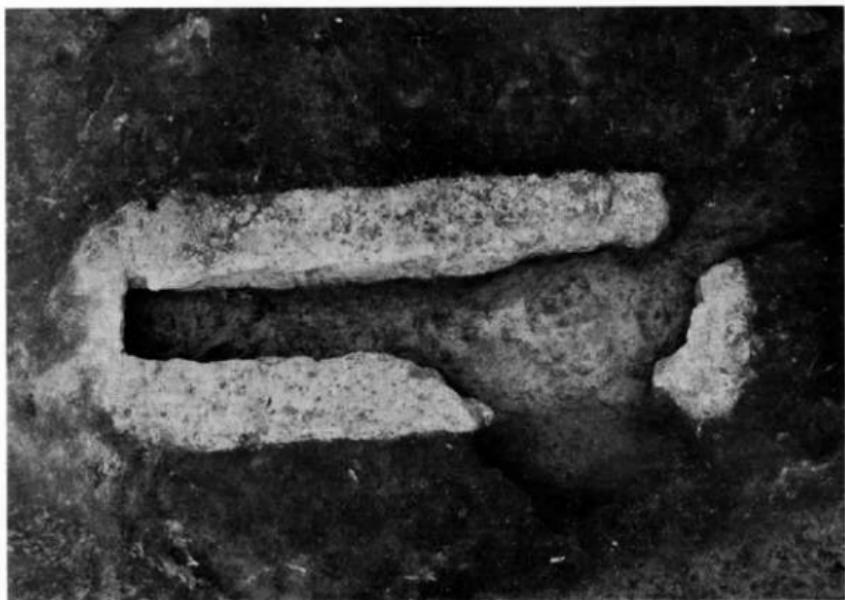
2 8号土壙墓（西から）



1 3号墳墳丘の調査（東から）



2 3号墳全景（北から）



1 3号墳主体部（南から）



2 同主体部（東から）



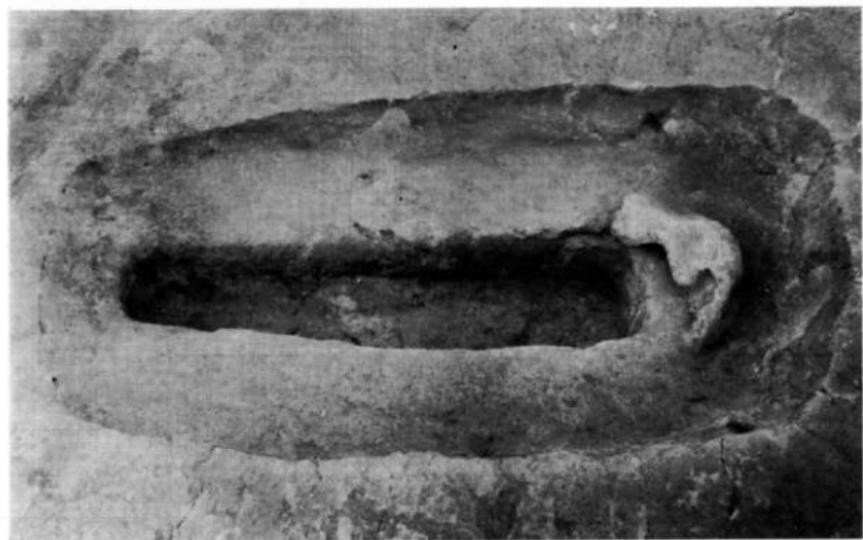
1 4号周溝墓全景（西から）



2 4号周溝墓主体部（北から）



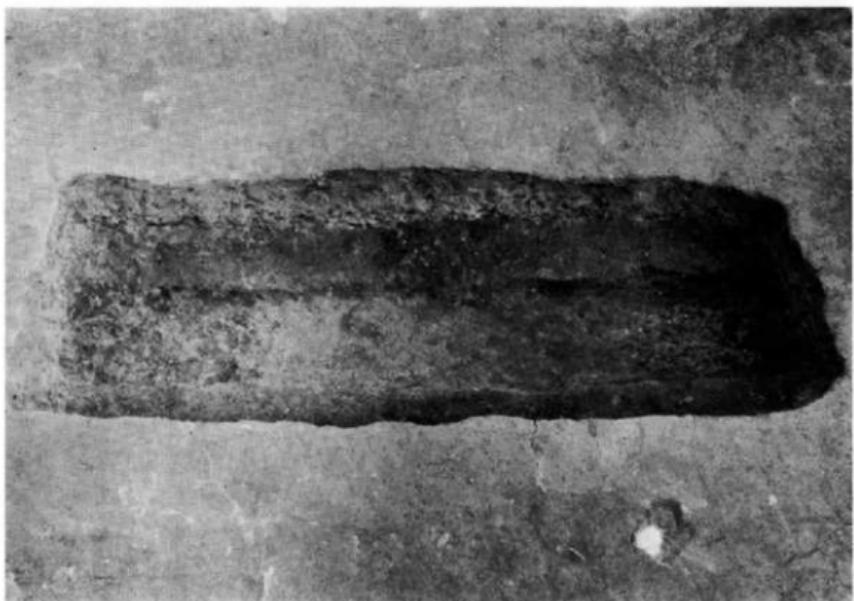
1 5号方形周溝塚全景（南から）



2 5号方形周溝塚主体部（東から）



1 6号周溝墓全景（南から）



2 6号周溝墓主体部（西から）



1 7号周溝墓全景（西から）



2 7号周溝墓主体部（北から）



1 9号土壙墓全景（北から）



2 9号土壙墓断面（西から）



1 10号土壤墓全景（北から）



2 10号土壤墓断面



1 11号土塚墓全景（北から）



2 須恵器副葬の状態（東から）



1 1号住居跡の調査（東から）



2 1号住居跡全景（南から）



1 1号住居跡高杯出土状態



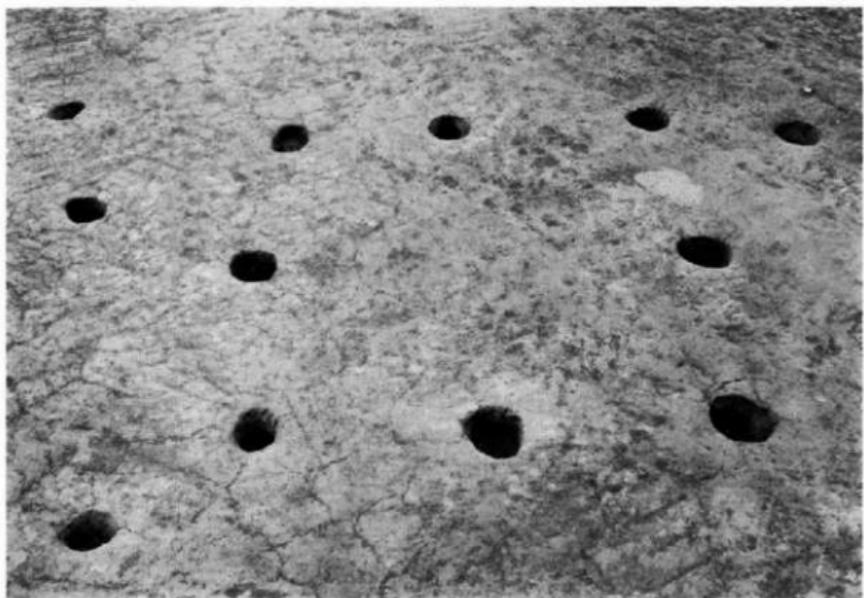
2 2号住居跡全景（北から）



1 中世建物跡全景（南から）



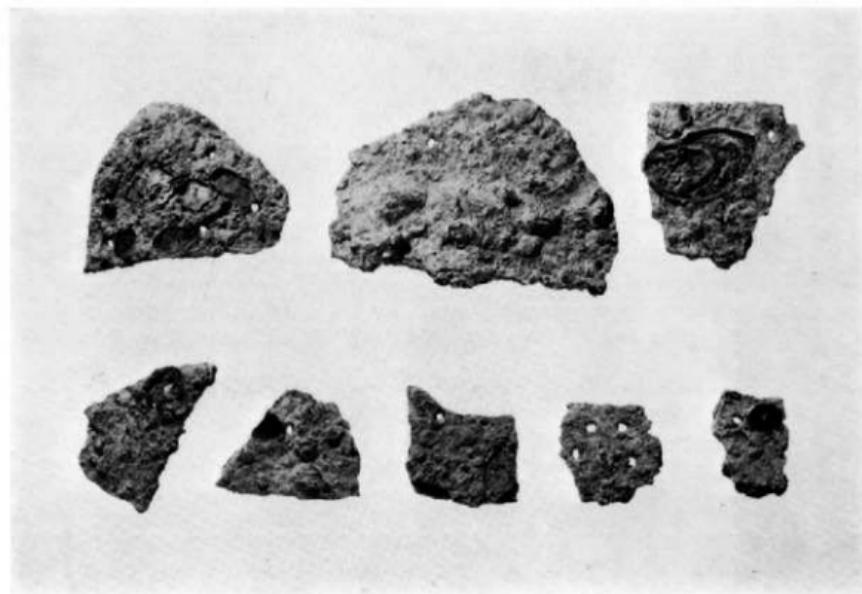
2 1号建物跡全景（南から）



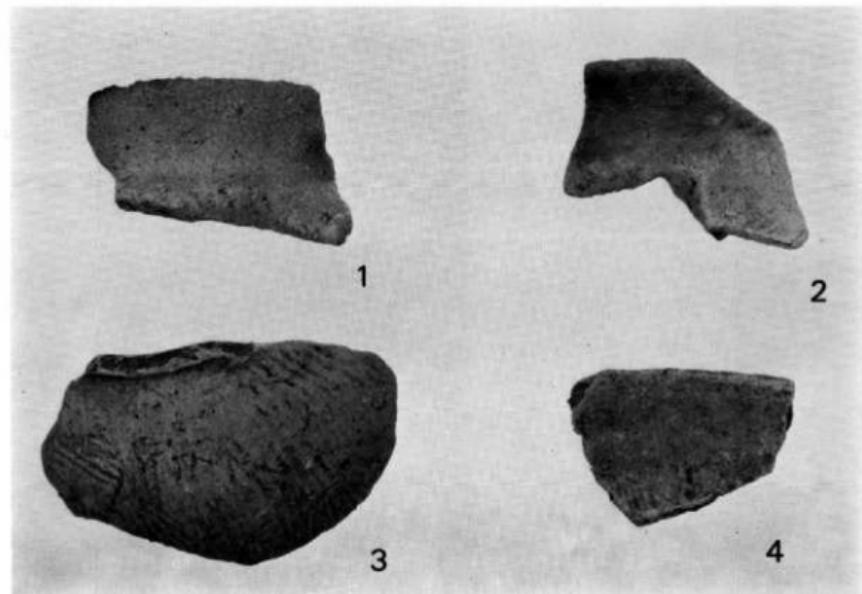
1 3号建物跡全景（東から）



2 4号建物跡全景（南から）



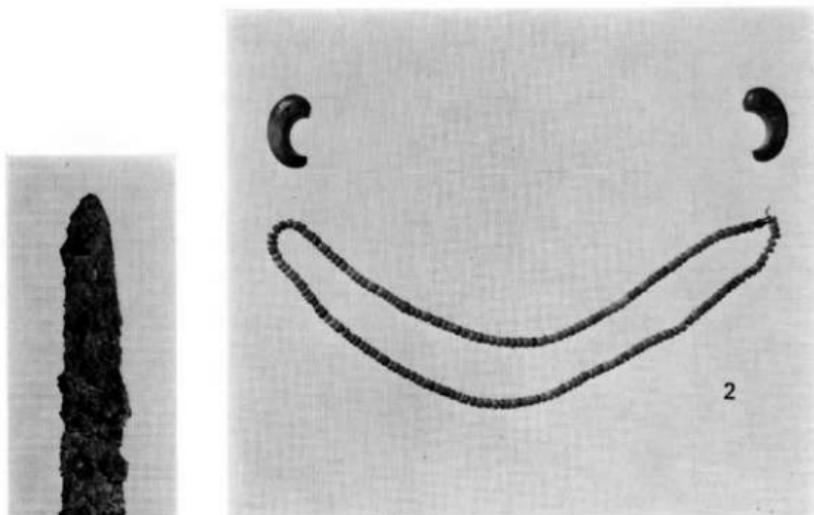
1 1号墳石室出土鎧甲



2 1号墳出土土師器



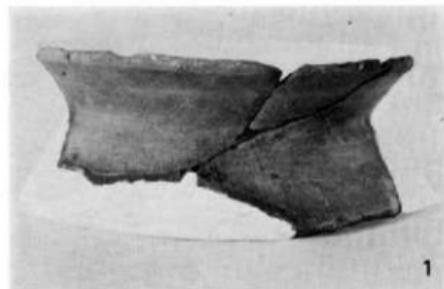
2号墳出土土器



(1) 2号墳 鉄剣 (3分)

(2) 2号墳—3号周溝墓 勾玉・小玉 (3分)

(3) 2号墳—1・2周溝墓共通溝 壺 (3分)



1



2



1



2



4



5

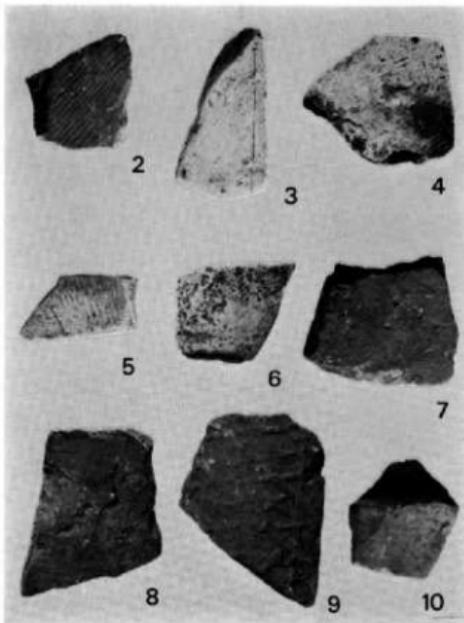


3

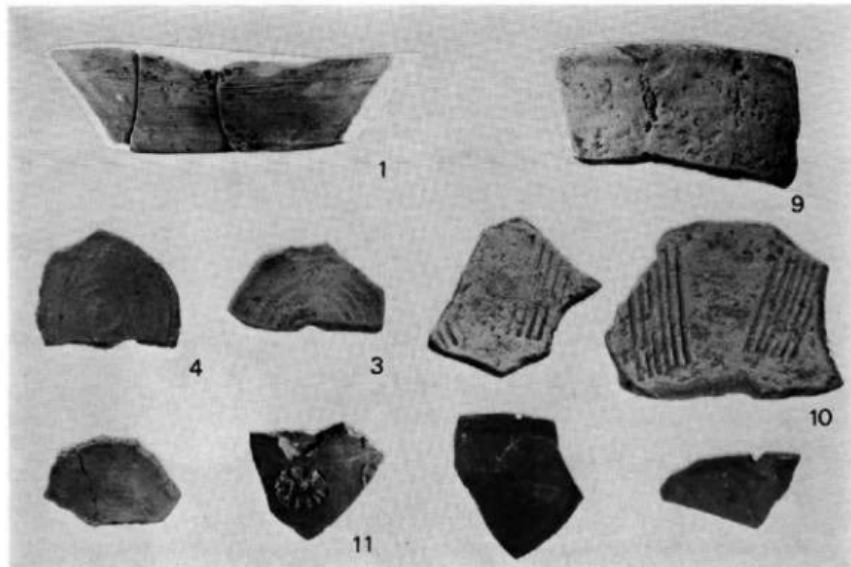


3

土壤墓・住居跡出土土器 (3/2)



1 瓦（1以外は表土層出土）



2 中世土器

## IV 井手ノ原遺跡の調査

筑紫郡那珂川町大字中原字井手ノ原・深原



井手ノ原遺跡 方形区画溝Ⅱ全景航空写真（1973年7月）

## 本文目次

1.	はじめに	79
(1)	調査の経過	79
(2)	遺跡の立地	80
2.	遺構	83
(1)	方形区画溝Ⅰ	83
(2)	方形区画溝Ⅱおよびその関連遺構	83
(3)	方形区画溝Ⅲおよびその関連遺構	94
(4)	方形区画溝Ⅳおよびその関連遺構	94
(5)	その他の溝状遺構	96
3.	遺物	97
(1)	縄文時代の遺物	97
(2)	弥生時代の遺物	104
(3)	古墳時代の遺物	104
(4)	歴史時代の遺物	105
4.	まとめ	115
(1)	遺物の山土状態と遺構との関係	115
(2)	出土遺物について	117
(3)	おわりに	119

## 図 版 目 次

	本文対照頁
図版 1 (1) 井手ノ原遺跡と觀音山航空写真（井上裕弘撮影）	80
(2) 井手ノ原跡第1次調査航空写真（井上撮影）	80
2 (1) 井手ノ原遺跡全景航空写真 北から（井上撮影）	83
(2) 井手ノ原遺跡全景航空写真 西から（井上撮影）	83
3 (1) 方形区画溝Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ全景航空写真 西から（井上撮影）	83
(2) 方形区画溝Ⅲ・Ⅳ全景航空写真 西から（井上撮影）	83
4 (1) 方形区画溝Ⅱ全景航空写真 西から（井上撮影）	83
(2) 方形区画溝Ⅱ全景航空写真 北から（井上撮影）	83
5 (1) 方形区画溝Ⅰ・Ⅲ全景 南から（井上撮影）	83
(2) 方形区画溝Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ全景 北から（井上撮影）	83
6 (1) 方形区画溝Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ全景 南から（井上撮影）	83
(2) 方形区画溝Ⅳ全景 南から（井上撮影）	83
7 (1) 方形区画溝Ⅱ北西部の溝と獨立柱建物A群（井上撮影）	83
(2) 方形区画溝Ⅱ南西部の溝と獨立柱建物B（井上撮影）	83
8 (1) 方形区画溝Ⅱの南北溝 南から（井上撮影）	83
(2) 方形区画溝Ⅱの北側東西溝 東から（井上撮影）	83
9 (1) 方形区画溝Ⅱ溝内土層断面（井上撮影）	84
(2) 方形区画溝Ⅱ溝内土器出土状態（井上撮影）	84
10 (1) 方形区画溝Ⅱ溝内土器出土状態（井上撮影）	84
(2) 方形区画溝Ⅱ溝内土器出土状態近景（井上撮影）	84
11 (1) 方形区画溝Ⅱ溝内土器山土状態（井上撮影）	84
(2) 方形区画溝Ⅱ溝内土器出土状態近景（井上撮影）	84
12 (1) 方形区画溝Ⅱ張り出し造構Aと集石溝 北から（井上撮影）	84
(2) 方形区画溝Ⅱ張り出し造構Bと集石溝 南から（井上撮影）	85
13 (1) 方形区画溝Ⅱ張り出し造構Aと集石溝 東から（井上撮影）	85
(2) 方形区画溝Ⅱ張り出し造構Aと集石除去後の溝 南から（井上撮影）	85
14 (1) 方形区画溝Ⅱ張り出し造構Bと集石溝 東から（井上撮影）	85
(2) 方形区画溝Ⅱ張り出し造構Bと集石除去後の溝 南から（井上撮影）	85
15 (1) 方形区画溝Ⅱ獨立柱建物A・B群と溝 南から（井上撮影）	86

(2) 方形区画溝Ⅱ掘立柱建物A群と溝 東から(井上撮影) .....	86
16 (1) 方形区画溝Ⅱ掘立柱建物Bと溝 東から(井上撮影) .....	87
(2) 方形区画溝Ⅱ掘立柱建物B 東から(井上撮影) .....	87
17 (1) 方形区画溝Ⅱ掘立柱建物C 東から(井上撮影) .....	87
(2) 方形区画溝Ⅱ掘立柱建物C 南から(井上撮影) .....	87
18 (1) 方形区画溝Ⅱ掘立柱建物D群 北から(井上撮影) .....	87
(2) 方形区画溝Ⅱ掘立柱建物D-1 北から(井上撮影) .....	87
19 (1) 方形区画溝Ⅱ方形堅穴群と掘立柱建物群南半航空写真(井上撮影) .....	90
(2) 方形区画溝Ⅱ方形堅穴群と掘立柱建物群北半航空写真(井上撮影) .....	90
20 (1) 方形区画溝Ⅱ 1号方形堅穴 北から(井上撮影) .....	93
(2) 方形区画溝Ⅱ 2号方形堅穴 南から(井上撮影) .....	93
21 (1) 方形区画溝Ⅱ 3号方形堅穴 南から(井上撮影) .....	93
(2) 方形区画溝Ⅱ 4号方形堅穴 南から(井上撮影) .....	93
22 (1) 方形区画溝Ⅱ 5号方形堅穴内土層断面 南から(井上撮影) .....	93
(2) 方形区画溝Ⅱ 5号方形堅穴 東から(井上撮影) .....	93
23 (1) 方形区画溝Ⅱ 7号方形堅穴内土層断面 西から(井上撮影) .....	93
(2) 方形区画溝Ⅱ 7号方形堅穴 南から(井上撮影) .....	93
24 (1) 方形区画溝Ⅱ 8号方形堅穴内土層断面 南から(井上撮影) .....	93
(2) 方形区画溝Ⅱ 8号方形堅穴 西から(井上撮影) .....	93
25 (1) 方形区画溝Ⅲ張り出し造構Cと集石 北から(井上撮影) .....	94
(2) 方形区画溝Ⅲ集石除去後の張り出し造構C 南から(井上撮影) .....	94
26 (1) 方形区画溝IV全景 南から(井上撮影) .....	94
(2) 方形区画溝IV全景 北から(井上撮影) .....	94
27 (1) 方形区画溝IV張り出し造構D 北から(井上撮影) .....	95
(2) 方形区画溝IV張り出し造構Eと集石溝 北から(井上撮影) .....	95
28 (1) 方形区画溝IV掘立柱建物E群と溝 南から(井上撮影) .....	95
(2) 方形区画溝IV掘立柱建物E群 東から(井上撮影) .....	95
29 (1) 井手ノ原遺跡南端発掘区(55地点)全景 東から(井上撮影) .....	96
(2) 井手ノ原遺跡南端発掘区(55地点)全景 南から(井上撮影) .....	96
30 (1) 井手ノ原遺跡南西部発掘区(50地点)全景 西から(井上撮影) .....	96
(2) 井手ノ原遺跡南西部発掘区(50地点)全景 東から(井上撮影) .....	96
31 (1) 桶文時代土器(小池史哲撮影) .....	97
(2) 桶文時代石器(小池撮影) .....	100

32 土師器壺・皿・杯・托(井上撮影) .....	104
33 土師質・瓦質土器 湯釜・火鉢・土鍋(井上撮影) .....	105
34 土師質土器 土鍋(井上撮影) .....	107
35 土師器・陶器 土鍋・拂鉢・甕(井上・石丸洋撮影) .....	109
36 磁器 高台付碗(井上・石丸撮影) .....	110
37 弥生・歴史時代石器 石戈・石刀・石臼(井上撮影) .....	112

## 挿 図 目 次

第 1 図 錦音山からみた発掘前の井手ノ原遺跡遠景(井上裕弘撮影) .....	80
第 2 図 発掘風景(井上撮影) .....	80
第 3 図 春日・那珂川地区歴史時代遺跡分布図(国土地理院地形図福岡南部・不入道 1 : 25,000 柳田康雄作成) .....	折込み
第 4 図 井手ノ原遺跡地形図(日本国有鉄道原図 1 : 1,500 井上製図) .....	折込み
第 5 図 方形区画溝Ⅱ溝内土層図(石田広美実測, 井上製図) .....	84
第 6 図 方形区画溝Ⅱ張り出し遺構A実測図(河野真知郎・駒木洋子実測, 井上製図) .....	85
第 7 図 方形区画溝Ⅱ張り出し遺構B実測図(三津井知廣・宮崎貴夫実測, 井上製図) .....	86
第 8 図 方形区画溝Ⅱ掘立柱建物A-1・2実測図(河野実測, 霽久順郎製図) .....	折込み
第 9 図 方形区画溝Ⅱ掘立柱建物A-3実測図(宮崎実測, 霽久製図) .....	87
第 10 図 方形区画溝Ⅱ掘立柱建物B実測図(河野・吉崎・森田徹実測, 霽久製図) .....	88
第 11 図 方形区画溝Ⅱ掘立柱建物C実測図(河野・吉原・瀧雄実測, 霽久製図) .....	89
第 12 図 方形区画溝Ⅱ掘立柱建物D-1・2実測図(河野・石田・三津井・今井正明 実測, 霽久製図) .....	折込み
第 13 図 方形区画溝Ⅱ方形窓穴実測図(1)(河野・吉原・佐藤啓久実測, 井上製図) .....	91
第 14 図 方形区画溝Ⅱ方形窓穴実測図(2)(河野・石田・高田一弘実測, 井上製図) .....	92
第 15 図 方形区画溝直溝内土層図(石田実測, 井上製図) .....	94
第 16 図 方形区画溝Ⅲ張り出し遺構C実測図(前島邦弘実測, 井上製図) .....	折込み
第 17 図 方形区画溝IV張り出し遺構D実測図(井上実測, 製図) .....	折込み
第 18 図 方形区画溝IV掘立柱建物E-1~3実測図(石田・三津井実測, 霽久製図) .....	折込み
第 19 図 桜文時代土器実測図(1)(小池史哲実測, 製図) .....	98
第 20 図 桜文時代土器実測図(2)(小池実測, 製図) .....	99
第 21 図 桜文時代石器実測図(1)(小池実測, 製図) .....	101

第 22 図	縄文時代石器実測図(2) (小池実測, 製図)	102
第 23 図	縄文時代石器実測図(3) (小池実測, 製図)	102
第 24 図	土師器・土師質土器・瓦質土器実測図 (井上実測, 製図)	104
第 25 図	土師器・土師質土器実測図 (井上実測, 製図)	106
第 26 図	土師質土器実測図 (井上実測, 製図)	折込み
第 27 図	土師質土器・陶器実測図 (井上実測, 製図)	折込み
第 28 図	磁器実測図 (井上実測, 製図)	111
第 29 図	弥生・歴史時代石器実測図 (小池実測, 井上製図)	112
第 30 図	歴史時代石器実測図 (小池実測, 井上製図)	113
第 31 図	方形区画溝Ⅱ内遺物分布状況平面図 (井上作成)	折込み
第 32 図	『寒鳥絵図』南海院僧御珍の房の合所繪図 (石丸洋模写)	119

## 表 目 次

表 1	春日・那珂川地区歴史時代遺跡地名表 (柳田作成)	81
表 2	方形区画溝Ⅱ掘立柱建物A-1計測表 (轟久作成)	87
表 3	方形区画溝Ⅱ掘立柱建物A-2計測表 (轟久作成)	87
表 4	方形区画溝Ⅱ掘立柱建物A-3計測表 (轟久作成)	87
表 5	方形区画溝Ⅱ掘立柱建物B計測表 (轟久作成)	89
表 6	方形区画溝Ⅱ掘立柱建物C計測表 (轟久作成)	90
表 7	方形区画溝Ⅱ掘立柱建物D-1計測表 (轟久作成)	90
表 8	方形区画溝Ⅱ掘立柱建物D-2計測表 (轟久作成)	90
表 9	方形区画溝Ⅳ掘立柱建物E-1~3計測表 (轟久作成)	95
表 10	縄文時代石器計測表 (小池作成)	103

## 付 図 目 次

付 図 1	井手ノ原遺跡遺構配置図 (轟久・官小路賀宏・井上・副島・木下修・河野・石田・宮崎・三津井・森田・佐藤・今井・高田実測, 轟久製図)
付 図 2	発掘区と方形区画溝遺構図 (轟久・官小路・井上・木下・河野・石田・宮崎・三津井・佐藤・今井・高田実測, 井上製図)

## IV 井手ノ原遺跡の調査

### 1. はじめに

#### (1) 調査の経過

この遺跡は、当初の分布調査では別々の4つの地点であった。37・39・50の3地点は中世の55地点は縄文時代遺物の散布地としてあげられていた。このため、発掘調査はこれらを別々の遺跡としておこない、最後に一括したものである。

庶務担当者	福岡県教育委員会文化課	主 事 小川 治一郎
	同	同 植田 實
	同	嘱託 吉村 源七
調査担当者		技術主査 霧久 順郎
	同	技 師 宮小路 賀宏
	同	同 御田 康雄
	同	同 井上 弘
	同	同 木下 修
九州歴史資料館		技 師 斎島 邦弘
調査員		櫻井 康治
調査補助員		河野 真知郎
		宮崎 貴夫
		石田 広美
		高田 一弘
		三井 知廣
明治大学学生	森田 徹・佐藤 善久・和田 むつみ	
	迫 かつみ・駒木 洋子・高橋 和子	
	吉原 浩雄	
国学院大学学生	今井 正晴	

まず、第55地点の調査を昭和46年8月17日から11月3日までおこなった。これは、隣接する

### 井手ノ原遺跡

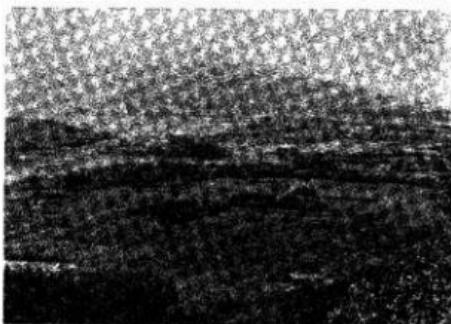
第38地点（觀音山2号墳）の調査と並行しておこなったもので、一部は深原遺跡を含むものであった。統いて、道路をはさんだ北接する第39地点を、昭和47年2月1日から3月31日まで調査した。これも、第45～48地点の5基の古墳（觀音山古墳群の一部）と並行する調査であった。

昭和47年度には、第37地点を7月14日から8月26日まで、第50地点を第44・52地点などと並行して9月26日から12月26日まで調査した。これらの調査の結果、第39・50・55地点は道路の切通しによつて隔てられてはいるが同一台地上で互いに隣接することと、中世遺物や類似の溝状遺構をもつことから同一遺跡であることがわかり、昭和47年度末から48年度当初にかけて境界域の調査をおこなった。

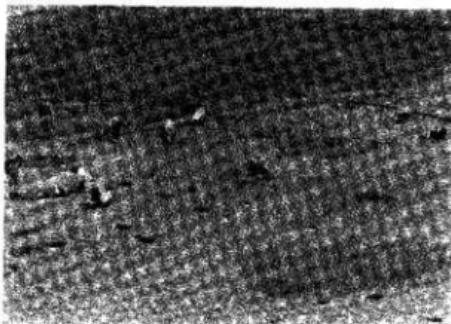
昭和48年度には最終調査をおこなった。第37地点は前記3地点から北東に約150mほど離れているが、類似の遺構・遺物がみられほぼ同レベルの連続する台地面上に位置するところから、同一遺跡となる可能性があった。昭和48年6月15日から8月14日にわたる調査の結果、第37・39地点の間にも連続して遺構が検出されて、南北約200mに亘る中世遺跡としてまとまった。

### (2) 遺跡の立地

この遺跡は、福岡県筑紫郡那珂川町大字中原字井手ノ原・深原にある。那珂川平野の最奥部の東側にあたり、南方の九千部山から高度を下げてきた山塊が春日丘陵をのせる広大な台地に移行する部分である。山地最北端の觀音山は、北麓の台地上に小丘状地をつくっているが、そ



第1図 観音山からみた発掘前の井手ノ原遺跡遺景



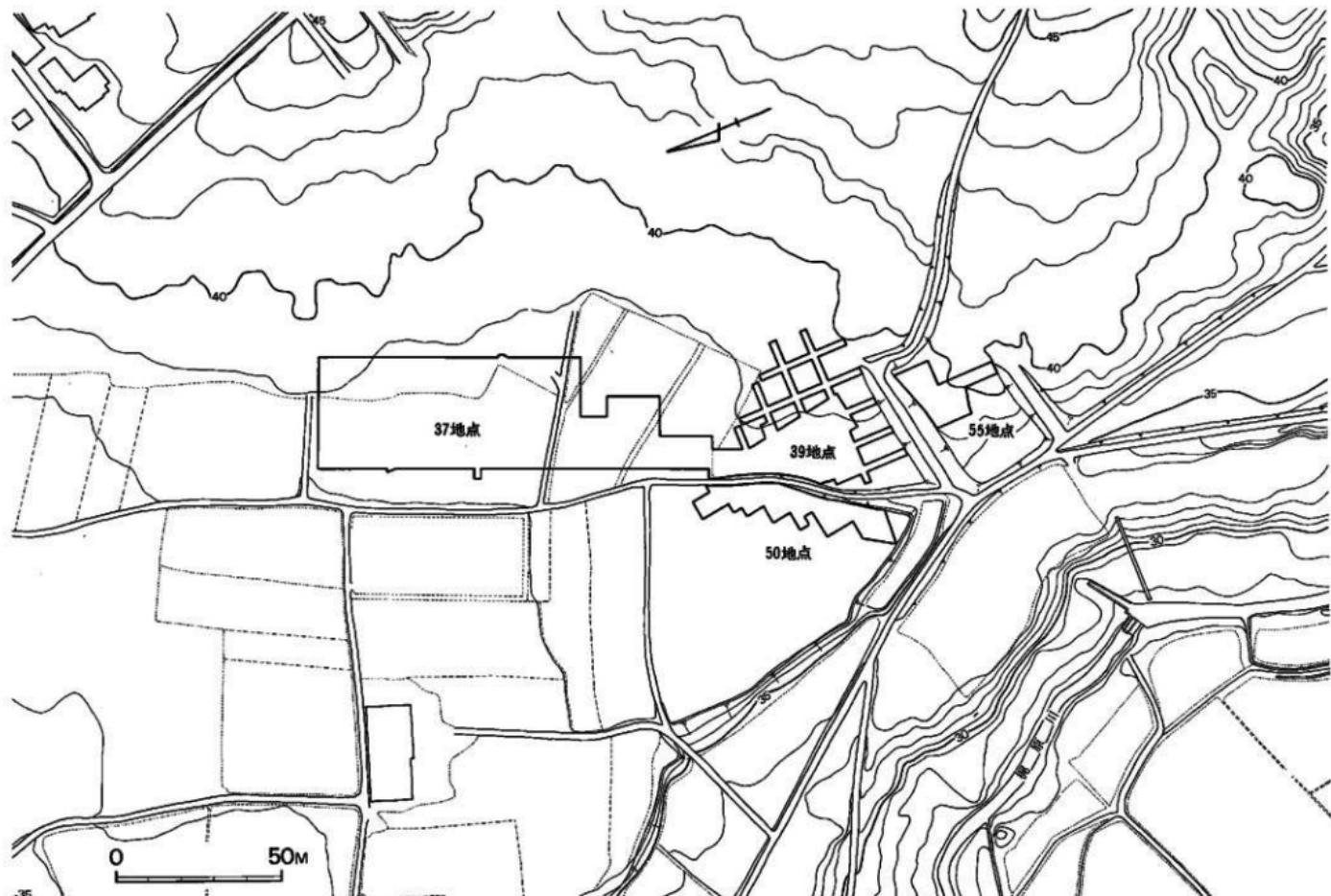
第2図 発掘風景



第3図 春日・那珂川地区歴史時代遺跡分布図 (1:25,000)

1:25,000

1:25,000 福岡南部 不入道



第4図 井手ノ原遺跡地形図 (Ise-no-hara)

の緩傾斜地末端から台地平坦面にかけて遺構が分布している。遺跡は、台地西端にのぞんでおり、西側水田面との比高は約10mである。

なお、この遺跡は、南側で深原遺跡・縦音山古墳群と一部重複し、西側約100mの範囲に第35・44・52地点などの中世遺構をもつ遺跡がある。

(鶴久禪郎)

表 1 春日・那珂川地区歴史時代遺跡地名表

遺跡名	所在地	立地	時期	遺構内容	出土遺物	註
1 老司瓦窯跡	梅崎市南区老司本町	丘陵	奈良		瓦	1
2 安徳城跡	那珂川町安徳	山頂	中世	山腹に土塁あり		2
3 上 須 原	" 上野原	段丘	"	板碑(伝伊豆景時墓)		2
4 八 龍	" "	"	"		青磁・白磁	3
5 製 田 游	" 安徳東通	"	"			4
6 井 手 ノ 原	" 中原	"	"			
7 立 石	" " 立石	"	"	方形周溝、大溝	青磁・土師器	5
8 鳥 ノ 墓	" "	"	"		土師器・漫鉢	6
9 松ノ木屋根	" 松ノ木	"	平安			
10 原	春日市上白水原	"	奈~中世		瓦・青磁・土師器	
11 ウトロ瓦窯跡	" " ウトロ	丘陵	奈良		瓦	3
12 上 白 水	" " 天神ノ木	段丘	"		瓦	7
13 門 田	" " 門田	"	奈~中世	土壙築・住居跡	瓦・青磁・白磁・鏡・筋鉢車	8
14 辻 田	" " 辻田	"	平安~	掘立柱・土壙基		8
15 今 光	那珂川町今光	"	中世	住居跡		9
16 柏 田	春日市上白水柏田	"	奈~中世	包合堆・掘立柱	瓦	8
17 池 / 内	" 須玖池ノ内	"	平安	井戸	土師器	10
18 園 本	" 園木町	丘陵	奈良		瓦	11
19 伯 玄 社	" 小倉・伯玄社	"	中世	方形周溝	土師器	12
20 天神山小水域	" 上白水	平地	奈良	土壙		13
21 大土層小水域	" 下白水	谷間	"			13
22 小倉小水域	" 小倉	"	"			13
23 春日小水域	" 春日	"	"			13
24 上大利小水域	大野城市上大利	"	"			13
25 水 跡	" 太壳府町	平地	"	土壙・門跡・木脚	瓦・須恵器	13
26 成 屋 形	太壳府町水城	段丘	奈良	住居跡	須恵器	14
27 萩ノ田窯跡群	" "	丘陵	"	窯2基	須恵器	15
28 向佐野窯跡群	" 向佐野	"	"		須恵器	16
29 草 田 窯 跡	" 草田	"	"	1基	須恵器	16
30 上 大 利 窯 跡	大野城市上大利	"	"	灰塚	須恵器	16
31 窯 跡	" "	"	"	1基	須恵器	16
32 平 田 窯 跡 群	春日市春日平田	"	"	2基	須恵器・瓦	16

## 井手ノ原遺跡

33	円 入	春日市春日円入	鹿丘 奈~中間	散布地	須恵器・土師器	3
34	窯跡	" "	丘陵	灰原・散布地	須恵器・土師器	17
35	大牟田池窯跡	" 春日大牟田池	"	1基	須恵器	16
36	窯跡	大野城市上大利	"	1基		16
37	野添窯跡群	" 上大利野添	" 古~奈	10基	須恵器	18
38	大浦窯跡群	" 上大利大浦	" 古~奈	5基	須恵器・瓦	16
39	平田窯跡群	" 牛頭平田	" 古~奈	6基	須恵器	18
41	東浦窯跡群	" 東浦	"	4基	須恵器	19
42	大谷窯跡群	" 大谷	"	3基	須恵器・瓦	16
43	石板窯跡群	" 石板	"	8基	須恵器	16
44	足洗川窯跡	" 足洗川	"	灰原	須恵器	18
45	道の下窯跡群	" 道の下	"	5基	須恵器	16
46	原窯跡	" 原	"	1基		16
47	ハゼムシ窯跡	" ハゼムシ	"	灰原	須恵器	16
48	中通窯跡	" 中通	"		須恵器	20
49	上平田窯跡群	" 上平田	"	3基	須恵器	21

註1 小田富士雄「九州に於ける大宰府系古瓦の展開」『九州考古学』2 1957

2 那珂川町教育委員会編「那珂川町文化財遺跡調査」 1970

3 1975年福岡県教育委員会実査

4 日本書紀、筑前続風土記

5 柳田康雄編「昭和48年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」福岡県教育委員会 1975

6 1976年那珂川町教育委員会調査

7 小田富士雄「九州に於ける山田寺系撫先瓦の発見」『歴史考古』6 1961

8 木下修雄「昭和49年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」福岡県教育委員会 1975

9 森田勉氏教示

10 亀井勇氏教示

11 九州歴史資料館編「九州の古瓦と寺院」 1974

12 松岡史外「福岡県伯父社遺跡調査概報」『福岡県文化財調査報告書』36 1966

13 鏡山猛「大宰府都城の研究」 風間書房 1968

14 亀井明徳「成型形遺跡」 1970

15 酒井仁夫「対ノ田遺跡」『教育福岡』 1972

16 柳田康雄「野添・大浦窯跡群」『福岡県文化財調査報告書』43 1970

17 肥山正秀氏実査・教示

18 板路秀一編『筑前平田窯跡』 雄山閣 1974

19 国士館大学調査

20 松岡史氏教示

21 1972年櫻井康治調査

## 2. 遺構

遺跡はトレンチとグリット発掘を併用して行ったもので調査面積は4,829 m<sup>2</sup>を測る。遺跡は南北に長く、さらに周囲に拡大する可能性をもっている。しかし、本遺跡はすでに触れたように5次にわたり異なる地点遺跡として調査され、同一の遺跡であることが最終的に確認されたものであるために、方形区画溝内全域の調査が充分でなかったことは遺構そのものの性格を理解する上で極めて問題点を残す結果となってしまった。だが、ここではそれらを総合して報告することにする（第4図）。

検出された遺構は、中世の方形に区画性をもつてめぐる溝4、付随する溝2、その内外における振立柱建物10、方形堅穴遺構10、不整形堅穴遺構10、その他の溝状遺構12、無数のピット群である（図版2、付図1）。また遺跡は全体に後世の開墾、一部宅造計画による削平などが重なり、かならずしも満足な保存状態ではなかった。

### (1) 方形区画溝Ⅰ

4つの方形区画溝が何時期に分けられるか明らかではないが少なくとも、その内で古い時期のものと思われるものである。方形区画溝Ⅱ・Ⅲに一部をそれぞれ切られた状態で検出された。溝は極めて幅も狭く、浅いU字形を呈するもので、一部北西と北東隅が切れる状態で検出された（図版3、付図1）。幅は最も広い所で0.7m、深さは0.16m、これは当初よりかなり上面が削平された結果と思われる。南北区画溝の長さは63m、東西区画溝は未調査地域を多く残すため明らかではないが現状では北側が6.50m、南側が10.30mを検出し得た。遺物としては若干の土師器や青磁片を発見したのみで、区画内においても、それに付随する施設等は明らかにできなかった。

### (2) 方形区画溝Ⅱおよびその関連遺構

#### a 溝状遺構

方形区画溝Ⅱ（図版2～4・6～1・7～11、付図1・2）発掘区の北端で発見されたもので、南北区画溝の長さは65.5m、東西区画溝は未調査地区を残すのでその規模は不明であるが、現状では北側が32m、南側が30.5mを測る台形状を呈する区画溝である。南北溝には内側に舌状に張り出した遺構が検出され、北西隅と南西隅には、それぞれ水落ちと思われる落ち込みが発見された。とりわけ南西隅では東西方向が屈曲する東西区画溝と同時に南北方向にのび

## 井手ノ原遺跡

る溝があり、後述する溝に続くものと思われる。溝は最も広い所がE14・15で2.7m、狭い所のJ2で0.45m、深さ0.4~0.95mを測るU字形、逆V字形を呈する溝である。溝内の土層は2~4層にわかれ、自然堆積の状況を呈している(第5図)。また、溝内の各所には河原石が集石された状態で、溝底より浮いて発見された。その他の、この区間に付随すると思われる遺構が内側に発見された。区画南側東西溝に沿ってL字状を呈する浅い溝2(溝a、溝b)とK・L12~13に溝1(溝c)さらに方形堅穴造構9、不整形堅穴10、掘立柱建物5棟が、南側の区画外に、この区間に付随すると思われる掘立柱建物2棟が東西溝に並行して検出された。方形区画溝内の出土遺物は土師器・土師質土器が最も多く、杯・皿・托・土鍋・擂鉢・湯釜等があり、須恵器・瓦質土器・陶器・青磁等もかなり検出されている。石器としては砾石・石臼が数点とその他に骨片(火を受けていて、また細片のため人骨か獸骨か不明である)がE3の溝内から出土している(註22)。

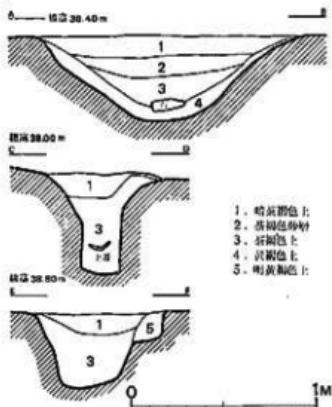
**溝 a (付図1・2)** F・G16~17で検出されたL字状を呈する溝で、方形区画溝IIの南北溝、南側東西溝に沿って小区画をなし、南北溝に注いでいる。溝は上面がかなり削平されているよう幅0.2~0.6m、深さ0.04~0.10mを測り一部とぎれているU字状を呈する浅い溝である。出土遺物としては若干の土師器片を検出している。

**溝 b (付図1・2)** G16~17、H・I17、I18、J・K・L18、L19にわたるL字状を呈する溝で、方形区画溝Iを切って作られたものである。溝は溝aと同様、上面をかなり削平されていて、南北溝はわずかに溝底を残すだけであった。溝幅0.20~1.20m、深さ0.10~0.35mを測るU字状の浅い溝で溝底は全体的に東側に傾斜している。出土遺物は湯釜・土鍋・擂鉢・杯の破片等である。

**溝 c (付図1・2)** J~L12~13にわたる溝で、西側を6号方形堅穴で切られ、掘立柱建物Cと一部複合している。溝幅は0.60~0.90m、深さ0.20~0.30mのU字状を呈する。出土遺物としては、土師質の湯釜・土鍋・杯・皿・壺前焼擂鉢等の破片である。

### b 張り出し造構

**張り出し造構A (図版12-1・13、第6図)** E5~6、F5にわたって検出された舌状に



第5図 方形区画溝II溝内土層図(1/50)

東側に張り出した堅穴状の造構で、底はゆるやかなU字状をなしている。造構内の土層は自然堆積の状況を呈している。出土遺物としては、土師質の土鏡・擂鉢・杯・皿・瓦質の火鉢・青磁・白磁・須恵器・陶器等の破片多数を検出した。

張り出し造構B（図版12-2・14、第7図）E9・10、F9・10にわたって検出された舌状に張り出した堅穴状の造構である。底は緩やかに西側に傾斜し溝につづいているが、造構内には若干浮いて砾群が検出された。出土遺物としては土師質の土鏡・擂鉢・杯・皿・須恵器・青磁・瓦等の破片がある。（井上裕弘）

#### c 捅立柱建物

発掘区のほぼ全面にわたりて無数にある柱穴状のなかから、建物と想定できる組合せは10棟分あるが、方形区画溝IIに伴うと考えられるものはそのうち7棟分である。北寄りのものから順に、A群・B・C・D群とした。

#### 建物A-1（図版7-1



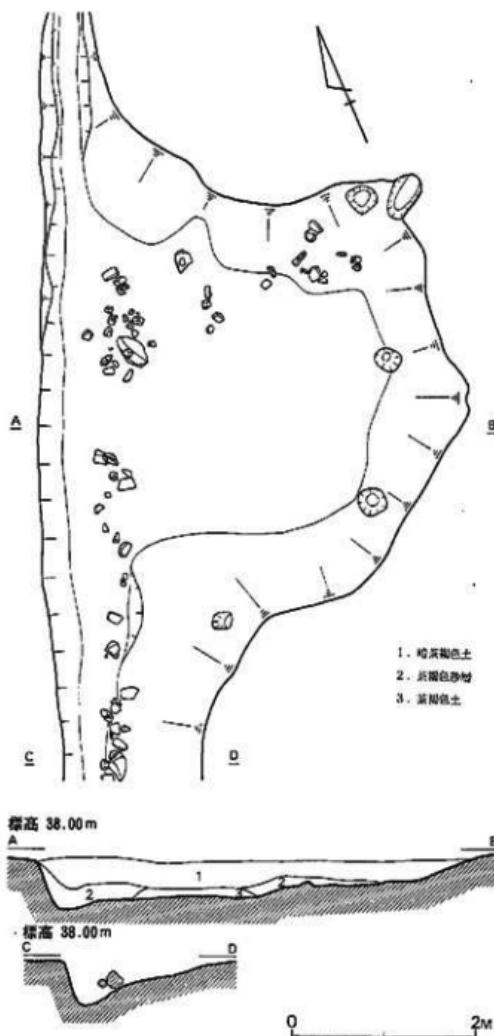
第6図 方形区画溝II張り出し造構A実測図 (360)

井手ノ原遺跡

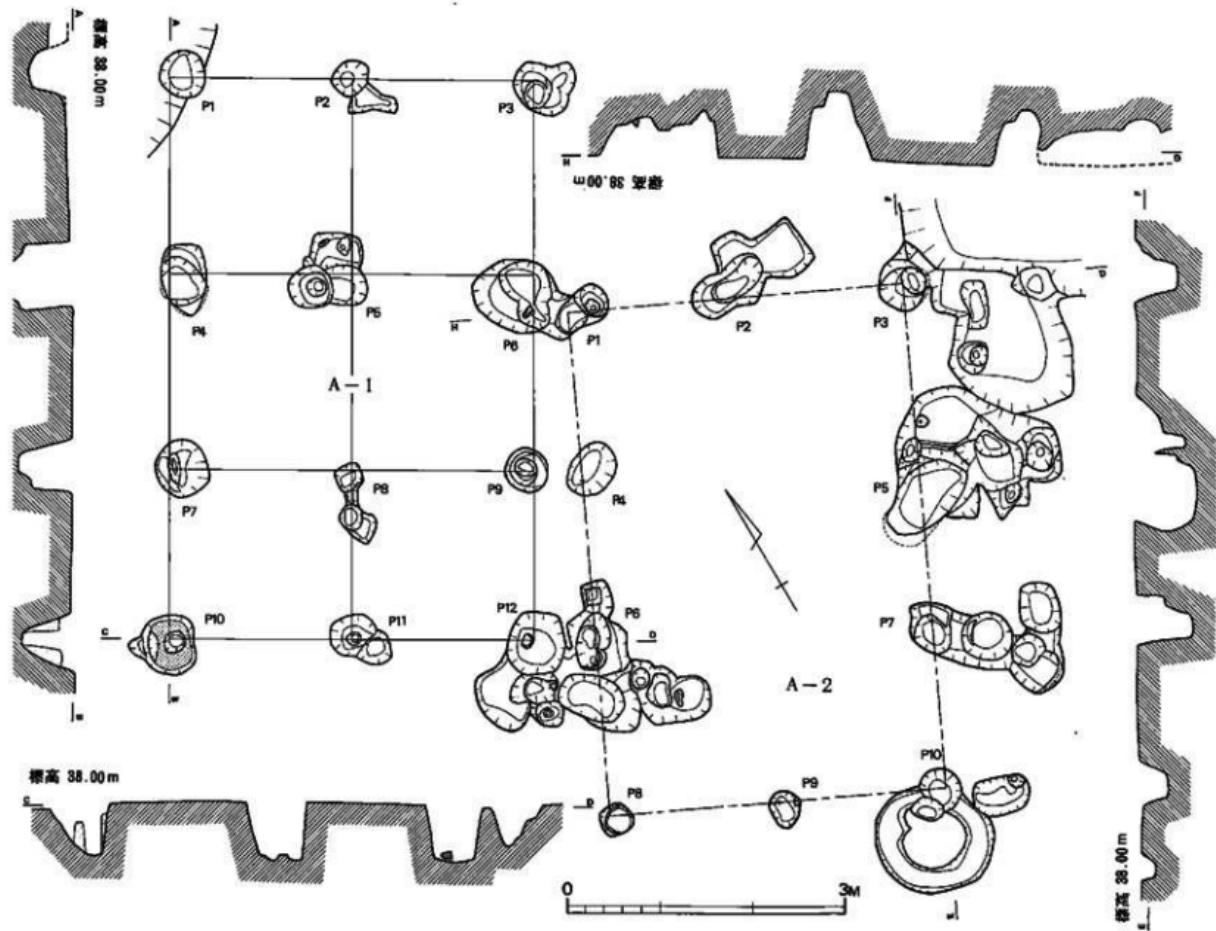
15—1・2, 第8図, 付図2, 表2) 方形区画溝IIの西辺にはほぼ平行するもので、2間×3間の中柱をもつ建物遺構である。桁行方位はN30°Eを示している。柱穴の深さはおおむね60cmほどで、P5・8は約25cmと浅い。P1は張り出し造構Aのふちにかかっており、P10には根巻きの粘土が、P6・12の底には拳大の石が各1個残っていた。

建物A-2 (図版7-1  
15—1・2, 第8図, 付図2, 表3) 建物A-1の東側に軒を接する2間×3間のもので、桁行方位はN36°Eである。P10は浅くて約30cm、他は50~70cmの深さである。底はほぼ平坦であるが、P1のみはやや尖っている。東隅のP3に接して1号方形竪穴がある。

建物A-3 (図版7-1  
15—1・2, 第9図, 付図2, 表4) 前記2棟から約5m東よりに1間×1間の小形の建物遺構がある。桁行方位はN62°Eを示し、柱穴はいずれも10~20cmの範囲にはいる深さである。



第7図 方形区画溝II張り出し造構B実測図 (7-6)



第8図 方形区西溝Ⅱ掘立柱建物A-1・2実測図 (36c)

建物B (図版7-2, 15

-1, 16-1・2, 付図2,

表5) 張り出し造構Bと  
4号方形窓穴との南に接する  
2間×3間のものである。方形区画溝Iには並行し、桁行方位はN26°Eを示す。柱穴はP2が約50cm, P9が25cmと浅いほかはみな70cmをこえるもので、P3・5には根巻き粘土の残留がみられた。

建物C (図版17-1・2

付図2, 第11図, 表6)

前記建物Bの造構から南東に10mあまりの所に、5~

表2 方形区画溝II掘立柱建物A-1計測表

(単位 cm)

桁行柱間寸法			梁間柱間寸法		梁間寸法	
P1~P4	P2~P5	P3~P6	P1~P2	P2~P3	P1~P3	
228	227	206	180	206	386	
P4~P7	P5~P8	P6~P9	P4~P5	P5~P6	P4~P6	
199	206	200	178	197	375	
P7~P10	P8~P11	P9~P12	P7~P8	P8~P9	P7~P9	
190	175	196	188	193	381	
桁行寸法			P10~P11	P11~P12	P10~P12	
P1~P10	P2~P11	P3~P12	193	199	392	
617	606	602				

表3 方形区画溝II掘立柱建物A-2計測表

(単位 cm)

桁行柱間寸法			梁間柱間寸法		梁間寸法	
P1~P4	—	P3~P5	P1~P2	P2~P3	P1~P3	
165	—	183	178	196	374	
P4~P6	—	P5~P7	—	—	P4~P5	
181	—	199	—	—	351	
P6~P8	—	P7~P10	—	—	P6~P7	
205	—	172	—	—	373	
桁行寸法			P8~P9	P9~P10	P8~P10	
P1~P8	P2~P9	P3~P10	179	169	348	
549	568	554				

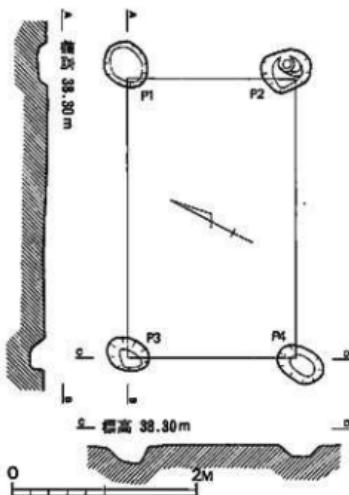
表4 方形区画溝II掘立柱建物A-3計測表

(単位 cm)

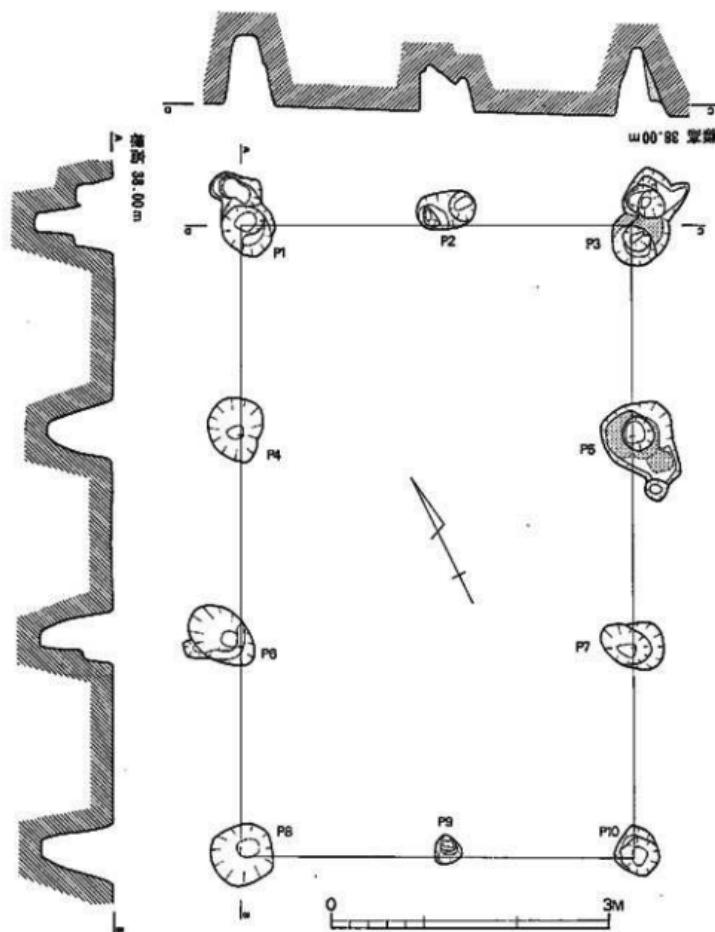
桁行柱間寸法	梁間柱間寸法
P1~P3	P2~P4
321	322
P1~P2	P3~P4
174	187

9号方形窓穴に囲まれて2間×2間の造構がある。桁行方位はN26°Eで、建物Bの方位と完全に並行している。柱穴はP3・6が75cmほどの深さで、ほかは45~55cm程度である。P5はP3・8の中間でなくP8寄りである。変則的な組合せであるが、他に適当なものがないので組込んだものである。P2は溝Cの底に痕跡を残すが、切り合い関係は不明であった。P1の底部に挿入した石1個が残っており、この間に接して6号方形窓穴がある。

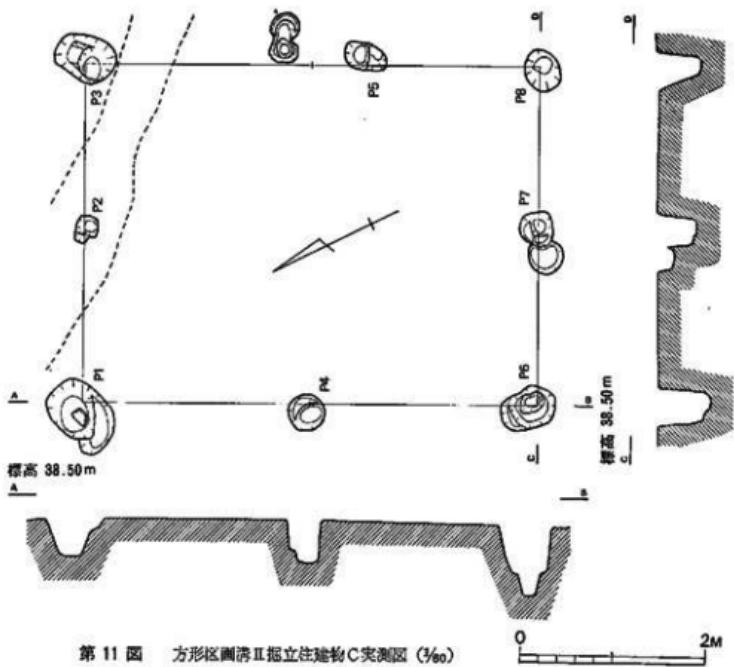
建物D-1 (図版18-1・2, 付図2, 第12図, 表7) 方形区画溝Iの北西辺を挟んで2棟の建物構造があるが、柱穴列の一辺が



第9図 方形区画溝II掘立柱建物A-3実測図 (1/60)



第10図 方形区画溝II標立柱建物B実測図(3‰)



第11図 方形区画溝II掘立柱建物C実測図 (%)

0 2M

溝を切断するので、新らし  
い方形区画溝IIの南側区画

外に並行して建てられたも  
のと見做すほうが妥当であ  
る。西よりの遺構をD-  
1, これに東接するものを  
D-2とした。

D-1は2間×3間で,  
桁行方位はN45°Eである。

P6・8の中間にP7が位

置して中柱かとも思われるが、P4・5の間には柱穴が検出されなかったので、あるいは密に  
分布する柱穴のひとつが偶然に合致したものかもしれない(付図1)。P2も検出されていな

表5 方形区画溝II掘立柱建物B計測表

桁行柱間寸法			梁間柱間寸法		梁間寸法	
P1~P4	—	P3~P5	P1~P2, P2~P3	P1~P3	P4~P5	
226	—	215	199	226	425	
P4~P6	—	P5~P7	—	—	P4~P5	435
223	—	225	—	—	P6~P7	434
P6~P8	—	P7~P10	—	—	P8~P9	426
227	—	223	—	—	P9~P10	207
桁行寸法			P8~P9	P9~P10	P8~P10	
P1~P8	P2~P9	P3~P10	219	207	426	
676	670	663				

### 井手ノ原遺跡

いから、建物の構造・間取りとも関連させて検討する必要があろう。柱穴の深さはP7が最も浅く36cm、P1・6・10は約60cm、他は80~95cmと深いものである。P1の中の石2個は、底から約50cm浮いている。

**建物D-2** (図版18-1  
付図2、第12図、表8)  
方形区画溝Ⅱを挟んでD-1の南東面に接する2間×3間と思われる建物構造である。P1・4・6・8が溝を切っているし、桁行方位がN43°EでD-1と2°しか違わないことから、2棟とも方形区画溝Ⅱに伴う建物構造と考えられる。柱穴は、隅のP1・3・8が約70cmと深く、他は約50cmでP5のみが約30cmで浅い。

(鶴久嗣郎)

表6 方形区画溝Ⅱ掘立柱建物C計測表

桁行柱間寸法			梁間柱間寸法		梁間寸法	
P1~P4 257	—	P3~P5 291	P1~P2 203	P2~P3 169	P1~P3 372	
P4~P6 241	—	P5~P8 199	—	—	P4~P5 392	
桁行寸法			P6~P7 189	P7~P8 174	P6~P8 363	
P1~P6 498	P2~P7 487	P3~P8 490				

表7 方形区画溝Ⅱ掘立柱建物D-1計測表

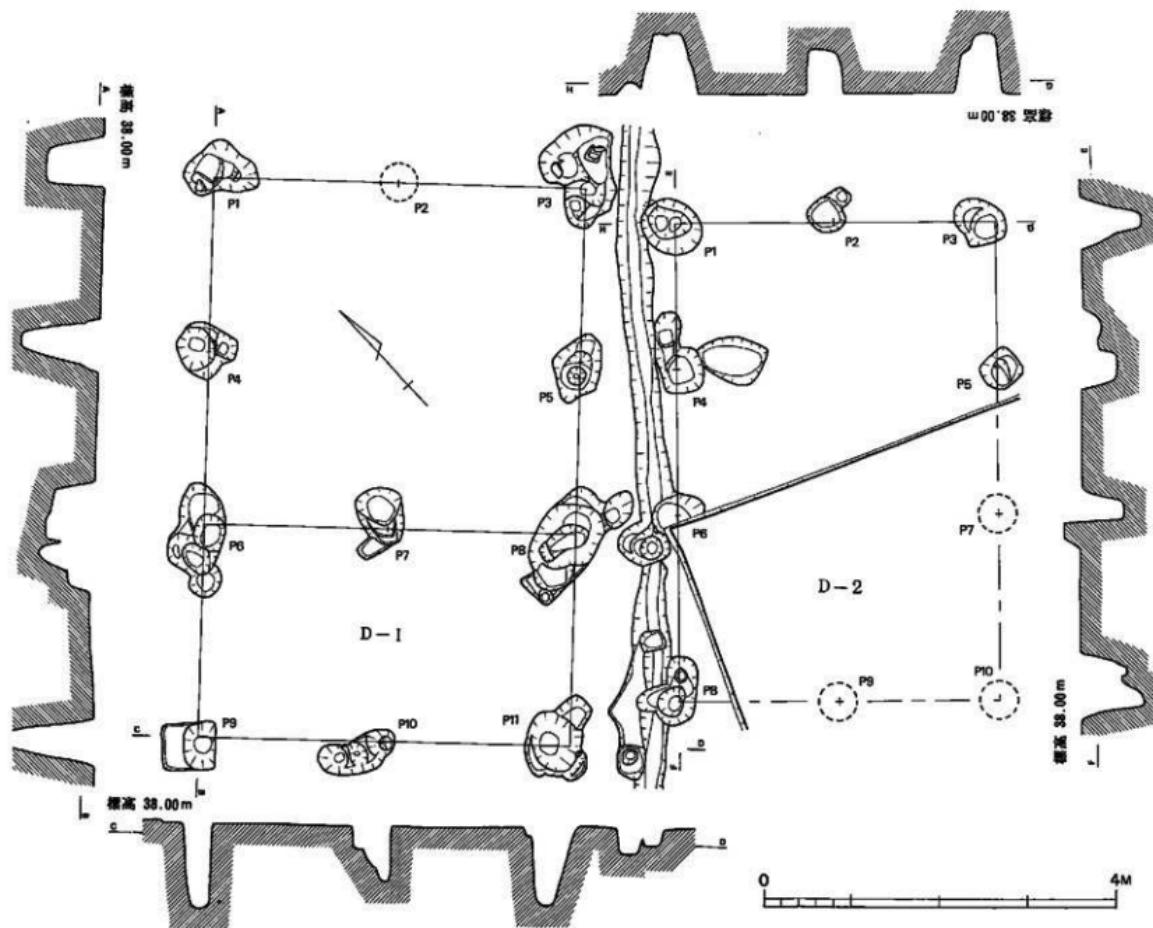
桁行柱間寸法			梁間柱間寸法		梁間寸法	
P1~P4 201	—	P3~P5 213	—	—	P1~P3 433	
P4~P6 218	—	P5~P8 187	—	—	P4~P5 436	
P6~P9 240	P7~P10 248	P8~P11 240	P6~P7 198	P7~P8 220	P6~P8 418	
桁行寸法			P9~P10 209	P10~P11 188	P9~P11 397	
P1~P9 659	—	P3~P11 640				

表8 方形区画溝Ⅱ掘立柱建物D-2計測表

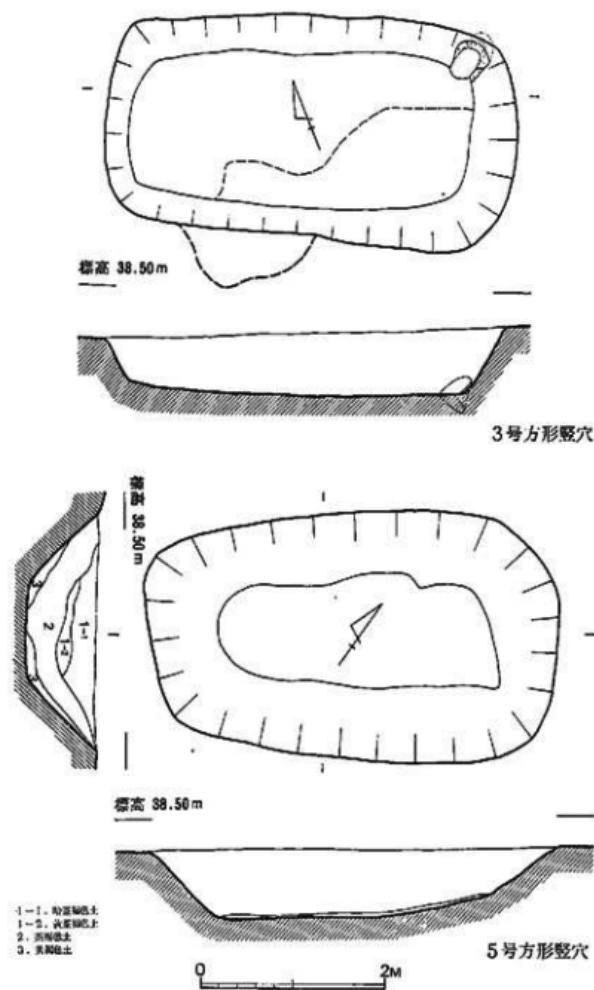
桁行柱間寸法			梁間柱間寸法		梁間寸法	
P1~P4 167	—	P3~P5 171	P1~P2 173	P2~P3 182	P1~P3 365	
P4~P6 169	—	—	—	—	P4~P5 363	
P6~P8 211	—	—	—	—	—	
桁行寸法			—	—	—	
547	—	—				

### d 方形竪穴造構

区画溝Ⅱに属するこの種の竪穴は9基(図版19~24、第13・14図、付図1)あり、6・9号を除く全ての平面形態が剛丸長方形を呈する。時期は1号・4号・6号で検出された土器類から区画溝Ⅱと、同時存在と考えられるものである。また、その分布は一見散在的で方向も一定しないが、各建物に少なからず付随する可能性を指摘できるものである。建物A群に対する1号、建物Bに対する4号、建物Cに対する6号などである。竪穴内の土層堆積はすべて自然堆積の状態を示し、上屋の施設等を設けた柱穴も発見されていない。また、その機能について明らかにしうる出土遺物もないが、少なからず各建物内の生活にかかわる食料の貯蔵穴の性格をもつものと考えている。

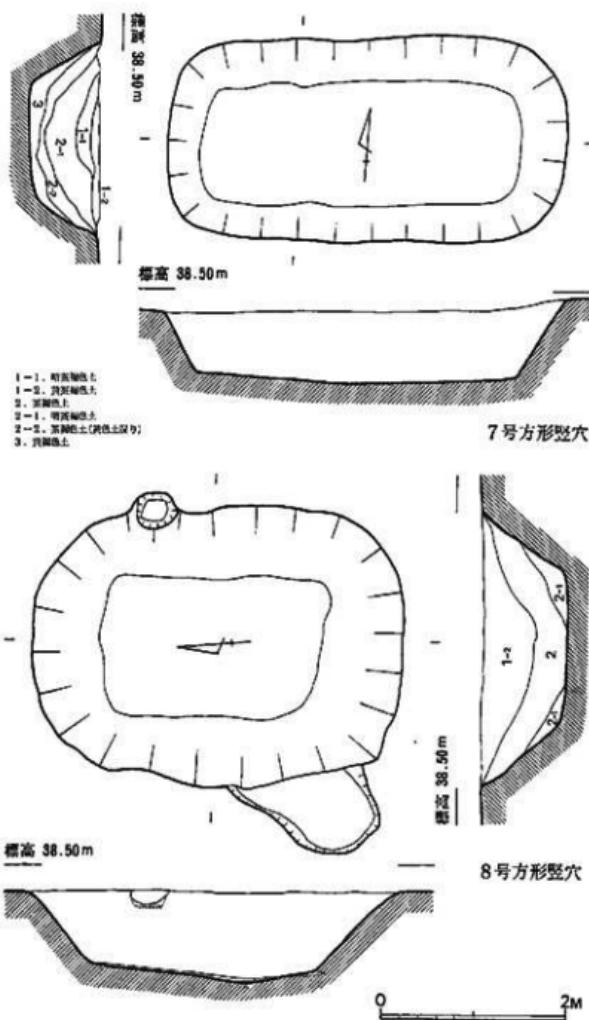


第12図 方形区画溝II掘立柱建物D-1・2実測図(1/60)



第13図 方形区画溝Ⅱ方形整穴実測図(1)(%)

井手ノ原遺跡



第14図 方形区画溝II方形竪穴実測図(2) (360)

1号方形堅穴（図版20—1） A—2掘立柱建物の北東に接して発見された隅丸長方形を呈する堅穴で、長辺4m、短辺2.17m、深さ0.60mを測る。断面逆台形状を呈し、土層は自然堆積を示す。出土遺物は土師器杯・土鍋・瓦質の火鉢破片数点である。

2号方形堅穴（図版20—2） J7・8、K7・8区にわたって検出された梢円形を呈する堅穴で長辺3.40m、短辺2.40m、深さ1.11mを測る。断面はU字状を呈する。

3号方形堅穴（図版21—1、第13図） 2号堅穴の南側に接して、発見された隅丸長方形を呈する堅穴で、長辺4.45m、短辺2.35m、深さ0.73mを測る。断面は逆台形状を呈し、堅穴内から土師器杯・瓦質土器片が若干検出された。

4号方形堅穴（図版21—2） 掘立柱建物Bの北側に接して発見された隅丸長方形を呈する堅穴で、長辺3.50m、短辺2.10m、深さ0.83mを測る。断面逆台形状を呈す。出土遺物は土師器杯1個体と若干の須恵器片のみである。

5号方形堅穴（図版22、第13図） H13・14、I13・14区にわたって発見された隅丸長方形を呈する堅穴で、長辺4.40m、短辺2.66m、深さ0.74mを測る。断面は逆台形状を呈し、堅穴内の土層は自然堆積を示す。

6号方形堅穴 掘立柱建物Cの北西側に接して検出された。隅丸方形を呈する堅穴で、一部、溝Cを切っている。長辺2.90m、短辺2.55m、深さ0.35mを測る。断面は低平なU字状をなし、出土遺物は土師器杯・土鍋・擂鉢の破片が検出された。

7号方形堅穴（図版23、第14図） L13・14、M13・14区にわたって検出された隅丸長方形の堅穴で、長辺4.30m、短辺2.17m、深さ0.77mを測る。断面は他の堅穴と同様逆台形状を呈し、土層は自然堆積を示す。

8号方形堅穴（図版24、第14図） J15・16、K15・16区にわたって発見された隅丸長方形を呈する堅穴で、長辺4m、短辺3m、深さ1mを測る。断面は逆台形状を呈し、堅穴内の土層は自然堆積を示す。

9号方形堅穴 8号堅穴の東側に接して発見された梢円形を呈する堅穴である。長辺3.40m、短辺1.80m、深さ0.27mを測り、断面は低平なU字状を呈する。堅穴内には数個の河原石が流れ込んだ状態で発見された。

#### e 不整形堅穴

すべて方形区画溝IIの内部から発見されたもので10基を数えるが、時期についてはH2～4、I2～5区で検出されたものが、明らかに、中世期のものである他は時期不明である。長辺17m、短辺5mを測る不整形の堅穴で、底面は緩やかにU字形を呈する（付図1）。

## (3) 方形区画溝Ⅲおよびその関連造構

## a 溝状造構

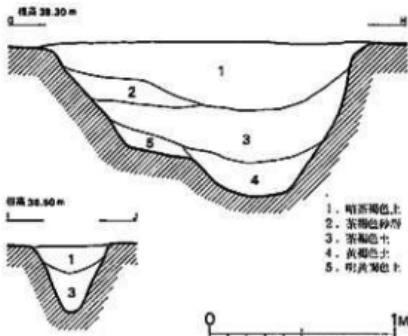
方形区画溝Ⅲ（図版3・5・6-1, 付図1・2） 発掘区のほぼ中央部で発見されたもので、方形区画溝Ⅰを一部切って作られた区画溝である。未調査地区を多く残すので全貌は明らかにしえないが、全掘された西側の南北区画溝は長さ35mを測り、最も小規模のものである。一部北西隅は後世の擾乱により破壊されていたが、南北隅では、溝は南東に屈曲し、区画すると同時に南西方向に排水溝が続いている。溝は南半部が0.40~1.10mと狭いのに対して、北半部は張り出し造構が大きいこともあって広い。また南北区画溝の北よりには東側に大きく張り出した舌状の張り出し造構があった。本造構に付随する明確な他の造構は発見されなかつたが、無数のピット群が検出されている。出土造物としては、その殆んどが張り出し造構内からで、若干の土師器・須恵器・青磁・石臼破片のみであった。

## b 張り出し造構

## 張り出し造構C（図版25, 第16図）

F・G22~25, H22~24にわたって検出された舌状に東側に張り出す窪穴状の造構である。底はゆるやかに西側に傾斜し、西側の壁は直立ぎみに立ち上がる。張り出し造構中最も規模の大きいもので最大幅8mを測る。

造構内には2ヶ所に底面より浮いて砾群が集石された状態で発見された。造構内の土層は自然堆積の状態である。出土造物としては、土師質の湯釜  
・土鍋・擂鉢・杯・須恵器・瓦質土器・青磁・瓦の破片が多数と石臼破片が発見された。

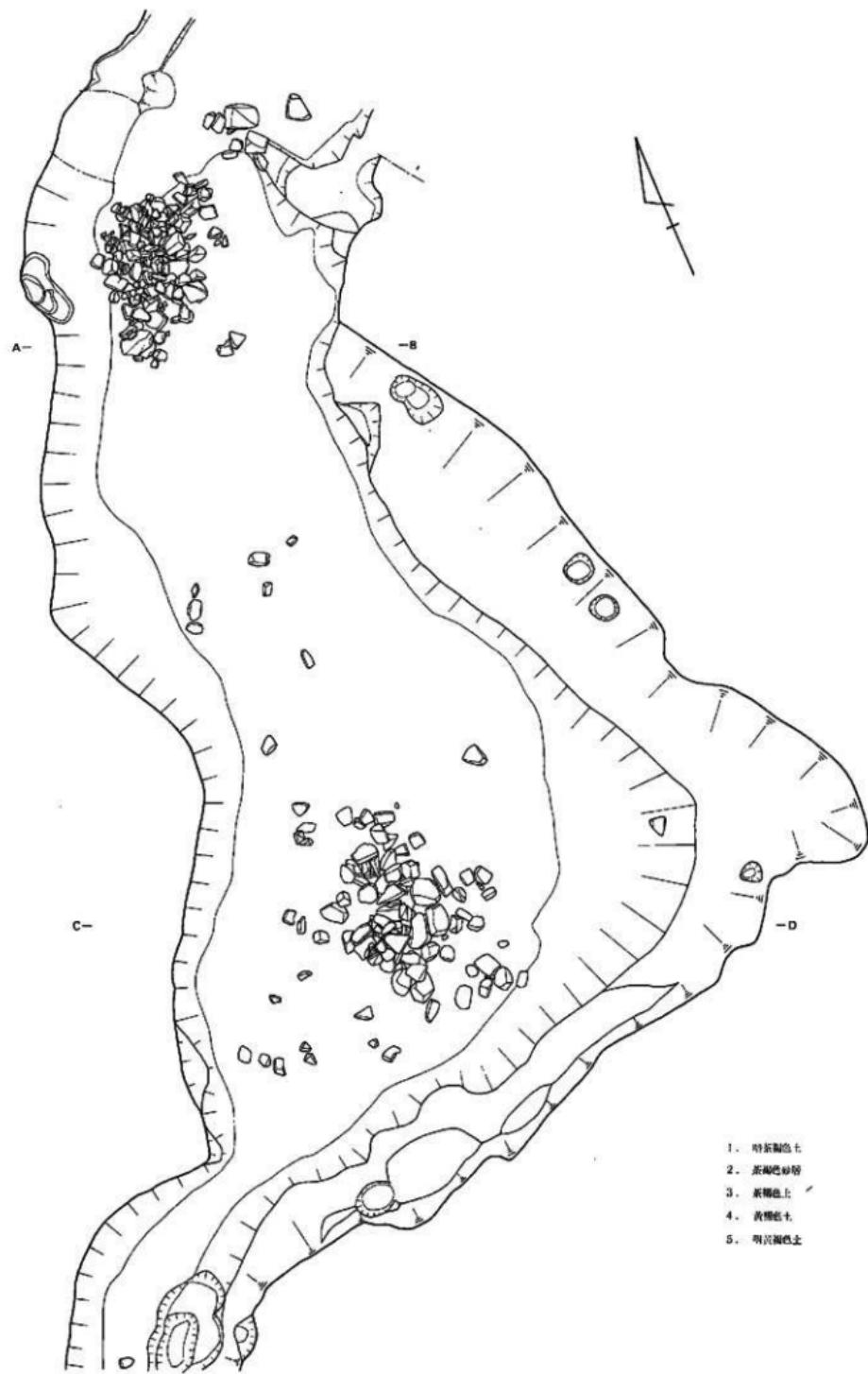


第15図 方形区画溝Ⅲ溝内土層図(3-6-1)

## (4) 方形区画溝IVおよびその関連造構

## a 溝状造構

方形区画溝IV（図版2・3・6-1, 付図1・2） 発掘区の南端で発見されたもので、西側の南北区画溝の長さは25mを測る。東西区画溝については未調査地区を多く残すので不明で



標高 38.50m  
C

第16図 方形区西端Ⅲ張り出し造構C実測図 (36a)

ある。ゆるやかに屈折した北側の東西区画溝は一部、方形区画溝Ⅰと複合しているが、新旧は明らかにしえなかった。溝は最も広い所で1.80m、狭い所で0.30m、深さ0.20m~0.70m、全体として狭く浅いV字状、逆台形状を呈するものである。また、溝内E37~38には、他の例と同様、礫が築石されて発見された。また、区画溝内には掘立柱建物3棟と方形竪穴造構1、さらに無数のピット群が発見された。溝内出土遺物としては土師質の土鍋・擂鉢・杯・皿・青磁・備前焼窯等の破片多数と砾石數点を発見した。

#### b 張り出し造構

張り出し造構D（図版27-1、第17図） D・E・F35~38区にわたって検出された舌状に東側に張り出した竪穴状の造構（一部西側にも張り出しているが）である。底はゆるやかな逆台形状を呈していて、最も広い所で6.20m、深さ0.60mを測る。出土遺物としては土師質の土鍋・杯・皿等の破片が検出された。

張り出し造構E（図版27-2） D38区で発見された舌状に西側につきでた竪穴状の造構である。この竪穴は他の例とは異なり、区画溝の外側（西側）に張り出したものである。底は他の例と同様、逆台形状を呈し、最も広い所で3.40m、深さ0.50mを測る。 （井上裕弘）

#### c 掘立柱建物

方形区画溝IVの内側で、張り出し造構D・Eの東側柱穴群の中に3棟分の建物遺構が確認された。いずれも1間×1間の簡素な建物で、方形区画溝IIに伴う7棟分に統けてE群とした。

建物E1~3（図版28-1~2、付図2、第18図、表9） この3棟分の建物遺構は、E-1・2、E-1・3が重複する。いずれも一辺が方形区画溝IVとほぼ並行しており、この区画溝に伴うものと思われる。平行方位はE-1がN57°W、E-2がN29°E、E-3がN52°Wで、建物の一辺の方位は最も差の大きいE-2・3の間で9°である。この3棟分の柱穴は重複しないので、時期の前後関係は不明である。E-1が最も溝に近く、P1・2が溝に接している。柱穴はおおむね40~70cmあるがE-1のP2・E-3のP2が約30cmと浅いものである。E-2のP4底に拳大の石1個が残っていた。

（鶴久昌郎）

#### d 方形竪穴造構

10号方形竪穴（付図1） G34区で検出された隅丸長方形を呈する竪穴で、長辺2.40m、短辺1.80m、深さ1.12mを測

表9 E群建物計測表

建物	裏間柱面寸法		平行柱面寸法	
	P1~P3	P2~P4	P1~P2	P3~P4
E-1	295	301	227	246
E-2	201	214	153	149
E-3	297	297	237	244

る。断面逆台形状を呈する。

(井上裕弘)

(5) その他の溝状遺構

溝 1 (図版29、付図1) 55地点の発掘区の南端部で検出された北東から南西方向に走る溝で、幅0.30~0.50m、深さ0.24mの浅く断面逆台形状を呈する。時期は不明。

溝 2 (図版29、付図1) 55地点発掘区のはば中央部で検出されたL字状を呈する溝で、幅0.25~0.40m、深さ0.20mを測る浅いU字形を呈する。一部、溝3と複合する。時期は不明。

溝 3 (図版29、付図1) 溝2と複合する南北に走る溝で、幅0.30~1.20m、深さ0.24mの浅いU字形を呈する。遺物は若干の土師器片と青磁片を含み、ほぼ中世のものと思われる。

溝 4 (図版29、付図1) 55地点発掘区の北端で検出された溝で後述する溝5と複合する溝であり、溝5に切られている。出土遺物としては若干の陶文土器片・土師器・須恵器・青磁片を検出した。ほぼ中世のものといえる。

溝 5 (図版29、付図1) 溝4の北側に複合して走る溝で、溝4を切って作られている。溝幅0.60~0.90m、深さ0.30mを測る断面逆台形状を呈する。出土遺物としては若干の土師器・青磁片のみであった。時期は中世のものと思われる。

溝 6 (図版30-1、付図1) 50地点発掘区の南端部で検出されたL字状を呈する溝で、幅1.70~3.60m、深さ1.48mを測る断面V字形を呈するしっかりした溝である。出土遺物としては、若干の土師器・青磁片と石臼片(第29図1)があり、中世のものである。

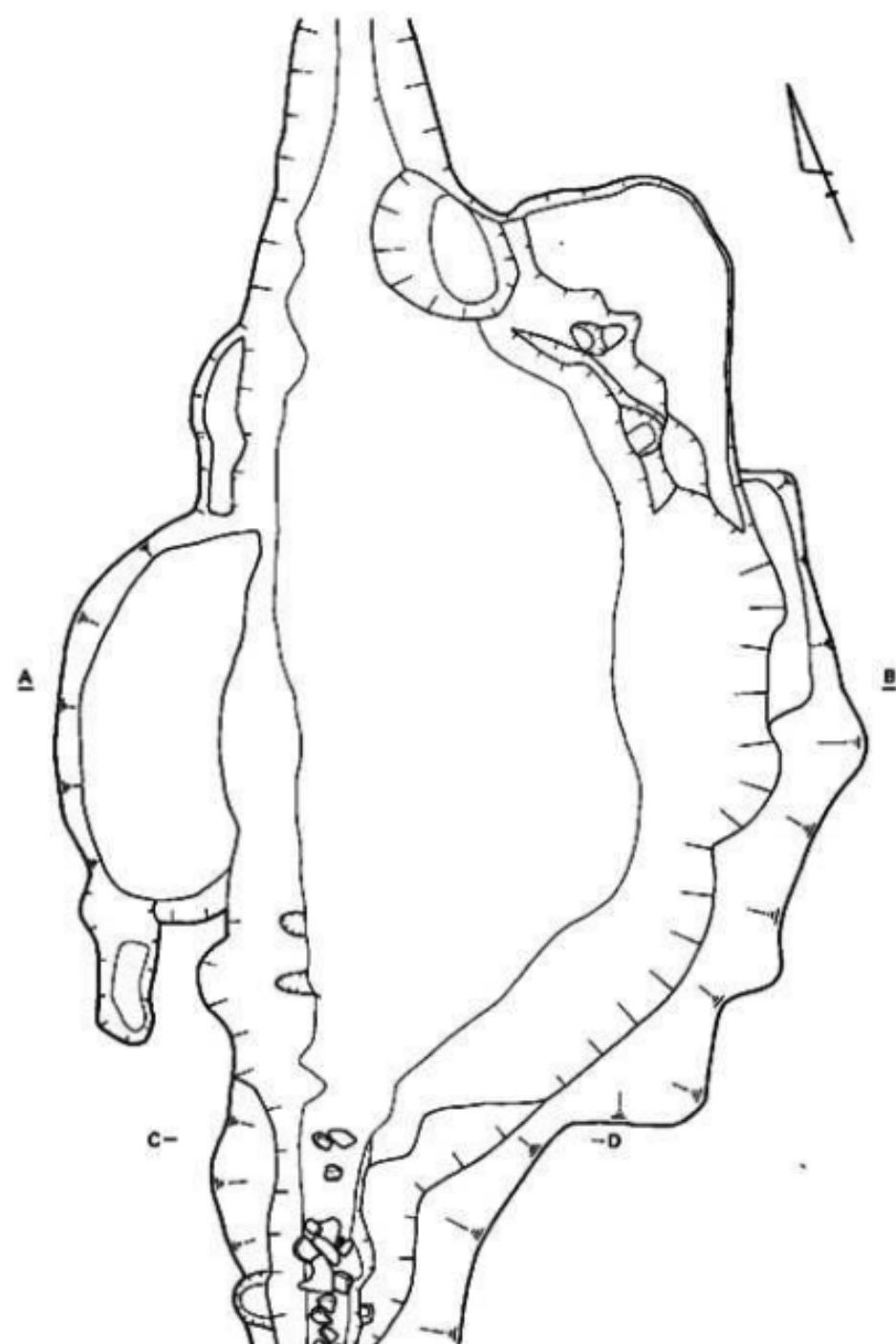
溝 7 (図版30、付図1) 50地点発掘区の中央部で検出された南北に走る溝で北端と南端部に瀬りの遺構をもっている。溝幅0.25~0.70m、深さ0.30~0.35mを測り全體に浅い断面U字形を呈する溝である。出土遺物としては若干の土師器・須恵器片・青磁片のみである。時期は、ほぼ中世のものと思われる。

溝 8 (付図1) 50地点発掘区の北端部で検出されたL字状を呈する溝で、幅0.15~0.60m、深さ0.25~0.72mを測る断面逆台形状を呈するしっかりした溝である。出土遺物は若干の土師器のみであるが、中世のものといえよう。

溝 9 (図版26-2、付図1) D29~39区にわたる(いわゆる39地点発掘区の北西部にある)溝で、幅0.50~0.70m、深さ0.25~0.45mを測る断面逆台形状を呈する。出土遺物としては若干の土師器片のみであるが、ほぼ中世のものといえる。

溝 10 (付図1) 溝9の西側で39地点発掘区の北西端部から一部検出された溝で、その規模は明らかでない。出土遺物はなく時期は不明である。

溝 11 (付図1) 方形区画溝Iの南北溝と複合し、区画溝IIIの南西隅から派生する溝とも



標高 38.50m

A

B



標高 38.50m

C

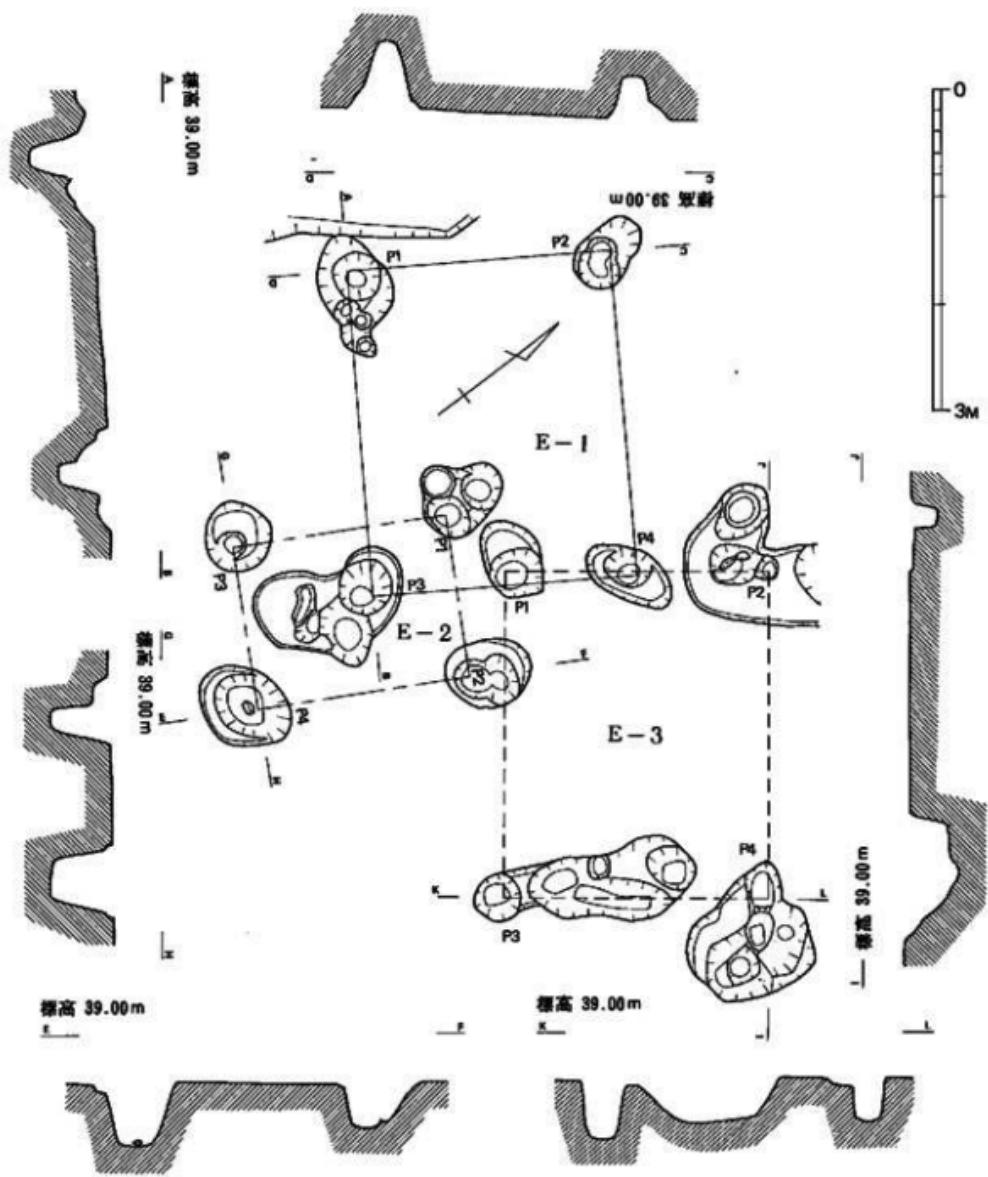
D



0

2M

第 17 図 方形区両溝 IV 張り出し造構 D 実測図 (%o)



第18図 方形区西溝IV柱立柱建物E1~3実測図 (1/60)

複合する溝である。区画溝Ⅰの南北溝よりは新しい溝であるが、区画溝Ⅱから派生する溝との切り合い関係は不明である。溝幅0.60~0.90m、深さ0.30~0.51mを測り、断面はU字状を呈する溝である。出土遺物としては若干の土師質の土鏡片と青磁片のみである。中世のものといえる。

溝 12(図版25-1、付図1) E21~28区にわたる溝で、幅0.20~2.00m、深さ0.20~0.60mの極めて浅い溝で一部断続している。この溝は、方形区画溝Ⅱの南西隅から派生し南走する溝と方向的には一致するが、溝の幅・深さ・断面の形態等がかなり異なり、また、後世の搅乱によりその関係は明らかでない。ここでは、一応、別な溝と理解する。出土遺物としては若干の土師器・青磁片のみである。中世のものであろう。

### 3. 遺 物

発見された遺物としては、圧倒的に土器が多く、他に若干の石器と骨が出土している。土器としては量的に土師器・土師質土器が最も多く、青磁がこれに次ぎ、須恵器・瓦質土器・陶器さらに埴文土器が少量発見された。器形は、深鉢・浅鉢・甕・皿・杯・托・湯釜・土鏡・擂鉢・火鉢・碗などである。石器としては縄文時代の石斧・石鎌・ブレイド・スクレイバーと、弥生時代の石戈、歴史時代の石臼・磁石等である。

(井上裕弘)

#### (1) 縄文時代の遺物

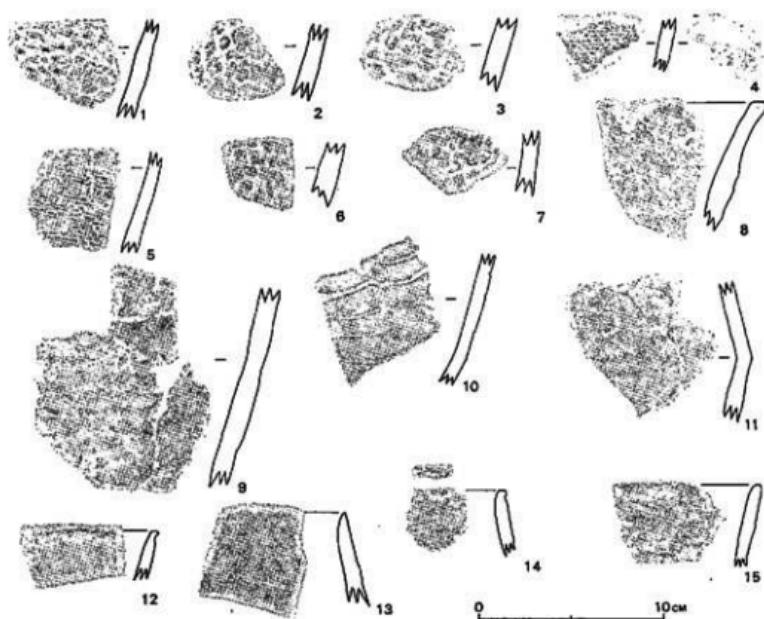
##### a 土 器

早期の土器(図版31-1、第19図1~9) 当該遺跡より出土した土器片のうちこの期に属するものは押型文土器(1~7)と無文土器(8~9)に大別される。押型文土器はすべて第39地点より出土しており、層序は第2層である。この7点は文様等の特徴から4種に分類できる。

(1) 脊部破片で文様は7×5mmの梢円押捺文で、ややくずれた配列ではあるが回転押捺されたものであろう。色調は灰黄褐色で胎土はやや粗であるが焼成は普通である。繊維などの混入はみられない。

(2・3) 脊部破片で文様は9×6mmの梢円押捺文で、ややくずれた配列ではあるが一部回転押捺されたと解せられる部分がある。(2)は梢円が明瞭であるのに対して(3)はかなりくずれた状態である。色調は灰褐色を呈し胎土はやや粗雑で、(2)は焼成良好であるに比して(3)は焼

井手ノ原遺跡



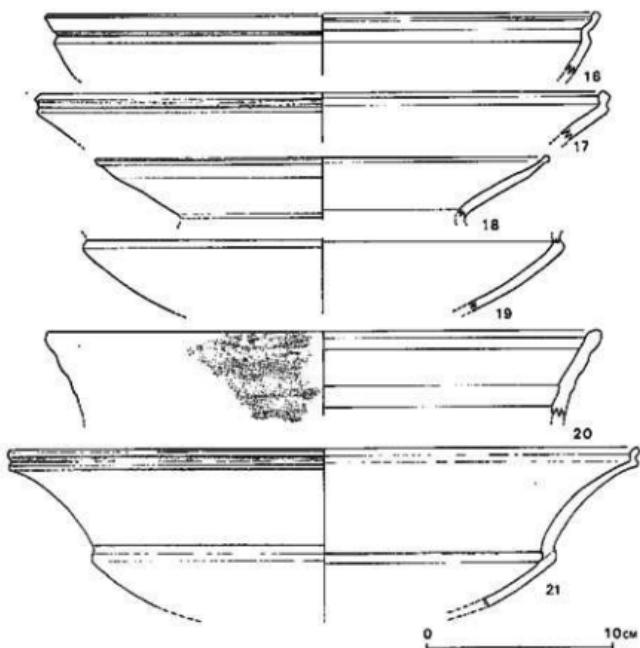
第19図 桶文時代土器実測図(1)(3%)

成不良である。いずれも繊維などの混入はみられない。

(4・5) (4)は口縁部付近、(5)は腹部破片であるが、同一個体とみなすことができる。文様は $4 \times 2\text{ mm}$ の精円文で粒の小さいわゆる穀粒文と称される部類に入る。回転押捺され整然とした配列を有するが、(4)の内面にみられる配列は他のものに比してやや疏になり施文原体の異なる可能性がある。色調は赤褐色を呈し胎土・焼成とともに良好である。繊維などの混入はみられない。

(6・7) 腹部破片で文様は $8 \times 5.5\text{ mm}$ の精円押捺文であるが、それぞれ整然と配列されおらず、これもくずれた状態である。色調は淡黄褐色で胎土は良好であるが焼成はやや不良である。繊維などの混入はみられない。

以上7点はほとんど同一箇所の出土によるもので、4種の存在から4個体の存在が考えられる。(4・5)は早水台式土器に相当するものと考えられ、その他は稻荷山式・田村式ぐらいの時期に属すると考える。



第20図 純文時代土器実測図(2)(%)

無文土器は次の2点である。(8) 37地点のF21・22区の第2層より出土した無文土器の口縁部破片で、口縁部がやや外反し厚さは8~12mmを測る。色調は暗赤褐色を呈し胎土・焼成とともに粗雑である。(9) 39地点の第2層より出土した口縁部付近の破片で厚さ10~12mmを測る。色調は外面暗赤褐色で内面は褐色を呈する。胎土・焼成とともに粗雑である。以上2点の無文土器片はその特徴より、前述の押型土器に伴うものと考えられる。

**晩期の土器** (図版31-1, 第19図10~15・第20図16~21) 当該遺跡より出土した土器で晩期に属するものは、いわゆる粗製土器と精製土器に大別され、また器形は浅鉢形と深鉢形に分類される。ここでは、若干のバリエーションをも含めて、精製深鉢形土器・粗製深鉢形土器(主に条痕文が施文される)・精製浅鉢形土器・無文土器に分類して報告する。出土点数は多くみられたが、小破片がほとんどで器形の復原・判別のできる資料は次の11点のみであった。

(10・11) 前者は37地点のD8区の第1層より出土した土器片で腹部破片かと思われる。色

### 井手ノ原遺跡

調は暗褐色及び黒色を呈する。胎土・焼成とともに良好で、文様は無文地を若干研磨した素地に沈線をもって波状に描かれたもので、3本の沈線を単位にしていると考えられる。精製の深鉢形土器で、その特徴から縄文時代晩期I～II式ぐらいに属すると考えるが、瀬戸内系の様相を有するものかともみられる。後者は37地点のF8区付近より出土した土器片で調部破片、深鉢形土器のくびれ部にあたる。胎土・焼成とともに良好で、暗黄褐色を呈し、精製。晩期I～II式に相当する。

(13・14・15・20) ⑬資料のみが37地点の第1層の出土によるもので、その他は39地点の第2層の出土により、全て粗製深鉢形土器破片であり、条痕文を施文している。⑭は口縁部破片で内側に傾斜した口縁を呈する。胎土・焼成とともに粗雑である。その特徴から晩期II～III式に相当する。⑮は口縁部破片で内側にやや傾斜した口唇に刺突文を施している。色調は淡褐色を呈する。⑯はやや外反する口縁部破片で胎土は粗雑であるが焼成はやや良好にして黄褐色を呈す。⑰はやや外反した口縁部破片で外面は条痕文、内面には条痕文を有しながらも浅くて太い2条の回線を有す。胎土・焼成とともに粗雑で赤褐色系の色調を呈す。以上それぞれの特徴から晩期II式(黒川式)に相当するものと考えられる。

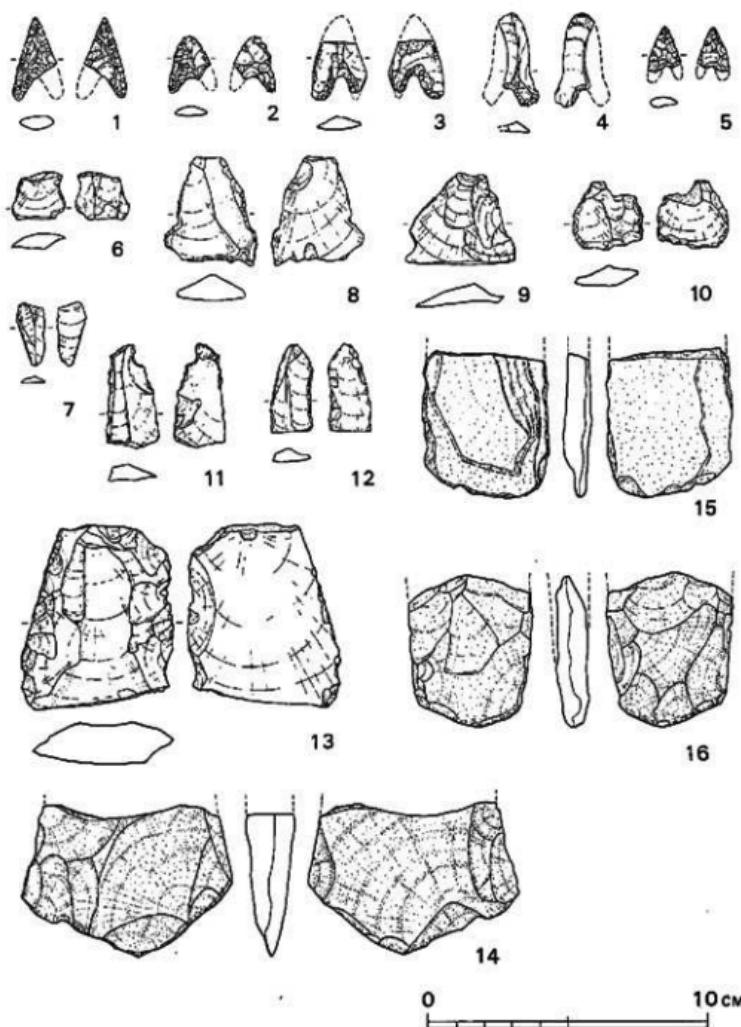
(16・17・18・19・21) ⑯資料は37地点の第2層の出土によるがその他は39地点の第2層の出土によるもので、全て黒色研磨の精製深鉢形土器の範疇に属するものである。それぞれ胎土・焼成とともにほぼ良好で黒褐色系の色調を呈す。口縁部は断面「く」の字形をなして折れ一条の回線を有す。口縁部内面にも凹状を形成する例もある。⑰資料はやや様相を異にし口縁部はかなり外反するが口縁部附近の回線はほとんど消滅した型がある。また底部は丸底かやや回む形態かと考えられる。⑱資料がその特徴から晩期II式(黒川式)に相当し、その他の資料は晩期II式と考えられるが晩期I式(大石式)の系譜に入るものである。

(12) 39地点の第2層より出土した無文深鉢形土器の口縁部破片で、胎土はやや粗雑であるが焼成良好にして暗黄褐色を呈す。口縁部直下に1条の浅い回線を有しており全体によくなでの器面調整がみられる。晩期の精製研磨深鉢形土器のバリエーションとみられる。

### b 石 器

当該遺跡から出土した石器は19点でその形態から石鋸5点(剥片鋸を含む)、ブレイド3点、スクレイパー5点、石斧6点に分類される。

石 鋸(図版31-2、第21図) (1・2)が37地点の第1層、(3)が37地点の第1層、(4)は37地点のI18区の溝、(5)が50地点の第1層より出土している。石鋸は全て黒曜石で完形品はない。(3・4)が剥片鋸で基部の抉り込み及び片側のみにretouchを加え押圧剥離によって調整されている。その他の資料は全面に経かくretouchを加えて押圧剥離によって製作されている。



第21図 縄文時代石器実測図(1) (1)

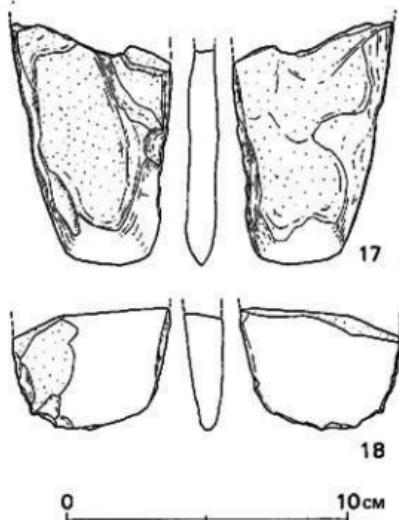
井手ノ原遺跡

ブレイド (図版31-2, 第21図) (6) が37地点のF・G22区付近, (7)は37地点のE17区の溝, (11)は50地点の第1層の出土によるもので, 石質は全て黒曜石であるが(11)資料は風化が頗著である。(7・11)資料は片側に調整を加えサイドブレイドとして使用した可能性を有している。

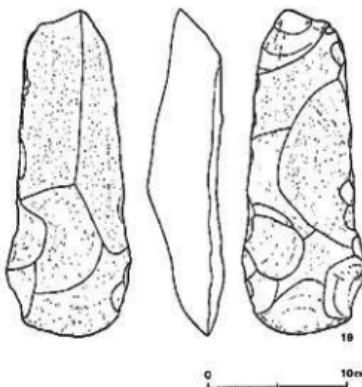
スクレイパー (図版31-2, 第21図) (8) は37地点のE21区付近の第2層, (9) は39地点のE7区の第1層, (10) は50地点の第1層, (12)は39地点の第1層, (13)は37地点のD17区の出土によるもので, (13)資料のサスカイトを除いて石質は黒曜石である。そのほとんどは両側に急傾斜のretouchがみられ, (13)資料のみが大型でかなりの厚みを有す。

打製石斧 (図版31-2, 第21・23図)  
石斧はその製作形態から打製石斧 (14・15・16・19) と磨製石斧 (17・18) に分類される。打製石斧は(14)が37地点の第1層, (15)が39地点のE18区付近の第2層, (16)が39地点の第2層, (19)が37地点のE18区の溝内Pitより出土している。短冊形の石斧で(15・16)資料は扁平な断面を有し, (14)資料はやや厚みを有す可能性があり, (19)資料は大型で中央に約5cmの厚みを有して重量は1,220gとかなり重いものである。

磨製石斧 (図版31-2, 第22図) (17) が39地点のI19区, (18)が37地点のE7区の出土による。やや薄い断面を有し(17)資料は局部磨製石斧状で中央部には



第22図 純文時代石器尖削図(2) (16)



第23図 純文時代石器実剥図(3) (16)

自然面がみられる。

以上が当該遺跡より出土した石器であるが、(13)資料のスクレイパーと石斧を除いて全て黒色を呈する黒曜石を原材としている。これらの石材の原産地については未同定であり後日分析をする予定である。ただ姫島産黒曜石は石川においてもみられなかった。

石器は剥片鐵が表に示す如く大型で重量は復原値で2~3kgを測るのに比してその他の石器は小型で1kg前後と重量が軽い。製作形態の差もあるが捕獲対象物等に相違がある可能性もある。ただ自然遺物を残存しない遺跡からの出土であり、資料も僅少である為に確証できないが、近傍遺跡の例や洞穴遺跡・貝塚等の自然遺物の出土する遺跡での結果による検討を望むものである。

スクレイパーは、黒曜石製でそれぞれ中央部において縦に接線を有すもので、サスカイト製の断面菱形になるものと併せて何らかの規制を考えることが可能だが、これも資料の増加を待ちたい。

打製石斧は中部九州に類似資料が多く、いわゆる扁平打製石斧の範疇に入れてもよいものであり、磨製石斧も扁平形を呈す。当該遺跡に縄文時代晩期I~II式期を中心とする土器の出土することから、この時期に属するものと考えたい。

表 10 縄文時代石器計測表

形態	種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	刃部の角度(左)・(右)	石質	備考
石	1	29.0	(16.5)	4.5	(1.0)	—・—	黒曜石	
	2	(19.0)	(15.0)	3.5	(0.7)	—・—	"	
	3	(20.0)	20.0	4.5	(2.5)	—・—	"	剥片鐵
兼	4	33.0	(15.0)	4.0	(1.2)	—・—	"	剥片鐵
	5	16.0	(12.0)	3.5	(0.5)	—・—	"	
ブレイド	6	(17.0)	19.0	5.0	—	70°・45°	"	
	7	28.0	10.5	2.5	—	—・30°	"	
	11	37.0	19.0	5.5	—	—・27°	"	
スクレイパー	8	39.0	33.0	9.0	—	90°・80°	"	
	9	33.0	39.0	6.0	—	55°・—	"	
	10	25.0	24.0	7.0	—	80°・80°	"	
	12	32.0	15.0	5.0	—	75°・85°	"	
	13	65.0	55.0	15.0	—	70°・—	サスカイト	
石斧	14	(55.0)	78.0	18.0	(90.0)	24°・19°	玄武岩	打製石斧
	15	(52.0)	45.0	10.0	(38.0)	17°・38°	粘板岩質?	打製石斧
	16	(55.0)	45.0	(11.0)	(45.5)	50°・67°	玄武岩	打製石斧
	17	(86.5)	(57.0)	(11.0)	(81.3)	32°・30°	輝石片岩	磨製石斧
	18	(42.5)	57.0	18.5	(38.6)	47°・39°	?	磨製石斧
	19	236.0	89.7	55.0	1220.0	47°・19°	玄武岩	打製石斧

( ) を付した数値は欠損資料の現存値である。尚、石斧の刃部の角度は断面の中軸線を中心とした。

### 井手ノ原遺跡

石錐・ブレイド等については、確実に土器に共伴した出土状態ではないが、その形態から、剝片縁を除き縄文時代早期に遡るものがある。

当該遺跡にみられる土器・石器は縄文時代早期と晚期に集中する。近傍遺跡としての深腹遺跡が同一台地上に立地し、縄文時代早期から晚期にわたる遺物の出土がみられることから、同一遺跡として把握・検討する必要がある。

(小池史哲)

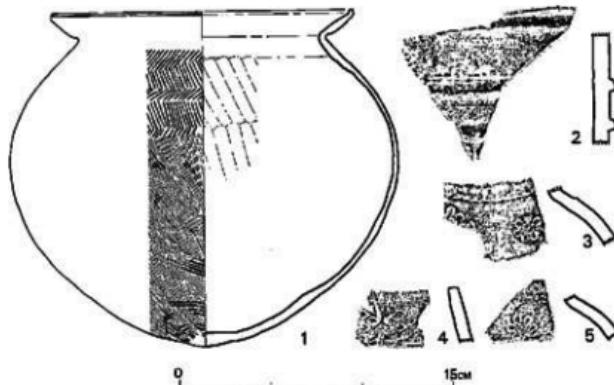
### (2) 弥生時代の遺物

石 戈（図版37-1、第29図1） 石戈の破片を砥石として転用した資料で、身の下部と頭の一部を残している。その大半は欠損し、さらに転用により変形されているため、全形を復原することが困難である。現存長11.9cm、復原最大身幅約5.4cmを測る。復原身厚約1.7cmで断面は菱形を呈し、銛を一部に残している。また、身の残存部に両側から穿孔した一つの縦縫孔がある。砥石として使用した面は身の表裏（ドットの部分）にある。

### (3) 古墳時代の遺物

土師器甕（図版32-1、第24図1） L16のピット中から出土。器高約18cmで、球形の胸部に「く」の字状のわずかに肥厚した口縁部がつく。口縁部の端は上向きのはね上り口縁となっている。肩部最大径は中位にあり、若干尖り気味の丸底へとつづく。器面には叩き目（肩上部は波状、肩下部は底部からラセン状）が見られ、胴下部は叩き目（上をさらに刷毛整形している）。内面は窓削りにより器壁を薄く仕上げている。

胎土にはかなりの細砂を含み、暗茶褐色



第24図 土師器・土師質土器・瓦質土器実測図 (1)

をしている。焼成は悪く、腹下部には炭がはなはだしく付着している。時期は古墳時代前期に属する。いわゆる庄内式土器といえるものである。

#### (4) 歴史時代の遺物

##### a 土師器・土師質土器

皿(図版32、第25図1~6) 1は表土層、2は第2層、3はG14、4はG13、5はH7のそれぞれピット中、6はE5の溝中出土のものである。

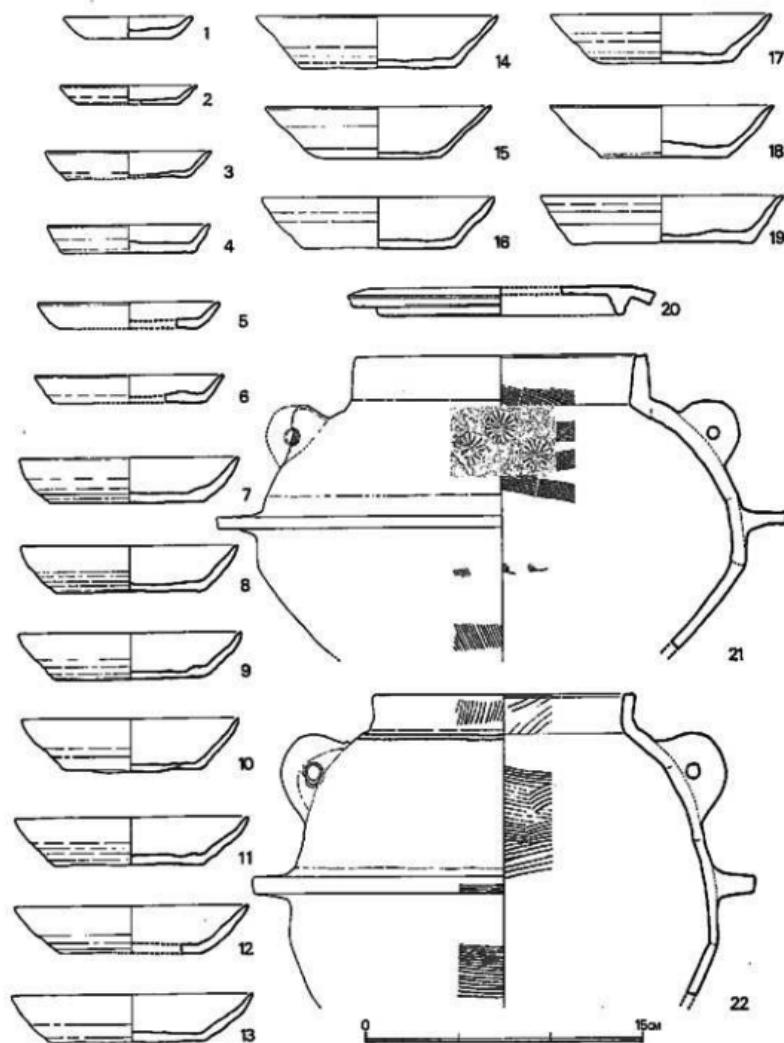
1は口径7cm、器高1.2cmで体部は内寄ぎみ、口縁端は丸くおさめている。器壁はやや厚い。2は復原口径7.4cm、器高1cmで体部中位にて若干肥厚し、口唇部は外反する。器壁は薄い。3は復原口径9cm、器高1.4cmで体部中位で上半がやや外反し、肥厚する特色を有している。4は口径8.8cm、器高1.5cmで体部下位はヨコナデによりやや凹み、中位にて若干肥厚し、わずかに外反する口唇部へと続く。器壁はやや厚い。5は復原口径9.8cm、器高1.4cmで体部は丸みをおび、外反する口縁部へと続く。口縁端は丸くおさめられ、器壁はやや厚い。6は復原口径10.2cm、器高1.5cmで体部下位はヨコナデ調整により若干凹み、直線的に外反する口縁部へと続く。器壁はやや厚く、内面外輪がヨコナデ仕上げにより隆起している。

以上の皿は形態・手法において大きな変化はみられないが、口径7cm内外(1・2)、9cm内外(3・4)、10cm内外(5・6)のものに分けることができる。体部の調整は全てヨコナデで、内底部については1が強いナデのため凹状を呈している。底部については全て糸切り離しの手法を用いている。6の胎土は他に比べて精製された丁寧なつくりの土器である。

杯(図版32、第25図7~19) 7・8・9・11はE6溝中一括、10・17はF7の第2層、13はJ18の溝中、12はE9、15はI16、16はE12の溝中、14はK13の第2層、18はH18のピット中、19はF10の4号方形窓穴内出土のものである。

7・8は口径11.8cm、器高2.4~2.5cmとほぼ同じ大きさで底部から口縁部への立ち上がりは内寄気味に外反している。9~11・16・17は口径12cm前後、器高2.7cm内外で、体部下位はヨコナデによりやや凹み、中位で若干ふくらみ、わずかに内寄気味に外反する口縁部へと続く特徴を有している。底部は全て糸切り離しの手法で、16・17を除く他の杯は内底而外輪がヨコナデにより隆起し、凸状に肥厚している。しかし、16・17の胎土は他に比べよく精製され、焼成は堅緻なものである。12・13は口径12.8cm前後、器高2.5cmで体部中位はヨコナデによりやや凹み、それによって下位が肥厚している。また、口縁部は若干内寄気味に外反している。14・15は体部下半がヨコナデによりやや凹み、ほぼ直線的に大きく外反する口縁部へと続く。口径は14が13cm、15が12.2cmと大小があるが、器高は2.8cmと同じである。底部は他の例と同様糸切り離しの手法である。18は口径12.1cm、器高2.7cmで底部から口縁部への立ち上がりは内

井手ノ原遺跡



第25図 土師器・土師質土器実測図 (%)

弯気味に外反し、口唇部がわずかに屈曲する特徴を持っている。胎土は砂粒が目立ち、悪い。19は口径13.1cmと最も大きく、器高2.5cmで底部から口縁部への立ち上がりは直線的である。また、底径と口径の差がもっとも小さい例で、底部は糸切り離しの手法である。

以上のように、全てが体部の調整がヨコナデで、底部は糸による切り離しの手法を用い、また、口径・器高においてもさほどの違いはみられない。しかし、形態的・製作的なクセをみると大きく6分類(I: 7・8, II: 9~11・16・17, III: 12・13, IV: 14・15, V: 18, VI: 19)できる特徴を有している。

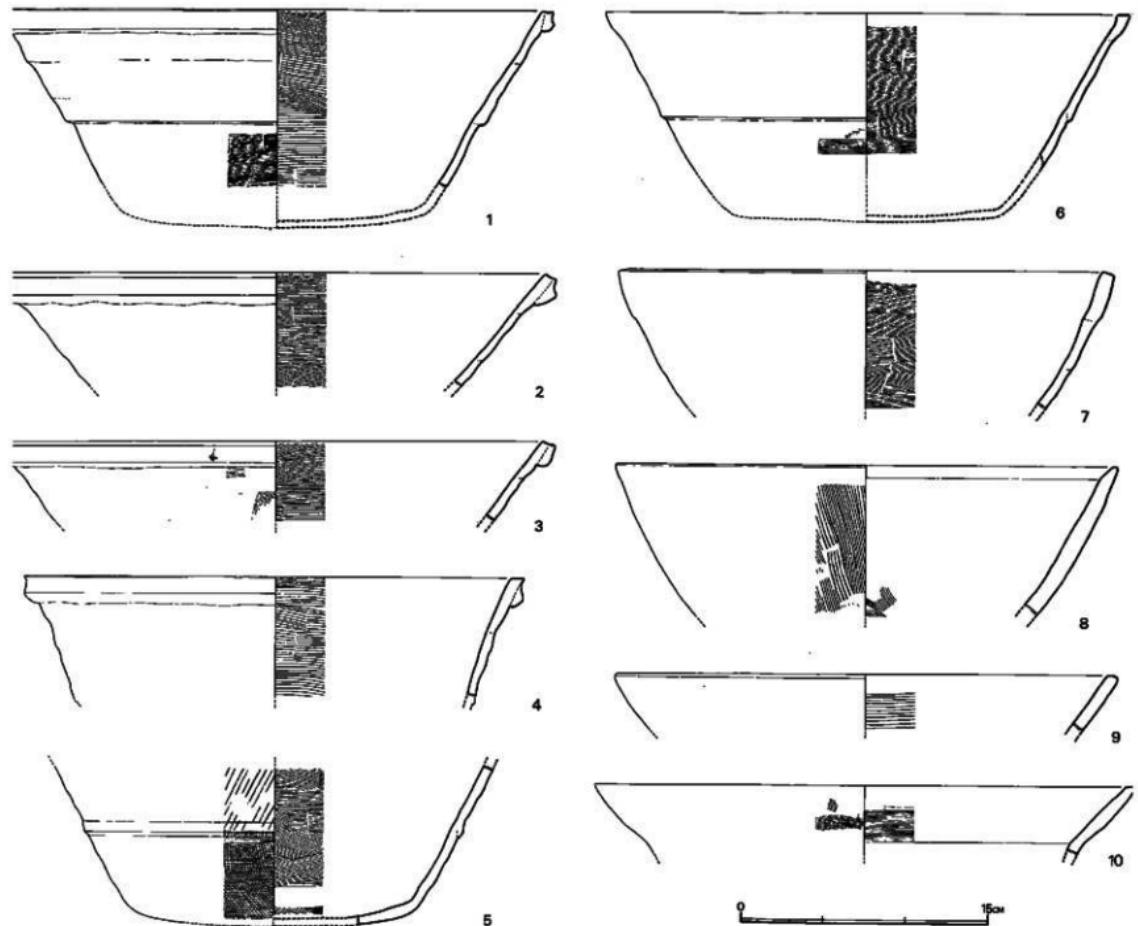
**托**(図版32, 第25図20) 上面が平らで、口縁部前に垂れさがった円盤に低い高台をつけた器形を呈するものである。復原口径は16.6cmで、器高1.5cmを測る。上面および体部はヨコナデ手法で、内面中央部は不定方向の刷毛整形を行っている。胎土・焼成とも良好で、黄褐色を呈している。この資料はE3溝中、G7ピット中、G20の第2層出土のものが接合した資料である。

**湯釜**(図版33, 第24図3~5・第25図21~22) 2・4とも7弁の梅花様押印文をもつ茶釜形土器の胴上半部の破片資料である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。3は菱形押印文をもつ茶釜形土器の口縁部の破片である。色調は茶褐色を呈し、胎土・焼成とも良好く堅敏である。21は底部を欠損している資料である。口径15.6cm、胴部最大径26.4cm(鈎は除く)、現高16cmでソロバン玉状の脚部に直立した口縁部と幅2.4cmの鈎が胴中位にめぐり、肩に一対の有孔耳がついている。また、肩中央部に一対の三つの菊花文が押印されている。花文は16弁、径1.8cmである。色調は内外とも暗茶褐色を呈し、焼成は極めて堅敏で、体部上面の一部に残しの痕跡を残しているが、全体として土師質である。胴下半部の一部に縁の付着がみられる。外面上部はヨコナデの上から丁寧に箇磨きが施され、下部は別毛の上から粗い箇削りを行っている。内面上半は刷毛整形を、下半は刷毛の上からヨコナデしている。口唇部の外面と内面の一辺はヨコナデである。また、一対の有孔耳の左側の耳部に、つり輪として使用したと思われる鉄小片が付着している。E2の溝中出土のものである。22は底部を欠損した破片資料である。復原口径14cm、復原胴部最大径23cm、現高17.4cmで21の例より若干器高が高く、胴部も球形を呈している。口縁部は直立し、胴中位に幅2cmの鈎がめぐる。また、肩に一対の有孔耳がついている。色調は内外とも暗茶褐色を呈し、胎土・焼成とも極めて良好である。胴下半部には縁の付着が頗著である。口縁部内外と胴上半部は粗い刷毛整形の上からヨコナデ仕上げを行っているが、内面上半は粗い刷毛整形のままである。内面中部はヨコナデ、下部は箇磨きを行っている。外面下半の上部と鈎は別毛の上からヨコナデを行い、下部は粗い刷毛整形を残している。この資料はF1溝中とG7ピット中のものが接合した資料である。

**土鍋**(図版33・34、第26図1~10) 全形を知り得る資料ではなく、全て復原実測を行ったものである。1は口径35.6cm、復原器高13.2cmで、口縁部に帯状の貼り付け凸帯を有し体部中

### 井手ノ原遺跡

位には段を形成している。体部上半は箒削り、下半は細かい刷毛により整形している。一部、口縁部と口唇部さらに休部中位の段状部はヨコナデ仕上げである。休部内面は粗い刷毛により下から上に横位・斜位の整形を行っている。外面全体と内面上半の一部にわたって煤の付着がみられ、特に体部外面下位に顕著である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。この土器はH18溝中と掘立柱建物D-1内ピット中出土のものが複合した資料である。2は器体上半部を残すのみである。復原口径34cmで、口縁部には帯状の貼り付け凸帯をもち、1の例と同じ器形を呈するものと思われる。体部は箒削り、口縁部はヨコナデを行い、内面は、下から上に横位の粗い刷毛整形している。休部は暗茶褐色を呈し、外面に煤の付着が目立つ。胎土・焼成とも良好である。3も器体上半部を残すのみである。口径・器形とも1・2と同様である。体部整形は刷毛整形のあと、箒削りを行い、口縁部はヨコナデ仕上げをしている。内面整形は2と同じである。H18ピット中山土。4は前例とはほぼ同じ器形を呈するものであるが、復原口径30.2cmと若干小さく、体部が立ち気味の器形を示している。体部が茶褐色を呈する他は内外の整形・胎土・焼成ともほぼ前例と同様である。E21溝内出土。5は器体下半部の破片資料で、前例の帶状貼付け凸帯の口縁部がつく器形のものと思われる。だが、以上の例が口縁部にヨコナデ彫整による若干の凹みをもつて対して平滑に仕上げているのが異なる。胴下半部に段を有し、上半部は粗い斜位の刷毛整形のあとを軽くヨコナデ仕上げしている。下半部は横位・縦位・斜位の粗い刷毛整形を行い内面は下から上に横位・斜位の細かい刷毛整形し、一部底部付近は刷毛の上からヨコナデを行っている。体部外面は暗茶褐色、内面は茶褐色を呈し、外面には著しい煤の付着がみられる。胎土・焼成とも良好である。G6ピット中出土。6は復原口径31.6cm、復原器高12.6cmで胴下部を欠損している。口縁部はつまみ上げ気味に肥厚し、口唇部は平滑である。胴部中位に段を形成し、底部は欠損のため明らかでないが、5の例とはほぼ同じ平底の底部がつくものと思われる。体部上半は箒削り、下半は横位の細かい刷毛整形で、口縁部内外はつまみ上げ気味にヨコナデしている。内面は横位・斜位の細かい刷毛整形で仕上げている。休部は茶褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。外面には煤の付着がみられる。H18溝内出土。7は復原口径30cmを測り、胴下半部を欠損している。口縁部は6と同じつまみ上げ気味に肥厚させ口唇部を平滑にしているが、胴中位には段を形成しない形態のようである。休部外面は箒削り、口縁部内外をヨコナデ、内面は下から上に細かい刷毛整形で仕上げている。休部は茶褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。外面全体に煤の付着が著しい。8は復原口径30.4cmを測り、胴下部を欠損している。口縁部は他と異なり内面に稜をなし、尖り気味に外反する。胴部は粗い斜位の刷毛、内面は刷毛の上からヨコナデ仕上げを行っている。休部は茶褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。外面には著しい煤の付着がみられる。9は口縁部付近を残すだけで、復原口径30.4cmを測る。外面は箒削り、内面は横位の刷毛整形、口唇部はヨコナデで丸く仕上げている。10も口縁部付近を残すのみで、復原口径32.8cmを



第26図 土師質土器実測図 (36)

刻る。口縁部はわずかに内弯ぎみで、口唇部を平滑に仕上げている。また、内面に稜を形成し屈曲して副部に移る。内外とも斜位の細かい刷毛整形したのち、口唇部付近はヨコナデ調整、口縁部外面下部は笠削りしている。色調は茶褐色を呈し、胎土・焼成とも普通である。

以上のように10例の土器は口縁部の特色によって5分類できる。1に代表される口唇部に帯状の貼り付け凸帯をもつ複合口縁のもの、6の口縁部がつまみ上げ気味に肥厚し、口唇部を平滑に仕上げた單口縁のもの、8のように口縁部内面に稜を有し、尖り気味に外反するもの、9の口唇部を丸くおさめたもの、10の口唇部を平滑にし、口縁下端内面に稜をもち、「く」の字形に屈曲するものに分けることができる。また、整形技法上においても、体部上半外面を刷毛整形したのち、ヨコナデで仕上げ、内面を粗い刷毛整形しているもの(1~4)、体部外面を笠削りし、内面は細かい刷毛整形しているもの(6·7)、体部外面は粗い刷毛整形、内面を細かい刷毛の上からヨコナデ仕上げしたもの(8)、外面は笠削り、内面は粗い刷毛整形したもの(9)、外面は細かい刷毛の上から笠削り、内面は細かい刷毛整形したもの(10)、にそれぞれ差異が指摘できる。

**標 鉢**(図版35、第27図1~6) 全形を知り得る資料はなく、全て復原実測を行ったものである。1は底部のみを欠損したもので、口径34.8cm、復原器高13.5cmを測る。E 4溝出土のものである。口唇部は若干凹み、内外面につまみ上げた状態に張り出し、両口がついている。内面には10条の横目条溝がみられる。外面は笠削りしたのちヨコナデで仕上げ、口縁部内面はヨコナデしている。内面上半は粗い刷毛、下半は細かい刷毛整形を行っている。内面器底は剥落がはげしく、外面全体に縁の付着がみられる。色調は黄茶褐色を呈する。胎土には細砂をかなり含み悪く、焼成は普通。2は底部を欠損した破片資料で、復原口径33.6cm、復原器高12.8cmを測る。1とほぼ同じ器形を呈し、内面の横目条溝は6条である。内外とも剥落がはげしく整形は不明。色調は黄褐色を呈し、胎土は細砂をかなり含み悪く、焼成も悪い。3も底部を欠損した破片資料で、復原口径33.6cm、復原器高11cmを測る。器形は1·2とほぼ同じで内面の横目条溝は5条である。口縁部内面を刷毛整形、体部外面を笠削りし、そのうち内外をヨコナデして仕上げている。色調は黄茶褐色を呈し、胎土に細砂を含むが焼成は良好で極めて堅敏である。この資料はE 12表土層とG 9第3層出土土器の接合資料である。4も底部を欠損した破片資料で、復原口径30.6cmと若干小さい。基本的には前者と同じ器形を呈するものであるが、前者の口唇部が若干凹み、内外につまみ上げた状態とは異なり、口唇部を平滑にしている。体部内面は細かい刷毛で整形し、外面は笠削りのあと軽くヨコナデしている。口縁部内外はヨコナデ仕上げである。外面に縁の付着がみられる。色調は黄茶褐色を呈し、胎土に若干の細砂を含み、焼成は良好である。5も底部を欠損した破片資料で、復原口径28cm、復原器高11.4cmと最も小さい資料である。器形・口唇部の特徴とも基本的に1·2·3の例と同じであるが、口唇部の凹みは他の例よりも顕著である。内面の条溝は6条である。体部外面は笠削り

### 井手ノ原遺跡

のち粗い刷毛整形し、さらにナデで仕上げている。口唇部と口縁部内面はヨコナデしてあるが、体部内面は剥落がはげしく整形は不明である。色調は黄茶褐色を呈し、胎土は細砂を多量に含み、焼成とも極めて悪い。E12表土出土。6は胴下半部の資料で、復原底径15cmを測る。

### b 瓦質土器

火鉢（図版33、第24図2） 脇部の破片資料で、復原径37.6cmを測る。円筒形を呈する瓦質の火鉢で、胴部に三条の貼り付け凸帯を持っている。色調は黒灰色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

### c 陶器

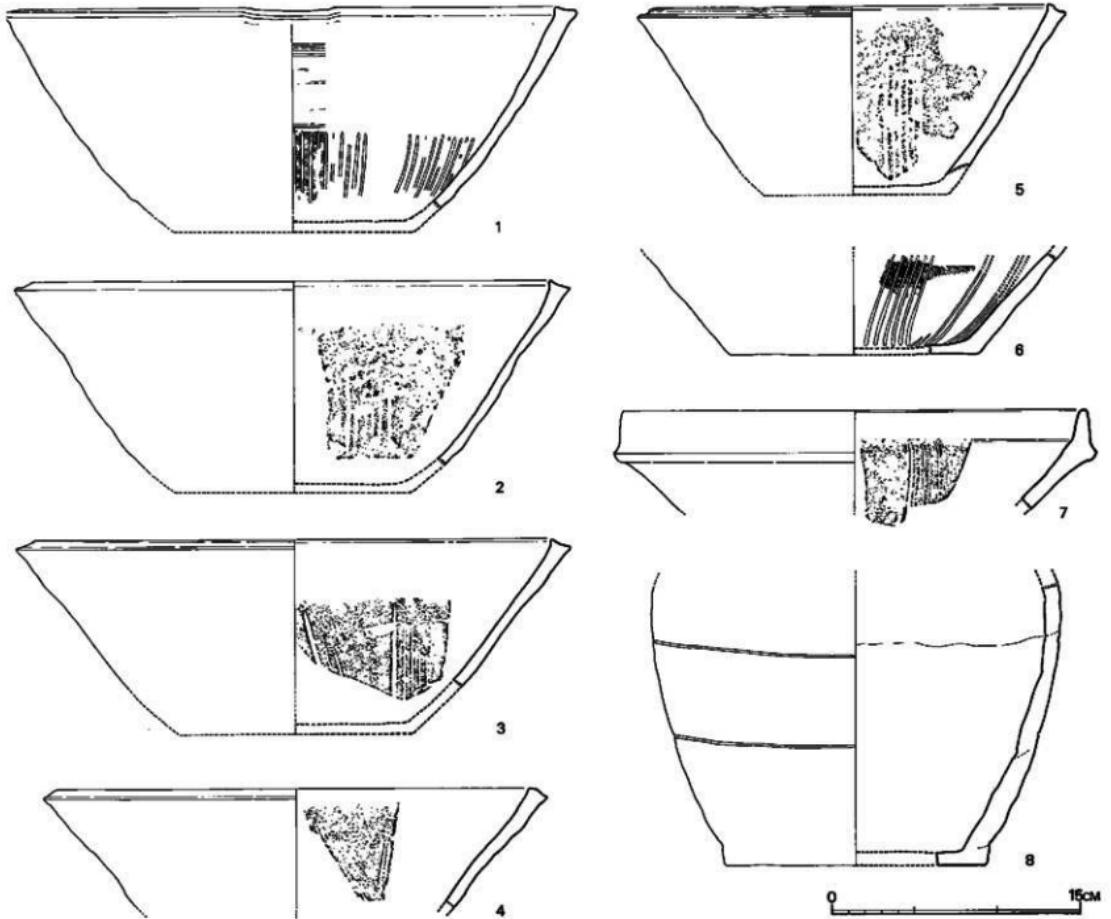
確前焼櫛鉢（図版35—6、第27図7） 脇上半部の破片資料で、復原口径28cmを測る。口縁部は上下に拡張され、麻立ぎみの複合口縁で体部内面の横目条溝は9条である。色調は内面が暗灰色、外側が赤褐色を呈し、胎土には多量の細砂を含むが焼成は極めて堅硬である。E16溝内出土。

備前焼窯（図版35—7、第27図8） 脇下半部の破片資料で、復原底径15.8cm、現器高16.9cmを測る平底の甕である。胴部には2木の箆描き沈線が走り、体部内面には釉積みの痕跡を残している。色調は赤褐色を呈し、胎土には細砂や金属性の物質を含みあまり良くない。E5張り出し造構B内出土。

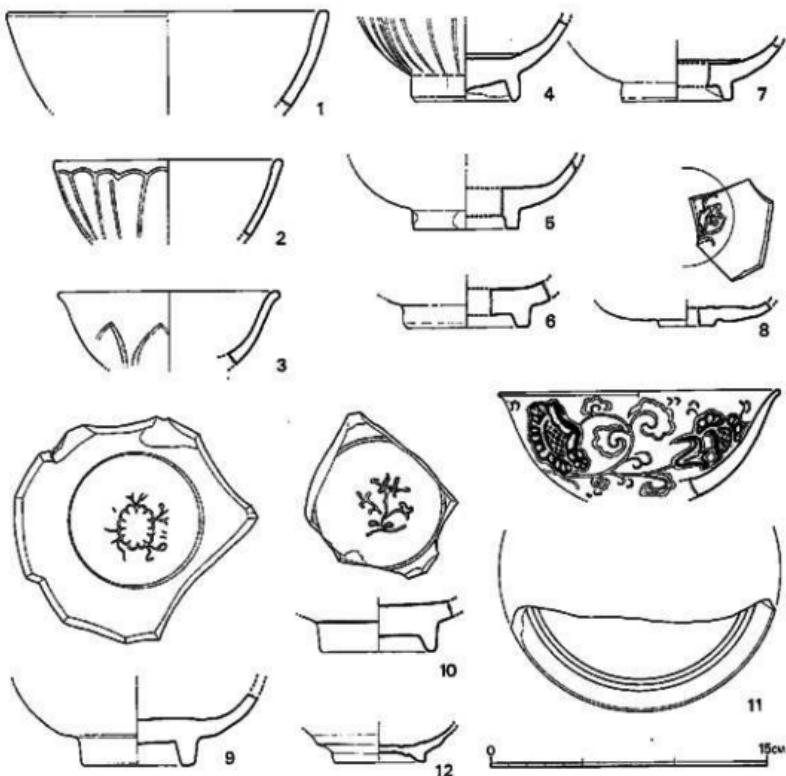
### d 磁器

全て破片資料で、復原実測を行ったものである。1～11は明代の青磁で、12は高麗青磁である。

碗（図版36、第28図1～12） 1は脇上半分の破片資料で復原口径17.4cmを測る。緑灰色の釉薬のかかる碗で高台のつくものと思われる。I15の第2層出土。2は脇上半部の破片資料で、復原口径12.4cmを測る碗で、高台のつくものと思われる。外面に箆描きによるくずれた蓮弁文が描かれ、器面は緑灰色の釉薬がかかっている。また、全面に貫入がみられ、胎土はよくない。これはK18ピットとE19溝内出土土器の接合資料である。3も脇上半部の破片資料で、復原口径12.4cmを測る碗で高台のつくものと思われる。器面には箆描きによる蓮弁文があり、緑灰色の釉がかかり、胎土は気泡が各所にみられよくない。E5張り出し造構B内出土。4は脇下半部の破片資料で、底径6cmの高台付碗である。外面には箆描き蓮弁文が描かれ、緑灰色の釉がかかり、高台内面の一部にたれ下がっている。E16溝内出土。5は高台部の破片資料で、底径6.8cmを測る。高台内面を除く器面には暗緑灰色の釉がかかり、全体に貫入がみられる。6は脇下半部の破片資料で、底径6cmを測る高台付碗である。器面は緑灰色の釉がかかり、



第27圖 土師質土器・陶器実測図 (3)



第28図 磁器実測図(12)

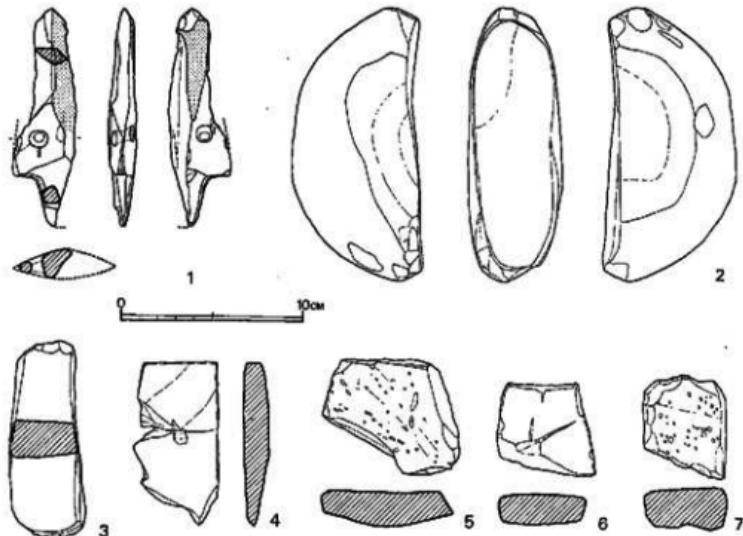
り、台部内面一部に軸たれがみられる。身込みには一条の笠描き沈線が描かれている。胎土は極めて悪く器面には多くの貫入がみられる。E 5張り出し造焼B内出土。7も胴下半部の破片資料で、底径 5.6 cmを測る高台付碗である。胴部全体に緑灰色の釉がかかり、一部台部に軸たれがみられる。胎土は極めて悪く器面には多くの貫入がある。8も胴下半部の破片資料で、底径 3 cmを測る割り出しの高台をもつ碗である。器面には緑黄色の釉がかかり、裏底面にはみられない。内底面には笠描きの草花文が描かれている。9は高台部の破片資料で、底径 6.4 cmを測る。身込みには一条の笠描き圓線があり、中央部に草花文が描かれている。器面には緑灰色の釉がかかり、台部内面にはみられない。10は胴下半部の破片資料で、底径 6.2 cmを測る高台

井手ノ原遺跡

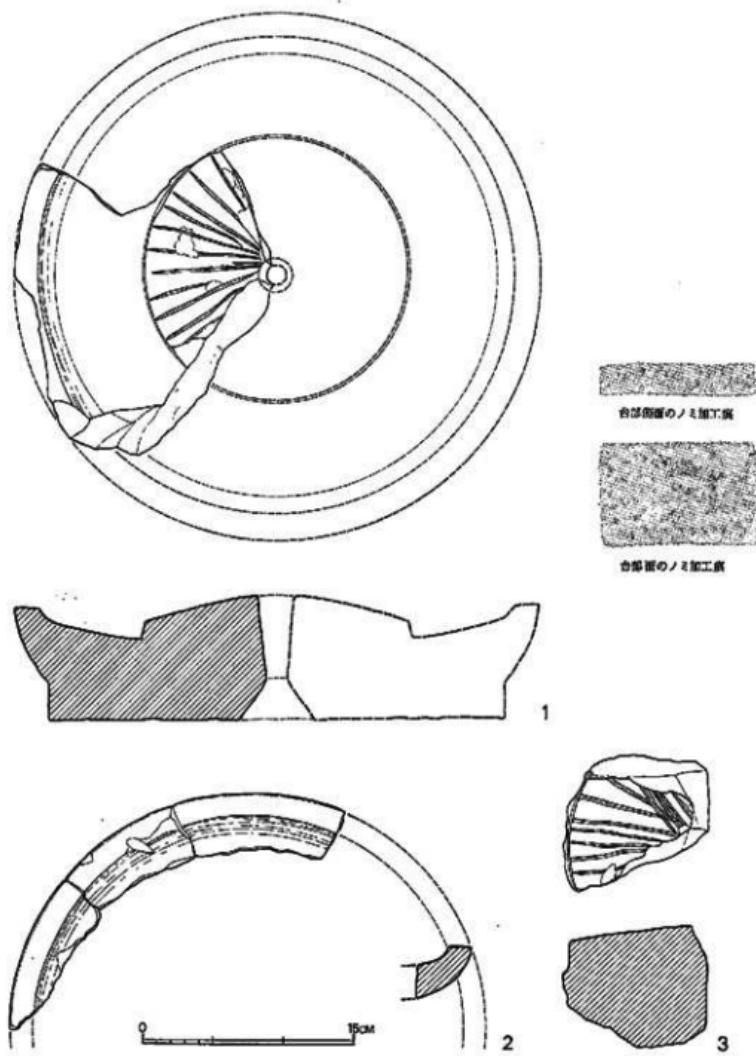
付椀である。身込みには範描きの圓線を施し、中央部に草花文を描いている。高台裏底面を除く器面全体に緑灰色の釉がかかり、各所に貫入がみられる。E 12溝内出土。11は高台を欠く腕の破片資料で、復原口徑15.4cmを測る。器面には沈線と浮き出しの華麗な蓮華唐草文が、内面口縁部付近には三重の浮き出し圓線が描かれている。器面全体に青灰色の釉がかかり、胎土は灰白色を呈する。E 39表土層出土。12は肩下半部の破片資料で、底径5cmを測る高台付椀である。器面は回転箇削りで整形しているが非常に凹凸が著しい。また、青灰色の釉がかかっているが胎土まで貫入があり作りはよくない。高麗青磁である。

e 石 器

砥 石（図版37-2～6，第29図2～7） 2は自然の円錐を磨石として使用したものと砥石として転用したものである。磨石として使用した面は両面にあり周囲に自然面を残している。それが割れ等により半裁された側面を砥石として再利用しているものである。砥石面はかなり使用された形状を呈し、平滑面は赤褐色の光沢を有している。G 10ピット内出土。3・7は砂岩製のものである。3は全面を、7は片面と右側面を砥石面として使用したものである。



第29図 弥生・歴史時代石器実測図(%)



第30図 歴史時代石器実測図 (34)

### 井手ノ原遺跡

3はE8張り出し造構B内、7はE39第3層出土。4～6は輝緑凝灰岩製のものである。4は片面を、5は全面を、6は両面を砥石面として使用したものである。4はE22表土、5はE7溝内、6はD39溝内出土。

石臼(図版37-7～9、第30図) 1は復原直徑37cm、磨歯面直徑18.5cm、受面幅7.5cm、底部直徑32cm、磨歯面高8.7cm、周提高8.2cmを測る石臼である。磨歯面にはノミによる放射状の凹線が作出され、中心部には直徑2.5cmの穴が穿孔されている。磨歯面は内から外に傾斜し、磨歯面側端と受面の比高差は1.1cmである。台部側面と底面はノミによる加工痕を残したまま仕上げている。石質は凝灰岩である。2は復原直徑39.3cmの周提部付近の破片資料である。1と比較し、直徑はやや小さく受面は若干深い。内面に煤の付着がみられる。石質は凝灰岩で、E16溝内とE17溝内出土のものの接合資料である。3は磨歯面の破片資料で、復原磨歯面直徑18cm、磨歯面高8.3cmを測る。磨歯面にはノミによる放射状(一部に乱れもあるが)の凹線が作出されている。磨歯面の側端と受面の比高差は2.3cmと1より深く、直立している。

### f 小 結

本遺跡の主題である歴史時代の土器から本遺跡の年代について若干触れてみたい。出土遺物の大半は方形区画溝IIの溝内出土のもので、溝内土層は自然堆積を示し、大きく2～4層に分かれる。遺物はその内の3・4層から出土したものといえる。土師質の皿・杯・托・湯釜・土鍋・擂鉢・瓦質の火鉢・陶磁器の備前焼擂鉢・甌・青磁碗等であるが、それぞれ全体的にみると器形に大きな変化はみられないが、前記した微妙な相違点が指摘できる。近年、各地でこの種の資料が増加しつつある状況ではあるが、いまだ公表され、年代的に示された資料は少ない。また、地方色をもつ杯・土鍋・擂鉢等が一層それを困難にしているともいえる。

ここでは年代的にかなり正確におさえうる備前焼擂鉢(第27図7)について、間壁忠彦・蘿子両氏の研究に依拠して本遺跡の年代に触れてみたい(註23)。両氏は備前焼の成立から確立への過程を大きく5期に分けて編年されている。本遺跡の資料はそのIV期にあたり、備前焼の特色である器面の赤色化「擂鉢の口縁端部がますます拡張の度を強めて上方に立ち上がる感じ」をもつていて、室町期のはば全体にわたる時期と考えられているものである。とりわけ、「鎌倉中、後期に於て、他地方の窯に先がけて、放射状の櫛がき線の入った擂鉢を完成した。備前焼が室町期に特に備前擂鉢として知られ量産体制を確立していたことを示すものであろう。」とされているもので、この時期に本遺跡においても供給されたものと思われる。また、共伴土器として備前焼とは異なる多くの土師質の擂鉢形土器・土鍋・土師器杯があるがとりわけ、杯は全体として中世でも古い様相を持っていることが指摘できる(註24)。しかし、数量的にかならずしも多くないが明らかに共伴する青磁碗が明代のものであることなどから、ほぼ14世紀後半～15世紀初め頃の年代を北定することが妥当と思われる(註25)。

(井上裕弘)

## 4. まとめ

### (1) 遺物の出土状態と遺構との関係

すでに触れた如く、発見された4つの方形区画溝は、少なくとも新旧の二時期に分けることができる。それはまた、中世集落の一単位を構成するものと理解できるであろう。

ここでは、その中の最も広範囲の調査を行った方形区画溝IIを取り上げ、遺物の出土状態と遺構とのかかわりについて、第31図から若干の考察を加えてみたい。

**遺物の接合** 遺物接合資料は8点あり、①は掘立柱建物跡A-3内ピット中出土のものと、F1溝内出土の湯釜（第25図22）の接合資料、②はE3溝内と掘立柱建物跡A-3内と掘立柱建物跡D-1内出土の托（第25図20）の接合資料、③はE12溝内出土のものと、G9第3層出土の擂鉢（第27図3）の接合資料、④は張り出し造構A内と張り出し造構B内出土の備前焼甕（第27図8）の接合資料、⑤はE14溝内とE16溝内とL13溝内出土の備前焼擂鉢（第27図7）の接合資料、⑥はE19溝内とK18ピット内山土の青磁碗（第28図2）の接合資料、⑦は掘立柱建物跡D-1柱穴内と掘立柱建物跡C内出土の土鏡の接合資料、⑧はE16溝内とE17溝内出土の石臼（第30図2）の接合資料、⑨は掘立柱建物跡D-1柱穴内とH18溝内出土の土鏡（第26図1）の接合資料である。以上が接合した資料の全てである。

この接合資料がいかなる原因による移動の結果であるのか、ここでいくつかの要因を想定し具体的に考えてみたい。それは大きく、(1)自然的移動、(2)人為的な移動、(3)人為的と自然的移動が加わったもの、の3つに分けられる。

(1)の自然的移動は地形の傾斜（本遺跡では東から西へゆるやかに傾斜している。）、風・雨等があろう。(2)の人為的移動は、建物廢棄等による移動・清掃・その他による廃棄場、後世の耕作等による移動などが上げられる。また(3)の両者が加わった移動も充分に考えなければならない。

まず、接合資料①・③・④・⑥・⑨については前記した3つの要因のうち、とりわけ、溝内出土の遺物が溝の底付近から検出されたものばかりであるということからも、それは、いまだ溝が機能していた当時に近い時期に起った移動であることはほぼ間違いないだろう。そうすれば地形的に高い位置である破片資料がより原位置に近いことを示す可能性がある。従って、接合資料①は掘立柱建物A-3で、③は掘立柱建物Bで、④は掘立柱建物A-2かA-3で、⑨は掘立柱建物D-1で使用されていた可能性を持つ遺物として指摘できるであろう。それは、またそれぞれの遺構の同時期存在の可能性もいえるものである。

しかし、他の接合資料の②・⑤・⑦については、溝内出土の一部破片が溝底付近から出土し

たものであることを考えると、その移動が少なからず溝の機能した当時に近い時期の移動であることを示すもので、他の破片資料が溝を飛び越して移動をしない限り、その破片は当時の移動であることは理解できないものである。従って、その破片は後世の移動と理解するほかない。このように原位置的確認と理解への道は多くの可能性を持つつも、多くの問題をかかえている。

**遺物の分布** 遺物の出土状態をみると大きく、4つの集中地域をみることができる。それはまた、掘立柱建物跡とその付近に集中する傾向を持っていることが指摘できる。従って、その分布の中心をなす建物で、その遺物類が基本として使用された原位置を示すものと理解することは可能であろう。

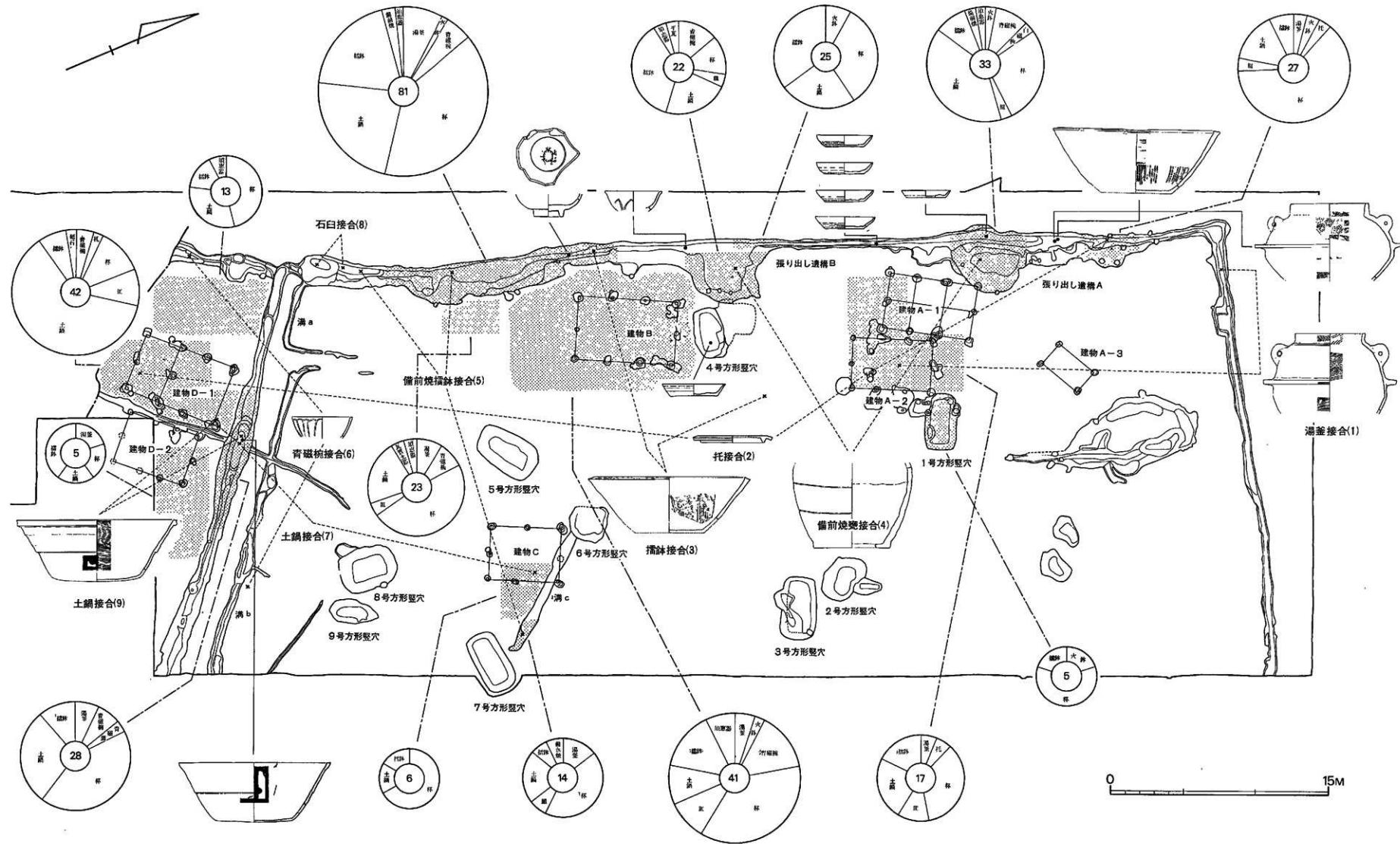
Aグループは2棟の若干方位を異にした建物A-2・A-3・張り出し造構A内・E3溝内・1号方形窓穴造構を中心としたものであるが、その大半は張り出し造構内と溝内出土の資料である。まず、2棟の建物のうち、遺物の集中する建物A-2付近の遺物は17個体あり、その組成は、土鍋・擂鉢等の炊事場に使用する日常雑器がその中心をなすが、杯・湯釜・托の存在は居間を想定させる遺物類である。張り出し造構A内の遺物は33個体あり、その組成は基本として前者と同様に炊事場を思わせる日常雑器がその中心を占めていることではほぼ同じであるが、青・白磁碗と瓦質の火鉢が新たに加わっている。これは前記した居間などで使用される可能性を持つ資料である。

また、Aグループとして加えたE3溝内出土の遺物は27個体あり、その組成は前者と同様の傾向を持つが、とりわけ杯の占める位置が高いことが指摘できる。

Bグループは建物Bとその付近、E9溝内、E12~15・D13~15溝内、張り出し造構B内、F14出土のもので、その大半は建物BとE12~15・D13~15溝内出土のものである。建物Bとその付近の遺物は41個体あり、その組成は他と同様に炊事場用日常雑器がその中心を占めている。最も多いE12~15・D13~15溝内の遺物は81個体あり、その組成も建物Bと同じ様相を示している。

Cグループは建物C付近とL18溝内出土のもので、これも他の例と同様のものといえよう。

Dグループは建物D-1とその付近、西側のF18・19、建物D-2とその付近、両建物の北側H・I18、J18・19溝内出土のものである。その中で、建物D-1とその付近の遺物は42個体あり、その組成は他に比べ土鍋の占める位置が圧倒的に高く、極めて特異な状況を示している。それは炊事場としての機能を多く持つ必要のあった炊屋の建物であったのか、また他の建物よりも長期間にわたって使用された結果であるのか判らないが、特異な様相をもつ建物として指摘できよう。また、この建物が方形区画溝外に並存した建物であった可能性が強いことからも、区画内の建物と別な意味の建物として機能した可能性を持つ注目すべき建物といえよう。H・I18、J18・19溝内の28個体は接合資料⑨も示すように、建物D-1・D-2からの



第31図 方形区画溝Ⅱ遺物分布状況平面図 (3/200)

流入物と理解できよう。

以上のように遺物の集中する4つの分布地域は、少なからず当該建物で使用された結果の、その表現形と理解することはできるであろう。その内容はすでに触れてきたように、建物D-1の特異な状況を示したもの以外は、基本としてそれぞれ、住居内における炊事場・居間等を包括する機能をもった建物として理解することはできる。

ここでさらに想像をたくましく、他の遺構とのかかわりで区画内の生活空間に触れてみよう。すでに述べたように張り出し遺構A・Bを池と理解し、方形堅穴遺構を根茎類の貯蔵穴と理解した時、また南側東西区画溝と溝a・溝bに挟まれた0.8~1.8mの空間が道路として機能したものであったならば中世の集落の生活内容は一層興味深くなるだろう。

## (2) 出土遺物について

ここでは、前記した建物で使用された可能性を持つ出土遺物から屋内の生活内容の一部に触れてみよう。

炊事関係の用具として、食料調製のための重要な道具である石臼がまず上げられる。3点出土した石臼はいわゆる磨臼で、下臼にあたるものである。磨臼は一般に上臼と下臼の2個からなり、下臼は固定し、上臼は下臼の中央部に造られた心棒を軸として回転する。上臼の穴から投入された原料は、上下両臼の接触面に作られた磨歯の摩擦によって、もみがらは除去され、あるいは粉末にされるものである(註26)。このようにして精白・精粉された穀類(米・麦・ヒエ・アワ・キビ等)はいろいろなかたちで調理され食されるわけであるが、次に調理に使用される炊事用具について記してみよう。

まず、土鍋について、本遺跡で発見された土鍋には前記したように、5つの形態的な特色がある。この土器に付着する著しい煤は、いわゆる煮沸土器として使用されたことを物語るもので、米・麦を炊いたり、食物を煮たりしたものであろう。とりわけ、第31図の遺物の組成関係からみても土鍋の占める位置が高いことは日常生活において重要な道具として使用されていたことを示すものといえる。また、調理の過程で必要なものである擂鉢であるが、本遺跡で発見されたものには土師質の擂鉢形土器と堅い陶器の備前焼擂鉢がある。一般的に擂鉢とは食料をすりつぶすのに用いる調理用具で擂木と一緒に使用され、アエモノ・トロロ・豆汁・味噌汁などの調製に用いられるものである。また、土鍋と同様に出土遺物の中で、擂鉢の占める量が多いことは中世における毎日の生活に欠かすことのできない炊事用具であったことを思わせる遺物である。土師質と陶器の2種類あるが、数量的には圧倒的に土師質のものが多く、堅い備前焼のものは、なかなか入手しないものらしく数点にすぎない。また、土師質の擂鉢形土器には両口の注口(第27図1)があることは前記したトロロ・豆汁・味噌汁等の使用を思わせる。

### 井手ノ原遺跡

さらに、一部、土師質の擂鉢形土器（第27図4）には煮沸具として使用、あるいは転用されたものもある。

いわゆる壺としては、備前焼壺（第27図7）があるが、全体として数個体発見されたのみで、各建物に1～2個体程度しかなかったよう、その量は少ない。一般的に水・酒等が貯蔵された可能性をもつものであるが、後述する木製槽・桶等がそれを補うものとしてあろう。さらに食器の一部を構成する土器として考えられる杯・青・白磁碗等がある。その量も全体的に高い位置を示していることは生活における必需品を表わしているといえよう。

また、湯釜と托についてみると、いわゆる湯釜とは、一般的に茶の湯において湯がまたは炉にかけて茶をたてるための湯をわかす釜を茶の湯釜という。茶の湯釜の起りは中國から渡来した湯釜にはじまり、鎌倉時代から桃山期にかけて茶の様式の成立とともに、茶の湯釜なるものが定式化されるようになったといわれている。本遺跡の資料が少なからず、茶の湯釜に使用されたものであろうことは、土師質の托の存在からも想定できる。また、単なる湯を沸す釜としても使用されたことはいうまでもなかろう。

いわゆる托とは、一般に茶碗の下にしく受台をいい、茶托・托子とも呼ばれる。また、数量的には少ないが瓦質の円筒形の火鉢が數点検出されている。火鉢とは、いわゆる暖房具で、中に灰を入れ、炭火をいけて用いる。屋内の暖房には欠かせないものとして近年まで使用されていたものである。

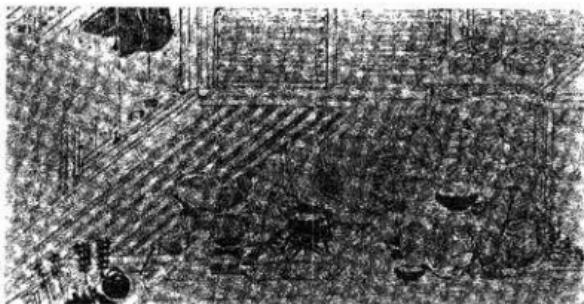
以上のものが、本遺跡で遺存した主な遺物であるが、すでに各所でも触れてきたように、当然付随的に必要な調理具としての庖丁・俎板・薦籠・笊・籠・曲物・木鉢・槽・桶・柄杓・椀（漆器も含む）・箸など多くの木製・竹製・鐵製品の存在していた可能性は理解できるのである。とりわけ、砾石（第29図2～7）の存在は庖丁、その他の鐵製品の存在を示すものといえる。このようにみてくると、前記した建物D-1を除く区画内の建物に付随すると考えられる遺物の組成は、日常生活における屋内生活のほぼ全内容を包括する用具・施設をそなえた遺物として自立していることが判らう。従って、特に区画外にある遺物D-1の異質性が強く指摘できるのである。

次に、南北朝の頃の世相を分明に描写したものとして『幕開絵巻』という絵巻がある。この絵巻は觀音の曾孫覺如の伝記を描いたもので、覺如の子、徒寛によって発願され、觀音二（1351）年一月十九日の覺如の死後、10ヶ月の十月三十日に完成をみたものとされている絵巻で、全10巻から成る。

ここでは、第2巻、南流院僧静珍の房の台所の様子を描いた部分があるので紹介し、前記した本遺跡の住居内生活の復原を少なからず補足しよう（第32図）（註27）。

絵図の左には圍炉裏があり、圍炉裏の中には赤く炭火が燃え、何かを串さにしたもの、豆腐の田楽などが火にあぶられている。土瓶・火箸などもみられる。その右には火桶（炭桶）が

あり、僧が五徳に箸をのせて何かを煮ている。煮えかげんをみているのである。左手で木蓋を上げ、右手でしゃもしをもっている。その周囲には曲物の水桶・桶杓・桶鉢・桶木・笊がある。その右側には鉄瓶・酒壺・



第32図 『喜慶絵詞』南端院僧淨珍の房の合所絵圖

柄のある皿・小皿・アエモノを盛った鉢・飯を盛った黒塗りの鉢があり。そのまわりでは3人の僧が食事をしている、その背後には金器をのせた猪が描かれている。この絵巻は、当時の上流の僧の食生活を示したものであるが、その内容の差は少なからずあるとしても本遺跡の遺存しえなかつた資料を窺う好い資料といえる。

(井上裕弘)

### (3) おわりに

これまでに見てきたところで、ほぼ14世紀後半を中心とする時期の一生活単位の状況を、ある程度まで明らかにできたと思う。建物は、わずか10棟しか推定できなかったが、無数に分布する柱穴群から、比較的柱列の通るもののみを選びだした結果である。2間×3間のプランを持つものが多いが、A群・B・C・D群とも溝・張り出し造構・方形空穴と近接しているのは、特に建物と方形空穴との間の有機的な関係を示すものである。いまひとつ注意を引くのは、建物と溝の中に集中して発見された石塊群との関係である。A群・B・E群は西接する溝の中に、D群は北東側の溝の中に、それぞれ单から人頭大の石が多数みられた。瓦が、Bに近接する張り出し造構のみから磨滅した小片となって3~6片しか発見されないとあわせて、棟にのみ瓦を用いて他の屋根材を石で押さえる石置屋根を想定せるものである。建物の規模は、柱間の一定しないこととあわせて、中世の道例と大差ない。

出土した各種の土器は、日常用いる生活必需品ばかりである。特殊なものとしては托があげられる。これは湯呑の存在とともに、様式として成立した茶の湯、あるいは中世を通じて流行したといわれる闇茶の風習が、この地方にも行なわれたことを物語るものであろう。

建物1棟の規模はさして大きくなないが、一辺60mを越す方形区画をひとつ的生活単位とする階層は、いうまでもなく庶民ではない。中世郷村の中間支配層として、鎌倉末期から台頭した

## 井手ノ原遺跡

地侍層に相応しい規模と立地とをそなえたものである(註28)。班端文書にみえる「班端納申状」の(註29)記事は、このような位置づけが必ずしも無理なものではないことを思わせる。

この史料は、南北朝期に探題方・宮方とともに九州を三分する勢力であった佐渡方に属された足利直冬が、九州各地の国人たちを味方につけようとして乱発した安堵状のひとつである。この中に、貞和6年(1350)肥前神崎荘などとともに安堵された「筑前岩戸郷中原田地屋敷」がみえ、中原は、この遺跡から北北西わずか500mに集落がある。貞和6年は、この遺跡の時期よりやや先行すると思われるが、この地域で郷村指導層が屋敷を構えた可能性を示すものである。

また、「筑前国続風土記拾遺」那珂郡下の中原村の条に、次のような記事がある。

「〇城と云地有村の東側也御音堂の上也局り竹林にして上に平地三ヶ所あり上方一反斗中に掘切有共東四反斗も有べし其北に道を隔て黒男森の塹二反斗も有べしいづれも亂世に小身の士の里城成べし土民ハ井上氏の城址也といへども詳なら須」

ここに見える井上氏は、同じく後野村の条にあげられているが、近世初頭の武士の一族らしい。中原村の東で御音堂の上といえば、御音山であるが、中世山城の相貌をもつ城跡についての記述である。

いずれにしても、数棟の建物を配した周囲に掘をめぐらし、台地上にあって背後に山を負うという状況は、かなり防御に意を用いた立地である。中世郷村において指導的地位を占め、特に地方では、在郷農民や多數の下人をかかえて武士的性格を強くもった名主層の存在を想定するのは、さしたる飛躍ではあるまいと思う。

(鶴久潤郎)

註22 九州大学医学部解剖学教室 永井昌久教授・木村泰彦助手西氏の協力を得た。

註23 間壁忠彦・間壁恵子「備前焼研究ノート(1)一備前焼の成立」倉敷考古館集報 第1号 1966, 間壁忠彦・間壁恵子「備前焼研究ノート(2)一中世備前焼の推移」倉敷考古館集報 第2号 1966

註24 前川威洋「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第2集 福岡県教育委員会 1975, 前川氏の論によると鎌倉時代中期後半Ⅱ—5類にはほ本遺跡の資料も相当するものである。

註25 東京国立博物館編「日本出土の中国陶器」1975, 陶器・磁器については九州歴史資料館 魚井明徳氏から多くの助言を得た。

註26 茶臼として使用されたことも考えられる。

註27 渋川敬三編著「日本常民生活叢引5」角川書店 1968

註28 伊藤鄭齋「中世住居史」東大学術叢書14 1958

註29 濑野精一郎編「肥前国神崎荘史料」莊原史料叢書 吉川弘文館 1975

図 版

井 手 ノ 原 遺 跡



1 井手ノ原遺跡と般音山航空写真



2 井手ノ原遺跡第1次調査航空写真



1 井手ノ原遺跡全景航空写真（北から）



2 井手ノ原遺跡全景航空写真（西から）



1 方形区画溝 I・II・III全景航空写真（西から）



2 方形区画溝 III・IV全景航空写真（西から）



1 方形区画溝Ⅱ全景航空写真（西から）



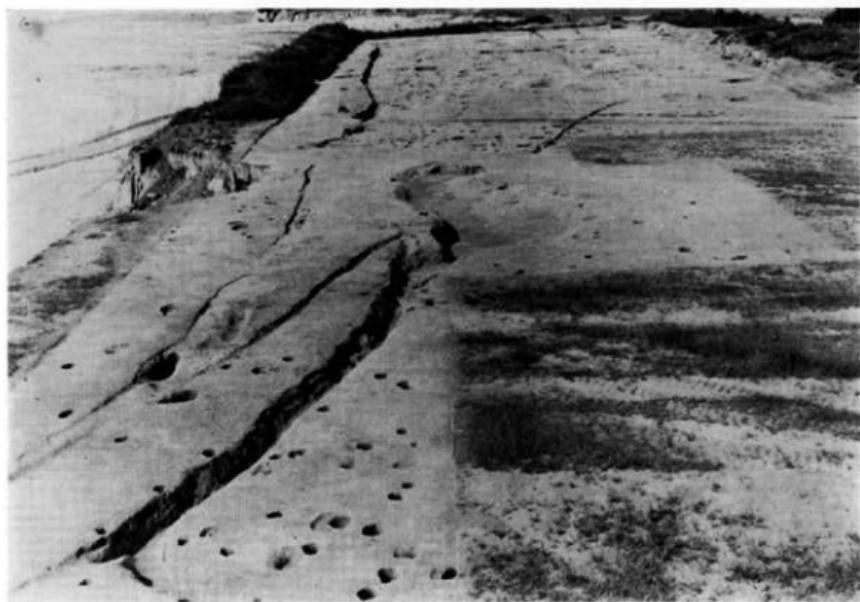
2 方形区画溝Ⅱ全景航空写真（北から）



1 方形区画溝 I・III全景（南から）



2 方形区画溝 I・III・IV全景（北から）



1 方形区画溝 I・II・III全景（南から）



2 方形区画溝IV全景（南から）



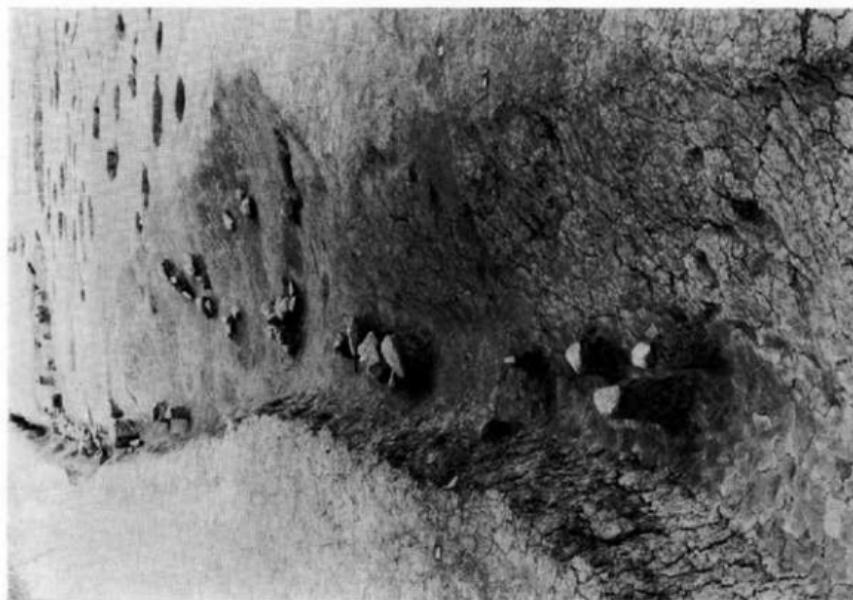
1 方形区画溝 II 北西部の溝と掘立柱建物 A 群



2 方形区画溝 II 南西部の溝と掘立柱建物 B 群



2 方形区画溝Ⅱの北側東西溝（東から）



1 方形区画溝Ⅱの南北溝（南から）



1 方形区画溝II溝内土層断面



2 方形区画溝II溝内土器出土状態



1 方形区画溝Ⅱ溝内土器出土状態



2 方形区画溝Ⅱ溝内土器出土状態近景



1 方形区画溝Ⅱ溝内土器出土状態



2 方形区画溝Ⅱ溝内土器出土状態近景



1 方形区画溝II張り出し造構Aと集石溝（北から）



2 方形区画溝II張り出し造構Bと集石溝（南から）



1 方形区画溝Ⅱ張り出し造構Aと集石溝（東から）



2 方形区画溝Ⅱ張り出し造構Aと集石除去後の溝（南から）



1 方形区画溝II張り出し造構Bと集石溝（東から）



2 方形区画溝II張り出し造構Bと集石除去後の溝（南から）



1 方形区画溝II掘立柱建物A・B群と溝（南から）



2 方形区画溝II掘立柱建物A群と溝（東から）



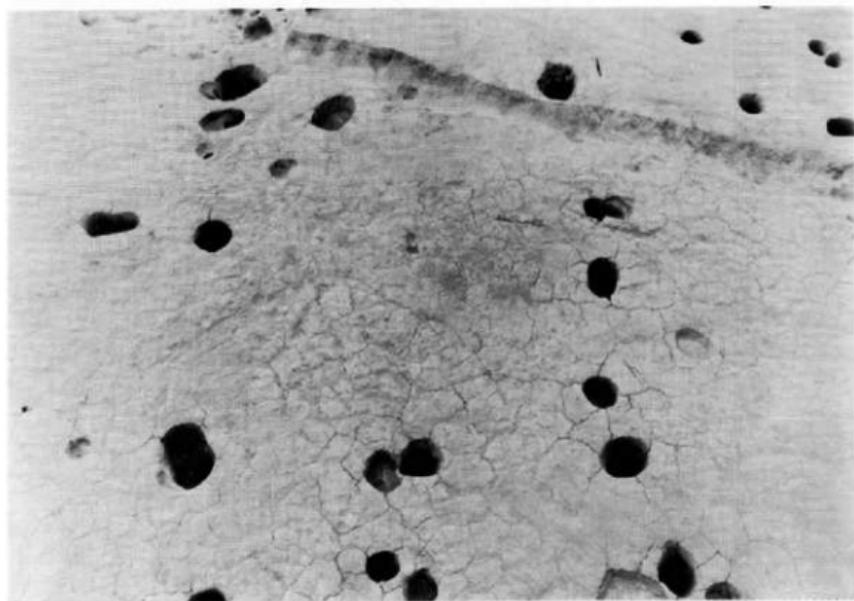
1 方形区画溝Ⅱ掘立柱建物Bと溝（東から）



2 方形区画溝Ⅱ掘立柱建物B（東から）



1 方形区画溝Ⅱ掘立柱建物C（東から）



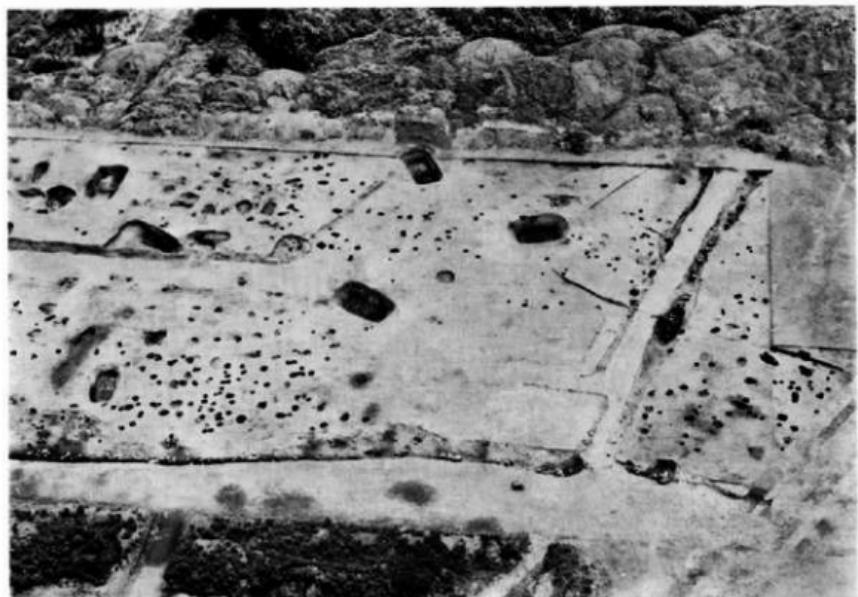
2 方形区画溝Ⅱ掘立柱建物C（南から）



1 方形区画溝II掘立柱建物D群（北から）



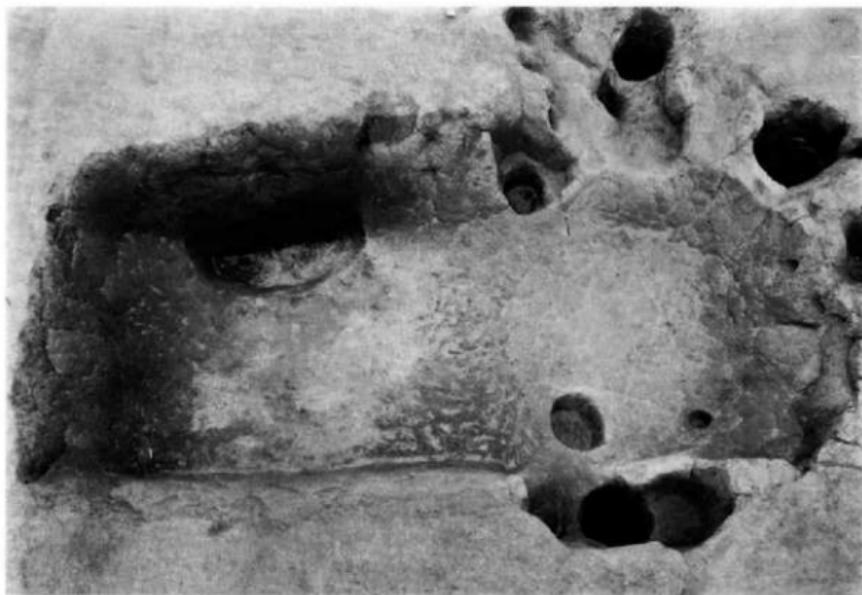
2 方形区画溝II掘立柱建物D-1（北から）



1 方形区画溝Ⅱ方形堅穴群と掘立柱建物群南半航空写真（西から）



2 方形区画溝Ⅱ方形堅穴群と掘立柱建物群北半航空写真（西から）



1 方形区画溝Ⅱ 1号方形堅穴（北から）



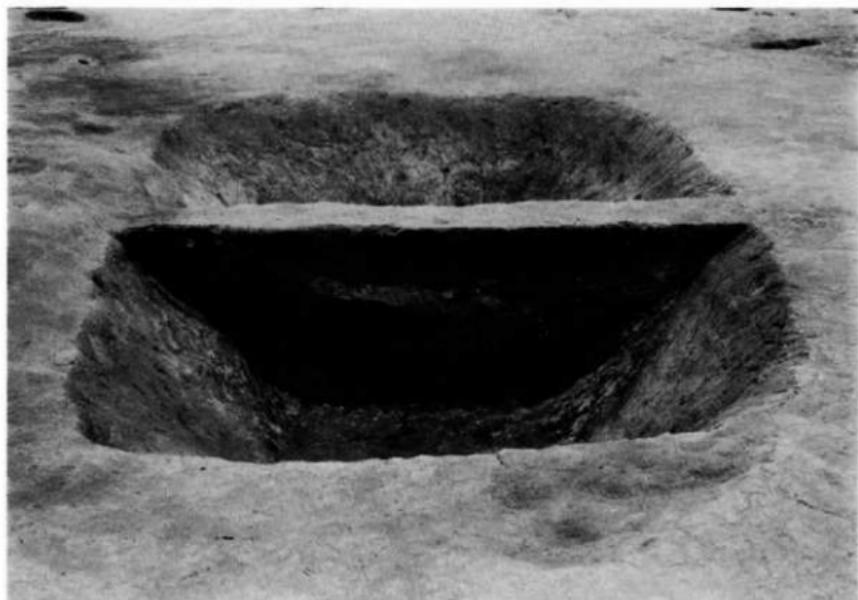
2 方形区画溝Ⅱ 2号方形堅穴（南から）



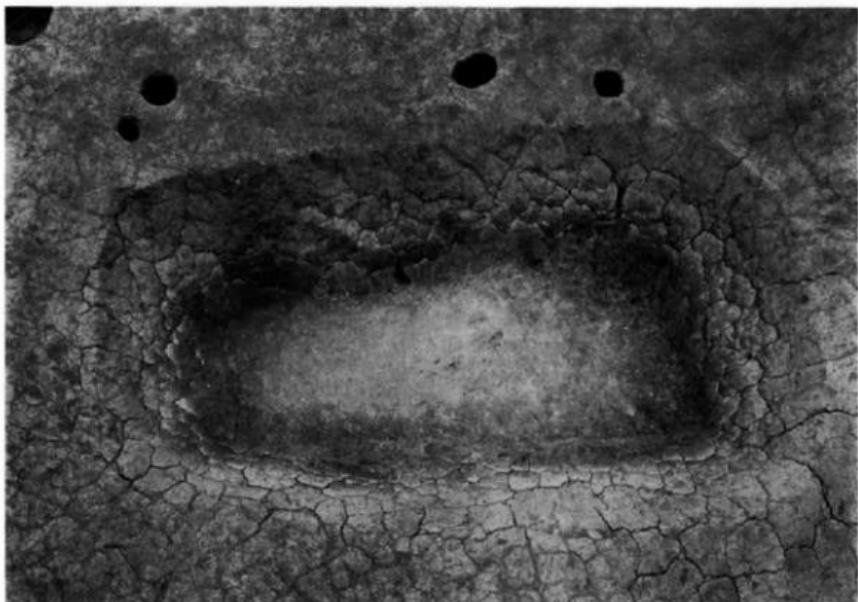
1 方形区画溝II 3号方形堅穴（南から）



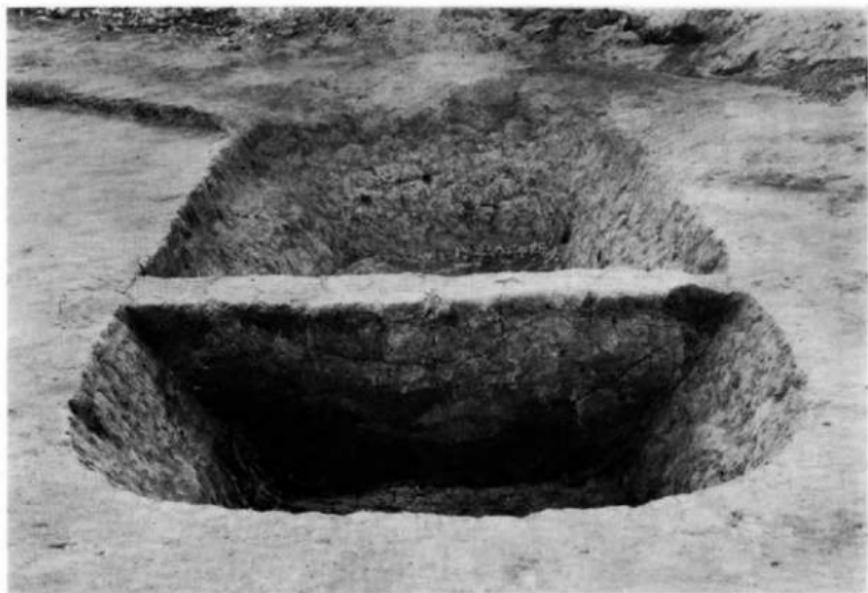
2 方形区画溝II 4号方形堅穴（南から）



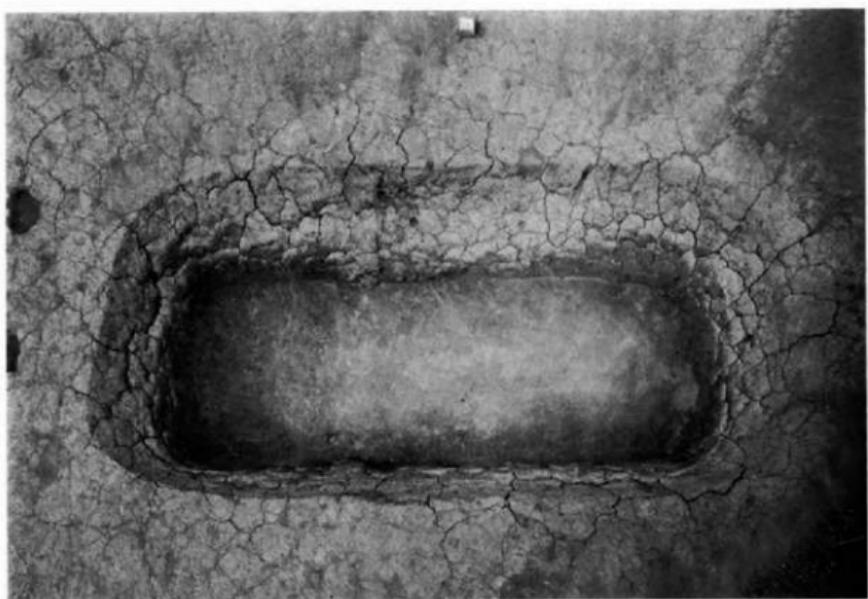
1 方形区画溝Ⅱ 5号方形堅穴内土層断面（南から）



2 方形区画溝Ⅱ 5号方形堅穴（東から）



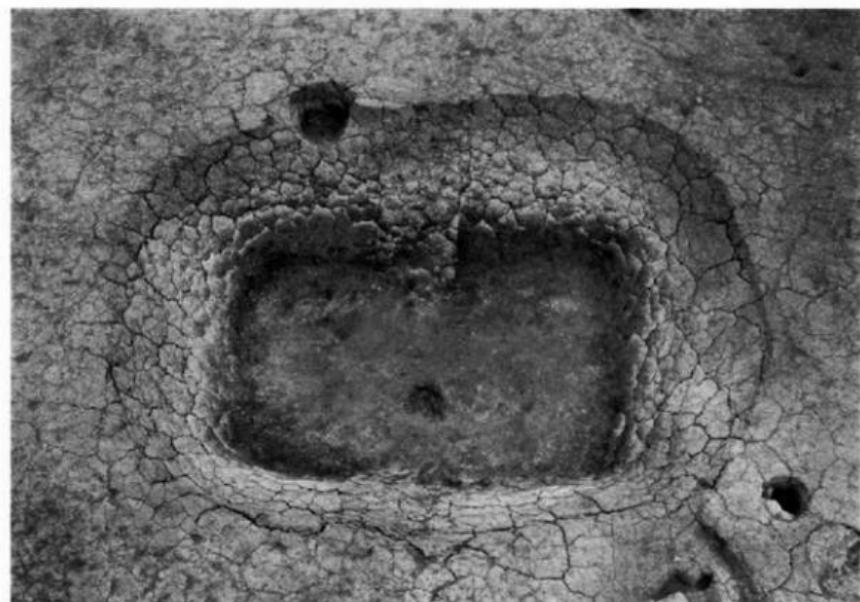
1 方形区画溝Ⅱ 7号方形堅穴土層断面（西から）



2 方形区画溝Ⅱ 7号方形堅穴（南から）



1 方形区画溝 II 8号方形堅穴内土層断面（南から）



2 方形区画溝 II 8号方形堅穴（西から）



1 方形区画溝Ⅲ張り出し造構Cと集石溝（北から）



2 方形区画溝Ⅲ集石除去後の張り出し造構C（南から）



1 方形区画溝IV全景（南から）



2 方形区画溝IV全景（北から）



1 方形区画溝IV張り出し造構D（北から）



2 方形区画溝IV張り出し造構Eと集石溝（北から）



1 方形区画溝IV掘立柱建物E群と溝（南から）



2 方形区画溝IV掘立柱建物E群（東から）



1 井手ノ原遺跡南端発掘区（55地点）全景（東から）



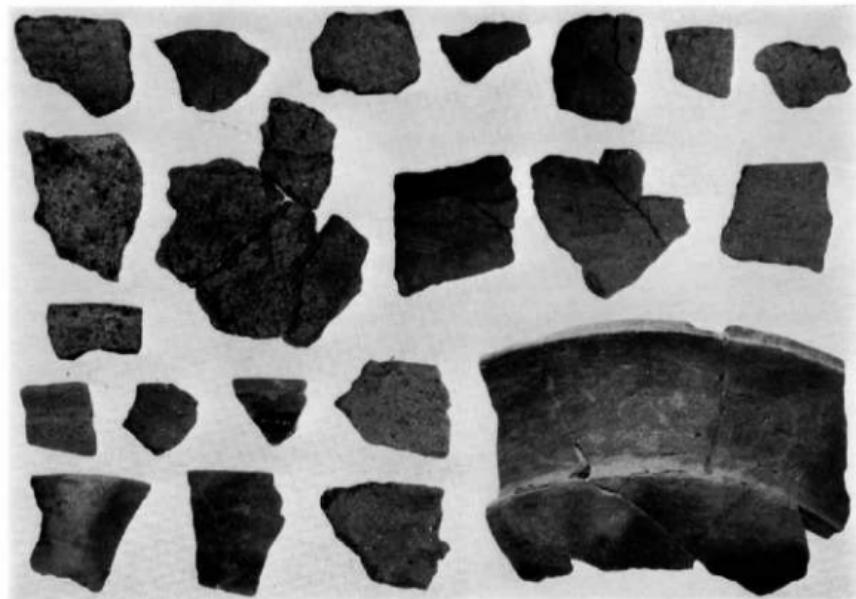
2 井手ノ原遺跡南端発掘区（55地点）全景（南から）



1 井手ノ原遺跡南西部発掘区（50地点）全景（西から）



2 井手ノ原遺跡南西部発掘区（50地点）全景（東から）



1 縄文時代土器



2 縄文時代石器



1



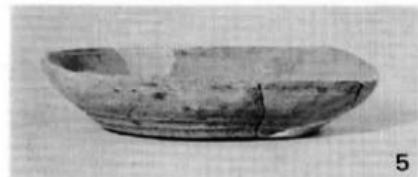
2



3



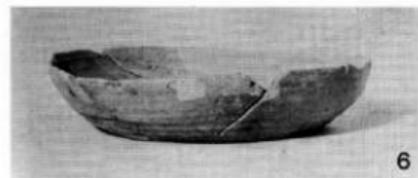
4



5



9



6



10



7



11

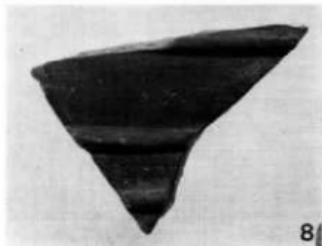
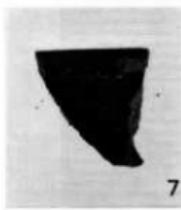


8



12

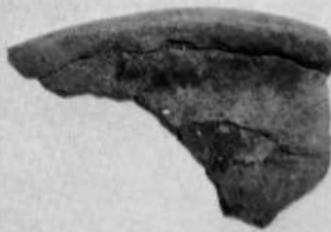
土師器 豆・皿・杯・托



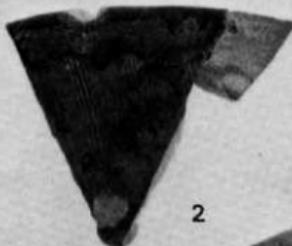
土師質・瓦質土器 湯釜・火鉢・土鍋



1



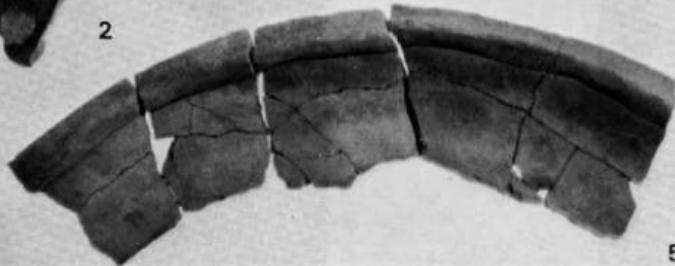
3



2



4



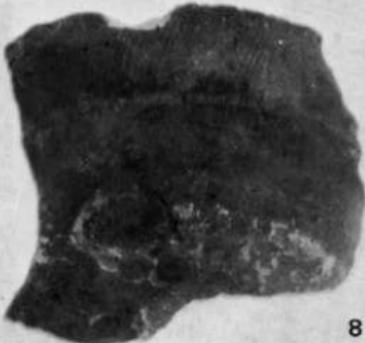
5



6



7



8



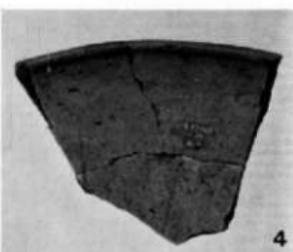
1



3



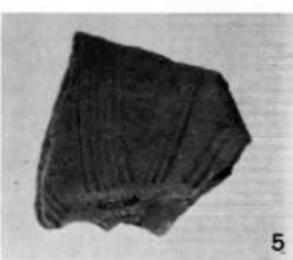
2



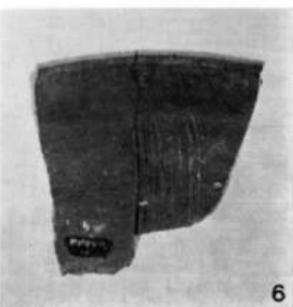
4



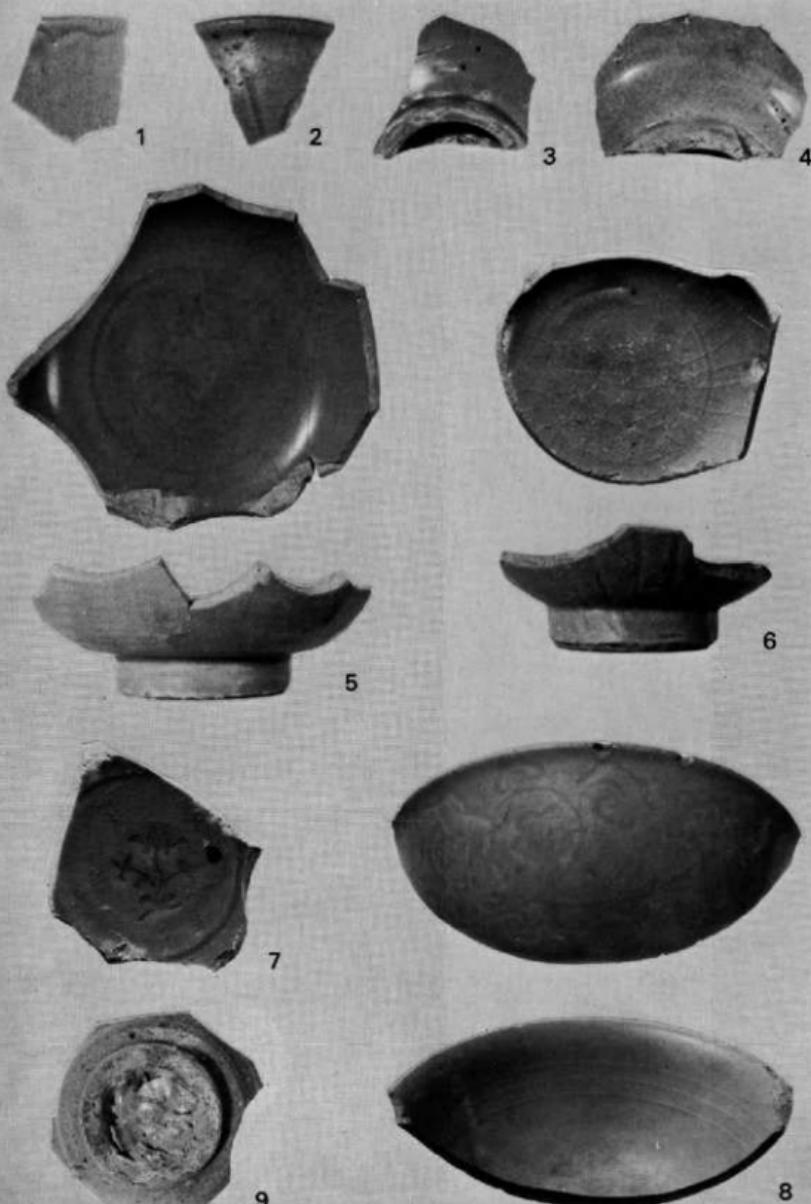
7



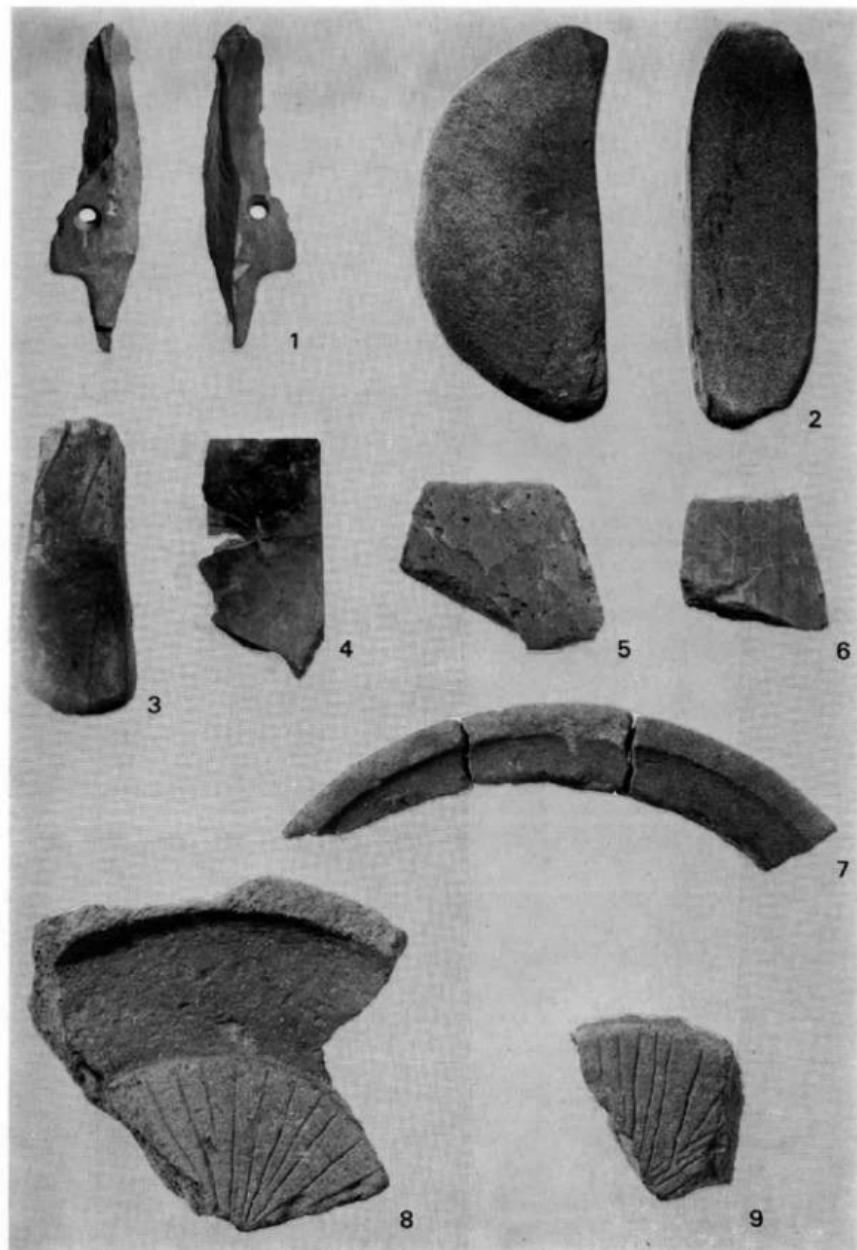
5



6



磁器 高台付碗



弥生・歴史時代石器 石戈・砥石・石臼

山陽新幹線関係  
埋蔵文化財調査報告

第2集

昭和51年3月31日

発行 福岡県教育委員会  
福岡市中央区西山洲6-29

印刷 福博綜合印刷株式会社  
福岡市博多区堅松3-16-36